

尖閣研究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－ 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 －

2014年

尖閣諸島文献資料編纂会

発刊のあいさつ

本調査報告は、日本財団の2014年度研究助成交付によるものです。

即ち、「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告」の第3回目に当り、「沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 2014年」です。

日本財団は早くから尖閣諸島海域の漁業調査の重要性を認識され、当編纂会は、第1回は2009年度、第2回は2012年度、第3回は2014年度の本調査報告と、3回に亘って研究助成を頂きました。日本財団の、特段の3回に亘るご助力に対して、笹川陽平会長をはじめ関係者の皆様に対して、心から感謝申し上げます。またこの間、海洋グループの杉浦清治様、橋本朋幸様には大変お世話になりました。有難うございました。

私共編纂会は地元沖縄にも埋もれている尖閣諸島に関する文献資料を発掘し、これをとりとまとめて、全国に発信することを目的に結成された任意団体(研究会)です。

戦後の尖閣諸島の学術調査は、1950年の故高良鉄夫先生(元琉球大学長、本編纂会顧問)による戦後初の単独調査を皮切りに、計5回に亘り調査がなされ、同島が「生物資源の宝庫」「海鳥の楽園」であることが明らかになりました。

当編纂会は、最初の仕事として、これらの調査成果をとりとまとめて、2007年「尖閣研究 高良学術調査団資料集」を刊行しました。

他方、尖閣諸島海域は魚族が豊富な好漁場として、終戦後いち早く、沖縄各地から出漁した漁船、県外船、台湾船も入り混じって操業し、賑わいを見せてましたが、同海域の漁業に関する資料は殆どなく、その全容は不明のままでした。

私共の次なる課題は、尖閣諸島海域の漁業に関する調査・資料のとりまとめであるとして、同海域の漁業に関心を持ち、助力してくれる団体探しに取り掛かりました。

当時、国は無論、民間の諸団体は、尖閣諸島に対する認識すらなく、一顧だにせず、同海域の漁業に無関心でした。暖簾に腕押しの方塞りの中で、調査を諦めていた矢先に、日本財団から快いご返事を頂き、ワラにすぎる思いで研究助成をお願いした次第です。

日本財団より、2009年度に研究助成交付を頂き、「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告—沖縄県における戦前～日本復帰(1972年)の動き—」を調査報告できました。

この調査報告は、私共の力量不足もあり、決して満足のいく内容ではありませんが、日本における尖閣諸島海域の漁業の調査報告の第一号であると自負しております。

この第一号は2010年8月に刊行しました。その2ヶ月後の10月21日、中国外務省馬朝旭報道局長は、「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”である」と声明を出しています。しかしながら、中国漁船が尖閣海域へ出漁するのは1980年以降であり、中国の主張が歴史的事実に照らしても、事実無根、誤りであることは自明であります。これは尖閣諸島海域の漁業に関する資料のとりまとめが如何に重要であるかを如実に示しています。

日本財団には、続く第2回以降は、漁業関係者への聞き取り調査の意義と重要さを認識

して頂き、同事業に対して、快く研究助成を頂きました。第 2 回が「沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 2012 年」、同調査に補足追加したのが第 3 回目の本調査報告です。

昨今は、わが国の尖閣諸島に中国公船が不法に居座り、漁民の安全操業を脅かしているため、同海域の漁業に対して国民的関心が高まっていますが、当時は全く無関心でした。

この 3 回に亘る調査報告は、わが国の尖閣諸島海域の漁業の開発利用の実態を明らかにし、こと国際的問題が生じた場合、日本の尖閣諸島に対する実効支配を証左する重要な資料になるものと確信します。これも日本財団様のご助力のお陰と厚く感謝しております。

最後に、本調査報告について、以下の 2 点に留意しました。

1 点は編集内容の変更です。前回 2012 年の報告書は「尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告」にこだわったため、尖閣諸島での漁労・操業に絞り込んだ内容になりました。

ウミンチュウ(海人)の皆さんが、海を生業にして如何に生き、尖閣諸島と如何に関わってきたかは興味ある事実です。この点に留意して、本調査報告では、彼らがどのような海人人生を送ってきたか、できるだけ時間を掛けて聞き取りしました。彼ら海人の歩み、個々人の歴史の総和が、沖縄の漁業の歴史にもなり、それが尖閣諸島での漁業の正しい理解にもつながるものと確信しています。今回聞き取り人数が減り、個々の内容が増えたのはこの理由によるものです。また尖閣諸島の漁業と無関係の内容もありますのでご容赦下さい。

もう 1 点は、「サンゴ漁」と尖閣諸島での「電灯潜り」の聞き取りに意を注ぎました。

いずれも過去の漁で、前者は 1960 年代、後者は 1970～1990 年代に営まれた漁です。

サンゴ漁と言えば、昨今中国のサンゴ船団が小笠原近海に、200 隻余押しかけて来て、赤サンゴを盗りまくり、連日そのようすが新聞テレビで報道されて、大きな問題になったのは記憶に新しいです。中国船は、小笠原に来る前は、沖縄に来てサンゴを盛んに盗っていました。南西諸島、尖閣諸島海域は知られざるサンゴの好漁場です。

本県において、サンゴ漁が盛んだったのは 50 年以上前であり、当時の漁に携わった人は殆ど亡くなっていますが、数少ない関係者を探し出し、滑り込みセーフで聞き取り調査することができました。これまた日本財団様のお陰です、誠に感謝にたえません。

なお、本調査報告は、以下の 2 人が担当しました。

本編纂会 研究員 國吉 まこも

本編纂会 事務局長 國吉 真古

本調査報告の聞き取りに際して、快くインタビューに応じて下さった漁師の皆さんはじめ、多くの漁業関係者の方々にお世話になりました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

2015 年(平成 27 年) 9 月 30 日

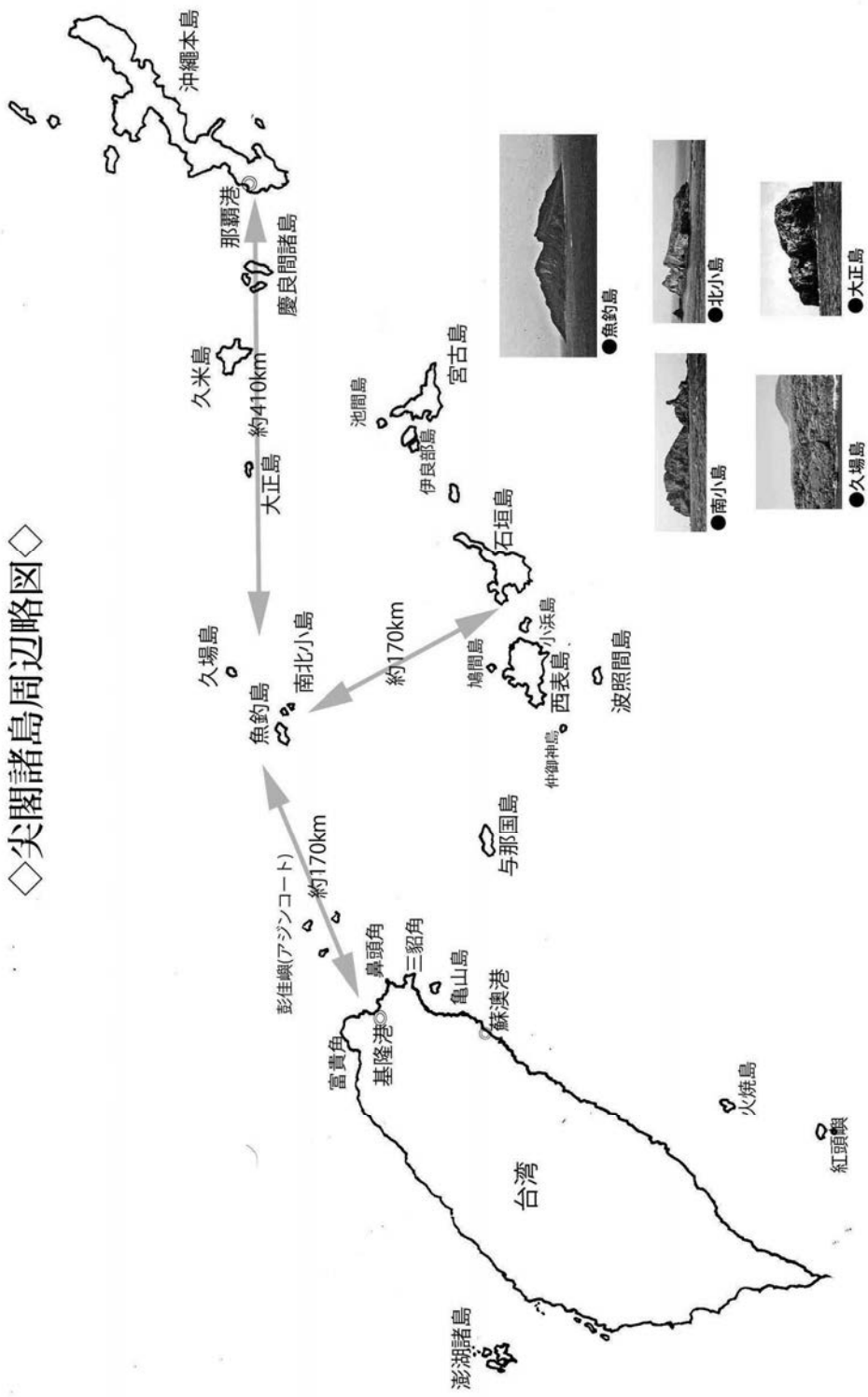
尖閣諸島文献資料編纂会

会長 新納 義馬

目 次

発刊のあいさつ	1
尖閣諸島とは	6
I 尖閣諸島の漁業概要	7
II 聞き取り編	15
1 章 沖縄本島地区	
1-1 那覇地区漁協等	19
1-2 鹿児島・熊本県漁業関係者	127
1-3 渡嘉敷漁協、糸満漁協	171
2 章 宮古島・八重山地区	
2-1 池間漁協	229
2-2 八重山漁協	247
3 章 電灯潜り	263
4 章 サンゴ漁	
4-1 サンゴ採取	335
4-2 サンゴ加工・販売	384
5 章 尖閣諸島調査関連等	
5-1 石垣島測候所関連の思い出	413
5-2 戦前・戦中の調査2題	440
あとがき	453

◆尖閣諸島周辺略図◆



尖閣諸島とは

・絶海の無人島

沖縄県の八重山諸島の北北西凡そ 90 カイリ(約 170 km)に位置する無人島群を総称して、いわゆる「尖閣諸島」と呼んでいる。島嶼群の構成は、「魚釣島」「北小島」「南小島」「久場島」「大正島」の 5 島嶼と「沖の北岩」「沖の南岩」「飛瀬」の 3 岩礁である。

地理的には東シナ海南部に位置し、各島嶼が東シナ海大陸ダナの縁辺に沿うような恰好で連なっているため大陸沿岸流と黒潮の混合によって生じる潮目を形成、その影響を多く受け様々な魚族が附近を回遊、棲息していると言われている。

・1895 年に領土編入

歴史的には古くから中国南部福州～琉球那覇途上の航路標識として知られていたが、絶海の孤島とも言うべき場所に位置するために中国、琉球どちらにも属する事はなかった。

このように長い間無主地であったが、1895(明治 28)年に日本に領土編入され沖縄県の所属となり、翌 1896(明治 29)年には行政区分上八重山郡の所轄となった。

・本来の自然が残された島

過去、同諸島を明治政府より借受けた古賀辰四郎等により開拓がなされた。が、学術的には、依然人の手が殆んど入っていない。生きたままの自然の姿が其処に残る島々である。

島で歩き回り調査するたびに本来の自然を実感でき、生物・植物学者にとっては希少種や固有種が数多く棲息する学術上貴重な島嶼群である。

・現在の概要

現在は沖縄県石垣市字登野城に属しており、魚釣島・北小島・南小島の 3 島は無人島、久場島・大正島の 2 島は在日米軍の軍用地として射爆撃演習場に指定されている。

尖閣諸島は歴史的に長くアホウドリやアジサシ類といった海鳥の繁殖地であったが、明治期の開拓により、アホウドリは絶滅したとされていた。が、1988 年 4 月、朝日新聞社は上空から南小島の断崖で繁殖しているアホウドリ及びヒナを再確認した。2002 年には北小島での繁殖も確認されており今後もさらなる棲息数の増加に期待が寄せられている。

参考：◇尖閣諸島地番・地目・面積表◇

島名	地番	地目	面積	備考
南小島	石垣市字登野城 2390 番地	原野	0.40km ²	国有地
北小島	同 2391 番地	原野	0.31km ²	国有地
魚釣島	同 2392 番地	原野	3.82km ²	国有地
久場島	同 2393 番地	原野	0.91km ²	私有地
大正島	同 2394 番地	原野	0.06km ²	国有地

沖の北岩・沖の南岩・飛瀬は岩礁のため地番等は付されていない。

I 章 尖閣諸島の漁業概要

①、戦後の漁業の概要

尖閣諸島海域への出漁開始は、おそらく 1946～1948 年間だと思われるが一定せず。

1950 年代初頭には、各地で製氷会社が稼働し始めている。そうして沿岸から沖合へ、沖合から、尖閣諸島海域へ出漁操業して、魚を積んで帰って来るのが可能となる。

漁業者に対する聞き取り調査及び関連する報告書をもとに作成したのが下表である。

尖閣諸島海域における各地区の漁業概要

	沖縄本島地区	宮古島地区	八重山地区
終戦～1950 頃	ダツ追込：糸満	カジキ突棒：伊 ※台湾より出漁含	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：与/鳩 マグロ延縄：石垣
1950 年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区 サバ跳釣：琉水 サバ棒受：琉水	ダツ追込：池(糸) カジキ突棒：伊 鯉竿釣：池/伊/宮 カツオ節：池/伊/宮 曳縄：池/伊/宮 深海一本釣：池/伊/宮 サンゴ：池	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：石/与 鯉竿釣：石垣/鳩間 カツオ節：石垣
1960 年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区 サンゴ：那覇地区	曳縄：池/伊/狩 深海一本釣：池/伊/宮 サンゴ：池/伊/宮	鯉竿釣：石垣 曳縄：石垣 深海一本釣：石垣 底延縄：石垣 潜り：石垣 サンゴ：与那国
1970 年代～ 復帰以降	ダツ追込：糸満 深海一本釣：那覇地区 底立延縄：糸満/那地 電灯潜り：那沿/浦宜 サンゴ：那覇地区	鯉竿釣：伊良部 曳縄：池/伊/宮 深海一本釣：池/宮 サンゴ：池/伊/宮	曳縄：石垣 深海一本釣：石/与 潜り：石垣 電灯潜り：石垣 サンゴ：与那国

※表中の漁協等の略式名は以下の通りである。

沖縄本島地区：那覇地区漁協=那地、那覇市沿岸漁協=那沿、琉球水産(株)=琉水
渡嘉敷漁協=渡、糸満漁協=糸、与那原・西原漁協=与、浦添・宜野湾漁協=浦宜。
宮古島・八重山地区：池間漁協=池、伊良部漁協=伊、宮古島漁協=宮、狩俣漁協=狩
八重山漁協=石垣、石、鳩間漁協=鳩、与那国漁協=与。

なお、今回の調査は、上表中から 8 漁協及び電灯潜り及びサンゴ漁の関係者を対象に聞き取り調査を実施した。聞き取りした内容の概略を以下に述べる。

②各地区の漁業状況

1、沖縄本島地区

1-1 那覇地区漁協等

各地区の漁業状況については、前回 2012 年度調査報告であらましは述べてある。本調査報告では、聞き取りの内容の幾つか抜粋して紹介する。那覇地区漁協は深海一本釣、底立延縄、そしてマグロ延縄を操業している。今回の聞き取りは一本釣 2 名、底立延縄 1 名、マグロ延縄 2 名、船大工 1 名から聞き取りした。

普天間直精氏(那覇地区漁協)は「僕が 18 歳位・・・尖閣列島に行く時は、エサも買わないで、久米島に行って、久米島から、すぐコースをアコウ(大正島)にとって行きよったです。・・・一本釣のエサにするカツオ釣るんです。当時は、アコウの海は、カツオも沢山いるし、もう飛んで歩く位、潮に向かって走るわけ。・・・向こうに行くと必ずいる。アコウの丁度西側かなあ、そこに潮がかかるから、それに向かって、カツオとかの魚がいっぱい浮いているわけです。カツオはホンカツオ、それを釣ったり、サワラ釣ったりしてねえ」。

我那覇生太郎氏(那覇地区)も一本釣である。「尖閣には大体がアカマチ、シチューマチ狙って行って相当獲れました。だけど、向うは潮の速くて、向うの魚は全部は獲りきれない、ものすごく引きますからねえ、・・・枝は大体 5 本から 6 本位付けますが、幹縄をこれを手で持って、今 1 匹目が食っている、2 匹目が食ったと、これ勘で手の動きようで分かるんです。もう 4,5 匹位食っているから、いいだろうなあと揚げるんです。今大きいのが食っている、今度は小さい奴が、今何が、どんな奴が食っていると、手の感覚で大体分かります」。

石垣真次郎氏(那覇地区)は底立延縄を操業している。「協徳丸は、尖閣は 1 航海 6 名位、早い時は 1 週間、遅い場合は 12,3 日で帰って来た。2 週間まではかからなかった。水揚げは今は和だが、4 千斤から 5 千斤、和にすると 2.4 トンから 3 トン位で、殆んどマーマチ、浅瀬ではカンパチが多かったねえ。いつも満船して大漁したから、船造る時に借りた 7 千ドルも、据置き 3 年間のうちに全部支払った。5 カ年間水揚げ 1 番で、優勝旗ももらった」。

國吉真一氏(那覇地区)と儀間真松氏(睦漁船主組合)の 2 氏から、主にマグロ延縄について聞き取りをした。マグロ延縄の漁法、投縄、揚げ縄の様子など懇切丁寧に説明してもらった。また 1970 年代の那覇地区漁協の遠洋マグロ漁進出の頃の話も貴重である。

また、船大工の宮良貞光氏は「僕是那覇地区とか、糸満、浦添漁協、宮古八重山とか、あっちこちの船を造りました。大きい船だと皆、尖閣列島に一本釣りとか、底(立)延縄、電灯潜りで行っています。僕が造った船は皆大漁船だと言っていました。那覇地区でも、糸満、浦添漁協でも、1 番から 3 番は、大体が僕が造った船だった。僕が造った船だから大漁するのではなく、船主が優秀だから、腕のいい船長だから、番に入ったわけです」。

氏から聞き取り内容は、これまで沖縄の漁船の造船事情が模糊蒙昧だっただけに貴重である。魚釣島の掘割と古賀氏開拓時代のカツオ船についても、船大工ならではの専門の立場から興味深い言及をしている。

1-2 鹿児島・熊本県漁業関係者

1972年5月日本復帰の直後から、南九州の県外漁船が沖縄を漁業基地にして、深海一本釣で尖閣諸島へ出漁するようになった。那覇泊港を基地にしていた一本釣船は、最盛期には鹿児島船籍20隻、熊本船籍3,4隻、長崎、大分、宮崎船もいて、全体で30隻余りはいたという。現在は鹿児島船5,6隻、熊本船1,2隻に減っている。今回、県外船については鹿児島船から2人、熊本船から1人を聞き取りした。

高橋一雄氏(鹿児島県指宿漁協)は、「尖閣行く場合は、最初は大正島に寄って行く。丁度大正島が1昼夜位かかるもんだから、久米島の南通って、直行で行くわけだけど、今日の朝に出港でして、明日の朝に着くわけですよ。丁度あそこで1日仕事をして、そこがダメだったら、また魚釣島の方に10時間位かけて行くわけです。丁度また夜走って、次の日から仕事できるわけです」。また「尖閣では同じ場近くで、浅りの魚も、深りの魚も釣れる。水深180メートルから150メートルでシチューマチ、クルキンマチが釣れて、またその近くでも、アカマチが200メートルから250メートルで釣れる。それに量も多く釣れるから、浅りでシチューマチ、クルキンマチを3時か4時位まで釣っておって、夕方なつたそこから30分位走ってきて、すぐまた深りの方に行って、アカマチなんかを釣るわけよねえ」。

高杉忍氏(鹿児島指宿漁協)は、「全盛期には結構船が来てましたから、1隻で水揚げできること殆どなかったもん、毎日2隻ずつ順番待ちして水揚げ、だから新垣水産(委託仲買業者)には、3ト枠に5ト位水揚げしよつたから、マチだけで、毎航海、自分達は多い時は5トは持って来ました。1週間10日で釣りよつたです。だから、それだけ船がいて、順番待ちになるんです。氷がなくなって入港して来るんですよ。・・それだけ獲れたんです。また魚もこっちでも売れたし、鹿児島にも送っても売れた。だから、頑張って働いただけは金になりよつたです。すごかったですよ、5トは今なら考えられない。尖閣諸島に行ったら、最低で3ト、4トです」。また「尖閣ではずーと釣り放しじゃないから、今でもそうです。1年のうちで、向こうで釣って歩きよつたのは3,4ヶ月位です、夏場は鹿児島近海行って、冬場はこっち来て、漁場を転々と廻りながら釣って、大体がその繰り返し繰り返しです。魚の産卵時期に合わせて、漁場を循環というか、ローテーションしているわけです。マチ類の産卵時期は、鹿児島近海は7,8月位始まるみたい、こっちの与那国近海は3月位から。だから丁度タイミングがいいですよ。尖閣辺りも2月3月かなあ」と漁場ローテーションについて触れている。

丸山文博氏(熊本県樋島漁協)は、「尖閣の魚釣島近辺だと、魚釣島、南小島、北小島、それと南小岩、北小岩とかあるさあ。この島なんか全部ツルツルツル漁場でこう繋がっている。だから操業しやすい。シケた時も、島からすぐ出たら、もう陰になるから、何ともない所からできるから、シケもあんまり考えなくていい。もう漁場が目の前だから、幾らでも仕事できるさあ。もうあんなのは最高ですよ。漁も丁度いい位獲れますよ。あっちやったり、こっちやったり、深い所から浅い所まで、それぞれにやったりで。ほんと大正島から、尖閣の西までは、魚釣の西までいい漁場です」と太鼓判を押して褒め称えている。

1-3 渡嘉敷漁協 糸満漁協

渡嘉敷漁協

慶良間諸島は沖縄カツオ業の発祥地である。渡嘉敷村は座間味村と並びカツオ業で潤った島である。戦禍で打ちのめされたものの戦後いち早くカツオ漁を再興した。

1950年渡嘉敷のカツオ船の源三丸が、琉球水産研究所の委託を受け、休漁期を利用して尖閣諸島で40日間深海一本釣試験操業を行った。その時15歳で飯炊きで行った兼島秀光氏(渡嘉敷漁協)から話を伺った。「尖閣列島は昔から魚が豊富な所と言われてましたから、八重山・宮古は勿論、台湾からもたくさんの漁船が来ていました。台湾船は殆んど突ン棒ですよ。・・・糸満の船が3隻シジャー(ダツ)とかを囲って獲っていた」。「北の方にあるコウビトウ(久場島)という所は、米軍が何か爆撃演習するとか言って、そこには近寄らなかったです。魚釣島と南小島、北小島、大体がこの3つの島の周囲でやりました。・・・尖閣列島は魚の宝庫です、だから相当獲れてました。5,6匹位一緒に揚がってきますからねえ、提灯みたいにして・・・アカマチ、マーマチ、シチューマチなんかすぐ食いますよ。大体150メートルから250メートルの同じ層にいますから。またこれがこっちで釣れるように小さくない、2,3呎です。大きいのは5呎位あるし、皆大物ですねえ」。それを契機に、カツオ漁の休漁期には渡嘉敷からも尖閣列島に一本釣りに行くようになったという。

糸満漁協

糸満は集団でダツ、トビウオなどを袋網に追込んで獲る網漁法を得意とする。前記渡嘉敷漁協の源三丸が1950年尖閣諸島で一本釣試験操業した。その時糸満船3隻がダツ追込みしているのを実見している。復帰後、カマボコ原料のダツは売れなくなり、ダツ漁は廃れた。

代わって出てきたのが底立延縄漁である。糸満漁協には最盛期には底立て延縄船が30隻ほどもいて、尖閣諸島にも出漁していたという。1990～2000年代になると船も次第に少なくなり、現在尖閣諸島に出漁しているのは1隻だけである。

糸満漁協から2人に聞き取りした。金城芳雄氏と當山清氏である。金城氏は、糸満に導入された当初から底立延縄に従事され、リーダーとして活躍された方である。

氏は、戦時中の14歳(1944年)に、家族と共に鹿児島へ疎開、種子島に移住した。

以来28年に亘り同島で追込み、トビウオ漁、一本釣りをを行う。19歳(1949年)には長崎県五島・小値賀島に追込み漁に行く。43歳(1973年)糸満に引き揚げる。糸満で新規に導入された底立延縄を始めて、金市丸を購入、尖閣諸島を主な漁場に出漁する。氏は種子島に長年寄留し、また終戦直後に五島列島に追込みで出漁した。半生を旅漁で生き、帰郷後は尖閣諸島で底立延縄に勤しんできた。氏の話は尖閣諸島における漁業は無論、糸満海人の歩みを知る上でも興味深いものである。

糸満はマグロ漁も盛んである。當山清氏は戦後マグロ漁の復興期から携わった。沖縄の遠洋マグロ業は景気の波に乗って大躍進するが、バブルの影響をもちに受け、業界は破綻し、遠洋マグロ漁は壊滅する。氏は、この盛衰につぶさに見聞、自身も体験した。

2、宮古島・八重山地区

2-1 池間漁協

池間島は名にし負うカツオ業の島であり、戦後のカツオ業の再興の中心になった島でもある。また 1960 年代一大サンゴブームの源にもなった。池間漁協長嶺組合長よれば、池間島は古くから尖閣諸島と関わりがあったというお話だった。

長嶺巖氏（池間漁協）曰く、「加那志オジーは、(明治の頃?)にイクン(尖閣諸島)に何年も通ったみたい。それが池間から何人か出稼ぎみたいに行っていて、年間通してじゃなくて、冬になったら満期だといって、島に帰ってきて、カツオ業、サワラ漁ができるのは春から秋までだから、これやって、漁期を終えると来年もまた出かけて行って、それで、母船は鹿兒島、それで八重山からも来ていたみたいです。・・・オジーが言うには、あの掘割を掘ったのは自分達だと 池間の漁師達だと」。これが事実なら驚くべきである。

戦後になって、尖閣諸島との関わりは深い。「終戦後、戦争終わって昭和 23,4,5 年には、ここ池間からも、冬には、尖閣列島に、宝山丸がカツオ業で行って、魚釣島に仮工場建てて、カツオ節製造しました。・・・うちのお祖父さんが漁労長していて、親父は機関長しているはずですよ。丸山(宝山丸カツオ工場)の工場長は森田金松オジーです。私の実家の真向かいにいました」。次から次へ、興味そそられる話が続くが、本文を見て頂きたい。

2-2、八重山漁協

尖閣諸島は八重山石垣市の行政管轄区域である。戦前からカツオ業が盛んだった。やはり古賀氏との関わりも深い。八重山マグロ船主組合長仲田吉一氏から聞き取りした。

「祖父さんは、ずっとクガドゥン(古賀商店八重山支店)の所において、ずっと古賀丸に乗っている。尖閣でカツオ釣っていたわけ。・・・祖父さんの跡継いで(親父は)カツオ業ですよ。カツオ船に乗ったり、潜ってカツオのエサ採りしたりしてます。あと一本釣、曳き縄したり、何でもやってます。戦後カツオ船が盛んな頃は、島の船は、もう皆尖閣の辺りまで出漁しましたからねえ。私の家も三世代、この尖閣の海で飯を食ってきたわけですよ」。

このカツオ業は衰退し、今はマグロ延縄が盛んである。主なる漁場は尖閣諸島と八重山群島の間であり、台湾マグロ船の不法操業、八重山漁船とのトラブルが続出している。これを解決するため、日台漁業協定交渉が進められている。これに対して厳しい評価である。「線引きを取り決めるという考えには大賛成ですが。残念なことは、日本政府は、水産庁は、台湾が勝手に引いた暫定執法線を認める形で譲歩していることです」。

「この三角水域と特別協力水域は、一番魚の獲れる所を台湾側に譲歩しているわけです。もう政府のやることはムチャクチャ、我々沖縄漁民にとって致命的な痛手、将来に悔いを残すことになるはずですよ。台湾船は 300 から 400 隻位いますから、台湾全体からこっちに集中して来ますよ。絶対台湾船は太刀打ちできない。ウチらにとって大変な打撃、死活問題ですよ」。

3、電灯潜り

尖閣諸島での電灯潜りは、1970年代中頃から始まり、1990年から2000年代初頭に終息した。主に沖縄本島的那覇地区漁協、那覇市沿岸漁協、浦添・宜野湾漁協の漁船が操業し、出漁する度に満船大漁したという。尖閣諸島での電灯潜りのようす、衰退した理由は本文を読んで頂きたい。今回4名の方から聞き取りした。その一部を紹介する。

志村武尚氏(浦添・宜野湾漁協)は、「電灯潜りで尖閣行く度に、もう魚を満船して帰ってきましたから。あまり大漁するもんだから、尚丸の出入港に合わせて、この辺のセリ市場はやってきましたねえ。セリ値を崩さげないためです。・少なくとも4名から多くて6名位です。操業日数は1航海5日、長くて6日です。1晩で5回操業、・水揚げは3トから4ト位かなあ、結構揚がりましたよ。浅瀬の場合もブダイ、深い所もブダイ・水揚げは一本釣りよりはよかったです。一本釣りは2トでもう大漁ですから」。「大漁するもんだから、僕を真似て、皆尖閣へ、電灯潜りで、行き始めるんですねえ。あっちこっちから、船立立てて、尖閣に、皆来てましたよ」と話している。

上原徳広氏(那覇地区漁協)は、「ハタ類だと・・クルバニアカジンといって25和位になるアカジンがいる。あれを相当獲って来た。・産卵期にはちょっと群でいる。魚釣島とか、コウビトウとか、どこといってはない。産卵で集まる場所は大体決まっている。・あれは産卵は大体4月5月だから、旧の4月20日位だから、だから年に一時さあねえ、その時にあっちこっち潜って探した。一度は1日16本獲ったよ。クルバニアカジン16本というのなかなか獲れない。大きいのが21,2和、小さいのが12,3和位。平均で18和位、これだけで約290和、他の魚も獲れて、大漁した」。

川満力氏(那覇地区漁協)は、「尖閣列島は、このブダイ類は沢山いましたよ。このオーバチャー(オビブダイ)とか、イラブチャー(ニシキブダイ)とかが多い。ワラー(スジブダイ)なんかは沢山いる。こういった奴は浅瀬に多いですよ。魚がいる所はサンゴが皆多いわけです。あのテーブルサンゴとか、このイラブチャー、ワラー、オーバチャーなんかは、ハーガー(浅瀬)のトンネルみたいな岩の中に入っている。岩の割れ目の中とか、サンゴの下とかに、動かないで眠っている。これを突いて、獲るわけです」。

野里秀吉氏(浦添・宜野湾漁協)は、「尖閣の場合は潮はすごい。(魚釣島の西端と東端を指して) こういう島の角とかさあ、こういう所は潮はすごいわけ。空飛んでいるみたいでどこまでも流されて行く。あそこの潮だったら、こっち(浦添牧港漁港)から1時間で、那覇空港辺りまで流されて行くはずよ。潮の流れ? あれは何メートル潜っても一緒、上の潮も、下も潮と一緒に走るよ。ただ島カタカ(陰)で潮が止まる所があるわけさあ。だけどこっちに来たらまた戻されるし、またあっちに行ったらまた戻されるわけよ。潮が巻くからここで。海の中は真ん中だって潮の流れは渦巻いているから、もしこっちから潮来てるとしたら、飛び込むさあ。ボーライ(すぐに)流されて、こっちで止まるわけ。で、反対から流れされて来ると、こっちに止まる。もう洗濯機の中泳いでいるのと一緒に。魚も逆立ちなって、夜だけど、こんなして泳いでいる」。尖閣諸島で潜った人ならではの体験である。

4、サンゴ漁

サンゴ採取

戦前から尖閣諸島海域のサンゴは取り沙汰されていた。「台北州水産会では試験船北丸をして・・・アジンコートから尖閣列島に至る90哩の間を幅十哩長さ30哩に互って・・・前途頗る有望」(台湾日日新報 1927.07/22・「台湾の珊瑚上」)／「本県に珊瑚・・・就中尖閣列島の周囲は大いに有望視され・・・列島と縁故者たる古賀氏に許可された」(先島朝日 1935.7.3)／「尖閣列島近海の珊瑚漁場は台湾を根拠とする漁船の漁場と化し・・・連日70隻からの出漁を見てみる」(先島朝日 1935.7.24)、等々と報じている。終戦後の1948年、宮古民政府が再びサンゴ漁に着目し、「北は大球曾根より南はせん角列島周辺に至る海底に多量のさん瑚が自然成育し・・・之が実施の暁は本郡経済界に多大な貢献をなす」(みやこ 1948.6.4)とサンゴ漁を企図したとある。1959年(昭和39年)森田真弘氏により、宮古の宝山ソネで、一大サンゴ漁場が発見され、サンゴブームが沸き起こる。カツオ船もカツオ釣るのを辞め、サンゴ船に切り替わった。

100隻余りのサンゴ船が押し掛け、宝山ソネはサンゴ網曳く煌々とした灯りで不夜城の如くだったという。今回、3人の方から当時のサンゴ漁の話を伺った。尖閣諸島に関わる内容は少ないが、これを契機に、尖閣諸島におけるサンゴ漁の解明の手掛かりも得られよう。

川満力氏(サンゴ船漁労長)は、「魚探では、サンゴがあるか分らん。ずっと100メートルから240、250位の海底を見ていて、影映っても、これサンゴかどうかは分らん。今は船の機械も進歩して、サンゴがあるのが分るか知らんが、あの時分はそれができない。どこそで採れた、どんなサンゴが、どの位採れた、そういう情報を聞いて、皆その漁場に行って、そこに網入れても、深さと地形見て、あとは勘でやりよったです」。

西里勇氏(サンゴ船機関長)曰く、「僕らが行ったのは昭和35年だ。僕らは最初行って、採って来てから、・・・サンゴはメチャクチャ揚がったよ。・・・1貫以上のものが何10本も揚がってきた。伸光丸のブリッジに入らん位、大きなものもあった。桃サンゴだったけど、中には、きれいなスカッチの、このパイプの大きさ位のもあった。この長さ位のが、何本も揚がってきた」。外間安健氏は、「サンゴ船は厳しいよ。マグロ船、一本釣船と違って、サンゴ船の船員は月給制だった。採る時も採らん時もあるのに、決まりがないさあ、行って品物揚がるか、揚がらんか分らんのに、月給制にしないと誰も付かんさあ、配当制では船員はもたんさあ。それにこれ品物売らんと金幾らなるかはっきり分らん。しかも3、4ヶ月も寝かして、入札に出す。サンゴ船は2回しか入札しないわけ。だから船主はこの間金作らんといかん。金がない人は簡単にできない」。

サンゴ加工・販売

サンゴ漁業はサンゴ採集と製品加工・販売の両輪からなることから、沖縄県のサンゴ製品加工の魁であり、第1人者である根間忠男氏に聞き取りした。氏は沖縄県のサンゴ業が失敗した一因はサンゴ加工製品の粗製濫造、安売りにある。この反省に立ち、サンゴ漁業の将来性に期待して、サンゴ製品に付加価値付けた宝飾産業の育成を提言している。

5 尖閣諸島調査関連等

石垣島測候所関係者の思い出

戦後尖閣諸島調査は、1950年(昭和25年)の故高良鉄夫氏(元琉球大学長)の戦後初の単独調査を皮切りに計5回に亘り調査がなされた。高良氏に幼少の頃、天空がかき曇るほどに海鳥が乱舞する島があると教えたのは石垣島測候所長岩崎卓爾翁である。その岩崎所長の愛弟子正木任氏が1939年(昭和14年)農林省南西諸島資源調査団に同行し、尖閣諸島を調査した。高良氏は、正木氏の調査に鼓舞されて、戦後初の尖閣調査を敢行されたという。

正木任氏のご子息正木讓氏(琉球気象庁)から、石垣島測候所関係者の思い出として、岩崎翁、父君任氏、農林省調査団のお話などをお聞きした。話は戦前から戦中のことに及んだ。

1943年(昭和18年)、中央气象台は、尖閣諸島へ測候所設置を計画する。戦時体制のこともあり、内容が軍事機密であり、石垣島測候所とのやりとりは暗号電報に代わって行く。

この経緯は本文に譲るとして、最後は戦争に突入、建設不能となって、計画は頓挫した。

讓氏によれば、尖閣諸島への測候所建設計画は戦後の1時期また取沙汰されたという。

1946年(昭和21年)比嘉正雄氏が八重山測候所所長で赴任してきた。氏の話を用いる。「ああこれぜひやるべきだ。やっぱり台湾坊主の発生、これが分かんるとどうにもならない。で、それを押し進めるわけです。比嘉所長は八重山高校で地学教えていたんですよ。あの頃は理科の先生が少ないもんだから教えに来ていた。そしたら、尖閣に測候所造るといしょっちゅうその話ばかり。・・・尖閣に測候所ができれば、その時に幾らでも人間必要だと。僕ら15名足らずの受講生しかいない。お前ら15名全員採用する！だから大学なんか、行く必要ないから、測候所が皆採用する！」。興味深い内容である

讓氏の話は多岐に及んでいる。与那国測候所時代の突船、カツオ船体験は面白い。

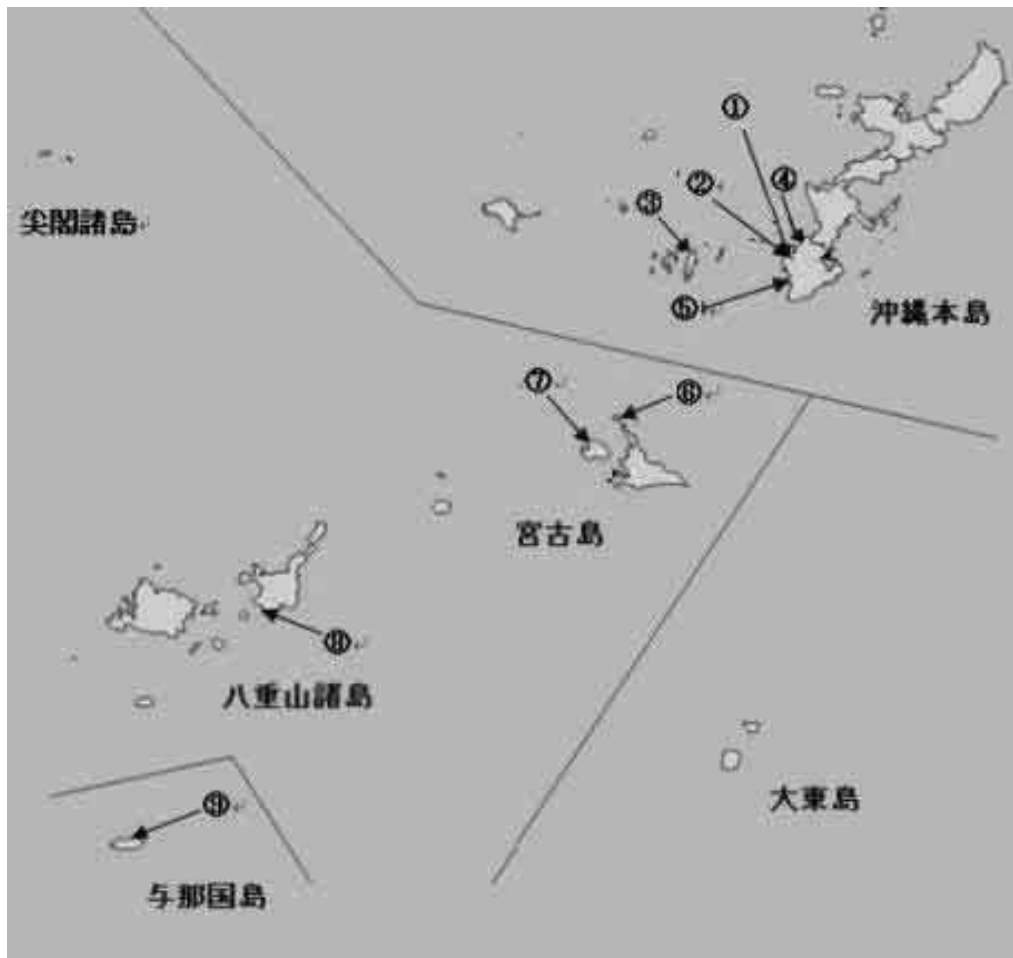
また長崎海洋气象台観測船・長風丸に乗船してCSK(国際黒潮共同調査)の海流調査、舞鶴の海洋气象台観測船・長風丸での海洋調査。この2つの調査でも尖閣諸島のすぐ傍をとおったと言う。3度目の正直で、憧れの尖閣諸島に上陸したのは1968年(昭和43年)、高良鉄夫氏の第5次調査、その団員の一人として参加した。

戦前・戦中調査2題

照屋健吉氏(元沖縄テレビ報道部記者)より、「尖閣諸島調査2題 農林省・中央气象台地調査」と題して寄稿頂いた。氏は農林省の調査団の小林純氏を生前訪問し、その時の写真、報告書、8ミリフィルム等の貴重な資料が保管されているのを見せてもらった。現在、これら写真、8ミリフィルムは沖縄県公文書館に大切に保管されている。照屋氏の尽力によるものである。寄稿にはこの調査関係資料発見の経緯を紹介している。また戦時中、中央气象台から、内川規一氏が派遣されて、魚釣島を調査した。この内川氏に生前インタビューしたのも照屋氏である。海軍警備艇「関」丸に乗船、魚釣島に上陸し、銃を持参した水兵らとジャングルを切り開きながら頂上まで登ったという。内川氏の「きしょう春秋」の手記を引用しながら、4時間の難行苦難だったと、照屋氏は記しており、貴重な記録である。

II章 聞き取り編

聞き取りに関連した主な漁協。



漁協名	所在地
① 那覇地区漁協	那覇市港町
② 那覇市沿岸漁協	那覇市安謝
③ 渡嘉敷村漁協	渡嘉敷村字渡嘉敷
④ 浦添・宜野湾漁協	浦添市 字牧港
⑤ 糸満 漁協	糸満市 字糸満
⑥ 池間 漁協	宮古島市平良字池間
⑦ 伊良部 漁協	宮古島市伊良部
⑧ 八重山 漁協	石垣市新栄町
⑨ 与那国 漁協	与那国町字与那国



①. 那覇地区漁協



②. 那覇市沿岸漁協



③. 渡嘉敷漁協



④. 浦添・宜野湾漁協



⑤. 糸満 漁協



⑥. 池間 漁協



⑦. 伊良部漁協



⑧. 八重山 漁協

対象者の内訳

漁業関係者へのヒアリング調査は概ね下表の内容である。

地区	所属漁協・団体	員数	備 考
沖 縄 本 島	那覇地区漁協等	6	深海一本釣、 マグロ延縄 造船（船大工）
	鹿児島・熊本県漁業関係者	3	深海一本釣
	渡嘉敷漁協	1	深海一本釣
	糸満漁協	2	底立延縄、 マグロ延縄
宮 古	池間漁協	1	カツオ漁、深海一本釣 サンゴ漁
八重山	八重山漁協	1	マグロ延縄
	電 灯 潜 り	4	
	サ ン ゴ 漁	7	サンゴ採取、 加工・販売
	尖閣諸島調査関連等	2	気象、海洋調査他 資源調査他
	合 計	27	

※ 主な聞き取り期間： 2014年4月～2015年9月



普天間 直精 ふてんま ちよくせい (那覇地区漁協)

1932年(昭和7年) 那覇市垣花町に生まれる。82歳(2015年時)。

13歳(1945年)に終戦、戦中避難先のヤンバルから那覇若狭に移転、15歳で海人。のち高田商会に勤める。21歳(1953年)ガリオア船購入(勝進丸ト)を機に、船長の父親に伴い尖閣諸島へ出漁する。のち父親が 病気になり、この航海は長く続かなかった。21歳から26歳(1953~1958年)5年間頃の体験である。終戦直後の体験者が物故して少ないだけに、氏の話は興味深い。往時は氷と燃料だけ積んで、エサ持たずに、大正島で釣ったカツオをエサにし、尖閣諸島へ出漁したという。また氏の父親達が、戦前鹿児島に行き来し、ヤマギタ(大分式一本釣)を導入した話も、一本釣漁法の歴史を知る上で興味深い。



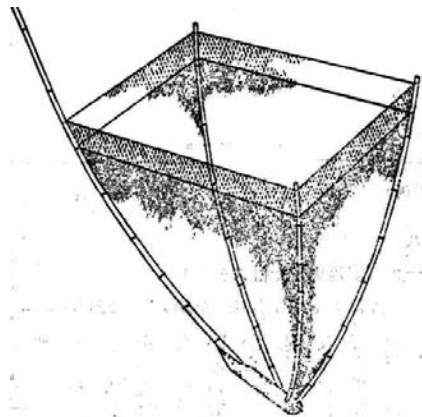
祖父の代から 海人3代目

ウチのお祖父ちゃん、親父の代からの垣花の海人です。カツオ釣は宮崎(県)から慶良間に伝わった話ですが、ウチのお祖父ちゃん達も大島から習ってきて、垣花でもカツオ釣りを始めたそうです。こっちから大きなサバニもって行って、大島でこの網業(わざ)をして、エサのスルルー(キビナゴ)を採って、これでカツオ釣したんですよ。あれは活きたエサを使うもんだから、これで一生懸命採って、網で採って、で、本船が来て、それに渡して、カツオ釣に行きよった。住吉一丁目の比嘉とか、渡嘉敷姓の人達がスルルー網でエサ採り専門でやっていたようです。

だけど、この人達は全部戦前失敗して、皆南方とかこんな所に連れて行って亡くなっているそうです。

ウチのお祖父ちゃんなんかは、今の那覇港の護岸辺りで、エサのスルルーを採って、それをちょっと沖に出て行ったら、もうカツオがいたそうです。このカツオを釣って、当時垣花にセリ市場はできておったから、そこに卸出したり、こんなしてやっておったようです。小さい頃は、お祖母ちゃんも一緒に、夜通し起きておって、このエサ採りのスルルー網作りよったのを憶えています。

戦後になっても、僕はあのスルルー採りを叔父さんなんかと一緒にやったんですよ。スルルー網がないから、ダイナマイト使う、あれにニチビ(導火線)だけ点けて、パッチとって鳴らす(爆発させる)と、これに動転して、スルルーは渦作るんですよ。それで1人は潜っていて、下から普通の網で揚げてきて、それを掬って、そのまま活け間に入れて、水入れて、活かしよったんです。



スルルー網(「琉球網・松原新之助画」より)

10.10 空襲 船にいて 頭怪我して

親父(普天間直保)は、戦前、勝進丸という船を持って、大島の名瀬とか、鹿児島を行き来して、カツオ漁とか、(深海)一本釣とかやりましたよ。それが 10.10 空襲で船やられて、船にいたもんだから、頭をやられて、大怪我しました。幸い命は助かりましたがねえ。

僕はこの戦争の時は 13 です、そのあと皆でヤンバルに避難して、向こうであれこれして、15 にはここ(若狭)に来ました。あれからずっとここです。元の垣花には戻れないもんだから。もう 15 から海人です(笑い)。

最初は、親父と一緒にサバニとかで漁をやっておって、そのあと 58 号という船を、ほれ水産高校辺りでカッターで漕ぐボートがあったでしょう。あれを改造して、これに焼玉をのせて、海人仲間 5 名で持っておったんです。で、僕も、この船に乗せられて、親父から一本釣をしこたま仕込まれたです(笑い)。

一本釣の経験はそれからだったんですね。だけど海にはあまり興味がなかったから、そのあと高田商会に勤めて、番頭しておった。親父は、58 号を辞めたあとは、叔父さん達と大島から小さい船買ってきて持っていましたねえ。その船はあまり古くて、故障も多くて、遠い所には行けないと親父が言ったもんだから、これではいかんなあということで、そしたら、丁度ガリオア船が売りに出されて

いました。あの時分大きな船はガリオア資金で造った船しかないでしょう。親父が渡名喜のカツオ船が経営できないと売りに出されていると聞いてきたから、僕がこの船を買ったんですよ。

番頭しておって貯めたお金が少しあったもんだから、残りは漁協組合から借りて、このガリオア船を買って、修理させて、親父に持たしたんです。ウチは戦前から船持っていて、ずっと勝進丸で通してきたから、船名は勝進丸にしました。



1950 年代ガリオア船の進水式光景。この大型造船を機に尖閣諸島などへ出漁し始めた。(「大琉球写真帖」より)

60 年前? 尖閣で一本釣

親父は、この勝進丸は大きいからと、その船持って、それで尖閣列島に行き始めたわけです。それに僕に海のことを教えたいという気持ちがあつてねえ、しょっちゅう僕と喧嘩するんですよ。あんまり喧嘩するもんだから(笑い)、とうとう店を辞めて、僕も元の海人になって、親父と一緒に尖閣列島に行ったんです。

僕が 20 歳?(1954 年)の頃かな、尖閣列島行ったのは。いつだったか、はっきり憶えていないけど。とにかく終戦直後の早い時期で、この那覇地区から誰も行ってなかった頃です。

ウチの親父の働きがうまくて、向こう行って相当儲かったです（笑い）。あの時分は尖閣列島は魚は幾らでも釣れよった。もう1週間では、満船して帰って来ましたよ。

だけど、向こう行く時は天気との闘いだっただねえ、親父はしょっちゅう天気だけ見ておったから。僕らが勝進丸で向こう行ったのが、5年ちょっとじゃないかなあ、そのあと親父は病気したから行けなくなっただです。僕もそのあと海人辞めて、陸(おか)の仕事に替わりました。だから尖閣列島に、親父と一緒にいったのは、僕が20ちょっとの頃ですかねえ。

そのあと行ってないし、今の尖閣列島は知らないです。あの時も終戦直後だから、あれから60年は経っているし、もう昔のことだから、僕の記憶もはっきりしない。頭もチクハグになっている（笑い）。それでよければ、僕が分かる分だけは話してもいいですよ。

エサ持たず 氷と 燃料積んで

僕らが、尖閣列島に一本釣で行った時代は今のエンジンじゃない、当時は焼玉といって、玉を焼いて、それをエンジン起こして行く時代だった。25馬力のシングルの奴で、沖縄から行って、氷積んで、エサも何も持たないで、道具と氷だけです。氷は当時は、こっちの漁連に、今のとまりん(泊港ビル)の端っこにあったんですよ。僕が18歳位だった。その時は琉水(社)は三重城にあって、こっちで氷積んで、近い海行く時はエサを向こうでサンマ買って行きよった。尖閣列島に行く時からは、丁度エサも買わないで、久米島に行って、久米島から、すぐコースをアコウ(大正島)にとって行きよったです。その当時の勝進丸には6名乗っています。

ウチの親父、親子で7名か、8名か、親父の兄弟3名で持っていましたからねえ、直健とっていましたが、親父は3男で直保で、長男が直ちようといって、当時は魚探もローランも何もないもんだから、久米島からアコウにコース打つ、で、そこから時間をつけてねえ、朝行くと昼間でしよう。だから、向う(アカウ)には朝に着かないと、エサが今度は採れんわけ、とにかくアコウを見つけて、アコウでエサ採って、それで、尖閣に一本釣に行くんです。



大陸棚に沿って黒潮が北上している。尖閣諸島に行くには沖縄本島(那覇)～久米島～大正島～魚釣島のコースとる。

台風時期外して 冬場行く

よけい南からは天気が悪くなると、ほれ北風になるから、向うの天気が悪いというのは、南風の天気が悪いということじゃなくて、北風の天気、丁度時期的に冬しか行かんから、

夏場は絶対行けないですよ。向こうには、台風が怖いから、避難場がないでしょう。

冬行くと、ニシ(北)風が吹けば、大きい島(魚釣島)に、南側に避難できますからねえ、1日や2日位はできるけど、とにかく台風時期を外して、旧8月、9月頃から向こうに行きました。しかし、今のようにテレビで天気予報をするわけじゃないでしょう。当時は、ラジオ聞いて、空を見て、それだけで走りよったからねえ。親父も、自分で、空を見て、雲の動き見て、「しばらくはノーイヤクト(風だから)」と言って、尖閣に行きよった。それでも向こうはちょっとシケると、もう大荒れになりますから、危険ですよ。

いつだったかなあ、ほれ、テレビで、ゴムボートに乗って、波しぶきを被りながら島に上陸するのが映っていたことがあるでしょう。素人がよく向こうに行っているなあと思いましたねえ。

雲の流れで、天気を判断

親父もそうだったけど、当時の海人は皆天気に詳しかったですよ。近所に我那覇さんというお爺さんがいたが、僕の所に坐っておって、空を見ながら、「イェー、アヌ雲マーンカイトゥートーガ？」(どこに流れているか)と訊くんですね。雲の上にもう1つ雲がある、ヌーリ雲といって、雲の上からゆっくり歩く雲があるでしょう、これを見ておって、「イリーンカイドウ(西の方か)? アガインカイ(東の方)トゥートーリー？」と方角を聞いて、それで天気のことを、僕にいろいろと教えるんですね。

雲の動きで天気とか、風になるとか、時化る場合とか、海人に必要な知識を相当習いましたけど、もう皆忘れちゃったねえ(笑い)。だから親父も、尖閣行く時もいつも雲の動きを見て「ワーチチヌ(天気が)悪クナイクト、ナー行カンケー」とかねえ、「カジマーイドー(風廻り：移動性高気圧だから)行カラシガ」といって、そんな話をよくやりよった。それとイリヒ(夕陽)を見て天気を判断しよったみたい。海にちゃんと落ちるまで太陽が見えるんだったら、いい天気になる。これが落ちるのが見えなかったら「ワーチチ ヤンディークト(破れる)」と言ってましたねえ。

アコウに コース打つのが大変

しかしコース打つのが大変だった。ウチの親父は、すぐ久米島から昼出ますよねえ、詰め込みして。だから久米島では、丁度出発する時間にあてて、そこで寝ているわけです。そうしないと、アコウには朝早く着くように、ちゃんと計つといて、時間を作って行きよったです。しかし、天気が悪い時は流されてどこに行くが分からないですよ。今のようにローランも何もない時代だから、すぐ北風だったら、ほんとに、向うは台風並みだったです。そしたら、このアコウが見えなくなって、島が探せなくて、流されて行ったこともありますよ。流されてというよりは、コースはちゃんとアコウに乗せてあるけど、そこから少し外れてしまって、見えなくなったんです、天気が悪いから。それにアコウが小さいから、南から見ると横になってよく分かるけど、久米島から行くと縦になるもんだから。ア

コウ目指して大陸棚に上げればいいですよねえ。

普通は、チートー（オモリ付けた深さ測定用の縄）を入れながら、300メートルとって、入れて、ああ、大陸棚だなあと、だけど、あの時分はこんなのはしない。羅針1つと地図見て、ニヌファ（北の方角）向けなさいとって、ニシ（北）に向けなさい、何度ということ、アコウへそのまま向ける（笑い）。大陸棚に上げるということは考えなくてもう方角だけ。

親父はずっと潮を見てやっているみたいでしたねえ、潮の流れをねえ、ぶつかる潮の流れを見てやっておるみたいだったですよ。だから天気が悪くなるとどこに流されているかそれも分からない。今のようにローランとか、魚探があれば、こう外すということとはなかったはずだが。当時はもう、親父の勘というか、感覚と羅針1つだけが頼りでしたねえ。海図はあるけど、海図にはただ、親父が自分で計算して線を引いて、船がどこからどこに行くという線が引いてあるだけ。今のように機械とかを当てて走るということは一切ないです。羅針儀とその海図を見ながらの航海ですから（笑い）。親父がコースをとれば、あとは皆で交代して見て、走るだけです。だけど、少しは分かるからとって、簡単に親父の代わりに自分がやるよと言ってやりますでしょう。少しでもコース外れたらもう終わりです（笑い）。

コース外れて 八重山に流されたことも

1度はこんなことがありました。親父が身体の具合が悪くて、海に出ないからとって、行かなかった航海があるわけです。その時に奥間さんという船員が「アンシェー（それなら）ワーガイチュサ（私が行くよ）」と引き受けたわけです。そしたらコース外れてしまって、アコウ取れなくてねえ、そのままずっと走っていったら、どこがどこか、分からなくなって、もう僕はブリッジの上に坐っておって、しょっちゅう水平線に島が現れてこないか探して見ていおったですよ。

しばらくしたら、八重山が見えてきたから、「八重山だ」と言ったら、「イー、ウレーマークドゥヤル（いや、これは宮古島だ）」と言うわけさあ、ということは北風に流されているから宮古に行っていると思っているわけ。一番上の叔父さんが「違う、あれは八重山だ」と言って、2人とも喧嘩しながら、船をそのまま走らしたら、やっぱり八重山なんですねえ。平久保よ（笑い）。平久保から八重山の港に入れて、それで2週間位、遊んだのかなあ、遊んで、それで、またアコウに行こうとしても、奥間さんはあれから意地引いてしまって、行けなくなっているわけです。もうそのまま帰って来ました。これまで儲かっておったのに、この航海はもう向うで食うのもなくなって、借金してねえ（笑い）。



洋上に突き出すアコウの岩礁
尖閣諸島に向かう唯一の目印

アコウで エサのカツオ 釣る

アコウでは、一本釣のエサにするカツオ釣るんです。当時は、アコウの海は、カツオも沢山いるし、もう飛んで歩く位、潮に向かって走るわけ。カツオは普通鳥山見てから探しますよねえ、そんなことしない、向こうに行くと必ずいる。アコウの丁度西側かなあ、そこに潮がかかるから、それに向かって、カツオとかの魚がいっぱい浮いているわけです。昔の僕らに言わせると、「イユヌ(魚が)タジトーン(たぎっている)」と言う位、もういっぱいです。カツオはホンカツオ、それを釣ったり、サワラ釣ったりしてねえ。

ある時は、サメがアコウの西側にいっぱい浮いてからに、ほんとに海も見えない、底も見えない位浮いてねえ、角が横に生えて目がこっちにある奴、カシー(シュモクザメ)が沢山いて、それでカツオも釣れんわけですよ。サメは潮の流れを食って、エサを狙っているわけですよ。カツオを食うために皆時間なったら集まって、で、しばらくしたら、一斉にサッといなくなりましたねえ。またカツオは集まってきたから、僕らもまた一生懸命釣ったわけです。とにかく、最初にアコウに来てねえ、こっちでカツオ釣って、1時間位、エサを採って、場合によってはサワラとかも釣れるもんだから、それに時間とられて、ほんとの一本釣するのに時間が遅くなったりしましたねえ(笑い)。

尖閣で、大きなタイも釣れた

そこから今度は、3時間位走らしたら尖閣列島ですよ。ウチの船は15マム位の走りだから遅かったです。今いう西にねえ、西に走らして行って、丁度海(釣場ポイントの意)を探して、海といっても魚探とかこんなものでは探しません。もう大陸棚に上っているから、「チートー 入りレー」と言ってねえ、チートーで、縄で、深さを測りながら、自分が前釣った所を探してやりよった。そうねえ、当時は何10メートルとは言わなかった。幾尋位と、尋で話しよったですよ。それで海探すと縄入れるんですよ。漁法はイシマチャー(石巻落とし漁)じゃない、あの針金曲げて作ったヤマギタです。「トー、ヤマギタ 入りレー」と言って、エサかけて縄入れると、もうすぐ釣れるんですねえ(笑い)。

1本釣だから、アカマチ(ハマダイ)とか、シチューマチ(アオダイ)とか、マーマチ(オオヒメ)とかねえ、当時はタイも、こんな大きなタイが釣れよったです、ホンダイが。タイは、アカオと大きい島の合いで釣れたかなあ。

向こうでは、一本釣は、魚の種類によって違うが、大体80尋(140メートル)位の深さに縄入れますよ。ここで、この途中で、どうにかして、縄が絡んで纏れてしまって、あの時は手繰りだったもんだから、結局これ直すして、途中で止めておくでしょう。下まで行かなくても、もう魚釣れているんです。それ位いたんですよ。もう向こう行くと、例えば50尋(90メートル)で止まっているとするでしょう。そこで釣れるもんだから、80尋には下ろさんですよ。そのまま揚げて。下まで入れんで、手繰るの大変さあ、途中に入れたままで(笑い)。

そういうような釣り方しておったです。それ位釣れよったです。深海魚が下から上がって来るんです、エサ見て。魚が全部一緒に上がって来てねえ(笑い)。

八重山から魚購うて 運んでいる？

あの当時はほんとに、尖閣列島は魚の宝の島だったんです。1週間もあれば、魚を満船して、大漁して、帰って来ましたから。もう向こうには、たぎるほど魚がいるから、すぐ食い付くからということ、皆に言うとは終わりだから（笑い）。しばらくは自分達だけの金庫にしておこうと、内緒にして、誰にも言わなかったですよ（笑い）。

だけど、勝進丸は毎航海、満船大漁してくるでしょう。それを「クッターヤー（奴らは）エーマンカイ（八重山に）、イユル（魚を）コーティチュールヨー（購って来ている）」と言ってましたねえ（笑い）。勝進丸は八重山に着けて、八重山の船が獲った魚を買って那覇に運んでいると思っていました。あとからは、尖閣列島で魚がいっぱい釣れると分かったから、もうそれからは、皆尖閣行き争いになりましたけど（笑い）。

ヤマギタの針金 米軍の物資集積所から

あの時は、ヤマギタを使いました。これは全部手作りですよ、銘々で。今の一本釣は釣針を10も付けるさあ、あの当時はヤマギタはそんなに付けない。5つから6つ、多くて7つ位、揚げきれんのに、向うでは魚が大きいから、ヒイチャーバーケー（引っ張り競争）でしょう。当時は揚げ機はないから、皆手繰りで揚げるから、これだけが限度ですねえ。

このヤマギタはチュハーラ（沢山）作って準備しておかんといかん。海に行く時にこれ全部作って、針金は、戦後電柱の支えしている奴を、今沢山あるさあねえ、銅線も沢山あったけど、あれは曲がってねえ、魚が大きいと、タマツテ（曲がって）から、道具同士を喧嘩させて、よけい使えなくなるから、こんな硬い奴をわざわざ探して、電柱の支えしてあるのは太くて硬いさあ、あれの小さいのがあったんですよ。今の国際通りのグランドオリオンという映画館、この辺は米軍の物資集積所だったんです。こっちに色んなアメリカの資材を置き放して沢山あった。黒人兵が監視していたけど、色んなワイヤーとか無線の電線、そんなのも沢山あった、砲弾の薬莖も。

随分そこから材料盗ってきて、で、工夫しながら、ヤマギタとか、自分達で作っておったです。オモリとかはもう石は使わないです。

そこから鉄筋の太い奴を探して来て、これを切ってから作りました、軍の方に行ったら海の道具にできるのがいっぱいあって、トラックも全部捨てられておったねえ、僕らはそこに入って行って、黒人兵の目を盗んでねえ（笑い）。で、僕はそんな冒険はしなかったけど、戦果上げるといって鉄砲で射られそうになった奴が、友達にも2、3名はいましたけど（笑い）。



ヤマギタは米軍の集積所から針金拾ってきてチュハーラ作ったと説明する普天間直精さん。

沖縄の水産功労者 我那覇生敏さん 生傑さん

あのヤマギタとか、イシマチャー(石巻落とし漁)、あれは、戦前鹿児島から持ってきたものです。僕の先輩で我那覇生三さんと言う人がおります。生三さんのお父さんが生傑さんと言うて、生傑さんの兄さんが有名な我那覇生敏さんですよ。あつちは兄弟多かったですから、この生敏さん達が、大正時代に大島から習ってイシマチャーを持ってきた。このイシマチャーのお蔭で、マチジー(マチ一本釣)は相当進歩してそれで盛んになったわけです。このイシマチャーは垣花から港川、石川まで、沖縄中に広がっていくでしょう。生敏さん達は、沖縄の漁業の恩人ですよ。我那覇家は戦前は東雲丸という船を持っていたんです。その船が漁から帰る途中、糸満沖で台風に遭って、生敏さんは弟達を助けようと事故で亡くなったんです。昭和4年というから39歳の若さで。で、亡くなったあとから、県知事とか那覇市長から、沖縄の水産業の功労者として、表彰状をもらってます。

ウチの親父は弟の生傑さんの東雲丸の船長してました。東雲1号、2号、3号あったといえますから。何号かは分かんが。僕は小さい時の親父に連れられてよく生傑さんの家に行ったんです。昔は垣花の船置き場の所に石油タンクがあったです。そこを過ぎるとすぐセリ市場があって、氷会社があって、よく船に行きながら、生傑さんの家に連れて行かれたこと憶えてます。僕が生まれた時に、着物を縫って着せなさいとって反物持たされて、これで拵えた着物を終戦まで大事に持っていたんだよと、ウチの親父はこの話をよくやりおったから憶えているんです。この生傑さんも戦前、県から派遣されて南方に漁業の技術指導に行ってます。国から県から表彰されてます。

ウチの親父はその生傑さんの船から船長して歩いて、相当海を勉強してきたわけです。それから自分の船造ったみたいですからねえ。



イシマチャー、ヤマギタ漁法導入に貢献した我那覇兄弟。左：兄の生敏(明治23年生れ、享年39歳)。右：弟生傑、兄亡き後ヤマギタ漁法の普及に尽力。

ヤマギタ 親父達 鹿児島から習い 普及する？

で、ヤマギタですが、生敏さんが昭和2年に大島から習って持ってきたとあります。

ウチの親父の話だと、ヤマギタが普及し始めたのは、昭和10年頃からのようです。

親父は、明治43年(1910)生まれです。夏になると、大島から鹿児島まで行って、あつちこっち知っている海を歩いて、魚を積んで、で、鹿児島に売って、で、引き返してくるわけですよ。だから、戦前ジーマーというのがあって、今でいう白米、それを鹿児島から買って持ってきて、僕らが小さい時はこれをおった。これが戦時中になって買えなくなったから、今度は芋に代わってきたんですが。あの勝進丸は僕が生まれた翌年には造っています。親父がそう話してましたねえ、昭和9年(1934年)には、自分の船で鹿児島行っ

てます。その前は生傑さんの東雲丸乗って、鹿児島行き来してます。

親父は、その頃に自分達が鹿児島からヤマギタ習ってきて、沖縄に持ってきたよと話してました。あの当時垣花シンカ（仲間）が相当行き来していたわけです。鹿児島の連中が、ヤマギタを作ってマチ釣をやっているのを見て、これいいと、習って持ってきたわけです。

垣花ンチュ(人)は、皆海歩いているでしょう。親戚も沢山いるから、皆このやり方見て、また作り方を習って、これが大きくなって、広がったわけです。これ広がったのが親父の話だと、昭和10年から11年頃ではないですかねえ。親父が25,6歳の頃ですが。

生敏さんは最初にもって来たけど、実際に鹿児島の真似して普及したのは弟の生傑さんの頃じゃないかねえ。親父が元気な頃にこの話を詳しく聞いておけばよかったです（笑い）。

荒れ手に 豚脂 夜中ゴキブリ 齧る

僕らの時分、尖閣列島で一本釣りするさあ、もう縄揚げるのは大変だった。幹縄は手繰りで、揚げたから。もう200メートル、300メートルの深さでしょう。これを朝から晩まで、ずっと手でチャアギー(ずっと揚げる)してましたから。これが大難儀でしたねえ。

だから僕らの手はもうこんなタマッテ(反り返って)、指先は全部曲がって、手の掌は皮が剥けてカサカサーなって、ヒリヒリしてあんまり痛いから、夜は脂付けて、豚脂を付けて、眠るんですよ。そしたら、夜中になるとトービーラー(ゴキブリ)が出てきて、僕らの指先を齧るわけ（笑い）。食いにいっぱい集まって来るんです（笑い）。

船には小さい奴が沢山いるでしょう、夜中、食われているのは分からんわけ、もう疲れて眠っているから。朝起きると、指の皮が全部齧られて、指の皮だけきれいに食べられているんですよ（笑い）。ということは、ほれ、指の皮とか、手の掌とか、豚脂が塗ってある。それに爪の中にもエサのカスが入っているでしょう。相当洗っているけど、やっぱり残っているわけねえ。トービーラーはその匂いを嗅いで集まって来る。して、朝起きると、もうあっちこっち齧られて、食べられているわけですよ（笑い）。夜中は、夜中で、当時そんなこともありましたねえ。

昔の製造場工場 残っていた

上陸するのは西側に上陸していますようねえ、こちらは僕らが行く時までには小屋もあったんですよ。崩れかけたような小屋が、当時はこっちはカツオ節造っておったという話は僕は親父から聞いたんだが、何で、あれは何かなあと言ったから、こっちは昔はカツオ釣ってから、カツオ節製造しておった場所だから、あ



魚釣島の堀掘りから見た古賀氏カツオ工場跡、かやぶき納屋2棟見える。（新垣秀雄 1952）

れがあるんだと言っておった。

当時はもうきれいなお家じゃなくて、崩れかけているのが見えおったんです。その下に僕は避難したりしおったんです。あまり天気が悪い時には。あのワイトウイ(掘割)には入っていかない。外に、もうあそこには船は入らないですよ。海人は中に入れると漁も何もできんから、ただ、外の静かな所に、入口にアンカー入れとって、もし風が強くなったら、島のカタカ(島陰)に逃げるということで、そこで昼も夜も、遊ぶよりはということで、魚釣るんですよ。豪華なシチューマチとか、こんなのよく釣れましたからねえ。今はどんななっているか分からんけど、

海鳥の卵 臭くて食えん

(南小島の写真を指して) アホウドリ(カツオドリの意か?)というのがいるでしょう。

あれもここに沢山いましたよ。僕は下りていかなかったけど、ウチの先輩なんか下りて行って、卵まで持ってきてあったんです。臭くて食えなくてねえ、この卵はねえ、アッターがこの鳥も捕ってきて食ったりして、この島のこういう所に船おいて、ボートで渡って、採ってきておったです。で、バケツいっぱい採って来てよ、卵を。あれは大きいさあ、普通の卵よりずっと大きい。それを茹でて食おうとしたら臭くて食えないわけ、これはもう魚食っているさあ、その臭いそのまま卵に入って、鳥も臭かったよ。食べたんだけど美味しくなかった。肉も硬いし、食えんかった(笑い)。

シケれば 島陰に避難 正月にも帰れない

今のようにもう色んな電化製品が全部出て、設備ができていような船であれば、当時はそんなに苦労はしなかったんです。あの時分の船は大変苦労しましたよ。少しでも北から風があるでしょう。もうおれない。早くどこかに避難しないといかん。

一度は正月前に行ってねえ、正月できない年もありましたよ。戻って来れなくて、魚は沢山釣ってあるわけですよ。2つのイケマにそれ入れているけど、お家に来れんから、大きい島(魚釣島)に行って、カタカ(島陰)にアンカー入れて、何日か隠れて寝て、天気がよくなったから、すぐ走って来たんですよ。その時も帰って来るにも、少々天気じゃないわけですよ。大変、向うはほんとに北風になると崩れるような天気に、台風みたいになるからねえ、潮は、だから僕はよくあのう素人がよく向こうに上陸しに行くなあと思う時がよくあるんですよ、ニュース見ておって、あんな所によく行くなあと。

うんと儲けた 1、2年で 船代金返した

とにかく、尖閣列島に行けば、魚は幾らでも釣れよったですねえ。ああいう魚の釣れ方する海はないです。アカマチ、シチューマチ、マーマチとか、アカマチなんかでも本当に計算もできない位釣れよった。上の方ではシチューマチ、下の方に少し下がると、こんな大きなアカマチがねえ、段階的に魚が釣れよった。うんと釣れて儲かりました。

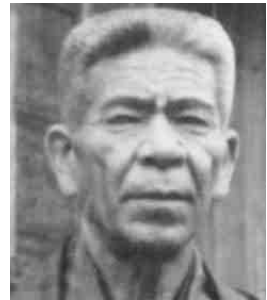
だから船の代金は1,2年年で返したですよ。1航海何ト位ですか？ 当時は斤だから4千斤位かねえ？ ト数にして2トから3ト位じゃなかったかなあ。

港に着けたら魚は馬車で、今の市場に運びよったんです。当時は、セリ市場はないです。仲買には売らないで、市場に小売させに。そのあとから市場はできてきたんです。こっち(泊港)で下ろしてからに、車もない時代だから、全部馬車に積んで行って、市場の前で、馬車から降ろしてねえ、今のような魚の大事さはなかったです。もう氷も入れないで、すぐそのまま下ろして、売る人達がまわってきて、取りたい放題です。僕らは、それを秤(はかり)にかけて渡すだけだから(笑い)。

まめだった親父 鳥山の下 ソネがあると

戦前ですか、ウチの親父は、尖閣列島は行ってないですよ、親父が持っていた勝進丸では。だけど、その前は我那覇さんの船の船長をしていたから、その時には行ったかしれない。親父は海の仕事が好きで、研究熱心でしたから、いろいろ海図調べたりしてました。自分がこれをやろうとしたら、念入りに調べて、海図に線を引いたり、潮の流れとか方角とか、色んな計算をしたり、時間当てて、色んな小さいソネもよく探していましたねえ。

渡名喜と粟国の間にタイショウジンとってソネがあるんですよ。あれも僕らが最初歩いたんです。イハズネとって伊平屋にあるんだけど、あれも戦後は本部のカツオ船がカツオ追っただけ、親父はカツオ時期になると必ず行くんですよ。カツオの上は鳥が飛んでいるから、その鳥山を目当てして行けば、そこにソネがあるからカツオが付くとねえ、今のパヤオ(浮漁礁)と同じ発想です。ソネ近くに来ると、今のように魚探はないさあ、チート一ついて(深さ測定用の縄入れて)、「ウマー(ここは)何10メートル来ているから」と、このソネ探してねえ。もう大変だったですよ。魚はこんなに釣れましたから(笑い)。



父普天間直保(明治43年生)海勇士で、研究熱心だった

病気になり 尖閣出漁 断念

ウチの親父は、先っきの話だけど、あの伊平屋のソネに上がっている絵を、自分の帳面にきれいに書いて持ってましたねえ。このソネから、島は晴れた時にはこういうふうに見えると、島当てにして、全部きれいに書いていました。尖閣列島の海も、島当てした海を、帳面に書いていたかもしれない。僕もあの時分、海に熱心でなかったから、ちゃんと見てませんが。親父は57歳(1966年)で亡くなりました。その時僕は34、亡くなってもうやがて50年になりますねえ。帳面ですか？ あの帳面はないですねえ。残しておけばよかったのですが、僕らも、あれは大事なものと、そういう頭があつた頃にはなかったですねえ。ホントに惜しいことをしました。親父が病気で海に行けなくなったあとは、勝進丸は従弟達に持たしましたよ。だけど八重山に行っても漁上げきれなくて、赤字赤字で大変だったです。

結局、向こうで買い手がいたから、船は売りましたが、結局ただ売り同然でしたねえ。僕はまた陸の仕事に戻って、垣花の地主会など事務局の仕事とかやってみました。

エサ用の活けエビ 採ったことも

親父が亡くなったあとからは、また海の仕事を始めましたよ(笑い)。夜海岸に行って、釣りエサ用の活けエビを採るんです。イザリです。今の浦添小湾の米軍部隊があるでしょう、あの裏手の海岸とか、豊見城の瀬長島、また那覇飛行場側に行って、あの辺もやるし、また糸満側の海岸も全部歩きましたよ。潮が引くのを待って、相当採りました、

あの時分は今のように冷凍のエサがないから、これは活きているエビでしょう。活きているからいい魚が釣れるからと皆買いに来るわけです。アメリカ(米軍人)がエサするといつて、あれ達はよく魚釣して遊ぶから。釣具屋も皆僕の所に買いに来ましたから。

もう日本復帰前の話ですが。僕はエビ採り網を工夫して作って、これでやったもんだから、相当採れて、相当儲けましたから(笑い)。

エビ採り網 ヤマギタを応用・工夫

エサ用のエビ、夜になるとこれ採ってきて、こっちに池作って活かしておったんです。アメリカ人は釣りのエサにと、朝 5 時頃からエビを買い来よったですよ。もう家の前は外車がいっぱい並んでねえ。通る人はこの車いったい何だろうと驚いてましたねえ (笑い)。

(物置から網を取り出してきて)、

これがエビ採り網です。ウチの垣花は昔からイザリが盛んですが、やっぱり昔風の網では採れんわけ、エビを屈んで、三角網に足で追込むやり方です。僕のこの網だったら、立っておって、網を開閉しながら手で掴むような感覚で、いっぱい採れますから。これだと昔のやり方の 5,6 倍は採れます (笑い)。これも考えたのは鉄工所で使う火箸、ああいう式に網を付けて取る人がいたんですよ。これを見て、これはいいアイデアだといって帰ってきて、それからいろいろ考えてねえ、最終的には、あ的一本釣のヤマギタを見て、このエビ採り網を作りました。

(ヤマギタと比較しながら説明する)、こっちから紐が通るでしょう、そしてこれをこういう風に曲げるでしょう、ヤマギタは普通曲がらないが曲げるという考え方に変わったわけです。番線買ってきて、これ曲げる工夫で考えて曲げたんです。だから僕はヤマギタを考えて、これに変えたわけです。いろいろ考えた挙句こういうのができたんです。これ引つ



ヤマギタ応用したエビ採り網、相当採れて儲けたという

張ると網が締まるようになっているんです。

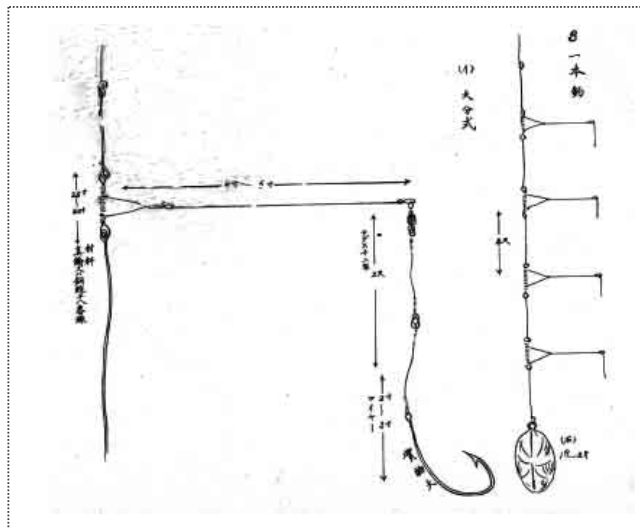
昔風の網だどどんなに採れても1日4,5疋、これだと10疋位は簡単に採れましたから、だから、このやり方は、特許取りなさいと言われる位だったですよ。これでうんと儲かりました。今はあっちこっち埋め立てして採れなくなったから、もう辞めました。そのあとですか、あれこれと陸（オカ）の仕事をしましたねえ（笑い）。

今年で82です、70過ぎて引退したあと、また船を持ったんです（笑い）。

今はノボル丸(2.80ト)と、船外機付のボートを持っています。海人？ いや海人というより、遊び海人ですよ。天気がいい時は、これで海に出て、沖釣りをチュハーラ(いっぱい)楽しんでます（笑い）。 (了)

※参考資料 「沖縄県鮪延縄並ニ深海一本釣漁業経済報告 第一号」(昭和11年9月から昭和12年10月調査)には、ヤマギタ漁法(大分式)が図で紹介され、同漁法は、昭和11年頃には増加した旨報告されている。

大分式



漁具ノ変遷 B 一本釣ハ昭和十年迄ハイシマチャー式(石ヲ鉤元近ク付ケテ置イテ鉤ノ海底ヘノ到着ヲ知ル法)デアツガ昭和十一年カラ鉤元ガスプリング=改良サレタル所謂大分式及ビハワイ式トナリ漸次斯法ガ増加シタ。鉤意図ノ材料ハ綿糸二五番手又ハ三〇番手三子撚三六本乃至四〇合ノ當初ノモノガ六〇ト合トナッタ。(「同報告」より)

我那覇 生太郎 がなは せいたろう (那覇地区漁協)

1933年(昭和8年) 那覇市垣花に生まれる。81歳(2015年時)。

祖父の代から漁家。戦前父親は、宮古島を基地に尖閣諸島で深海一本釣を操業する。氏も20歳(1954年)で海人となり、75歳余で引退する50年間、主に深海一本釣に従事する。氏は、尖閣諸島への出漁は、親子2代に亘り宮古島の仲買モニヤー(屋号)を基地にしたという。氏の話から、宮古池間島に、垣花の伝統漁法イシマチャー(石巻落し漁)が伝えられた由来も明らかになる。また、垣花漁民の戦後の歩みと尖閣諸島で操業したようす、尖閣漁業の一端を知ることができる。



祖父から海人 父 軍に徴用 南方で戦死

—我那覇さんは、元々の垣花の海人ですか？

我那覇：僕が生まれたのは垣花住吉3丁目64番地です。お祖父さんの代からの海人、親父も海歩いて 戦争で南方行って、戦死しています。親父が南方行く時は軍からの徴用、行ったのが昭和17年、僕の弟が16年生、生まれたタンカー(誕生日)に行っているから、船団組んで行った。垣花の船、3隻船団組んで行ったはず。僕の親父もその時、皆と一緒に行って、船も徴用されて南方に赴任、魚を獲るようにしなさいということで、シンコウ丸という船、それに乗ってですよ。親父は戦前その船で尖閣にも行ってます。

で、親父達が南方に行ったのは、兵隊に召集されるよりは、向こうに行って、軍に雇われて、魚を獲った方がいいと思って、あれが、給料が大きいから。だから月に百円位送って来よったからねえ。最初はフィリピンのマニラに行って、向うの兵隊と魚値交渉したら安かったから、ここにいたらダメということで、またボルネオに行って、ボルネオでも魚は自分の思った値段より安くて、他所に行く積りだったが、結局ここで仕事した。ボルネオはタラカンという離れ島だが、ここは石油がうんと出る所なのか、石油採るパイプがいっぱい設備されていた



戦前那覇港に係留している漁船。(那覇市歴史博物館提供)

とか、ここで魚獲っていたとか、そういう話聞いた。で、親父は仕事で、船もそのまま一緒に行っているから、南方はいろんなものが豊富だから、洋服とか、いろいろな品物が送ってきた。それと金も、月に百円も来ましたから。で、一緒に行った我那覇生義さんなんか3名は一応帰って来た、誰か連れて帰って来て、また行く積りだったが、戦が激しくなったから行けなくなって、それからずっと沖縄に。僕の親父なんかはずっと南方にいて、そこで、船も沈められて、亡くなりましたねえ。親父はボルネオで軍に徴用された形で、

仕事していたんじゃないかねえ、亡くなったあとは恩給が来てましたから。

10 歳頃から 海の仕事 手伝い

— お父さんが南方ボルネオで魚獲る仕事で行って、亡くなられた時は、まだ子供でお幾つでしたか？ 戦前から垣花は名だたる漁村、小さい頃の思い出を聞かせて下さい。

我那覇：僕は親父は顔ははっきり覚えてないです、その当時は9歳ですが、だけど親父が仕事やっていたのは覚えていますよ。親父が船で漁にいったり、魚獲って帰って来たことなんかを。自分の小さい頃の思い出ですか、もう7,8歳からは皆の加勢をしました。

大人の手伝いして、沖にサバニを出すでしょう、出す時には浜に揚げてあるから、子供ながらに後押ししたり、入ってきたら今度は皆で引っ張って、揚げる。そういう加勢なんかやりよった。こっちに溝、舟揚げ場といって、浜に溝を造って、潮が引いても沖まで持って行けるような、これが今の僕らの軍用地(※現在の那覇軍港)ですよ。そこに置けないから揚げるわけです、陸揚げ、その手伝いしたり。また、道具なんか、担いで行くささあ、ウエーク(櫂)なんかも、家から舟まで持って行って、帰ってきたら、また迎えに行く。

で、当時のご飯はない、芋を弁当で持って行く、あの弁当の残りの芋、たまには褒美にもらえる。それを食べて、喜んで(笑い)。あの当時は、子供でも手伝わないと、皆に叱られるからねえ。お前は、クヌアタイグワーン(この程度のことも)、ナランパーイ(できないか)、できないと、ヌーンナラン(何もできない)、フューナムンヤー(怠け者だ)と、叱られた。だから、子供でも、あれこれと、しょっちゅう忙しかったですよ。

戦前 親父 宮古基地に 尖閣へ出漁

— 垣花は戦前、深海一本釣で尖閣諸島にも行っていたと聞いてます。お父さんはシンコウ丸という船に乗って、尖閣諸島に行っていたわけですねえ。この船は憶えていますか。

我那覇：あのシンコウ丸という船は、我那覇生康さんのお父さんと叔父さんと婿の3名株の船だったと思う。僕の親父はそれに乗っていた。よく港に連れられて行って、船は見たはずだけど覚えてないです。7,8才の子供だったから。このシンコウ丸は、戦前尖閣には行ってますよ。宮古を基地にして、向うから尖閣に行きました。多分船団組んで行ったはずですよ、話ですよ。ユクン(久場島)、アコウ(大正島)に行ったと、クバシマ(魚釣島)、台湾近くまで行って、ああいう所は全部やりますからねえ、



入船出船で賑わう宮古島平良漁港 1960年代

え、どこどこは魚がよく獲れよったと、帰ってきたらその話しかやらんから。その話を子供の時分に聞いた気もするが、親父が話していたかは分からん。これは僕が、戦後の話で

すよ、宮古を基地して、仕事するようになってはっきり分かった。

宮古の市場、今は漁連なっていますが、向うにモニヤー(屋号)の伊波義男さんという仲買がいて、港すぐ近くに家がありましたから、このオジーに大変世話になりました。僕は船と一緒に行って、その家に泊り込んで、尖閣から魚獲ってきたら、それを沖縄に送ったりして、1年のうち半年はこういう形で、あっちで仕事してましたからねえ。

その時オジーの所に、戦前親父と一緒に仕事やっていた人がいて、あんたのお父さん達もこっちを基地にして、尖閣行っていたよと、そういう話が出ていた。向こう行く度に、こうこうだったと話しよったです。

で、モニヤーのオジーには戦前は親父、戦後は僕が世話になったんですよ。戦後は僕だけじゃなく、ウチらのシマンチュ(郷里の人：垣花漁民)は相当世話なってます。戦前は親父はここから船に乗っていくし、お袋はここで皆の飯炊きやっていたそうです。僕が宮古に行くと、オジーはあんたは宮古の人だよとよく言っていました(笑い)。

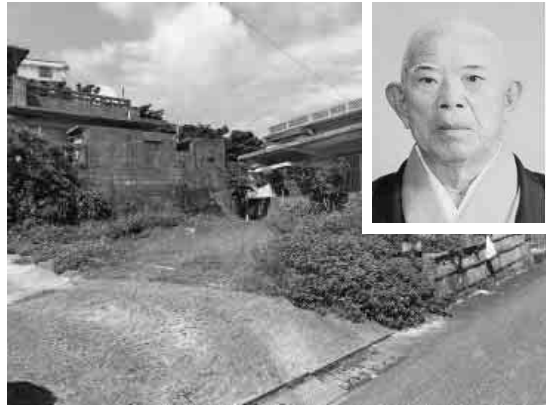
僕は那覇のカチヌハナンチュ(垣花人)なのに、何で?と聞いたら、ここにいた時に、お袋は僕を身ごもっていたと、それで宮古の水飲んで、育っているから、あんたは宮古の人だよと言ってました(笑い)。だから、宮古は僕の第二の故郷です。

イシマチャー 池間に伝える 親父ら垣花海人が

— 尖閣諸島で一本釣りに行く時は、戦前はお父さんが、戦後は生太郎さんが、宮古島を基地にして、伊波さんという方に世話になったというのは興味深い話ですねえ。

我那覇：それともう1つ、イシマチャー(石巻落とし漁)というのがあるんです。一本釣りの昔のやり方、オモリの代わりに石にエサ巻いて、魚を釣る方法ですよ。

戦前は船いっぱい石を積んで、尖閣でもイシマチャーしたといいます。そのあと針金曲げてやるヤマギタに替わりましたけど。僕らも終戦直後は、このイシマチャーを小さな舟でよくやり



宮古島仲買のモニヤー当主、伊波義雄翁(1890～2010)港近くのとみや商会隣にあった。写真はもとの屋敷跡。



池間漁港の岸壁には小石が積み上げられている。イシマチャーに使う石で、今では池間島独特の漁法である。

ました。で、あれが何で、池間にあるかなあと思っていたら、垣花の人がこれをやっていたんだ。池間の漁民にこれを教えたのは僕らのお祖父さん、親父達時代の人達がこういうことをやったんだよ、向こうでたえず話が出よった。

僕達のシマンチュは、戦前もこっちに来ていたって。池間はカツオなんか沢山あるさあねえ、当時の一本釣のエサにカツオだから、それを池間によく買いに行きますから。親父ですか、親父は我那覇生久、お祖父さんは我那覇タルー(樽)だが、子供の時分に、皆宮古に行っていたと聞かされてはいた。自分が向うで仕事をやって、ほんとにこういうことがあったんだなあと思かされて、不思議な気がしました。今でも池間ではマチ釣る時は、イシマチャーで釣っている。港に行くとあれに使う石が積まれているさあ。あれ見たら親父なんかのことが思い出される。

18 歳 商店に勤める 衣類を行商

一 お父さんが南方で亡くなられた時は 9 歳ですねえ。戦争中は無論、終戦後は垣花の漁民部落は軍港に取られてなくなるし、大変苦勞されたと思いますが。

我那覇：終戦が 12 ですか、戦時中は皆でヤンバルに避難していたんですよ。垣花の家屋敷は戦争でやられてないです。それに米軍が那覇港を造るといってあっちに帰れない。あっちこっち移動して、今の壺屋から若狭へ、こっちにきました。あれからずっとこっちです。いつから海の仕事？ 僕が海人になったのは 20 過ぎてからです。その前は一応陸(おか)に上がって、行商みたいな仕事やっていたんです。

僕は 18 の頃(1951 年)ですか、壺屋にあったうるま商会という所で働いていたんです。その頃は密貿易時代が終わって、丁度内地との自由貿易が始まった時分です。それまでは内地から品物来なくて、皆密貿易だったです。今的那覇市役所の所に貿易庁というのができて、内地から品物がどっと入ってきたわけです。各貿易する仲買がこっち来て、それを入札するんですよ、入札した品物を今度は店の人がこっち全部来て、クリワッタームン(これ自分の物)、アライッタームン(あれあんたの物)として、自分の店に運んで行くわけです。

僕もまた、この品物を自分の勤めている店に、自転車から運んで持って行って、それで、この商売を憶えて、それから今度は自力でやったんです。向こうから品物とって、シャツとかシミーズとかの肌着を、あっちこっちに、持って行って売りました、行商ですよ。

市内の近い所は自転車で、遠い所の中部コザ、吉原とかへは、バスから持って行って、売り歩きました。あの時は物が不足の時代でしょう。どこ行っても、結構売れました。

あとは暇見ては、海アッチャー(歩き)して(笑い)。こっち(若狭)の家の前はすぐ海だから、クリ舟みたいな小さい舟で、蛸とか採っていました。そしたら、親戚の叔父さん達が、タクグワートゥエーション(蛸採りなんかして)、ヌーナイガ(何になるか)。僕は親父がいないし、それにクニシヌーメー(屋号)我那覇の長男だから、ちゃんと海ワザ(業)させんといかんと、ワッタームンカイクーワ(俺の所に来い)と、それで陸の仕事止めて、強制的に、辞めさせら

れて（笑い）、船乗せられて、海歩かされたわけです（笑い）。

優生丸で、冬場 尖閣へ 一本釣に

— 我那覇家の跡取をちゃんとさせないといかんと、そう、親戚の人達が心配して、父親代わりに、一人前の海人に育てあげてくれたわけですねえ。

我那覇：うるま商會を辞めたあと、親戚が僕を引き取ったという形ですから（笑い）、20歳（1953年）だったかなあ、そのあと一本釣船の優生丸とか、豊祥丸とかに乗って、海の仕事をやりました。僕が最初に持った船は優生丸、あれはガリオア船で、米松（米国産松）で造っていた船で、一本釣船であり大きくなく12,3トでした。して、海の仕事は飯炊きから始まって、夜はワッチー（見張り）も交代してやって、機関か甲板かに分かれて、一応全部これをやるわけです。これで甲板もできれば、機関もできるというやり方皆やります。

僕も海の仕事を憶えて、この優生丸では、機関長も、最後は船長もやりましたよ。この船から、尖閣列島に、やっぱしアカマチ（ハマダイ）なんか釣りにも行きました。当時は、半年は深海一本釣、半年はノビ縄（延縄）、マグロ船やった。時期的に冬は一本釣、夏はマグロ船で、これを交互でやってました。

それで、冬なると、尖閣に行きました。最初は、こっちから久米島行って、久米島で時間作ってアコウ（大正島）にコース打って行きました。あとからは宮古に着けて、あっちを基地にして、よく行きました。宮古からはアコウが一番近いですから、行って、シケたら島（魚釣島）のカタカ（島陰）に入ってきて、また風なったら廻って、こういうふうには仕事やっていました。

この船は僕は何カ年使っていたかなあ、5,6年かなあ。したら、これはもう古いから替えよう、この船では仕事できないからと。この時には、もう豊祥丸1号、3号とありま

したから、あれに切り替えて、優生丸は廃船にしたわけです。この写真（上方に掲載）に優生丸も写っているが1965年とあるから、67,8年位に廃船したかもしれない。



旧正月大漁旗で祝う泊港、尖閣行き船が勢揃い。右端：優生丸。1965年2月（「写真集沖縄戦後史」より）

沖合いに 廃船沈めて 魚巢に

優生丸は、僕が最初に機関長、船長した船だから思い出があります。あの船は、チービシの後ろ側に沈め場があるといつて、魚巢造るといって廃船ブニで沈めに行ったです。

木造船を海底に沈めるわけだから、船底には石を相当積んで、機関場にも、ダンブルにも、詰め込んで、エンジンとは何もかも全部付いているが、全部油を抜いてですよ、油を

抜かなかつたら大変ですから。それで船で引っ張って行って、水産課から係りも来たんじゃないですか、場所は指示されますから、どこどこへ行ってやりなさいと行って、で、その場所来たら、今度はロープ切り離して、船はすぐ沈むように工夫してあります。船底に穴を開けて栓してますから、そこに位置来たら、この栓をボンと抜いて、沈めるわけです。したら魚礁になって、今のパヤオみたいになるわけ。

そうして船沈めると、こっちに来た人達は全部帰っていきますが、僕は沈んでいくまでずっと見てましたねえ。少し寂しかったです(笑い)。船沈めた場所ですか、チービシと読谷の残波の間に、深い所があって、その上の方は浅瀬になって、タチウオとかが釣れる所がありますねえ、あの側の少し下りる絶壁の所にですよ。あの時分は船が古くなって買い手が付かないのは、政府が補助して、イユノヤーチクチャー(魚巢造ろう)と、決まった場所に船持って行って沈めていたんじゃないですか、僕の場合が1番最後だったと思う。そのあとは聞いてない。

豊祥丸、泰久丸とか 一本釣船 マグロ船持つ

— 我那覇さんは、ここ那覇地区漁協でも、深海一本釣を長く機関長、船長されたと聞いてます。どんな船を持って、何年位、一本釣をしてきましたか？

我那覇：20歳位で、海人になって、海の仕事辞めたのが75だから、55年になる。

やったのは一本釣とマグロ船、でも殆んどが一本釣でした。さっきの優生丸ねえ、あれとか、豊祥丸、泰久丸、瑞幸丸とで、一本釣をやってきました。豊祥丸が一番長かったです。この豊祥丸という船は戦前からあります。カーカンメー(屋号)の我那覇さん達の船で、僕の曾祖母が向こうの娘です。この船も、戦前尖閣列島に行ってますよ。戦争でこの船は失くして、戦後は、最初はカーカンメーの生良ヤッチー(兄貴)、我那覇生安、生豊さんとか、豊祥丸を株して造ったわけです。あとで儀間真三郎さんの交開丸、船もろ共、合併して名前を変えて、豊祥丸1号、3号、5号と増やして行ってねえ。

また船が古くなったら、新造したりして、これ4名で株して、豊祥丸は相当長らくやっていたよ。50年位はやっていたかなあ。僕も40年あまりは乗っていたねえ。機関長とか、船長とかしてました。豊祥丸は新しい船が出ても、僕は、古い船ばかり持たされて(笑い)。大体が一本釣船が多かったですよ。で、株解散して、豊祥丸がなくなったあとは、瑞幸丸とかねえ、雇われ船長したり、船員やったり、船もいろいろです。乗った船の名前ですか？ 何だったかなあ、もう頭もバカなって、皆忘れてるさあ(笑い)。

今はこっち(那覇地区)には、一本釣は殆んどいません。もう皆年取って、辞めて、尖閣に行く船はいない。2、3隻は残っているが、皆小さい船だから近くを歩いています。

名船長の船習い 後追って 腕磨く

— 尖閣諸島は、潮が速く、波の荒い難所ですよねえ。海人の皆さんは、20代の若さで、船長して、船の装備も不自由な時代に、よくも尖閣諸島に行って、仕事できましたねえ。

我那覇：尖閣行けば、魚釣れるから、行かないと、皆飯が食えんでしょう(笑い)。

名船長の尻にくっついて行って、その真似すれば、仕事できるから。

名船長？ いましたよ。いつも大漁してくる人は(笑い)。それは勿論体験もあるが、元々勘が鋭く、それにいい運を、やっぱり名船長というのは知識と、勘と運を、この3つ持っている(笑い)。だからこの人が行く船だったら儲かるだろうと、この人に付いて行けば、大体ハズレはないから、一緒に連れていってもらおう、リーシンバイ(僚船で行く)するわけ(笑い)。仲間に入れてもらい、一緒に組んで行くわけです。一人では何かあった場合も助かりますから。それで大先輩の中から名船長を探して、お願いするわけです。僕なんかも知識ゼロでしたから、何回も、尖閣には先輩達、名船長に連れていってもらったです。

もう一生懸命、実地の講習だから(笑い)。あそこは潮の流れが速いし、潮の流れあの辺から変りよった。この辺から変わりよったと、これ憶えておかんといかんから、帳面にまとめて書いておく、自分でつけておくんですよ。どこからどこはどのような潮があって、どこからどこまでは何時間走りよった。いつもの所、同じ所でも、満ち潮、引き潮、風向きによっても違いますからねえ、あっち行ったりこっち行ったりしますから。これだけでも相当勉強になりましたよ。自分で船持てるようになったら助かりましたから。大体こうして、皆帳面はこの位は持ってましたねえ、あの帳面ですか、今はもうないです。もう50年前のことだから(笑い)。

雲の動き見て 天気予測

— 尖閣諸島に行くのは天気との闘いといっていました。天気を見誤ると遭難ですよねえ、天気予報は未発達なだけに、漁師独得の天気判断で行ったと聞きました。

我那覇：確かに尖閣列島は行く時は、天気は肝心ですから、当時は天気予報は殆んどラジオですが、当らない場合もあります。

その時は大変です。でも海人は昔から天気をよく当てる人が多かったです。

那覇に、ウチら垣花に、戦前測候所がありましたねえ、向うの職員も垣花の海人の所に聞きにきたそうです。ワッターガ予報トィシユー(自分らが予報するのは)これ以上の予報しかできないが、しかし垣花の人のこの予報は生まれ持った知識を持っているから敏感でもあるし、あの人達が言うて行けない時に、海行ったらこれはもうやられ



尖閣行くのは天気との闘い、雲の走り見て、シケか風かを判断。久場島上空の雲の流れを観る (石垣市 2014)

るから、必ず来るから、向うの聞いてと、それで、職員も来たそうです。話聞いたら、向うは計算上でしょう、机の上で、こっちは実地さあねえ、皆、年寄りなんかは習性です

かねえ、昔は、朝早く皆天を見て、皆浜に集まるんですよ。僕らもこっちの泊のこっちに集まって、チューヤヌーンアランヤー（今日大丈夫だ）とか、皆座談会やっておったです（笑い）。

これ見方はコツがあります。雲です、問題は雲が走るさあねえ。僕はあまり分らんが、「ヌーディーヌシチャワタイ」「ウマワタイ」とかあるんですよ（笑い）。雲の走り方があるらしい、要するに今、一番上と下との違いがあるさあ、その雲の流れですねえ、あの流れを見て判断しよったです。「ヌーディーヌシチャワタイ スッサー（やるさあ）、ヤンデーンドー（崩れるよ）」。僕なんかいくら、それを見ても同じようにしか見えない（笑い）。だから、船に、大先輩、年寄りが乗っていますから、その人達からも天気を聞きましたよ。

宮古基地に 尖閣へ

— 先ほどの戦前はお父さん達が、戦後は生太郎さん達が、宮古島を基地にして、尖閣諸島で操業した話を、もう少し詳しく聞かせて下さい。

我那覇：僕らの親父は宮古行ってますからねえ、戦前から、宮古基地にして仕事やりますから、僕もその関係で宮古は長い生活なっているんですよ。向こうに伊波さんといって仲買がいたんです。親父の代から皆この人に厄介なっているんです。だから入って来たら、オジー来たよと言って（笑い）。で、飯向こうで、風呂も何も入れて、また水揚げのあれは全部任してあるから。宮古で船着けて、本船を3,4隻位一緒になって、母船は魚を運搬する、沖縄に、で、残りは宮古にいて、して、そこから、仕込みを向こうでやって、尖閣とか、八重山、与那国に行きましたよ。

豊祥丸は大体が1号、3号、5号とかあって、大体が12ト未満、1号は少し大きかったけど、その当時は船員は6人か7人、多くて8名位、航海日数は、早くて5日、長くて12日位かなあ。尖閣行けば、1航海だと2トから3ト位は獲れたです。

で、魚獲れたら船を、宮古に着けて、宮古から魚を積んで、すぐ那覇に運搬する。その間に僕なんかは向こうで、エサとか、氷、燃料とか積んだりしたわけです。

宮古を基地にしていた全部垣花の船で一本釣ですよ。もう向こうの組合から、燃料とかを頼んでいいけど、あんた達が船を大漁して、これだけの魚をこっちに水揚げしたら、魚が売れなくなるからと、水揚げはできなかつたわけ。これは那覇に送って下さいという約束になっていた。また当時は宮古はカツオの本場だから、カツオとか、グルクンとか、エサになる魚が沢山あります。ああいうのを採ってから買うとか、また県漁連と那覇地区と向こうの組合と相談をして、こっちの組合に手数料を納めるわけですよ。組合立ち合って、幾ら送る、1トなら1トに対する手数料を納めんといかんです。普通は1つでいいです。その当時はこっちの組合、ウチの組合にも納めるから2重手数料になっていましたよ（笑い）。

今何匹食った 大物・小物 手の動きで

— 尖閣諸島へは、一本釣では、やっぱアカマチ狙いで行ったわけですねえ。当時は、

今みたいな一本釣でなく、針金曲げて作ったヤマギタでやったと聞いてますが。

我那覇：尖閣には大体がアカマチ、シチューマチ（アオダイ）狙って行って、相当獲れました。だけど、向うは潮が速くて、向うの魚は全部は獲りきれない、ものすごく引きますからねえ、だから今でも行けば獲れると思いますよ。僕らは一本釣は、初めはイシマチャーでなく、あのヤマギタでやりました。針金曲げて、あれ作って(笑い)。あとからナイロン糸に替わって、今の一本釣のやり方にねえ。ヤマギタの場合だと、枝は大体 5 本から 6 本位付けますが、今の一本釣だと 10 本から 15 本は付けるでしょう。して、キタナー(幹繩)、これを手で持って、ナマーティチュークートン(今 1 匹目が食っている)、ターチェックートン(2 匹目が食った)と、これ勘で、手の動きようで分かるんです。もう 4,5 匹位食っているから、いいだろうなあと揚げるんです。今大きいのが食っている、今度は小さい奴が、今何が、どんな奴が食っていると、手の感覚で、長いことやれば大体分かりますねえ。

それと、今は全部釣機でしょう。僕らの時は、最初は手繰りだったから縄揚げるのが大変だった。それから自分でローラー作って、手摺に穴あけて、台を取り付けて、手でローラー回して縄巻き揚げる。もう今の釣機は、自動巻き揚げる機だから相当楽さあ。

一本釣の場合、縄 10 本も 15 本も入れて、魚が 10 匹位掛かっても、最初はあっちこっち引ん張ってあれするんだが、あとでは自然に浮きますよ。船から 100 メーター位前に浮く場合があるさあ。海底にいる魚だから、上に揚がると、圧力の関係でエアが持たないわけ、自分で口開けて、浮き袋出して浮いてくる。アカマチとか、シチューマチとか、アーラミーバイ、あれも全部こんなですよ。アーラミーバイは、アカマチと同じ深さ、180 メーターから 220 メーター位にいるから、アカマチと一緒によく 2,3 匹掛かってくる場合もあった。



手繰りによる一本釣光景。魚食ったかは手の動きで察知。アカマチの大物引き上げる。(豊見山恵盛 1963) 引き上げる戸で分かる。感覚で身

ミーバイ類は、浅瀬にも、深海にもいる。浅瀬のハーガーミーバイは赤い、深海のアーラミーバイは黒っぽい。アーラは大体小さくても 50 疋位、だから大きくてダンブルに入らんから、大体が捨てていた。あれは、お汁でも、煮付けでも、美味しい魚だったが、当時はアーラも、ビタローとかも安かった。今は値段も高くて高級魚になっている。

やっぱし、尖閣行って狙っていたのは アカマチ、その下にクルキン、シチューマチ。ビタローなんかは、バーキヌミーナー(ザルー一杯も)、家に持ち帰る時もあったよ(笑い)。

糸満船 島基地に ダツ追込み

— 尖閣諸島でこんなに魚が獲れたんですねえ、向こう魚の宝庫と聞いています。

あの当時、那覇地区漁協の一本釣船の他に、どんな船が来てましたか？

我那覇：向うはトビウオとか、シジャー（ダツ）とか、グルクン（タカサゴ）とか、浮き魚も沢山います。糸満の人達なんかは、あれを獲りに来よった。追い込みでシジャーなんかを。船見て大体分かりますから、アレーイチマンヌ（あれは糸満の）フニヤムンナー（船だなあ）と、あれ達は網を使いますから、またサバニ 2、3 隻は必ず持ってますよ。

母船の外に運搬船もいるから。僕らは島の周辺で仕事やってますから、しょっちゅう見ました。大勢のシンカ（仲間）で追い込みしていた。僕らは島に上陸しませんよ、クリ船を持ってないし、泳がんと上陸できんから。島のことなら、あの糸満の人がずっと詳しいさあ。メーナチ（毎日）、島基地サーマ（にして）仕事していた。3ヶ月位はあそこにいたはずだから。あれ達は、サバニ着ければ、簡単に島に上がれるさあ、水なんかも汲まんといかんし。僕らは水は向こうから汲んだことはない。1航海少なくとも1トは持って行きますから。

で、あそこはニシカジイ（北風）なるとシケるんです。そしたら大きな島、あの魚釣島の後ろ側廻って、カタカ（島陰）に皆集まるんですよ。その時、ああ何丸は入っている、何丸来ている。垣花も、糸満も、宮古も、八重山も、内地船も、もう皆集まりますからねえ。

台湾船も来ましたよ。もう、あれなんか卵を採って（笑い）。トイシマ（南小島）があるでしょう、あそこに上って、バカ鳥の卵をいっぱい採るんです。

台湾船とトラブル 口論 しょっちゅうあつた

台湾船は色んな魚獲っていました。サンゴ船もいました。大体宮古の宝山からアコー島まで、向こうは全部サンゴ採れますから、サンゴ網を引っ張って、また延縄見たようなものでマンビカーとか、色んな魚獲って。これでケンカやった。ケンカは沢山あります。口論さあ、何でこっちから歩いてくるかして、領海が違うだろう、こっちは日本の領海だから、あんた達こっちに入っていけないだろう。今度は保安庁の警備船が来るさあ、すぐ逃げて、来るの分かるから、逃げて、またいなくなったら入って来る（笑い）。向こうの海はカジキも獲れます、何もかも獲れます。魚は豊富だし、こういう色んなのが獲れましたからねえ。逃げたり、入ったり、逃げたり、入ったりして、もうトラブルが多いわけ。今度は品物持



魚釣島沖で不法操業の台湾漁船。南北小島に上陸し、海鳥の卵・ヒナを乱獲していた。（比嘉健次 1971）

ってきて、バナナとか、酒とか、煙草とか、それ上げて、ウチらをシカス（宥める）わけよ。こっちで仕事やっているとお願ひねえと言って（笑い）。あれ達の延縄は、マグロ延縄みたいだった。マグロ船は大陸棚には延縄は入れれないけど、尖閣列島の深い所を探して

歩いて、延縄やっていた。あれはマンビカーも食うし、マグロも食う。何でも食う。ウチらは一本釣の延縄（底延縄）もやっていたから、縄がマチブって（纏れて）トラブルが起こるさあ、同じ縄が。これは規則としては、船は入る時には一方で入っていかなと、横切ったら全部やられる。台湾船は横切って入れるもんだから、だからトラブルが多かった。それが海がシケると、魚釣島のカタカに皆集まるわけです。だけど、あっちのカタカでは、台風の際は避難はダメですよ、向うは全然ダメだから、台風の予報聞いたら、すぐ宮古に走るか、八重山に行くか、その2つですねえ、

夜中 船見張り 航海灯・赤青で 判断

一 尖閣諸島で操業する時、台風などの場合はともかくとして、危険なこととか、注意しなければならないことは何ですか？

我那覇：向こうはいつも冬は北風さあ、あっちの潮は必ず北に流れて速いから。北風の波と潮とぶつかってからの、上に立つもんだから、三角波とっているわけ。あの三角波で、遭難することもあるから、その時は一番危険。それと、やっぱり一番注意することは、船よ、船の見張り。時季が合えば、沢山船が来ますから、台湾船も来れば、内地船も来るし、沖縄からも来るから、あっちこっちの船が集まってくるから、トラブルが起きないように船が来るのを見張っておかないといかん。船走って来ると、向うからも走って来る。どこを、どう避けるか分かりませんから、それを確認しながら船を運行しないと、あれが先なるか、こっちが先なるか、ほんとに義務船、権利船があるんです。

昼は皆見えているからいいです。一番怖いのは夜、この船がどこに向かっているという、あれ何で航海灯が赤、青とつけるかといったら、船走っているさあねえ、青と赤が見えたら自分の前に向かっている。船長室の左の青、赤と航海灯付いているさあねえ。これが2つ真っ直ぐ見えたら自分の所に向かっている。これがもし赤だけ、青だけが見えた場合は、あっちに向かっているんだなあ。船が多いと油断したらぶつかるから、夜がもう一番危険です。だから、船の見張り立てて、これまた眠くなるから大体3時間位で交代して、皆で船見張っていましたねえ。

豊祥丸 一本釣儲ける マグロ船失敗

一 尖閣諸島に、一本釣で行ったら、満船大漁して、結構儲けたわけですよねえ。

豊祥丸は、あとでは、マグロ船もやったそうですが、どうでしたか？

我那覇：尖閣行ったら、1航海大体12、3日位ですかねえ。仕事は帰るまでに、早い場合は1週間、5日で帰ってきます。もう漁によってです。大漁したら早く帰って来るし、不漁だった場合には、釣れるまで、経費とるまで頑張らんといかん(笑い)。大体これだけであるだろうなあとやって、宮古走って、宮古で今度は水揚げして、向うからまた仕込みして、また仕事する。当時は魚は相当獲れましたよ、向うまで行って仕事するのに、獲れなければ引き合わない、引き合わないなら誰も行かないですから(笑い)。

少なくとも1ト半は持ってこないと引き合わない、経費もない、多い時は3ト位。いや、ほんと、豊祥丸は皆儲かっていましたよ。船の代金とかも皆返したはずです。儲けの残りは食べてなくなったけど(笑い)。

豊祥丸は一本釣しながら、安仁屋さんの泰久丸、あのマグロ船も買いましたよ。こっちにいた仲買のマルサ商会(社長儀間優拓)が、あのマルサーは僕の従弟になる。向うが金出して、一緒にマグロ船をやりました。マルサーはあくまで問屋、僕らはそれに乗っかって、向こうに何もかもさせたわけ、金も出してくれたし、船員まとめるのも向こうが、マルサーは僕らが獲って来た魚も買うし、売りもする。もう自分達は仕事だけすればよかったから、とても楽でした。僕も泰久丸に乗って、マグロ延縄で沖縄近海から フィリッピンまで行ったです。だけど、マグロ船は失敗した。泰久丸の代船で、大型のファイバー船新造して、船が転覆して沈没したんです。1航海もしないですよ、処女航海でねえ、この事故で船員の7名か、9名位亡くなった。またグアムでも1隻のし揚げてから、あんなこんなで、もうマグロ船は失敗して、マルサーは手を引いたさあ。それでワッター(私らの)豊祥丸は元の一本釣りに戻ったわけ。もうその頃には、一本釣は昔のように儲からなかったです。船も古くなっているし、また年取っているから。

瑞幸丸を最後 75 で海辞めた

— 海の仕事辞めての幾つの歳ですか。最後に乗った船はどんな船ですか

我那覇: 海辞めてのは75の時です、家内が病気になったから、家内は漆器工場に勤めていて、20年余り仕事やってましたから、病気になったら、人に面倒かけるでしょう。もう仕事辞めなさい、僕も海は辞めるからと、それで海を辞めたわけです。

その時の船は瑞幸丸、あれが一番最後ですねえ。もう豊祥丸はないですよ。カーカンメーの我那覇生良ヤッチー、儀間真三郎さんも亡くなっています。我那覇生安さんも、生豊さんも年取って、海歩けないからと、もう皆辞めてましたから。もう豊祥丸4名株も自然消滅ですよ。船も、宮古か、どこかに売ったはずです。

そのあと、僕は真厚ヤッチーに雇われて、一本釣船の瑞幸丸(船長渡嘉敷真厚、5ト)に乗ってました。瑞幸丸も小さな船だが、これで尖閣によく行きました。この瑞幸丸も家内が病気だからと、75で、7年前に辞めたわけです。そしたら、僕はしょちゅう家にいるでしょう、船員が足らん、1航海位できないかと頼みにくるんです。やっぱし海の仕事が好きだし、いいよ、遊んでいるから行くと、もう僅か10日位だから、いいだろうと、よく行きました(笑い)。家内が少し元気なうちは、こうして臨時で何隻か歩いてきましたねえ。

家内は病気しても入院してませんし、お家がいいからと、自分で看護したんですよ、亡くなったのは丁度お盆前でした。この間3年忌終わりましたから。

今ですか、近くのディケアーに行って、毎日皆と話したりして楽しんでますよ。

(了)

石垣 真次郎 いしがきしんじろう (那覇地区漁協)

1936年(昭和11年)宮古島に生まれる。79歳(2015年時)。

8歳で八重山へ、12歳で網元へ奉公、貝殻採り専門の素潜りを習得。

25歳(1960年)、那覇地区のマチ船に乗り、7年余り深海一本釣、底延縄に従事。31歳(1966年)5名株で、延縄専門の協徳丸を新造、尖閣諸島を主な漁場で操業、大漁船として勇名を轟かせるが10年余で解散。のち他のマチ船に転じ、尖閣諸島での7年余、深海一本釣に専業。55歳には陸(おか)の仕事、のちセリ市場の仕事に就く。病気を機に73歳に引退する。

海を生業とした海人が如何に生き、尖閣諸島と如何に関わってきたか、氏の話は興味深い。



12歳で、糸満屋に年季奉公

— 石垣さんは、ここ那覇地区で、底魚一本釣、底延縄に30年あまり従事したベテラン漁師と聞いています。元々海人ですか？

石垣：私は宮古島の生まれで、元々は漁師でないさあ。八重山に8つに来て、12には糸満売り(年季奉公の意)されて糸満屋(糸満系網元を総称)に行っているから。私は糸満から八重山に寄留している上原という所、屋号は三男ハマンナヤー。それからが海の仕事するようになったわけ。自分なんかは4名兄弟全部糸満屋に行っている。長男は真太郎、私は次男で真次郎、三男は真三郎、四男は四郎、四郎はマチデーグワー。長男とは三男と同じイヤーキに行っていたわけよ。だけど長男は自分の弟がこき使われるのを見てから18才位に逃げている。逃げた長男除いて、私と真三郎是那覇地区で、一番下の四郎は石垣で海人ですよ。

して、糸満屋での満期は21歳の誕生日、何でもかといえ、昔は兵隊検査、赤札がその時に来るさあ。兵隊に行くと、死んで来るか、生きて来るか分からんから、自分の家から兵隊には入隊しなさいということで、親と21歳の誕生日までと借用書を書いて買うわけよ。糸満屋にはたくさんいたよ。糸満からも来るし、大島からも来るし、7つ8つの子供もいた。泳ぎを練習させてから一人前に鍛えるわけ。



糸満港光景。漁から戻ってサバニの前で忙しくしているのは糸満売りされた子供達か？ (東風平朝正 1959,60年?)

私の場合は12,3才で行った時は、海の仕事が初めてだから、すぐは泳ぐのはできなから、2カ年間は、山に行って薪木を採ってきて、午後3時位に帰って来るさあねえ。主人がこっちに坐って、泳ぎ練習しなさいって、泳ぐ練習させて、潜りの仕方とか、舟の漕ぎ方、魚

の採り方とか、いろいろ教え込まれたですよ。

— 糸満屋には雇いは何人位いましたか、またどんな仕事をなさっていましたか？

石垣：私の所は雇いは大体2人だったから、親方と3人で潜りをやっていた。私より1つ年下の大島から来た人がいたけど、逃げてねえ、その当時逃げて、警察が探して、また連れてくるさあねえ。この人は海があんまり上手でなかったわけ、可愛そうだったよ。

貝殻も人みたいには採りんきれんし、上手下手がいるさあ。だからどこに舟着けても、逃げて行きよった(笑)。次に来たのは、自分より2つ年上の宮古の人。16歳に来たんじやないかなあ、この人も18の時、夜中逃げて行って、探してまではといて、とうとう自分と親方だけ(笑)。隣に30名位いた所もあった。隣もやっぱし貝殻採り、宮古の人だったから屋号はミヤコヤーといった。あそこは一番下が7,8つ位、あそこは大変だった。

雇いの人は冬でもカマス1つ被ってあんなして眠ったよと訴えて、これから人身売買だから問題なった言い方する人もいたけど。何が本当か分からないさあ、私の所は楽だったけど。仕事は貝殻採り、これが主で、あとはアンブシ(建干網)とか、一本釣とかの魚釣り。

— 貝殻採りが主な仕事でしたなら、泳ぎや潜りは相当鍛えられたわけですねえ。

石垣：あの時分は魚よりも貝殻が高く売っていたさあ。貝殻でボタン作っていたから。その貝殻採るためには、泳ぎはもちろん、潜りができないといかんから、うんと鍛えられた。舟を漕ぐのもねえ、して夏なんか暑い時はニューイ(居眠り)するさねえ、權落したらすぐパカナイ(パカバカ)叩かれた(笑)。これをシーリーウエーク(權)と言うさあ。(難儀そうに漕ぐ所作して)、フューマヤー(怠惰者)がこんなして漕ぐわけよ。だけどシタテークギ(漕ぎ)と言うのは、ハーリー漕ぐように、下から勢いよく權を上に向けて、だからトムヌイ(艫乗：船頭)は後ろで舵とっているから「シーリー權サンキョー(するな)。シタティリョー(ちゃんと漕ぎなさい)」と言うわけさあ(笑)。

八重山で西表辺りに、潜りとかの仕事しに行ったら遠くて日帰りできないさあ、あつちに10日位なあ、ほんとは西表には水があるから住みたいんだけど、マラリア罹るからということで、西表から水缶で水に採って来て、別の無人島に舟着けて、ウエーク(權)立てて、帆でカバーして、そこで寝泊りしてやったねえ。竹富島にもよく行った。その当時は竹富と石垣は距離が離れているさあ、今は埋め立てているが、だから北風になったら石垣島に行けないさあねえ。竹富のお家に区長さんに頼って、天気が鎮まるまでは1晩、2晩はこちで眠らして頂戴、その代わり魚を持っていく。そういうことをしていたよ。

— きつかった仕事は多かったはずですが、とくに潜りだと、今のようにウエットスーツがなくて、パンツ1枚で素潜りだったわけですねえ。

石垣：きつかった仕事は、いっぱいあったけど。そうだねえ、ヒカークワー(スズメダイ稚魚)というのがある。小さい、油に揚げたら美味しい魚、あれ採るのが一番大変だった。

あれは泳いでからに魚見る人とこの後を追って、この後を付いて、して、これが手を上げてから、網入れる準備して、海に飛び込んで、泳いで網の中に追込んでいくわけ。

だから1日10回11回も泳いでいたさあ、もう朝から晩までよ。あの魚は11月12月の寒い時にしかいないから、もう身体が乾いた時分、また海に飛び込んで（笑い）。

当時は今みたいにウエットスーツがない時代、素潜りはパンツ1枚裸で潜るさあ、寒さで意識不明になっているのは2回位あるなあ、15、6歳位なってから、して、船を着ける所は、昔はハーマというさあ、あっちに運ばれて、ああこっち来ているんだなあと気が付いたことを憶えている。

さっきの写真（前々頁に掲示）子供達も着けていたけど、何で、海人はアメリカモーブ（米軍露営用毛布）で、着物縫うか分かります？ あれはねえ、毛布は水切りが速いさあ。それで、あれで着物縫って着けさせよった、あれは波を被っても水はけが速いもんだから、綿みたいに吸わない、上等だよ。して何で着物にするかといったら、ズボンは立たないと着けられない。着物は坐っておっても着けられるさあ。だから舟がひっくり返る恐れがないから、それで海人は皆着物よ（笑い）。

深さ12,3尋 潜って 貝殻採る

一 那覇地区で八重山から来た人の殆んどが潜りやっていたと聞いています。

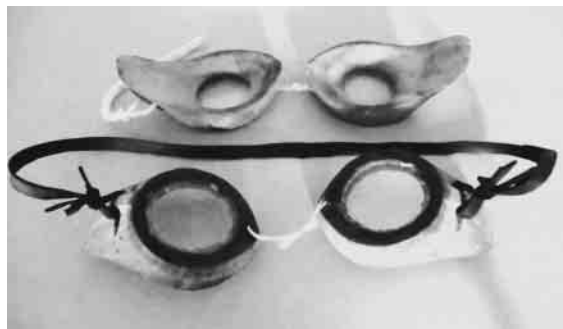
大半貝殻を採っていたわけですね。当時素潜りで、どの位まで潜ってましたか？

石垣：魚を追込むアギヤーも、チナカキエーも、皆潜る仕事だが、私らの場合は貝殻採りが多かった。ヤクガイ（夜光貝）とか、高瀬貝にはソームン（真物）、広瀬貝はモーモーといったらちょっと白っぽく薄い、マンナガーといったらヤドカリが入る浅瀬にいるサザエ、蓋がある。こんな貝殻を採っていた。

どの位まで潜れますかって、30メートル（約15尋）？ あんなに潜れんよ。昔は何尋何尋で計算しよったが、12,3尋（約18～20メートル）が限度だねえ、20尋（約45メートル）だと何10名に1人位。ドンブリ持って、潜って行って、すぐ上がってくるんだったらいいんだけど。

下で仕事やって貝殻も探すさあ。で、自分の息で、もう自分はこれが限度だと考えてから上がり始めるわけよ。もう間

に合はん時はねえ、見ている人は上から泳いで見ているから。船では見えんさあ、ああこの人は上までもたない、途中で息切れるんじゃないかと見たら、加勢に行くわけよ。海の底目がけて潜って行って、海底の岩を蹴ってバウンドかけてその勢いで急上昇するさあ。その時右手をうんと伸ばして、息切れかけた人の足の裏を下からポンと持上げるよ。息切



ミーカガン（水中眼鏡）各人の目・顔に合わせて作る。水密度が高い。他人のは使えない。海人の貴重な道具

れた人を早く上らすために、こんなして加勢させよったよ。

また息が切れて沈んでいく場合は、必ず人間は行きをハァーと吐いてからに沈む。

一応息は吐くよ、上に顔出して、吐いて沈んでいくよ。だから見ておって、沈む場合は、加勢に行く人がミーカガン(水中眼鏡)外す。息切れた人を掴まえて、その人のミーカガンを急いで外すさあ、そうしたら生き返るよ。潜っていたから水圧で目に圧力が掛かっているさあ、そのためじゃないかなあと思う。だからこれを外したら目が軽くなりますよ。

花儲け ミゾレ食べたり ラムネ飲んだり

一 親方から、頑張りに応じて、花金といって褒美のお小遣いですか、それをもらうのがまた楽しみだったそうですが。

石垣：そうそう、あの時分、親方から仕事の褒美として、花金ねえ、花儲けというのがどこの雇いにもあったわけよ。ソームン(真物)、高瀬貝1斤に対する5銭とか10銭とか、広瀬貝は幾らと決めて、親方から一生懸命働いた褒美。また頑張りなさいという意味さあ、大体14,5名いる所では、この花儲け上げるさあねえ。これが楽しみで、これもらったら、映画見たり、ソバ食べたり、ミゾレ食べたりしてねえ。皆パンツも着けないで、映画館の前で玉グワークワエー(ビー玉取り合い)(笑い)、またラムネ買って、あの中に丸い玉が入っているさあ、あれ取って、ラムネオーラシェー(喧嘩)して遊びよったよ。

私の場合は、花儲けはあったが、いいよと言ってもらわなかった。自分の使いたい時に頂戴といって使っていた。親方上原文助さんは、電気事故に遭って、そんなに働けなかったもんだから。あの時は八重山でも大きな事故だった。カヤ葺きに漏電して火事になり、死者2人出て、怪我人も相当出た。そんなこともあって、そんなに裕福じゃなかったから。

17歳 香港密貿易ブーム 葉きょう採り 那覇へ

一 そのあと、親方に連れられて、初めて、沖縄本島に葉きょう採りに来たんですね。その当時は香港へ密航船で持って売りに行けば、一軒の家が建つほど儲けたそうですが。

石垣：あの密貿易時代に香港に葉きょうを、1回持って行くだけで、一財産できるといってねえ。これをハチカモーキー(20日儲け)と呼んでいたさあ(笑い)。あの時、糸満にも家借りていたが、その家主もハチカーモーキーで、あの家を建てたと言っていた。

親方に連れられて、八重山から5,6名で来たけど、自分は17歳だし、子供だからと、海にはあまり連れて行かんわけよ。帰ってきてご飯作ったりしたら、時間がないから、お前はヤヌバン(留守番)して、ご飯作って待っておきなさいと言われた(笑い)。

して、海連れて行かれたよ。そしたらびっくりした。アメリカ人はすごい。使える弾も何もかも、皆海に捨てているさあ。読谷の残波岬の近くかなあ？ そこに砲弾がいっぱい沈ましてあった。使っていないのもいっぱいあった。機関銃の弾なんかはケースに入っていて、また大砲の大きな弾の葉きょうなんかはきれいに、錆も何もしてない。きれいにグリース塗ってセメント紙で巻いて、何かケースに入れた新品もあったよ。

もう糸満からサバニが 20、30 隻は集まってねえ。沈んでいるものを海底から引き揚げるさあ。弾撃ってないのは薬きょうの後ろ見れば分かる。ポンチが傷ついてないから。これは舟の上でカンカン叩くと、シュシュシューとエアが抜けるから。エア抜くと、火薬も捨てて、薬きょうだけ持って行く。あれの先に付いている弾(体)は鉄で売れないから、今度はあれを海に捨てるさあ。あの時はサバニが 2,30 隻も集まって、沢山のシンカ(仲間)が下で潜って仕事しているさあ。あんな危ないものを、どんどん下に落としていた(笑い)。だけど、潜っている人は怪我也何もなかったよ。あれが珍しかった(笑い)。

最初は自分なんかも分からなくて、スクラップというから皆鉄も、何でも揚げたわけよ。で、糸満の人が来て、これなんか買わんよ。これだけが買うよと教えたもんだから、分かったわけ。糸満の名城にサバニで持って行ったら、どういう薬きょうは幾らともう決まっているわけよ。和数は。だから数幾つと数えてからに、何知と言って、すぐ現金を、はいと渡しよった。

海に弾はいっぱい沈んでいるから、薬きょうは相当採れたよ。満船して、運べない分は、読谷の近くの海底に沈まして隠しておくわけよ。これを盗られないように、ワーギリョ(追い払え)と言われて、ここを番するのが自分の仕事だったさあ(笑い)。

親方達がサバニに乗せて糸満に持って行くから。だから浜に残って、ずっと座っていて、沖をチャーミチキー(凝視)しておく。して、こっちに他所の舟が入って来たら、泳いで行って、こっちに來るなと言うわけよ(笑い)。

それに自分なんかが糸満に來た時は、遅い時期だったから、もうその頃からは、警察の警戒があまり強くてよ。警備船がよく來た。警備船見たら、仕事止めて、すぐサバニを、波の所から中に(イノー、環礁の内側の意)、入って逃げた。したら、あつちは浅瀬だから、警備船入って來れないさあ(笑い)。取締りが厳しくなったのは、事故も多かつたから、爆発して死ぬ人も多かつたねえ。して、薬きょうに火薬も入っているから、この火薬も採って、ビンなんか詰めて、ダイナマ漁によく使うわけよ。



香港密貿易の花形だった薬きょうの山。
〔「大密貿易の時代」より〕

ダイナマ漁 ハヤギリ カンカン照り 事故多い

ー 当時、またダイナマイト漁が盛んだったとそうですが、これもなされたわけですか。

石垣: そうねえ、これもよくやった。だけど普通の魚雷のあれはダイナマに使えるけど、大砲の弾から出るあれは使えないわけよ。燃えたらパッパッパァーと燃えよったけど。

ダイナマ漁に使えるのは機雷というか、大きなのがあるさあ、あの中に手も真つ黄色なる位の火薬が入っている。ああいうのを外して使う。自分なんか外したことはないけど、八重山では外して売っている人がいて、自分なんかはそれを買って、グルクントヤー(タカサゴ獲り)に使った。して、酒ビンの3合ビンにセメン紙で巻いて、尻尾の方は縄で縛って、ビンを抜いたら、紙の袋ができるさあ。これに火薬を詰めるが、強く詰めるのと、あまり詰めないで、プーカー(フカフカ)とでは、爆発のやり方が違う。強く詰めているのは爆発は強い。またニチビ(導火線)と信管も売っているから、これ買って、火薬を入れた袋に、ニチビと信管を付けて、ダイナマイトを作るわけ。ニチビは、浅い水面で爆発させる場合は短く、深みで爆発させる場合は長くしたりして、ニチビの長さで調整するさあ。

ダイナマイトを誤って爆発させて怪我するのは、大体がハヤギリとって、ニチビを短くした場合に起きるよ。泳いでいる人が魚の群れ見て合図する。どこにダイナマ投げなさいと、魚が水面に群れてたぎっていたら、すぐ爆発させんといかんから、ポンと投げて落ちたと同時に爆発しないと、何の意味もないさあ。爆発するまで時間掛かったら魚は逃げていくから。このハヤギリ場合はニチビは僅かよ。僕なんかは5寸位付けたけど。

で、投げる人は舟に、ダイナマと線香持って立っている。この線香は太くて火が点いているさあ。これは、炊いたお芋、あれに立てて持っていた。で、魚見る人が、あちらに投げなさいと言うと、すぐ線香でニチビに火を点ける。だけど、太陽がカンカン照りだと、火がはっきり見えないさあ、点いているか、点いてないか分からんよ。曇りだったらすぐ分かるけど。迷っている間に、ババァンとすぐ爆発する。もう投げ遅れて、爆発して、手首が吹き飛んだ事故がよくあったよ。

八重山では、潜って貝殻採りとか、ダイナマ漁とか、いろいろしているうちに、満期の20歳になってねえ。して、昔は真面目に働いて満期したら、舟1隻、サバニ1隻付け舟したんだけど、ウチの親方は裕福じゃなかったから、それもできなかったさあ。

その代わりというわけでないが、私の家内セツは、親方の娘ですよ(笑い)。

満期して 南方へ 貝殻採りに

一 石垣さんは幸福者です。サバニの付け舟より、素晴らしい奥さんをもらって、最高の満期祝いです。ところであるの当時、南方へ貝殻採りが盛んでしたが南方へ行きましたか？

石垣：僕の親方は絶対プラタス(東沙諸島)には、キケンチ(南沙諸島?を指す)には行かざなかった。南方に行くんだったら満期ヌガー(免れ)ってからに、自分のお家から行きなさいと、万一のことがあったらいかんからと、それで満期したあと23,4歳の時に行って来た。プラタスはナチョーラ(海人草)採りさあねえ、あっちには行ったことない。自分はキケンチにが貝殻採りに行っている。フィリピンから2,3昼夜の南にキケンチという大きなリーフがあるよ。船に30名位乗って、3ヶ月間行ってきたわけ。

キケンチ行くのは大体が11月頃から2,3月頃までの台風が発生しない時期に、この時期

は冬だけフィリピン辺りはあまり寒くない。あっちの海めずらしいですよ。干潮すると1週間ずっと干潮、満潮したらずっと満潮、だからキケンチ、リーフの名前がキケンチと言っていた。それに魚探もないもんだから、あの近辺来たらマストの上に登って、交代でこの浅瀬を見るわけよ。あっち海は浅瀬からすぐ絶壁だから、大体島の近くには波は降りるさあ。だからこれを見るために、マストの上に登ってからに、交代でずっと見張りしている。そうしないとリーフに引っ掻いた場合はもう大変さあ。

— キケンチに3ヶ月間行ってきたんですか、水とか野菜はどうしましたか、

石垣：船に30名位乗って、3ヶ月間行ってきたわけよ。あの当時の船は5、6マイル位しかスピード出ない。行くだけで1週間から10日位掛かるから、行く時は冬瓜とか、大根とか持って行くけど、冷蔵庫もないから腐るさあ。大根は乾燥させて切り干しにして、一応昆布も持って行くけど、毎日は食べられんさあ。3ヶ月間ずっと、殆んど米のご飯と魚だけよ。

水は30名もいるからすぐ無くなる、無人島に着けて補給した、だけど潮水とちょっと混ざった水でも使った。して、船にドラム缶石油何10本と積んで行くさあねえ、これを使い次第洗って、洗うとって潮水で濯ぐだけさあ。このドラム缶に水を入れてねえ（笑い）。もう石油臭いしよった。して、これでご飯炊くさあねえ、真っ赤っかなご飯よ。ドラム缶のサビで（笑い）。何で自分は南方に行ったかといったら、八重山でしょっちゅう芋さあねえ、あっちに行ったら、ずっと米のご飯食べられるからと聞いていたから（笑い）。

だけど、お米のご飯といったら、サビの赤飯（笑い）。アメリカのチビタッチューグミ（尻尖った米：短形の加州米）だったさあ（笑い）。

して、3ヶ月間ずっと、あのバサバサーグミ（パサパサしたお米）と魚だけ。野菜もないし、土も踏まないから、脚気に罹って亡くなる人もいたよ。体調を悪くする人もいるし、1隻の船で2、3名位亡くしてくる船もいた。だから、死ぬ人はもう損さあ、賠償金も何もない時代だから。で、亡くなったら、どこかの島に着けて、山で、薪木集めて、火葬してから遺骨だけ持ってきたよ。

— 行くだけでも7日から10日間、大変な航海でしたねえ、

で、キケンチに着いたら、どのようなやり方で、貝殻採りをしたのですか

石垣：船には30名位乗って、サバニ5隻積んで行っている。キケンチではリーフがいっぱいあるさあ。して、この周りの海に貝殻があるもんだから、本船からサバニを出して、皆これに乗ってリーフを廻りながら潜って貝殻採る。朝行って仕事して夕方になったら帰って来る。サバニは8名乗ったり、10名乗ったり、大きさもバラバラだから。それに機械もエンジンもなく、漕ぎ舟だから、帰りも時間が掛かる。だから本船はサバニがこっちまで来るなあという所で錨かけて待っていたよ。

して、サバニの舵取りはトモヌイ（船頭）と言うさあ。これは大概ベテランの人がやっていた。トモヌイは貝殻は採らんでも、1人配当あるわけよ。だけど、どこ近辺に貝殻がいるか、

いないかは、このトモヌイの判断さあ。ベテランは海見たら分かったかもしれない。だから、自分なんか泳いで仕事する時に、いいトモヌイに当って、貝殻がいる所の分かる舟に乗っておれば、いっぱい採ることができるさあねえ。だけど、自分が好きなトモヌイの舟に乗りたいたいといっても、乗れないわけよ。勝手にできなかつた。全部くじ引きで、誰の舟に乗るか、誰のトモヌイに当るか、くじ引いて決めたさあ。全部公平にしないとケンカになるから。

— 貝殻採りは、誰が何貝を、秤で重さを計って、船の上で記録しながらやったと聞きました。

石垣: そうそう。貝殻は誰が何斤採ったかと秤にかけてからダンブルにチャーイリー(どンドン入れ込む)、腐らして貝殻だけをボタンに使うから。して、船長が誰々が幾ら採ってあるかと1週間分を黒板に書くんですよ。書いて、その時にはぜんざいを炊いて上げよつた(笑い)。

全部1週間発表の日、誰が幾ら採った。誰が幾ら採ったと書いて、その発表の日にはぜんざいよ。これがまた美味しくて、今でも味は忘れられない(笑い)。



南方からいっぱい貝殻積んで、石垣港に帰ってきた貝殻船。
「(八重山写真帖)より」

皆で30名位だったかなあ、全員の成績を発表した。で、順番を見て船長が配当を決めよつた。そうしない

と皆に同じようにくれたら、怠け者なんかはリーフに上がって遊んで、仕事しないさあ。だから秤にかけて誰が1番なっている、2番なっている、大体13番位までが1人配当して、これから落ちると9.5分とか8分とか9分とか、半分儲けとか、もう自分の働きよによって給料はあるわけさあ。1番、2番とか上の番になったら、また花金もあるわけよ。だから頑張れば配当も多くもらえるし、花金もあるから、もうみんな頑張るさあ。

もう先輩なんかはいつも1番2番、3番と並んでいた。私なんかは22,3歳の新参だったから、潜りも上手じゃない。大体が真ん中14,5番位だったかねえ(笑い)。

もうその頃(1958,9年頃)からは、次第に貝殻は売れなくなっていたんじゃないか。潜りの仕事も少なくなっていたから。

那覇に来て 生徳丸 泰久丸に乗る

— 貝殻採りが廃れたあと、潜りの人達が那覇地区にも来ますねえ。八重山上がりの人達は、今度は一本釣りで尖閣諸島に出漁します。石垣さんもマチ船に乗ったんですか？

石垣: 私八重山で少し延縄をやっていたから、この人なんかは沖縄に先に来ていた、

この人が誘ったから来たんだけど。25歳(1960年(昭和35年))には、那覇に来た。

那覇地区には当時マチ船がいっぱいだった。ここで最初に乗った船が生徳丸ですよ。

1号、2号、3号、5号と4隻あったわけよ、國吉真喜兄さん兄弟が株してやっていたマチ船、今のこっちに旧市場、琉球漁連はこっちにあったから。自分なんか八重山から来た当時は、今みたいには船には簡単に乗れなかったよ。船長同士聞き込みして、この人は仕事できるか、できないかと調べて乗せたよ。今簡単に乗れるさあ、船員不足だから。

生徳丸は尖閣に行った船もあるが、僕は生徳丸1号(船長：國吉真勇、5ト)に乗った。

1号では尖閣に行ったことない。あれは大体、イキオソネとって伊平屋のこっち側にあるよ。宝山なんかもよく行きよった。船員は8名位乗っていたよ。あの当時は一本釣りはヤマギタだった。針金曲げた作るさあ、あのヤマギタよ。

— 生徳丸1号に乗って、初めてヤマギタで、一本釣りですか？

石垣：いや、八重山でも冬の寒い時は、ウチの親方は潜りしないで、ヤマギタで一本釣りにしていた。夜釣りの時は、またイシマチャー(石巻落し漁)して、あれは石にエサ巻いて下ろして、エサと魚と交換してねえ(笑い)、だから夜釣りにいく時は、石をいっぱい乗せて行った(笑い)。

ヤマギタは、灯台がついているところ、平久保崎とか、伊良部崎とか、あちら辺の下でよくやったよ。深さは大体7、80メートルかねえ。

八重山にいた時分は豚の血はないさあねえ、だから幹縄固めるのは卵の白身使ったよ。木綿糸のままだと纏れるから。こっちに來てからは豚の血で染めて、すぐ水に入れたら溶けるから、お餅を蒸すみたいに蒸籠で蒸して、堅くしてからやった。

八重山ではクリ船だから、沖に出て一本釣りするのはよっぽどいい天気がいい時じゃないとできない。本格的に一本釣ったのは生徳丸に乗ってからだねえ。沖縄に來てからイシマチャーはやったことはない。生徳丸3号には1年ほど乗ったかなあ、そこ辞めてから、安仁屋宗栄さんの泰久丸に乗ったわけ。



爬竜船競漕で賑わう那覇地区泊港、大勢が漁船から立見。右下に生徳丸2号の船名が見える。(那覇市歴史博物館所蔵)

— 泰久丸は尖閣諸島に行って盛んに操業したと聞いています。1955年第三清徳丸事件が起こった時、泰久丸も魚釣島近くで操業していて、件のジャンク船に追われたようです。

石垣：第三清徳丸事件はよく知らない。事件が起きた頃は僕が20の歳だから。

泰久丸(15ト)は、私が乗っている時分はそんなに尖閣行かなかったよ。時々は行くけど。そうねえ、八重山のちょっと南の方に、与那国の近く、中ソネというのがあって、あっちにはよく行きよった、1航海で当時は8名、9名位乗っていたねえ。

当時の魚探は、魚は映らんよ。線がガサガサと映る、大体船長がこれはプランクトンか、魚か判断してやる、魚ははっきり映らん。ただ黄色いプランクトンか、赤いプランクトンか、これは魚だと船長が見分けてやるよ。

また今度の航海で釣れるポイント探し当るさあねえ、次来る時もここで縄入れるからこの場所を憶えておく。今ならGPSに位置を記録しておけばいいが、当時はこっちから何マイル、どこに何10メートルに行って、何時間位走らして行って、という風に島当てして見当付けていて、して、大体場所が近辺きたら、縄下ろすんですよ。前釣った所はこんな深くなかった。縄行かしてみてもっと浅かったと判断してやりよった。それが大変だったねえ。

して、大九行っても、宝山行っても、尖閣に行っても、狙うのは大体アカマチ(ハマダイ)よ。あれが高く売れるから、アカマチ、シチューマチ(アオダイ)、クルキンマチ(ヒメダイ)、もうこの3つが大量に釣れる。浅瀬にはいろいろ種類はあるんだけど、沢山は釣れない。

泰久丸の安仁屋宗栄さんは海上手で厳しかった。泰久丸は優勝旗も持っているよ。あれは那覇地区で水揚げは1番、3年間連続一番なったら優勝旗もらえるから。だから泰久丸はよっぽどの人じゃなければ乗れなかったわけ、また大概のフューナー(怠け者)は、泰久丸には乗らなかったよ。あんまり厳しすぎるから、だけどその代わり配当もよかった。儲かったよ。して、2年位いたら、泰久丸はマグロ船造ることになったわけ、大きな船を。一本釣りは辞めるから、して頑張りたい人は残りなさい、そうでない人は辞めなさいと言ったから、私は辞めて、エイシン丸に相談して乗ったわけよ。

エイシン丸で 底延縄 やって憶える

— 泰久丸の新造のマグロ船に乗らないで、エイシン丸に乗って、そのまま一本釣を続けたわけですねえ。このエイシン丸で尖閣諸島に行きましたか？

石垣：そうねえ、エイシン丸に乗って、一本釣もするけど、ここで延縄を憶えたわけ。エイシン丸では尖閣は行かなかった、宝山辺りに行って。次の協徳丸を造ってからが尖閣はよく行ったけど。エイシン丸の時分は延縄はねえ、一本釣のミキナー(幹縄)と同じ木綿糸、だから行かす時に纏れるさあ、粘りが無いから、豚の血で染めてから使っていたが、上等な縄が内地から入ってきたよ。ウチらはこれをアカナー(赤染縄)と呼んでいたが、中に絹が入ったみたいでちょっと硬かった。これは普通の木綿縄より強くて、切れないから、これで延縄やってみたら、よかったわけよ。して、私もエイシン丸で、この底延縄をやって憶えて、そのあと協徳丸を造るようになってからが底延縄専門にやったわけ。

エイシン丸には2カ年位乗ったかなあ。それから漁有丸に乗った。これも一本釣と延縄

船で、船長は比嘉という垣花の人、これに1ヵ年位乗っていた。そのあと弟の真三郎が臨時で乗っていて、久米島の鳥島で船を座礁したことがあったよ。して、この時分漁有丸も、安洲丸も新しく新造船造るし、自分なんかも協徳丸を新しく造ったですよ。造ったのは僕が29歳(1965年)の年かなあ？

5名株で 底延縄専門船・協徳丸 新造

— 協徳丸は底延縄専門だったわけですねえ。協徳丸は、尖閣諸島によく行って、那覇地区でも、水揚げはいつも1,2番争う大漁船だったと、聞きましたが。

石垣： そうねえ、泰久丸に乗った時は、尖閣には時々しか行かない。協徳丸(9ト)造ってからはあっちにはよく行ったよ。あれで底延縄して相当儲かった(笑い)。

那覇地区での水揚げは5年間1番だった。優勝旗の1つは船長の所にあるはずよ。亡くなった國吉真喜さんが船長だったから。

協徳丸は5名株で造った。当時はドルだったから1万2千ドルは掛かった。5名で千ドルずつ出して5千ドル、残りの7千ドルは農林中金から借入れた。据え置き期間が3年間だったわけ。

それを終わらんうちに全部支払いして、7千ドル支払った。

利益は船が4分、船員が6分だったから、この4分から経費差し引いて、残りは全部頭割りして分配してねえ。協徳丸のト数は実際は14,5トはあった。けど10ト以上なら船員手帳を作らんといかんし、これの切替えでも面倒さあ。それに船の設備とかいろんな検査もあるから10ト以下に落として9トで登録した。



前列左端が底延縄専門船・協徳丸。上：國吉真喜船長。
(那覇市歴史博物館所蔵)

尖閣では 底延縄 5,6つ旗立てた

— 協徳丸では、1航海何名位で、底延縄で行ったんですか？

石垣： 当時は一本釣りの縄も、底延縄の縄も手繰るさあ、だから1隻の船に10名位乗りよった、今はラインホーラーで縄巻かすし、機械で全部自動でやっているから3名でもできる。前は舵も4時間交代でとりよった、居眠りするからと。いわば尖閣列島に70か80位にコンパス向かわすねえ、これを見ながら4時間交代で、舵をラットを握っていたよ。

けど今は自動操舵で、クラッチ入れたら針はちゃんと合っているから傍に坐っていて見るだけ。当時は甲板も機関場も交代しながらやっていたさあ。

して、底延縄の場合は最後の縄の所に目印に大きな旗を立てる、船長はこの旗を見失ったらいかん、エンジン止めて見張っては、旗が流れたら、エンジン掛けてまた旗の所に船やって、船長は眠らんでしょっちゅう、今は眠っていてもラジオブイが旗はどこにあるよと教えるけど。



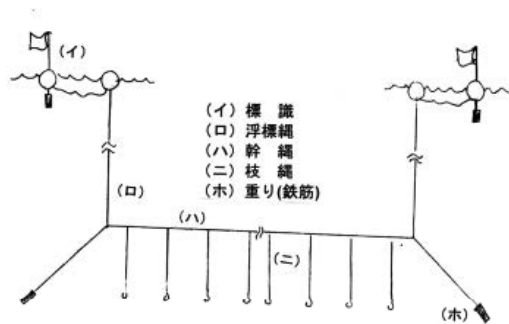
久場島沖合いに投縄した目印の旗。(上原博輝 2010)

その当時はそういうものがないから船長、機関長はずっと起きて見張りしないといかんさあ。だから船長、機関長は12時になったら眠りよった。そして朝は早いさあねえ、また縄入れるから。

— (底延縄図を指して) 底延縄は両方にオモリ付けて、沈まして、それに幹縄を結んで、枝縄を入れて、枝縄には釣針1本ずつですなえ、この枝縄を全体で何本位入れますか。

石垣：底延縄は昔からあったが、昔は漁船のような大きな船でなく、クリ船でもやっていたさあ。昔から枝縄1本に釣針1本。だけど慶豊丸が鹿児島から習ってきた浮き延縄(底立延縄)のやり方になると5本も付けていた。底延縄では、釣針は1本ずつ付ける。

協徳丸の場合は、一回の延縄で枝縄は500本位入れたかなあ。間隔は2尋半位だった。これに500掛けると1250尋、これを和にすると、延縄は約1.8キロ位の長さになる。それに目印の旗立てる、最初と最後と真ん中に、普通はこの3つ立てるけど。尖閣の場合は潮がものすごく速くさあ、底延縄だから縄は底に沈ましているから、ヤナ(魚の棲家の岩場)によく引っ掛かるよ。だから旗は大概5つ、6つは立てたねえ。縄がこっちから切れたら、またあっちから揚げるからとねえ。最初入れる旗は大きな旗、中間位にまた1つ1つと旗立てていて、こっちから揚げてきて、切れる場合があるさあ、岩に引っ掛かって、もう全然揚げきれんで、だから、尖閣列島に行ったら5、6つは旗立てたよ。



尖閣諸島での底延縄：釣針500本、枝縄間隔3.7メータ余、延縄長1.8キロ、潮の流れ速いから目印旗5、6つ立てた。

— 1回の底延縄で、500本の枝縄入れますと、エサを掛けた500本の釣針を、次々と順番通り入れていくわけですねえ。その時釣り針が手に掛かるとか、危険なことは？

石垣：こっちに皆キタ(幹)縄とエサ掛けた枝縄入れたカゴがあるさあ。カゴが5つ位あって、順番よく釣針を並べて、これに掛けておいて、1つのカゴには枝縄の針を100

本位掛けてあるよ。して、船をスローで行かしながら、カゴを前にして枝縄投げる人、キタ縄投げる人、2人両方顔合わせてからに、キタ縄投げて、枝縄投げて、艫からこれは投げるから、針の付いたこの枝縄を投げて行くわけよ。

針掛ける人が間違っ て 順番を間違えて、前のものを後に掛けたりすると、どれが飛んでいくか分からないさあ。これが手を引っ掛けて怪我する場合があるから、皆怖がってこれをやらんわけ。自分は10年あまりいつも枝縄ナギヤー(投縄役)だったさあ。だからいつも肩にきたよ。今は肩治っているけど、その当時はいつも肩痛かった。

10年間あまり自分1人でこれを投げていた時は、どれがいくか分からんから、余裕持って手に3つ位持っておってやっておったから、掛ける人が順番間違えて、針が手に掛けて怪我したのは1回だけだったねえ。



写真は底立延縄の投縄光景、底延縄と基本は同じ。浮球で浮かせるかの違い。カゴの手前から枝縄、浮き球、縁には釣針、後方にはエサが掛けてある。(上原博輝 2010)

底延縄 1日7回入れる

— 尖閣諸島では、底延縄は1日何回位、縄入れましたか？

石垣：1日に7回入れる、大体少なくて6回、潮の流れが強くてあまり仕事ができない場合は5,6回位入れるけど、普通だったら8回位まで。

して、縄入れて、入れ終わったあとは、大体反対側に戻るねえ、やっぱし先に下ろした所は早く釣れるさあ、あとから下ろしたのは沈むのが遅いから、船を先に流した所に戻して、こっちから揚げていく。縄揚げて、魚を獲って、エサがないのは付けて、皆エサ付けて、カゴに皆掛けて、これの繰り返しさあ。掛かった魚を揚げる場合は楽しみ、ラインホーラーに加勢させてからに手繰る人がいるし、こっちに枝外すのがいるわけよ。

どうしても纏れてくるさあねえ、して、自分なんかの場合はこうして、カキジャー(鉤)を準備しておって、魚が釣れたら、これで、こうして外すようにして、手で外したら間に合わないねえ、素早く外さんといかん。揚がってきたらカキジャーで、ちょっと釣の口を引っ掛けてこう廻したらすぐ抜ける、外れるよ(笑)。

この底延縄ではカンパチとか、マーマチとかが多かったけど、今はどんなかなあ。

サメも掛かってきた、あんまり金にならないが、小さいのはダブルに入る、入らなかつたら捨てる。また剥製している貝とかエビ、あれなんかも掛かってくる。底だからいろんなものが掛かってくる、マンボウ？ マンボウはマグロ船が、普通の一本釣、底延縄には掛からんよ、あれは深い所にしかいないから。

浮き延縄に 替えたら 相当獲れた

— そのあと、底延縄から、この浮き延縄に替えたと言いましたが、どうでしたか？

石垣：(底延縄図を指しながら) 渡慶次次郎さんが鹿児島から習ってきたこの浮き延縄(底立延縄)をやったわけ、これは大体釣針は5本付けだから、オモリ付けて、ここ浮子付けているから、潮にもたれて流れていくさあねえ。流れていったら、縄が引っ掛かる場合もあるし、引っ掛からん場合もあるけど。して、これを尖閣でやったら、タイ、ものすごい釣れよった、大きいタイよ。魚釣島のちよつと西で、マーマチ(オヒメ)も、タイも、よく獲れよったよ。

底延縄はあんまり深い所に入れなんです。大体120メートル位までだから。浮き延縄は、浮子で深さを調整すれば、これでアカマチも釣れるし、ビタロウ(フエダイ類)も。あれは浅い所にいない、アカマチと一緒に同じ深さにいるから。あの時分はビタロウは安いさあ。今高くて高級だけど、皆外して海に捨てよったよ(笑)

底延縄はこっちの場所に入れたら動かんさあ、端っこにオモリ付けてあるから、だけど浮延縄は流れていくさあねえ。

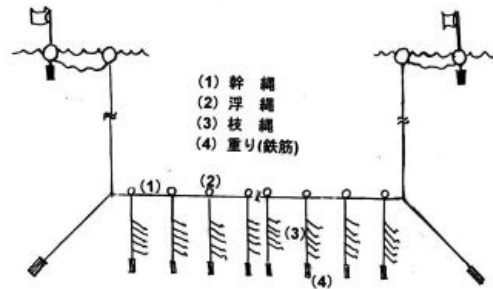
尖閣でこのやり方でやったら、魚は相当獲りよったねえ。もう自分なんかは氷がないもんだから、八重山近いさあ。氷は積んで行ったけど、あまり魚が釣れるから氷が足りなくて、八重山に行って氷積み足したよ。だけど、自分達はこの浮き延縄はあんまり長くやっていない。2,3年はしたかなあ、そのあと協徳丸の株解散したからねえ。

— さっきの話ですと、協徳丸は、那覇地区で水揚げは5年間1番にもなり、相当儲けたと言いましたが、1航海どの位水揚げがありましたか？

石垣：尖閣は1航海6名位、早い時は1週間、遅い場合は12,3日で帰って来たよ。2週間まではかからなかった。水揚げは今は知だが、その時分は斤だった。4000斤から5000斤、キにすると2.4トから3ト位で、殆んどマーマチ、浅瀬ではカンパチが多かったねえ。いつも満船して大漁したから、船造る時に借りた7000ドルも、据置き3年間のうちに全部支払った。5カ年間水揚げ1番で、優勝旗ももらったよ。だけど、協徳丸は10年あまりしたら、株解散したねえ。

— 協徳丸はあんなに儲けていたのに、なんで株解散したんですか？

石垣：もう協徳丸は10年あまりよく頑張ったさあ、やっぱりいろいろあるよ。陸の仕事はそうでもないけど、海の仕事、船の仕事はよけい難しい。縄の纏れとか、いろいろある



底立延縄：枝縄1つ1つに浮球付け、釣針も5本に増やし浮かし流しながら獲る。漁獲は驚くほど倍増。

から。昔の人が、ムスル(ムシロ)ティーチ(1つ)、ナービィ(鍋)ティーチ、マカイ(お椀)ティーチと言っているさあ。1つのムシロで一緒に寝起きして、1つの鍋椀で一緒に飯焚いて食って生活しないと、人の気持ち分かんよ。道から会って挨拶して、いい人のように見えるけど、いざ一緒に仕事したらいろいろケンカもするさあ。

それで5名株のうち2人がケンカして株抜けるというから、船長と会計と自分3名で、船を値段立てて取る話になったが、だけど10年も一緒に仕事やっているから大体人間の気持ち分かるさあねえ。皆が解散する時に一緒にいいと、私も相談して解散したわけよ。

で、会計と船長2人で船は取ったけど、会計は早く亡くなって、もう船長1人しか残っていないさあ。だから、あまり操業できなくて、とうとう陸揚げして、船は長らく組合事務所の下に置かれていたよ。



底立延縄の揚げ縄光景、これが楽しみ、魚を素早く揚げて、針外す、大物だと鉤で揚げるの大忙し。(上原博輝 2010)

私はそのあと八重山に行って、弟の真三郎と一緒にしばらく延縄やったわけ。そしたら、一緒に船造って延縄やろうと言ったから、人間はお金の関係とか、仕事の関係とかで必ずケンカするよ。私は兄弟とはケンカしたくないから自分だけで造りなさいと言って、弟は1人で造ってやっていたさあ。あれは伸三丸からは相当儲けたですよ(笑い)。那覇地区から賞状も貰っているから。

安洲丸 瑞幸丸 乗って 尖閣で一本釣

— そのあと、安洲丸、瑞幸丸に乗って、尖閣諸島に一本釣で行ったわけですねえ。

石垣：そう、安洲丸(5ト、船長高江州昇)に乗った。尖閣へよく行ったさあ、アカマチとか、シチューマチとか、一本釣で。安洲丸は5ト未満だから、4名位で行って、よく儲かったよ。大将がしっかりしていたから。

して、安洲丸を辞めて、真厚ヤッチー(兄貴)の瑞幸丸(5ト、船長渡嘉敷真厚)に乗った。瑞幸丸は2カ年位乗ったかなあ。船長の真厚ヤッチーと外間次郎機関長と私と3名だった。あの船でも相当尖閣行ったよ。その時分からは釣機で、1人で2つは使えたけど、魚が釣れて潮がよければいいが、潮の流れが悪い時は、相手の縄に纏れて引っ掛かるよ。だから1人で2つは使えんさあ(笑い)。

海は難しい。もう漁、不漁は船長の判断よ。魚探に、プランクトンか、魚か分かんが映るさあねえ、尖閣は潮が速くて、潮にすぐもたれていくから。だから船長が潮見て、風見て、こっちからどの位持って行って、錨下ろして、錨を引っ掛かって、自分が乗っている船が魚のいる位置に来るか、これもう船長の判断1つ。下手上手は船長の勘、腕次第さあ。

その点、真厚ヤッチーは上手だったねえ。それにアカマチ専門だった。瑞幸丸はよく大漁したから、うんと儲かったはずよ（笑い）。

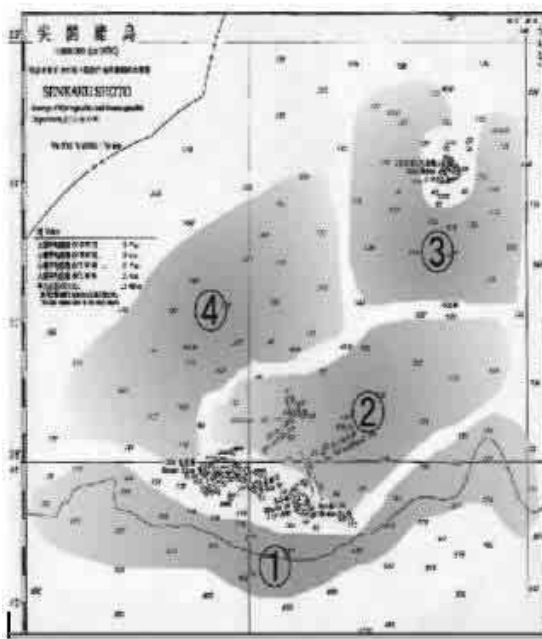
そのあと海の仕事辞めて、陸(おか)の仕事に替わって、コココーラー会社に勤めた。

延縄 一本釣で マーマチ クルキンマチ アカマチ獲った

ー 石垣さんは、尖閣諸島では 10 年あまり協徳丸で底延縄や浮延縄して、6 年あまり安洲丸や瑞幸丸で一本釣したわけですねえ、その時の漁の様子を話してください。

石垣： 尖閣行けば、満船大漁したから、浮延縄している時なんかは、大きなタイ、マダイ、あれよく釣れよった。またマーマチ、クルキンマチとか、カンパチ、殆んどこの 3 種類だった。（海図を指しながら） こっち（②と④）はアカマチはあんまり釣れなかったよ。海が浅瀬だから 120、30 メートルだから。浅瀬にはアカマチはいないから、して最初はマーマチとか、カンパチ類さあねえ、あとの深さはシチューマチ、クルキンマチさあねえ。大体シチューマチは 150 メートル位までは釣れるけど。80 メートルから 120 から 130 メートル、150 メートルになるとシチューマチもあんまりいない。クルキンマチはもっと浅いよ。120 メートル位まで。海だからといって皆同じ所で釣れるとも違うよ。アカマチはこの辺(①)ねえ、こっちは 270、80m から 220、30m 位はあるから。このフチミーグワ、100 尋線の近くは釣れるよ。

北の島（久場島）があるねえ、こっち（③）はあんまり行かなかった。底延縄とか、一本釣をよくやったのは、こっち側（①②④）よ。



尖閣諸島の主な操業海域 ①大陸棚百尋線付近、②③魚釣島付近、④久場島周辺。
獲れた魚 上：マーマチ 中央：アカマチ 下：シチューマチ。

夏場、潮の流れ速いから 尖閣行かん

石垣： とにかく、尖閣列島の潮はものすごいよ。大体 7、80 メーターの深さの海で、この縄にオモリを付けて、それが海底に着くまでは、潮にもたれて、300 メーター位縄行かすよ。

潮が速いと縄を揚げる場合でも手繰ってくる、やっぱし魚が揚がって来るまでは潮にどンドンもたれて、ずっと向こうで浮いてしまうさあ。それを船まで持って来るのは魚はもたない。ぐるぐる回って皆釣糸から切れちゃう。魚は獲れないよ。だから幾ら仕事やっても漁は上がらんから、その時はもう休みだよ。

潮の流れが速い時は、して潮はこっちに向くさあねえ。大体冬は北風さあ、だからこの潮の流れと波とぶっかって三角波が立つもんだから。あっちのものは怖いよ。夏場は潮の流れが速いから行かんわけよ。行く時は冬の大体 11 月 12 月から 2、3 月頃まで。

尖閣専用のアンカー 下にワイヤー付ける

尖閣の場合は潮はものすごく強いさあ。アンカーロープはもたなかった。すぐ切れよった。潮が強いもんだから、ロープが岩とかに当ってすぐ擦れて切れるさあ。それで尖閣専用

のアンカーは下に 5 尋位のワイヤーを付けるわけよ。ワイヤーが岩に擦ってもなかなか切れんさあ、ロープみたいに。なぜ 5 尋位にするかって、岩といっても 5 尋位の岩といっていないさあ。だけどこのワイヤーでも切れる場合あったよ。それだけあちは潮が当るのがものすごく強いからねえ。だから尖閣行ったら、運悪く潮の流れが強い場合があるさあ、2、3 日位待って、潮が止まるか待って、それでも潮が止まる見込みがなかったら別の所に移動したよ。



夜明けの久場島、潮の流れは速く、波も荒いため、尖閣専用アンカーで漁を行っている。(石垣市 2014)

エンジン止めても ゴロンゴロン ペラ回る

石垣： して、尖閣では、冬でも場所によって、時間によって、潮が流れる場合に当たったら、もう仕事はできない、潮が引かない場合と引く場合があるからものすごいよ。

あっちの潮は怖い位北に引く。もうシケるといことが前もって分かると、クバシマ(魚釣島)のカタカ(島影)に行つて、だから必ず冬は北風だから、南の方に避難するわけよ。

南は浅瀬は僅かだけど、マーマチが夜釣りでも釣れる。だけど、アンカー打って避難していても、船のペラがゴロンゴロンと回るからねえ。エンジン止めていても、潮の流れが速くそれに当たる力でペラが回っている。そんなに回る、ものすごい力だよ (笑い)。

だから眠っていて、ゴロンゴロンゴロンと音していたら、全然仕事できない。これが聞

こえなくなったら、ペラ止まっているから、もう潮は弱まってきて、仕事ができると判断したよ。

包丁を手に 大型船との衝突回避？

— 尖閣諸島では船のエンジン止めていても、ペラが回るのにはびっくりしました。そんなに潮の流れが速いのであれば、操業中でも危険にことはありませんか？

石垣: 仕事がやりにくいか、そんなことはいろいろあったけど、危険なことと言えば、一本釣はアンカーかけて釣るさあ、延縄はアンカー入れないで仕事するが。

尖閣の近くは、タンカー船とか内地航路の船なんか、行ったり来たり航海するさあ。

もし自分なんかこっちで仕事やっていたり、アンカー入れて眠っている時に、相手の船はあっちを通ると思っているけど、潮の流れがものすごく強いもんだから、ドンドン潮にもたれて来るさあねえ。近くに寄って来てさあ、特に夜なんか怖い。

航海灯が赤と青の2つが見えた場合は、まっすぐ自分の所に向かっていると判断さあ、トリ舵は赤、オモ舵は青さあ、赤だけ、青だけが見えた場合は、あっちに向かっているんだなあ。交代で、見張りしないと危ない。相手の船は大きいよ。あっちの船は自動で舵は切っているから、こっちの船を見ているか、見てないか、分からん。見えても見張りが油断して、トロトロしている場合もあるから。潮も強いよ。どンドン引っ付いてくる。だから、これ危ないなあと思ったら、急いで包丁持って来て、船のアンカーロープ切る準備するさあ。もうぶつかってきたら、自分なんか船は小さいからすぐ沈む。もう自分で逃げる準備しないといかん。アンカーロープ切って、エンジンかけて、すぐ逃げないと危ない(笑い)。



魚釣島沖合いを航行するタンカー船。夜間の衝突事故を防ぐため交代で見張りに立つ。(上原博輝 2010)

台湾船延縄 アンカーロープ切る？

台湾船の延縄は、またアンカーロープを切るよ。マグロ釣る延縄は長いさあ、ずっと向こうから入れて来るんだけど、自分なんかこっちで仕事やっていて、潮がこっちにもたれていると注意して見ておかんと大変だ。あれなんかの縄が、自分達の船のアンカーロープに引っ掛かるから、潮の流れ見ておったらすぐ分かるさあ。引っ掛かったら、あつという間に切れる。潮の流れが強いから。縄はノコギリみたいにこうして、アンカーロープを擦るさあ。あつという間にすぐ切れるから、ロープ切れたらもう大変だから。

台湾船の延縄がもう自分なんかに寄って来て、もう引っ掛かるなあと思ったら、あれなんかの縄を切ったこともあるよ。仕方ないから(笑い)。

陸から、セリ市場の仕事 73で引退、

— 尖閣諸島での漁のお話、話はどれも面白く興味深いです。そのあと陸の仕事されてどうされたんですか？

石垣：瑞幸丸に2カ年位乗って、して船員手帳切替まではやって、頑張ろうと思っていたけど、あの五真丸の親戚の長男にコココーラ会社の常務がいて、人数足りないからコココーラの仕事、自動販売機の手伝ってくれないかと頼みに来たよ。私は友達連れて、加勢しに行ったわけ、しばらくしたら、友達は皆辞めて、私一人になって、向うも困っているし、それにあんたが来たお陰で助かっていますと言うから、私はもう辞められないさあ、それでとうとう10年あまり、コココーラ会社で働いたわけ（笑い）。

して、あっちが中部の具志川営業所に移転する話が出たから、私はもうあんな遠くには通勤できないからと、すぐコココーラを辞めたさあ。

そのあとこっちの那覇地区漁協のセリ市場に来たわけよ。セリ市場の仕事は、セリの準備とか、片付け、清掃とねえ。海の仕事やってきたから、この仕事が楽だったさあ。ここで10年余り仕事やったかなあ。73歳で病気で2週間入院した。それを機会に那覇地区は辞めて、引退した。仕事辞めて1年は、退屈してもう大変だった。毎日が時間との闘いだったさあ（笑い）。で、今は毎日忙しくしている。殆んど毎日港に来ているよ。

だけど、船も、人間も、昔に比べたら少なくなっているさあ。海人も皆年取って、子供たちもこの仕事継ぐ人はいない。那覇地区から、尖閣列島に行っている一本釣船は、もう1隻もないから、さびしいですよ。

— 大変有益なお話、有難うございました。

(了)



早朝のセリ市場は活気がある。ここに来れば現役時代を思い出す。元気になるから、殆ど毎日来てますよ（笑い）。(2015,4)

國吉 真一 くによし しんいち (那覇地区漁協)

1936 年(昭和 11 年)、那覇市垣花に生まれる。78 歳(2015 年時)。

那覇市垣花の代表的な海人、1950 から 1960 代は尖閣諸島の深海一本釣に従事する。氏の一本釣りについては 2012 年度の聞き取り調査報告に収録。氏は 34 歳(1970 年)でマグロ船徳豊丸を建造、マグロ漁に乗り出す、のち一孝丸、越成丸を建造、沿岸から沖合い、遠洋マグロ業に従事、70 歳で漁師を引退。今回はこのマグロ漁業の話を伺った。氏の体験は 1970~90 年代のマグロ延縄を知る上で貴重である。



一本釣から 大きな漁したいと マグロ漁へ転換

— 前回、1960 年代における尖閣諸島での深海一本釣の話をお聞かせしてもらいました。順調だった一本釣を辞めて、マグロ船に切り替えたのはどういった事情からですか。

國吉：深海一本釣とマグロでは規模が違います。一本釣がどんなに順調にいてもマグロ船には敵いません。また組合から、一本釣じゃは若い人もいるし、早く内地みたいにマグロ船に切り替えた方がいい、建造資金も出すからということで。ウチも深海一本釣の第 3 五真丸持って、この船から尖閣も行ったし、東大丸では、誰もが開拓してない海を、魚探乗せて、開拓しました。それで順調に波に乗って、儲かっていたんですよ。

だけど、こんな小さい船からいつまでも一本釣やっても何にもならない、前には歩かんと、自分は若いんだから大きく金かけてやろうということで、これも人間の欲ですかねえ、もっと大きな船造って、もっと儲けのある



最初のマグロ船徳豊丸(木船 15 トン) 1970 年建造。

仕事をしたという考えで、マグロ船に切り替えたわけです。マグロ船なら、沖縄近海から、南方のあっちこっちへ行けますから。皆そうですよ。ウチの後からも、こっちな那覇地区ではマグロ船にどんどん切り替えています。やっぱり、皆一本釣では限界あると思っていたはずですよ。

— 最初に徳豊丸を新造して、そのあとずっとマグロ延縄やってきたわけですねえ。

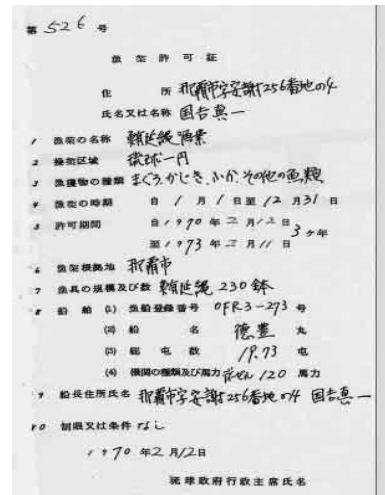
國吉：そうです、この徳豊丸、最初のマグロ船を造ったのは 1970 年、復帰 2 年前ですねえ。私と弟の真孝、それと姉婿の我那覇生三兄さんと 3 人株でやって、船大工の宮良貞光さんが造りました。15 トンの木船でした。船長は弟がやって、私は機関長やって、マグロ免許は、100 マイル、琉球一円でした。勿論、八重山から尖閣辺りまで行ってます。マグロ延縄

は大陸棚は浅くてできませんから、尖閣列島の手前まではずっと行ってます。

水揚げですか、マグロは全然違いますよ。

一本釣の場合は量が知れてます、1航海で、多くて100万そこそこの水揚げです。だけど、徳豊丸は300万水揚げがあるわけですねえ、3倍以上の水揚げです。それに歩合配当制でも一本釣の場合は4;6で、4は船側、6は船員側ですが、マグロ船なると4半5半、船側は5.5、船員側は4.5になるから、利潤もこっちの方が大きいです。

この徳豊丸で、マグロ船やって結構儲けてました。順調にやってまして、段々南へ下がって行きましたよ。そしたらフィリピン沖で、事故に遭ったんです。フィリピンの東で、流木にぶつかって船割れて失くしました。それまで6年位は持っていたかなあ。



マグロ延縄許可証 (1970年)

そのあと第2人で大型船の一孝(かずたか)丸を造りました。30トンの遠洋マグロ船です。これからはもう相当儲けました(笑い)。ファイバー船で、赤道近くまで行って、魚25トも積んで帰ってきましたから。また南方の魚でしょう、ずっと南、パラオ近海なりますと、もう最高のバチが食うんですよ。

一孝丸は量的にも違うし、値段も違うし、市場がタイミングあったら、1航海2千万から3千万ありました。この一孝丸も、今度はパラオで、台風で港に避難していたら、岸壁にぶつかって壊れて失くしました。この船は15年は持ったはずですよ。そのあと自分1人で越成丸(えっせい)造って、あれは沖縄近海です。積荷は7割で徳豊丸とそう変らんです。

この越成丸からも儲かりましたよ。船代も4、5年で返しましたから。

私は足痛めて、70歳で仕事を辞めました。それまでの12年間はこの船持っていましたねえ。



南下すると、パラオ近くは最高のバチが食う。揚ったマグロは養生ビニールで包み魚槽に入れる。一孝丸にて(1983年)

沖縄本島から 宮古・八重山近海 マグロの好漁場

ー 琉球列島一円は、マグロの好漁場と聞いていますが。

國吉: そうです、沖縄本島から 宮古・八重山から与那国近海はマグロの全部いい漁場

ですよ。(海図広げて) これ大陸棚、これ宮古八重山、(八重山・尖閣諸島間を指して) 大陸棚は浅くて縄入れられんです。八重山の北を歩く時はこの辺(イ：先島北西漁場)でやります。これからずっと流れていて、沖縄から久米島、この辺ですねえ、こっち(ロ：久米島西漁場)も全部いい漁場ですよ。宮古の東、これ宝山ソネだから、宮古、ウチらこの辺(ハ：宮古・八重山南漁場)はよう歩きましたねえ。で、こっち(イ)では、この大陸棚に沿って、もう皆こういう風にして縄入れていく(南から北へ)、尖閣に向かって、尖閣列島の近くまで、こっちとですねえ、ここの漁場とそして東側こっち、この辺、八重山のこの辺ですねえ、台湾と合い中も上等です、いい漁場がありますよ。

クロマグロはもうこの辺ですねえ、八重山の南側、宮古の下側、この宝山ソネのギリギリ、たまにはこっちから北に入れるから宝山に引っ掛かる場合もあります。沖縄の南側、この辺がマグロの一番いい所ですねえ、こっちからはずーと南に下がっていくから、キハダとか、トンボ(ビンナガ)、カジキ類はこの辺、下側はいいです。

3月から始まって、6月、長くて4ヶ月。ここ(イ)もクロマグロ食いますが、ここに大体が、ここはトンボは少ないですよ。キハダ目当てです。

ここ(ロ)は、この位置から久米島のここまでですねえ、キハダです、全部。

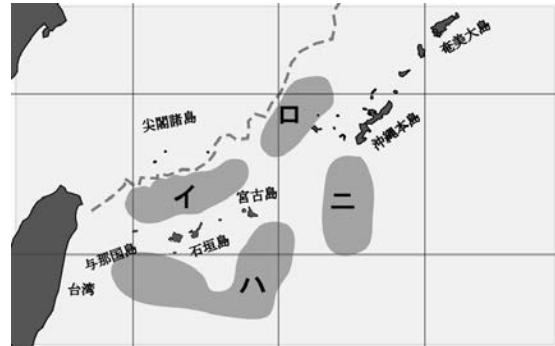
ここ(ニ)はトンボも食うし、クロマグロも食うし、ずっと南に下がって、大東の近くまで行きますよ。大東の島見ながら入れる場合もあります。

八重山の人は、こっち(ハ)の波照間の下の方、あっちも漁場はいいですよ。そして西表の下ですねえ、で、石垣の下とか、その合い中、で、多良間の下ですねえ、こういう、マグロはこの辺はたむろっていますから、トンボも。

一 八重山・尖閣諸島間(イ：先島北西漁場)はどんな漁場ですか、

國吉：八重山北側と尖閣との合い中もいい漁場です、マグロ釣っては、私も何回も行くんですが、この辺に結構釣れますよ。最初はキハダ混じって、クロマグロも釣れるけど、クロマグロが終わる頃には、キハダ、メバチが入ってくるんです。この辺は。キハダが切れる頃にはまたトンボが出てくるんです。

トンボは9月以降11月から出てくるんです。だからたまには大陸棚に上がる場合もあるんですよ。縄の長さによっては、まあ一応自分の持っている縄の長さ何マイルとって分かりますから、それ合わせて丁度ギリギリまでに来るように計算して、もし近ければもう少し南に下げて、入れるとか、厄介なのはこれだけの隻数があるもんだから、今台湾漁船がたむろしているのもこの辺ですよええ、競争していますから、皆トラブルあって困っている。



主なマグロ漁場図 イ：先島北西漁場、ロ：久米島西漁場、ハ：宮古・八重山南漁場、ニ：沖縄本島南漁場

だから政府が日台漁業交渉をやって、今どんな話合いしているとか、よく新聞に載っているでしょう。

延縄長さ まちまち 10マイルから 50マイルも

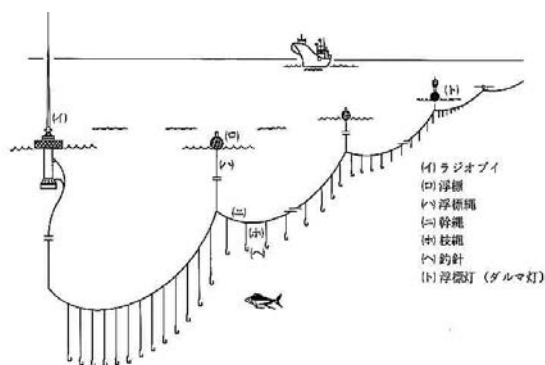
(マグロ延縄図を指して)、この図で説明しましょう。

これが浮球(ロ)と浮き縄(ハ)ですよ。これで深さを調整してこの幹縄(ニ)を入れます。

この幹縄に吊るされているのが枝縄(ホ)で、1本1本釣針(ヘ)が付いています。

この釣針と釣針の距離は大体が50メートル、50メートルだと枝の長さは25メートルできます。これ以上長くなるとこの2つ纏れる。両方魚が食って引っ張ってきたら、引っ付いて纏れて、外れる場合もありますから、枝と枝は50メートル離すわけです。

けどトンボの時期になると、その合い中から通る魚は全部獲れないということで、この距離を40に縮める人もいます。30に縮める人もいます。縮めると釣針の数が多くなるんです。50を40メートルにしたら釣針3本多く入るわけです。食う所にしか魚はいない、多く獲りたいという考え方で長さを縮めて、枝も縮めて、釣針を多く入れるという考え方もあるし、同じ距離で使っている人もいます。



マグロ延縄模式図 (「沖縄県の漁具・漁法」より)

トンボは少し浮いてますから、キハダはなお浮くんです。キハダは大体150メートル位の深さ、クロマグロなるともっと浮くんです。釣針で同じように使う人は、各々の時期は長さは触らないで、釣針の数も触らんで、浮き縄で調整します。浮き縄20メートル付けたのを15メートルにするとかしてねえ。

— マグロ延縄は数マイルの長さですか、どの位の長さで、どの位の釣針つけますか？

國吉: まあ船にもよりますけど、ト数によって、持つ数は違いますよ。それと延ばす船なんか大伸ばします。やり方もリール式とカゴ式があって、釣り元によって釣り針も2000本持っている人と、1800、1500、1300本とか、いろいろありますけど。

これはリール式とカゴ式でも全部違います。また船員の人数によっても違うし、徳豊丸の時はカゴ式で、釣針は何本付けていたかなあ。1300本位だったかなあ。

一鉢に釣針6本付けると、5鉢で1カゴだから、1カゴには釣針30本が付きます。

45カゴだと45×30で、釣針は1350本になるから、大体カゴはその位だったと思う。

あと枝縄と枝縄の長さは、内地から既製品として来る時は50メートルの長さです。これをウチらは40メートルにして使ったから、30本×40メタで、1カゴの幹縄は1200メートル位ですなえ。

で、全体で、45カゴだから、1200×45で、幹繩は54,000メートルの長さになる。これが延繩の全体の長さで54キロになる。これをマイルにすると、1マイルは大体2キロ、1852メートルですねえ。これで54キロをマイルにすると、約29マイルになりますか。ウチらの場合、船は時速8マイルで投縄していけば、大体3時間半から4時間位で終わりますけど、大部持っている人なんかは5、6時間位は掛かります。もうやがて久米島まで行きますよ、全速ですから。



マグロ延繩（カゴ式）カゴの縁に釣針が整然と掛けられ、枝繩と一緒に置かれている。（釣針・枝繩 30個）右：1個の釣針と枝繩取り出し様子。左：30個分で使用する幹繩と浮き繩（幹繩長さ1200メートル）

投縄位置の目印 ラジオブイ・ダルマ灯

これを投縄すると、繩は潮にもたれて流れて行きますよ。船もアンカーも入れんし、マグロの場合、大体が水深1000メートル以上の所ですから、アンカーは入れられないわけです。

で、大体潮はどこに流れていると計算して、ここまで来るには何時間なるからと上風に行つて、繩を見つめます。この時の目印になるのがこのラジオブイ(イ)とダルマ灯(ト)です。最初にラジオブイ入れて、投縄していきます。繩の最初と真ん中と最後に3つ入れます。

このラジオブイは送信機で、受信機は船に方探がありますから、これで繩の位置が分かるわけです。またラジオブイとブイの合い中に、ダルマ灯(ト)を、電灯が付いた浮球、これ位の1尺2寸の球に真ん中に棒差して、こっちに電球くびつて、これを5つ位準備して、合い中に入れます、光が点滅しますから、これは夜の目当てです。昼は肉眼で見えるようにダルマ灯に旗も付けますよ。ラジオブイにも旗を大きく作つて、くびつて、夜も昼も方探で電波をとつて、近くに来ているよ、まだ旗見えんか、とやりますから。

ラジオブイはこれも船によって、多く持っている人、少なく持っている人がいるんです。最初と真ん中と最後に3つですが、切れた場合のこと考えて、4つ入れたり、5つ入れたりするわけです。繩が途中で切れると、どんどん潮に流されて、見失ってしまいます。その中にラジオブイがくびつてあれば、どこに流れても見つけられますから。



左：ダルマ灯、旗の先端に電灯を縛る。中央：ラジオブイ。右：ラジオブイの位置を探す方向探知機。

漁船 到着順に優先 4マイル間隔で 漁場に並ぶ

一 延縄の仕組みはよく分かりました。漁期には沢山の船が漁場に集まって操業するわけですから、縄は長いので交差したり、纏れるとかのトラブルが起こりませんか？

國吉：マグロ延縄には操業ルールがあります。例えばA船が出港して、八重山の北側、八重山と尖閣列島の合い中でマグロを見つけて、釣っていたとしましょう。

船は出港したら、無線局に報告して、今日出ましたと、何時に、して、皆各船に連絡とって情報交換します。お前どこでやっているか？ 北のどこどこでやっている。西でやっている。で、食い付きはどんなか？ いいよ、悪いよと、マグロ何本とか、トンボがいくら、クロマグロも揚がっているよ、とかの情報聞いたら、今は何月何日だから、潮はどういうふうの流れていくから、北の方が無難じゃないかと。自分で判断した場合は、北の船と連絡して行くんです、漁のある所に行って並ぶわけですよ。A船がマグロを釣っている漁場に、もう漁があれば、これだけの隻数ありますから、皆船は集まって、そこで延縄するわけです。各船が勝手にばらばらに投縄したら、縄が纏れたり、交差したりしてトラブルになりますから。それでマグロ延縄には操業ルールがあります。この操業ルールは、漁場に早く着いた順番、どの船がこっちの漁場に早く着いたか、この順番で優先され、並ぶ位置が決まるわけです。必ず先に着いた船から決めていくんです。そうせんと勝手にあっちにも入り、こっちにも入りしたらもう喧嘩になりますから。

A船がここの漁場に最初に乗り込んでますから 1 番船とします。2 番目に着いた船は 2 番船、3 番目は 3 番船、あとは 4 番船、5 番船・・・ですね。1 番船は魚の食いそうなポイント、入れ位置を優先的に選ぶ権利があるわけです。この入れ位置が決まったら、ここは北緯何度、東経何度とすぐ分かります。この入れ位置を起点に、あとの船は 4 マイルずつ離して、先に着いた順番で並ぶわけです。大体が 1 番船の東側に並んでいきますが、自分は西側が釣れそうだから、あるいは背中合わせの方がよさそうだから、西側とか、反対側に行

って背中合わせに並ぶこともできます。空いた所があればそこに並ぶのは自由です。

投縄 北よりのコース 潮風向きで調整

船と船の間隔が4マイル空きますから、各船とも皆4マイル離して並びます。1番船の入れ位置の緯度経度は決まっていますから、あとは自分の船は、これから東側の何番目、西側の何番目、船の隻数に4マイル掛けたら、何マイル離れた場所にいると分かります。

これが自分の船の入れ位置になり、この緯度経度を計算します。各船とも、ここで操業している間、例えば7日間操業するのなら、この入れ位置は毎日の投縄開始の地点になるわけです。

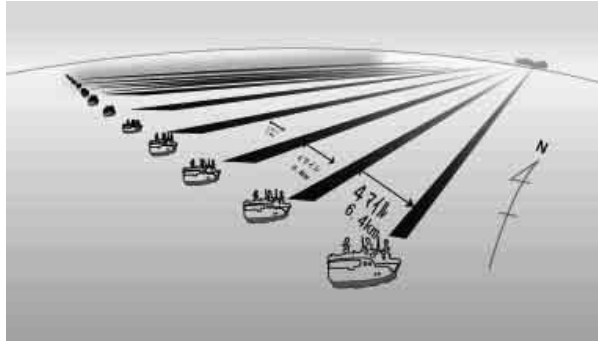
揚げ縄したあとは、翌朝までにはこの入れ位置に戻って、毎日朝6時にはここから投縄しますから。

で、船と船の間隔が4マイルだと、縄と縄の合い中も4マイルですが、4マイル空けても危ないですよ。潮の流れとか、あるいは縄切れたりする時、縄は軽くなって、黒潮はこういうふうに流れているから、ここに寄せられて来る。縄が切れんでそのままだったら、全体的に抵抗かかって皆同じような流れ方して行くけど、この半分で切れたら軽くなるから、ここに引っつくのは多いですよ。これに魚が食っていたらよけいです。その魚の重みで抵抗かけて北よりに、北よりに流れていくのが速いですからねえ。

それでも日台漁業交渉では台湾側は1マイルでいいと言っているわけ、1マイルだったら縄は、相当マチブクリ(纏)れますよ。全く仕事にならないはずだが(笑)。

投縄は、普通は南から北の方向に入れますが、今日ほどの方向に入れようか、皆で決めるわけです。風向けの計算もして、この漁場はシケが多いですから。黒潮が流れて行きますから、北風なるとぶっかって、ものすごいねりがあるんです。その時は揚げ縄はわざと右舷側に波風は当てるようにして、少し西に倒そうかと。この時は皆で相談するんですよ。あるいは今日はちょっと東から大シケだから、北に入れたらどうかねえ、あるいは北北東に入れたら下手に揚げていくから、皆が決まればこのようにコースが決まる。

勿論これ決めるのは、沖縄船も、内地船も、一緒に、無線で連絡取り合ってからです。大体北よりか、ちょっとノーイース(北東)に入れます。ちょっと倒して、こういうふうにして、で、船がない時は自由ですから、沖縄船でも、中にはノーイースに入れる人もいますし、大体北より、船が多くなるとまっすぐ北になりますねえ。



先島北西漁場での投縄、全船4マイル等間隔で並び北寄りのコース、いわば尖閣諸島の方角に向けて、一斉に投縄する。

朝6時 一斉に 全船 投縄開始

— マグロ延縄光景を上空から見たら、何隻ものマグロ船が4マイル間隔で、北よりに整然と並んで、朝6時になると一斉に投縄始めるわけですね。壮観な光景ですね。

國吉：そうです、朝には船は自分の入れ位置に来て流していて、4時から皆起きて準備していますから、で、朝6時に投縄始まるんです。時間を決めて、皆一斉にやらないと潮がこう流れていくでしょう。こっちから先入れたら縄は潮にもたれて寄っていきますから。彼らが1時間遅れて縄入れたら間隔は3マイルに縮まる、もう1時間で1マイル流れる計算だと、一斉で投縄すれば皆潮は同じように流れていくから、縄は4マイルの等間隔を保ってます。

だが、皆勝手にバラバラの時間で投縄すれば、先に入れた縄と後に入れた縄が潮に流されてきて、時間がずれているから引っ付いたり、マチブ(絡まる)たりしてもう仕事にならないですよ。だから、揚げ縄の時に、途中で縄切れて、魚食い付きが多い時はもう夜が明ける場合があります。

したら、もう自分の入れ位置に戻っていくのに、投縄開始の6時にはもう間に合わしきれん、皆に迷惑かかるから。私は今日休んで明日から同じ位置から入れるから、これは無線で全部に連絡しますよ。誰でもいいから自分の入れ位置に入れてもいいし、また寄ってもいいとなるわけです。このように投縄時間に間に合わしきれんで休む場合とか、その時は、10回操業予定だけど食い付きがよくて7回で帰る人もいる。5回して帰る人もいる。その時は右左の船が優先して入ります。で、入ったら、その船の入れ位置がまた空きますから、背中合わせしていた船とかが裏返しで、入ってくる場合があります。

中には、魚をポンポン揚げているなあ、いい入れ位置だ、もう皆獲りたいからこっち寄ってくるんですよ。2マイル引っ付けようかという船もあります。おいお前タックワイ(くっ付き)過ぎじゃないか、こんなに寄ってきたら縄はマチブル(絡まる)よ。もう少し東に寄れと(笑い)。もう皆生活掛かっているから、釣れる所に寄ってくるんですね。



朝6時一斉に投縄開始、千本余りの釣針にエサを掛け、船尾から次々と投縄していく。(仲田吉一 2007)

マグロ延縄 投縄ルール 内地から？

— マグロ延縄のこの操業ルール、実に見事です。これだと縄が絡まることもなく、マグロ船同志のトラブルも少ないですね。この操業ルールは終戦直後からありますか

國吉：終戦直後は船が少ないから、ウチらがこの徳豊丸造った時(1970年)は、こっち那覇地区だってマグロ船は5、6隻しかいなかったですよ。一本釣は15隻以上はいましたけど、

沖縄でもマグロしている船は少ないです。で、儲かったもんだから、皆マグロ船造ったり、一本釣から替えたりして、あるいは若手が独立してきたりして、もう今なら 100 隻余るんじゃないですか、全島合わしたら。徳豊丸造った時は一応はルールーはありました。でも広いもんだから、隻数が少ないから、どこに寄ろうが関係なかったんです。

隻数が多くなってきて、もう釣れたといったら皆集中して来たから、その頃からですよ。して、このルールは内地から流れてきたんじゃないか、こっちがマグロ船少ない当時は本土では盛んにやっていますから。内地のルールは必ず南側から入って並ぶと聞いてます。南から 4 マル空けて順番に並んで投縄する、そしたら縄は流れていくでしょう。

沖縄みたいに元に戻らんわけです。翌日揚げ縄終わった地点が入れ位置、投縄の開始地点になるんです。入れ位置は毎日動いている。北の方は知らないが、九州辺りは大体こうだと思ふ。また投縄スタート時間も決まっている、あそこは早く夜が明けるから沖縄より早いはずですよ。沖縄でもスタート時間を早める場合もある。もう夜も明けているから 5 時から入れようかと、その時は隻数が少ない場合です。1 隻の場合は自分勝手ですから。

台湾船 逆から投縄 交差のトラブル

— 台湾船とのトラブルが起こるのは、この操業ルールを守らないからですね。

國吉：台湾船はどこ行ってもトラブルですよ。南行ってもトラブル、北に行ってもトラブル、こいつらは厄介ですよ。沖縄船と本土漁船は大体縄の入れ方は南から北に入れていくわけです。北よりのコースに、黒潮の流れに沿って、少し北西よりに、流れの丁度十字路にして、一緒に縄はこう流れていくような格好で入れますからねえ、

台湾船は、西から東に入れる船もあるし、東から西に入れる船もあります。こっちとは全く逆のコースです（笑い）。だからもう縄が交差して纏れますから、あれ達はウチらの縄を勝手に切っていくんですよ。もう流されて、この縄探してつなぐのに夜が明ける場合もあります。また、時たま、厄介な同じコースで、北に入れる船もいるんですよ。いるんだけど、位置が分からんでしょう。言葉分からんから、ウチらが入れていったのを後から来て入れていく。で、揚げようとしたら全部引っ付いて、終わりまで。

台湾船が来たらそうしたトラブル起きますから（笑い）。で、ウチらはレーダーで見ながら、投縄していきますよ、したら、アイ、向こうに船がいる、ええ、どこに来るか？ こっち向かってくる。ちょっと待て、ストップ、見たら台湾船でしょう もう入れたら、縄は失くなるから、ストップ、ストップと、半分で、投縄止める時もあります（笑い）。

沖縄船でも、中には横暴な人がいて、漁がない時、真ん中切り通して行く人もいる。あれば野暴なことせんけど、もう漁獲らんとどうにもならんから、すまんけど十字で入れさせてくれ。皆イヤとは言えんですよ、同業者だから。その代わり、縄が掛かったら俺のもの切るなよ、お前の縄切ってフカシテから揚げなさい。

勝手な行動とった場合は、他人の縄切ってはならんわけ。自分の縄切ってフカシテ、外して、繋いで、また揚げていく、これは海人が守るべきルールです。

台湾船はそれが分からないから、もうどんどん切っていくんですよ（笑い）。もし縄切ったら、誰が先であろうが結んでもらわないと、この切られた縄は流れていくと相手に相当迷惑かける。次のラジオブイを探して取るまでがもう大変です。結んでおきさえすれば、縄は順調に揚がるわけだから。

仮眠とって 揚げ縄開始 縄切れて 夜中までも

投縄終わったら、縄の最後尾にもラジオブイを付けて投げるんです。縄は潮にもたれて風向きに向かってどんどん流れていきますよ。そのあと近くで船停めて、皆寝ます。揚げ縄時間まで、4,5時間位仮眠を取ります。そのあと揚げ縄ですねえ。

揚げ縄が始まると、縄がどこに流れているか、ラジオブイを頼りに探します。このブイは投縄開始と合い中、終わりに3つ、最低3つは投げています。これから電波が発信して、今どこに縄が流れているか、位置がわかりますから。

で、方探を見ながら船を走らして行き、最初に投げたラジオブイ、投縄開始した縄の先端部ですねえ。これを見つければ、このブイを回収して、いよいよ揚げ縄作業開始です。作業時間ですか？ 順調に行けば大体4時間から5時間かかります。揚げ縄は早い船は午後2時頃から揚げて、短い船は5時とか、4時から揚げます。縄の長さによって揚げる時間はバラバラ。皆同じ時間で揚げていったら、元の位置に戻ってくるのに時間がズレますから。皆揚げ縄を何時頃までに終わればいと潮の流れとかみて、計算するんです。そうせんと元には戻れんから。



揚げ縄光景、大物掛かってくるか心躍る。(仲田吉一 2007)

順調に揚がれば、潮の流れ方も一緒だから、皆同じ時間、大体夜の速い時間には終わります。けど、途中で縄切らしたり、食い付きが多いと遅れますよ。夜中通しかかる場合もあります。その時は翌日の投縄時間までには、もうギリギリだ、もう全速で走ったり、間に合わんで翌日休む場合もあります。

で、揚げ縄していると、隣の船見えるんです。4マイルしか離れてないから肉眼で見えます。途中で止まるでしょう、あいこれマグロ揚げているなあ、夜でもわかります。操業灯は船いっぱい点けていますから、栈橋の電気より多いです。また止まって遅れると、ああまた魚揚げている。大物のようだ、クロマグロかなあと（笑い）。

で、揚げ縄していると、隣の船見えるんです。4マイルしか離れてないから肉眼で見えます。途中で止まるでしょう、あいこれマグロ揚げているなあ、夜でもわかります。操業灯は船いっぱい点けていますから、栈橋の電気より多いです。また止まって遅れると、ああまた魚揚げている。大物のようだ、クロマグロかなあと（笑い）。

デイゴ花咲いたら クロマグロ最盛期

— 隣の船の様子伺いしながら揚げ縄ですねえ（笑い）。ところで、沖縄ではデイゴ(県花)

の花が真っ赤に咲いたら、あのクロマグロが大漁すると聞きましたが、そうですか？

國吉：デイゴの花が真っ赤に咲いたら大漁する？ それは分かりませんが。だけど、クロマグロの産卵時期とデイゴの開花とは関係ありますよ。クロマグロが回遊して産卵するのは沖縄近海ですから、この辺り、ずーと、だから北より経由のクロマグロと、南経由のクロマグロがあるんです。両方からこういう風に産卵しに来る。で、それを皆狙って皆縄入れて行きますけど、ここが先なったり、また沖縄の東、この与論の東が最初に始まるか、そういう時は北海道からの経由じゃなくして、南からが早くなる場合もあります。

与論辺りから段々段々南に、最後なると八重山の下にいくんです。台湾との合い中に、この辺ですなぁ、ここまで来るのには産卵も終わる頃ですから。

産卵する時期ですか？ 4月、5月ですなぁ、もう6月以降なると産卵が終わったら肉質が黒くなる、痩せてですなぁ。産卵するうちは肥って尻尾まで太いですが、産卵終わるとラッキョウになるんです。ウチらはもうラッキョウが揚がっていると言いますが（笑い）。

沖縄ではデイゴの花、あれが目安です。デイゴの花が咲いたら最盛期です。1番いい時期。ウチらの親なんかも、これが蕾のうち、もう縄を準備し待っていたといいますから、もうそろそろ入ってくるなあと。その時に獲る魚と、最盛期に獲る魚と、もう終わり位に獲る魚と、値段は、全然変わります。私が高く売ったのは1疋辺り1万5千円、東京の築地に送って。これが揚がったのが3月、第一号だったですよ、この時揚がれば、もうすぐ出荷して、190疋だったかなあ、もう1本で250万。この時は沢山量はないです。1本か2本、それでも2本持ってきたら、もう500万。だから漁師も3日したら辞められないですよ（笑い）。



沖縄県花“デイゴ”



八重山沖で揚がったクロマグロ。デイゴの花咲く4,5月がクロマグロの最盛期。(仲田吉一 2007)

クロマグロ終わる キハダ メバチ出てくる

クロマグロが終わる頃には、キハダ、メバチが入ってくるんです。この辺(八重山・尖閣諸島間)もそうですけど、クロマグロが揚がったらキハダ獲りに行くんですよ。またキハダが切れる頃にはまたトンボが出てくるんです。

トンボは9月以降11月から出てくるんです。トンボなんか釣れる場合は1ソクあまり釣れますけどねぇ、1ソクは100本、その時は却って儲けになりません。大漁貧乏といって、

あまりあまり揚がって皆が持ってくるもんだから暴落して二束三文ですよ。全部加工用です。こういう時は船のいっぱい積んできて、5、6ト、7、8ト持って来ても、140、155 円、こんな安い値段して。却って半分位持ってきて、値段が 1000 円位入ったら、水揚げ多いです。だからあんまり量が多すぎてもダメだし、なくてもダメだし(笑い)。これ厄介なもん。相場がいい時には釣れきれんで、相場が悪い時には大漁する。ああ折角の魚勿体ないなあ、そう思う場合もあるんですよ (笑い)。



左：セリに出されたメバチ 右：セリ落とされたキハダ (中2つ) とトンボ (両端)。(仲田吉-2007)

マグロ種類で 時期・深さ違う

— クロマグロ、キハダ トンボの、時期、深さ、大きさを教えて下さい。

國吉：クロマグロは3月から始まって、6月、長くて4ヶ月。クロマグロの深さは150から上の方ですねえ、キハダは200メートルまで充分に食います。あれもちょっと浮いている魚ではあるんだけど、トンボは上の方にいる場合もあるけど、大体250メートル以下です。

大きさは30和、小さくて15和。キハダ類はコシビとか、大きいのは150和とか100和とか、バチなんは。しかし今はクロマグロみたいな大きいキハダはないです。大体が60和でしようねえ。60和、70和まで。もう資源が段々獲り過ぎて、成長しないうちに獲りますからねえ。段々少なくなって小さくなっています。クロマグロは小さくても、私が釣ったので一番小さいのは80和、あとこれ以上の上まで、500和もいる話はしますけど。あんなもの獲ったことはない、大体300和まで揚げましたよ。

クロマグロが1番高いけど、操業期間が少ないでしょう。2月から始まって6月の半ばまでですから、7月入ったらダメになります。キハダはクロマグロと一緒に食う場合もありますが、大体トンボが終わって、キハダが入って来るんです。トンボは水温が下がったら8月頃、今揚がっています。これからずっと来年のもう2、3月まで続くんです。で、正月から2月頃になるとキハダが入って来ますよ。キハダは場所によっては年中食いますけど、まあ、大量に入ってくるのは7月以降が1番いいみたいです。キハダは、温度がちょっと上がってから。

途中で大暴れ 目の前で大物 取り逃がす

— クロマグロは高価な魚！ 釣れたら大暴れして、皆で大慌てしながら、モリで突いで仕留めて？ 甲板にやっところと、引き揚げているのをテレビで観たことあります。

國吉：そうでしたよ。だけど今は魚が食ったら、電気ショックですぐ弱らせるます。

昔はこれがなかったからもう暴れてねえ。ここに揚げて来るに大変でした。もう心臓もドキドキしてねえ。船まで引っ張ってきて、すぐ目の前で逃がす場合もあったですよ（笑い）。その時は大ショック、ああ 200 万失くした。全身から力が抜けて、ナートーリガター（もう卒倒寸前）（笑い）。今は魚が食い付いたら電気ショックとか、吊り機とか、ラインホーラーとかあるから 99%逃がさんですよ。

昔は手で引っ張って揚げていた、交代交代で。今は吊り機が出てきてからは、これに託して、枝縄の切れない圧力で調整して、魚が引っ張ったら、この吊り機は延んでいくし、緩んだら自分で巻いていくんですよ。これに持たしておいて、向こうが弱のを待って獲るんです。枝縄が来たといったら、すぐ電气流して、魚を弱らせるんです。

モリはこっちに来てから、こっちに来るまで吊り機は止めないですよ。魚見えたらすぐモリで突くんです。打ってから機械は止めるんです。これがない時です。モリで突くんだけど、魚が暴れて、失くす場合もありましたよ（笑い）。モリが外れたら、もう目の前から逃がすでしょう。もうイライラですよ。動作が鈍い人がいたら蹴り飛ばして、お前そこ退けと言って（笑い）。皆頑張れ、もう一息だ、逃がすなよ。



これ獲ったら、もう 20 万配当だ（笑い）。そう言うと若い連中なんかは、もう興奮して、一生懸命です（笑い）。

マグロの大物が揚がり、皆で船まで引き寄せる。時には目の前で取り逃がすことも、もう大ショック。（仲田吉一 2007）。

サメにも食われる 一級品のいい肉質ばかり

で、吊り機を延ばしたり、揚げたりしている間に、サメに食われてですよ（笑い）。この辺から失くなって、3分の1は食われて、水中だから分かんないです。すぐ急に緩くなるでしょう、出血したら、トルバル(力抜ける)からよ、こんなに暴れているものが急にダラッとなったら、ああこれはまたやられたなあと揚げてみるでしょう。案の定、もう枝縄 20 メーター 30 メーター下で、食われます。肉質がいいものですか？ これは色合いがよくて、こまみ、味があると、マグロの鑑定はこの 3 つです。仲買が尻尾の所を切って鑑定し、荒身か、こまみ

か、肉を指でもんだら、モチモチして餅みたいか、それとも砂みたいにサラサラするか、味見して値段を決めますよ。めずらしいことに魚を食うサメなんかも、この魚の肉質分かりますねえ。肉質の悪いのは食わんです。産卵して終わったのは勿論食べないです。サメもやっぱり美味しくないとっているんですねえ、食われるものは、ほんと、全部一級品です。クロマグロにせよ、キハダにせよ、メバチにせよ、皆あんなですよ。

これはもう和 4 千円、5 千円入る魚だなあ、尻尾食われてますけど、そこ切ってセリに出してみたら案の定。5,600 円。もう上等ですよ。仲買は傷ものだと叩いてこの値ですから。これが全部あったらもう 7,8 千円なります。サメは味見しますねえ、これは美味しい魚、これは美味しくないと。尻尾の縁に少し傷があるんですよ、サメが味見した歯形が。これ噛んでああこれ美味しい、また次に揚がってくるのは美味しいもの、そしたらもうどんどん食っていきますから。こっちはいい魚釣れたかなと引っ張るでしょう、あっちでは美味しい魚がきたと食うし、もう最悪ですよ（笑い）。

幹繩触って 魚の様子判断 ラインホーラー調整

— 深海一本釣でもベテランになると、船上から繩掴んでいるだけで海中で今何匹食っているのかが分かるそうですが、マグロ延繩でも分かりますか。

國吉：分かりますよ。マグロの場合はサーチライトで夜の海を照らして、ラインホーラーで繩巻き揚げながら揚げ繩するんですよ。この繩を手で押さえていたら、この引っ張る強さで、幹繩の張力で、食った魚がどんなものか、大体分かります。

何も食ってない時は柔らかいです。ベレベレして。また枝(繩)のあと 2 つ位に魚はすでに食っているなあとも分かります。また何かで纏れている場合も繩は重くなりますから、その時はラインホーラーの回転下げます。今まで 1 分間に 100 回転巻いていたのが 50 回転位に落して。生きてる魚も分かりますよ。

生きてるから逃げる時は重くなる、引っ張っていくから、魚はまた方向変えて巻く所に来た時に軽くなります。もう繩切れたのかなあと思う位軽くなる、また急に重くなるし。うん、これは確実魚食っている。生きてるなあ。食ってから掛かってから、揚げ繩まで、何時間も経ってますから、死ぬ魚もいますよ。この死んだ魚は下から抵抗同じですから、ああこれは死んでいるなあ。

で、また、大きい魚が食った場合に、もう重いのにラインホーラーをぐんぐんぐん巻いたら、すぐ切れます。その時は回転を落とします。この繩の強度が 100 和までしかもたんという時にはもう 100 和位来たら、繩切れるから、ラインホーラー止めて、繩外して、今度は手で揚げます。

沈んだら マグロ引き揚げ 大変

— 揚げ繩まで時間が経っているから、繩に掛かったまま死んでしまう魚もいると言ってましたが、マグロは死んだらどうなりますか？

國吉：マグロは生き物だから、疲れて、あとは死ぬんです(笑い)。マチもそうですよ。

死んだら沈むんです、マチは揚げながら浮き袋が胃袋が飛び出たら、ここにエア入っていますから、浮いてきますけど、マグロ系統は、死んだら全部沈むんですよ。生きている間はまだ浮いていますけど、あっちなり、こっちなりして、また回転したりして、もうこれが3つ位食って、1つが死んで沈んだら、生きている2つを引っ張っていきますから。

もう死んだら、力抜けて、もうどんどん沈む。もう海底まで沈んで、縄には泥が付きますよ。クロマグロが死んだら、一本揚げるのに6時間かかる場合もあります。ラインホーラーの回転は、もうゆっくりゆっくり、この位の回転で巻き揚げるんです。

生きている時は魚は浮いているが、これが死んで沈んでいくと、魚の重みで、引っ張られて、あの浮き球までも全部沈みます。底に沈んでいくと、あれまた水圧で、割れるんですねえ。300メートルから500メートル深度の水圧が限度ですから。今は少しプラスチックが分厚くなって800メートル沈んでも割れないようですけど。この浮球は割れたら、もう浮くのはないから、縄はよけい重くなって、もうどんどん沈んでいきますよ。今度はラジオブイまでも引っ張って、一緒に沈んでいきますから、こうなったらもう大ごとです。

死んだ魚を海底から揚げるにはものすごい抵抗かかるんです。ラインホーラーでもゆっくりゆっくり巻き揚げて、揚がらん時ですねえ、もうこれ以上巻ききれんからと、小さなドラム缶を浮き代用に使うとか、別のラジオブイから揚げ縄するとか、いろいろと工夫して、どうしても縄揚げんといかんから。皆で頑張ってやっても、揚げ終わるまでに、24、5時間かかったり、翌日太陽が上がっても終わりきれん場合もありましたよ。

そんな時は今日は休みますねえ、やっと揚げ終わったら、もう皆疲れてヘトヘトです。すぐにバタンキューですねえ(笑い)。

浮き球 マグロ種類で サイズ使い分け

— マグロ船の浮き球見ると紐で網編んで被せていますねえ。また、小さな球、大きな球と色々なサイズがありますが、マグロの種類によって替えたりしているわけですか？

國吉：昔は日本製の漁具は上等だったから、台湾船はうちの道具の電気球も外して盗って、バッテリーも盗ったり、漁具盗るから厄介だったですよ、今はどうか知らんが。

浮き球も、台湾船のものは編み入れん。ここにプラスチックの耳があって、



浮球、大きいのはトンボマグロ用(1尺球)。小さい球はクロマグロ用(7寸球)。パイプ取手は夜間用蛍光塗料を塗布。

これに縄くびって、これで延縄やっているんですよ。だから浮き球見たら、ああ台湾船がこっちに縄入れているとすぐ分かるわけ(笑い)。沖縄船とか内地船は紐で網編んで、網に入れている。浮き球は昔ガラスだったが、今は全部プラスチック。この網入れは危険防止です。ラインホーラーで縄巻揚げますから、浮き球は波しぶきと一緒に飛んで来るんです。裸のプラスチックだけなら、波に乗って、パッと飛んで来るから危険です。だけど網被せていたら抵抗が網にかかってそんなに飛ばんし。またプラスチック球の網の目は大きく、ガラス球のは小さい、球がぶつかっても中に当らんようになっています。

浮き球のサイズは、どのマグロを狙うかによって替えます。球はこれはクロマグロ用、トンボ用、キハダ用と、3つ位に分けてます。

クロマグロになると玉を小さくし、6寸、7寸の小さい球を使います。クロマグロは200キロ、150和、小さくても100和の母体です。力があるもんだから。大きい球かけたら、枝縄が殆んど切れるんですよ。これ一本逃がしたら100万もするから(笑い)。だから切れないようにして、わざと沈んだり、揚げたりできるように、抵抗を少なくするんです。

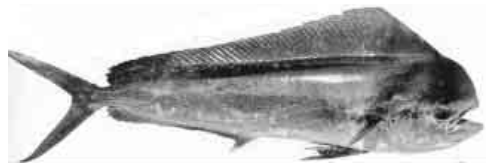
またトンボ時期は大きいので30和位、小さくて15和ですから。球はわざと大きくして9寸から1尺使う。今度はキハダだと9寸球と8寸球に替えるんです。キハダは60和から70和までの大きさですから。

シャチは怖い マンビカーは厄介

— マグロ船が一番怖いのはシャチ、もうマグロやられると言いますか？

國吉：そうです、シャチは怖い魚ですよ。100本でも頭だけしか残らないのに。胴体全部食われて。そういう時はシャチは大群です。大きなマグロ、60和位のマグロ、頭だけしか残らんですよ。胴体は全部なくなって、カラチブル(カスの頭)だけ、アギジャビョー(今畜生め!)、今日やられたなあ、終わり、その時はもう、時間いっぱい逃げて行くんです。

それと、特にマンビカー(シイラ)の時期、台湾船はあれを延縄で獲るんです。あれ達はマグロ船のやり方で、枝縄に針付けて、で、コース決めないで勝手入れますから、東から西に入れたり、また南から北へ入れたり、位置も分かんんですよ(笑い)。マンビカーが食ったら、ウチらの



マグロ延縄の厄介者 マンビカー(シイラ)

の縄と交差して、纏れて大変ですよ。またよく食うんでねえ。20本続けて食いつているのもあるし、あっちこっちにまた食っているのもあるし、だからあれが一番纏れるんです(笑い)。マグロの場合は生息位置は100メートルから150メートルの間ですけど、投縄していく時、もうこのマンビカーは後ろ見ていたら、バンナイ(どンドン)跳んで歩くから。これまた厄介ななあ、案の定、揚げて見たらもう10本位食っている。マンビカーは浮き魚だから縄入れていく時に食ったはずですよ。だから揚げてくる時には、もう殆んどが死んでます。

延縄のマンビーカー サメ、エイ、カジキが食う

今度はマンビーカーをサメが食う、そうなるよとよけい厄介。マンビーカーは死んでもどうということはないですよ。あれは母体が小さい、大きいので1メーター50位だから、浮球は沈まん。だけど、このマンビーカーをサメが食って、このサメが。もうイッチョウなんか、カシーなんか、カシーというのはエイ、あれなんかはもう200和、300和位大きいのもいますから。サメとか、カシーとか食って、また死んだら、これが重さで縄が沈んでいく。浮球も全部沈んでいく。もうこうなったら大ごとです。

たまにはカジキがマンビーカーを食ってよ。これまた暴れて、縄纏れさせて、厄介なものです。

ウチらは食っている魚を食うことをヌーイユと言ってますけど。クレー(これは)マグロヌーイユソーサー(しているなあ)と。

カジキはまた、延縄にかかったマグロを食いますよ。大きいのは食わんけど、大体30和から以下のもの、トンボの10和から15和の大きさだったら一発丸飲みです。カジキは飲んだら、もう暴れきれんわけですよ。で、時間経ったら段々弱ってくるでしょ、死ぬんですよ。カジキは150和から200和位はありますから。

もうこれが死んだら、あっちこっちの浮き球も全部引っ張って、全部沈んでいきます(笑い)。もう縄揚げるのは大ごとですから。



マグロ延縄に食い付いたカジキ。(仲田吉一 2007)

徳豊丸で しこたま儲かった

— マグロ延縄のお話、興味深く、楽しかったです。ところで一本釣辞めて、マグロ船の徳豊丸を新造して、割と早い時期にマグロ漁なさって、どうでしたか。

國吉: 徳豊丸を造ったのは1970年、復帰2年前です。あの当時はマグロ船少ないから結構、遠くに行かなくてもここで釣れたんですよ。許可は100マイル以内、琉球一円です。北緯27度以南、伊平屋沖から、沖縄本島、宮古八重山、与那国、尖閣列島辺りまで。



旧正月のハチウクシー(初仕事)祝い光景。各船大賑わい手前が徳豊丸。右端挨拶しているのは國吉真一船長。(1972)

これで八重山から、尖閣列島近くもずっと行っていました。水揚げは、大体が一航海 300 万位でしたねえ、一孝丸に比べたら 15 トシかない小さい船でしょう、どんなに積んでも 6,7 トシが限度ですから。だけど一本釣りの 3 倍位はありました。あの当時は物価も安い時代ですし、船員も 7,8 名もいても、結構儲けましたです (笑い)。

して、船造る時は 6 千万かかりました、6 千万かかっても、3 年間では元とりましたから。漁の範囲は琉球一円ですが、漁があるといったらどこまでも行くんですよ。燃料と経費を計算しながら。で、台湾からずっと南に下って、フィリピン近くまで行きました。

フィリピンの東まで行って、順調に行っていたんだけど、あつちで船失くしたんですよ (笑い)。あの事故の時、発電機全部やられて大変でした、だけど配線なんかの電気系統は、全部自分がやっていて、それが頭に入っていたから、全員助かりました。事故に遭ったのは 1976 年(昭和 51 年)4 月ですから、6 年位は持っていましたねえ。

暗闇の海 流木にぶつかり、沈没

一 暗闇の海で 流木にぶつかり、徳豊丸は沈没して、失くしたわけですか、しかも、発電機もやられた真っ暗な中を、よくも全員一人の犠牲者も出さずに助かりましたねえ。

國吉：あの時、徳豊丸は失ったけど、全員一人も犠牲者を出さなくてよかったです。

今考えたらようやったと思う。僕もあの時は 40 歳で、サラバンジ(男盛り)で、判断力、決断力がありましたねえ、今ならもうダメですよ。フィリピンの丁度 14 度 20 分の所を夜走っている時に、流木にぶつかった事故だから、もうブリッジに当直おいても何も意味もなかった。突然の事故ですから、強い衝撃と大きな音で、一瞬船が揺れたかと思ったら、船は止まって、電気もパッと全部消えて、もう真っ暗、何が起こったのか分からなかったです。見ると流木がぶつかって、船体をぶち破っているんです。流木でエンジン室もやられ、発電機も壊れている。このままでは船は沈没ですよ。もう SOS 発信して助けを求められない。だけど電気系統は全部やられて、電気も全部消えて、真っ暗です。

船の電気配線は全部自分でやりましたから、それが頭にあったから、とっさの応急処置ができたわけです。無線機はどこから通っているとか、ブリッジからどの線がどこに通っているか分かっていたから、すぐそこで切って、バッテリーは全部底から揚げなさい、機関場から全部持ってきて、上の方に、ブリッジに全部揚げて、線を切って、バッテリーにつないで、すぐ SOS を発信しました。そうしながら、浸水が激しくなって来た。

うん、これはもう持たないと、縄を捨てるんだ。浮き球も捨てるんだ。全部これにくるみなさい、つなぎなさい、山なしなさいと、漁具は全部紐通して、全部浮かして。

で、いざの場合は、保たん場合はこれに乗り移るからと。このままでは、船はどんどん流れされるし、どこ行くか分からん。投縄カゴは 45 持っていたから、最初オモリ付けて、縄と一緒にカゴ全部流して、船の表のビッチにくびりなさいと、これだけの縄がいつてますから、これは数はあるし、また救助する船がきたら位置はちゃんと言いますよ。

して、ランプも全部バッテリー入れて、流しなさいと、くびって全部流せと。ラジオブイも4台持っていますから、これもスイッチ入れて流せと。それも流したら、もう電波は発信しますから。流して、救助しに来る船に、ウチらのラジオブイは周波数は幾らだからと教えて、あつちは方探でとって、ああどの方向にいと分かりますから。

丁度、運よく、熊本保戸島の漁船が近くに2隻いたんですよ。SOS発信したら、すぐ1隻が来てくれて、メイオウ丸だったかなあ。この船に船員全員救助されて、保安庁に連絡して、保安庁の巡視船が来るまで、1日掛かって待って、巡視船に乗り換えて、この船はまた南下して行って、こんなして助かりましたよ。

船霊 持ち帰り お礼言いながら 酒かけて燃やす

徳豊丸を離れる時は、船霊(フナダマ)を持って離れたです。船霊は船長室の神棚の中に祀ってありますから。もうどうせ船沈むからということで、戸を開けて、全部中取って、あと神棚の両脇にお守りがありますから。船霊とお守りを急いで懐に入れて、神棚だけ残して、こっちに持ってきたですよ。

船霊というのは、女の神様だから、子供の髪とか、頬紅、口紅とか、お金かと、1つにまとめて祀ったものです。船の神様だから、船造る時は、こっちから全部持って行って、船造った棟梁が、神棚を造って、この中に納めてお祈りするんです。

沖に出て仕事するんだから、これに航海安全と大漁祈願をするわけ。朝は船霊に向かって手を合わせる。これは船員は全部じゃないが、船長はもう常時です。航海無事でありますようにと、初物は必ず供えるんです。魚もそうですよ。今日から操業するでしょう。その時揚げ縄の最初獲った魚、必ず供えます。で、ご飯は必ず上を取って碗に入れて、供えます。お汁はシケるものだから、こぼれるからいいさあと、代わりに刺身を供えて、お蔭様で、大漁しましたよと、報告して感謝するわけです(笑い)。

船霊は、お別れする時は、自分達が今まで、この船からこれだけ儲からしてもらったというお礼言いながら、お守りと一緒に、これを燃やすんです。もう別れていくから、そのまま捨てたらいかんわけです。お袋が元気だった頃、イッターヤ(あんた達) ヤーカラ(誰のお蔭で) ムノーカラガ(飯食べているか)? ウンジ(ご恩)忘れてはならんよと、よく言ってましたねえ。だから船霊にお別れする時は、全部酒をかけて、これまでのお礼言いながら、ちゃんと燃やすんだと教えてましたよ。



船長室に祀ってある船霊。神棚に鎮座した小さな社、この中に船霊を納めて、航海安全・大漁を祈願する。

船造った時 ウガン ご苦労様と 感謝して下げる

徳豊丸が沈没したあとは、女連中は海関係のウガン(御願ん)で拝所を全部廻りますよ。

こっちの開洋塔とか、住吉神社(垣花部落の海神)、あと首里 12 箇所も全部廻って、ウガン下げるんです。これお袋と家内がやったですよ。

ビンシー(携帯用ウガン道具箱)も、何もかも準備して、供え物も供えて(笑い)。

普通は年に 1 回の旧 9 月 29 日に海ウガンがある。男連中は、普天間宮に全員参拝して、船のお守り、今のお守り返して、新しいお守りもらってくる。これを神棚の両サイドに立てるわけです。女達は年に旧 9 月になったら、いい日選んで、長い間これで飯も食べているからと、感謝の気持ちで、ウガンに行く。また旧 12 月になったら、お蔭様で、この 1 年間皆元気で頑張っています、ありがとうございますと、お礼の下げウガンをするわけ。

新造船造った時には、このウガンとは別に、ビンシー持って、あっちこっち廻るんです。やっぱり普天間神宮から始まって瀬長島もあるし、波の上宮も、三重城とか 12 ヶ所を、ウガンして廻ります。船を造りましたと。要するに報告ですよ。この時は、船主は一緒に行きます。一緒に行って、新造船の航海安全と大漁祈願をお願いするわけです。

願いやってあるもんだから、今度はこれを抹消せんといかん(笑い)。下げ下ろしのウガンをやるわけです。長い間ご苦労さんでしたと報告とお礼をするわけです。あっちこっち廻って、最後はこっちの開洋塔で、船霊とお守りは燃やしましたよ。これまたお袋と家内、女達の仕事ですから(笑い)。

グアム島で一孝丸が台風でやられた時は、もう船使えないから、その時は、神棚も一緒を取って来て、酒 1 本買ってきて、あっちの浜に持って行って、船霊、お守り、神棚も、全部燃やしましたよ。お酒かけて、お礼言いながら、自分で燃やしましたねえ。

マグロ船 2 号 一孝丸新造

一 徳豊丸を失くしたあと、マグロ船 2 号の一孝丸を造ったわけですねえ、

國吉：徳豊が失くなったもんだから、またやってみようかということで一孝丸を新造しました。大きさは 30 ト級ですが登録は 19 トです。この 30 ト級の大型マグロ船は、一孝丸がこっち(那覇地区漁協)では第一号でした。ファイバー船で高知の馬詰造船所で造りました。これは弟と 2 人でやったので、2 人の名前の 1 字を取って、一孝丸にしたわけです。

金は大分掛かりました。全部で 1 億位はかかったんじゃないかなあ、あれは最大で 25 トは積めたから、あれからは冷



一孝丸、30 ト級マグロ船では那覇地区漁協第一号。この船からは赤道越えて操業し、満船大漁してきた。

凍です。今度は氷蔵じゃなく冷凍式に替えて、冷凍機を据えてねえ。この船からもう赤道越えて行きました。オーストラリ近くまで、南緯1度まで下がりました。50ト以上の本土のマグロ船も相当操業しています。オーストラリアの東、シドニーの東行くと、今度はシケが大変ですよ。また大体13度線ですな、パラオの西側か、8度も相当釣れましたねえ、パラオ近海は入漁料払って、ウチらが払ったのは年間に60万だったかなあ。パラオ政府に納めたんだが、それが年間に5、6航海しか入れんから。

もうあっちこっちで相当水揚げしました。25ト積みでも、魚は生簀いっぱいして、もう入らんで、冷凍機も間に合わない、もうデッキ、縄は揚げんといかんですから、あとは掛かるのは全部デッキですよ。で、生きていたのはもう殆んど逃がしましたから。今なら考えられませんが、当時は、こんなに釣れましたから。

1航海の水揚げで、3千万円揚げたのもあります。3千万から2千5百万位ですかねえ、あの頃は、高度成長期の時期で、丁度タイミングよかったですよ。それでウスマサ(大変)モーキタンヨーサイ(儲けましたですよ)。だから、この船造って、1億円の金を、4年位で返しました。もう南に下がれば、漁もいいし、魚もよかったから、僕がマグロ船やって一番儲けたのは、この一孝でやった時です。



①一孝丸のダンプからマグロを取り出している。左黒シャツ姿は國吉真一氏。②吊上げ機でセリ市場に移動。③養生袋を外し、セリに出す準備。④セリ市場に並べられたマグロ。

ベトナム難民15名 救助して 那覇へ移送

あの時丁度ベトナム戦争だったですから、南シナ海で、ベトナム難民に遇って、沖縄に

連れてきたことあります。この第一発見者は漁場一緒だった僚船です。ウチらは先に漁終えて帰る準備していたら、無線電話がきて、あんた達帰るの？ 帰るよ。じゃ難民がいるから、イッター(お前達で)連れて行ってくれ、と頼まれたんです。こっちから船見えなくて、位置聞いて行ったわけですよ。そしたら5、6マイルほど離れた所において、もう腐れかけたボロボロ船に15名位乗っている。年寄はいなくて、大体が若い人達、年配でも4、50位、もう飯も食ってないから、痩せこけていました。

何でこうしているかと聞いたら、もうベトナムで暮らせない、他所の国に行きたい。じゃどこに行きたいか？ アメリカに行きたい。殆どアメリカみたいですねえ。アメリカはどこだと分かるねえ、ここからお前達のこの船で、この燃料で、行ける所じゃないんだよ。行ける所は、中国か、台湾か、フィリッピンか、日本位なら行けるけど。そしたら日本に行きたい。ぜひ助けてほしいと言うから、それで連れてきたんです。

また、一度は、こんなこともありました。投縄終わって寝ていたんです、ゴロゴロゴロして、人が甲板を歩く音がするもんだから、何かなあと目覚めたら、ベトナムの船が、ウチらの船に着けて上がって、燃料を頂戴と言うんですよ。言葉は通じないが、テーヨーヒサヨー(身振り手振り)して、モーター指して、これが食べてしまってもう失くなっていると(笑い)。ああ石油のこと言っていると分りますから、ああいいよと、燃料タンクのいっぱい詰めて、渡して、フィリッピンに行きたいと言っていた。フィリッピンはあの方向だからと指して行きなさいと行かしたけど、あの時は3、4名乗っていましたねえ。

今度は、ハッサビヨー！(感嘆詞)、15名、それに男女もでしょう、その時船は洋式トイレけど、海の男達だけだから、囲いはないわけですよ。女はそれではできないからと、またカバーでちゃんと囲って(笑い)。あんなして、沖縄に連れて来たら、ハッサビヨー！保安庁に怒られましたよ。保安庁は取り締まりしているから仕方ないけど、係りの方に、こっぴどく言われたから頭にきてねえ、あんた方、これ見て見ない振りもできるねえ、できんでしょ。人の命に関わることだからと(笑い)。まあ、それで向こうに引き取ってもらい、あの当時の長崎かなあ、難民収容所に無事送られて、安心したわけですが、一孝丸ではこういうこともありましたよ(笑い)。

台風で廃船 仕事転々 やっぱりマグロ船に

一 ベトナム難民救助の話、初めて聞きました。いいことしましたですねえ。

この一孝丸も、最後は、徳豊丸と同じように台風に遭って失くしたと聞きました。

國吉：そうなんです(笑い)。南に下がってやって儲けたもんだから、今度はグアム島を基地にして、もっと儲かろうということで(笑い)、向こうに持っていったんですよ。

そしたら、あっちで1号台風引掛かって、船失くして、却って、損しました(笑い)。

結局、台風が来たので、港に避難して係留していたロープが切れて、船体が岸壁に叩かれて、船が使用不能になったもんだから、廃船にしたわけです。それでも、一孝丸は、足掛け15年位は使ってましたかねえ。

そのあと、私はもう海辞めようか思って、姉が公設市場の中で刺身屋していたんです。あっちの手伝いを1年位してました。だけど、やっぱり陸(おか)の仕事は性に合わなかった。で、あっちを辞めて、今度は、友人の船から一本釣を2,3航海行ったんです。行ったら、一本釣じゃとても飯食えない、儲からない(笑い)。やっぱりやるんだったらマグロ船だと思いましたよ。だけど、年齢的に50代後半でしょう。家内も一孝みたいに、遠洋マグロ船だと、南方に行くと1月も40日も帰らん。もう大変だからと反対したんです。

小さい船ならば、沖縄近くでやるならば、いいと言うもんだから、弟に、もう別々にやろうと言って、それで私一人で越成丸造ったんです、弟は典美丸を。

越成丸 沖縄周辺で操業

この越成丸は最高のエンジンだった。エンジン1つで千万掛かってますよ。燃料食わんし、また燃料も馬力が大きいから普通のタンクより大きく造って、空いている所は全部石油タンクにしてくれ、この船のダイバリがありますねえ、ここも全部燃料タンク、周囲全部燃料タンク、遠出する時は全部詰めて行って、沖で燃料貸して下さいといたら大変なことですからねえ、この船でも、漁がない時16度14度まで下がって行けるように準備してねえ。ト数ですか? 一応登録は11トですが、積みに最大で19トは積めました。

操業海域は、徳豊と同じ琉球一円、沖縄周辺で操業しましたよ。主に久米島沖から、宮古・八重山辺りでやりました。これ造ったのが58歳(1994年)位ですから、もうこの頃にはマグロ船も相当増えて、沖縄でも100隻余りはいたんじゃないかねえ。漁も厳しくなっていました。だけど、ウチはこの越成丸でも、また当たって、儲かりましたよ。

1航海で常時3百万位ありましたねえ。クロマグロ時期になると3航海、普通のトンボ時期になると2航海です。2ヶ月で1千万位は水揚げしました。で、この船造るのに5千万余りかかりました。建造資金は1年据え置きして、1年は利息だけ払って、10年計画での支払い予定でしたが、運営は順調だったもんだから、返済を早めにして、4,5年で全部返しました。



越成丸(11ト)では沖縄周辺海域で12年間操業した。

船員揃わず 2人で操業 身体酷使する

一 越成丸の建造資金の借入れは、支払い予定の半分で、5年で返したわけですね。借金もなくなって、あとは順風満帆ですねえ。

國吉：ほんとなら、借金はないから、もう順調にいくはずでしたけど、今度は船員がい

ないわけです。船員は徳豊丸だと 7, 8 名、一孝丸は大きいから 8,9 名、越成丸の頃には、船も自動操舵になって、投縄・揚縄も機械化されていますので、船員は少なくてよいが、4 名は必要でした。だけど船員になる人がいなくて、それに雇っている船員にも悩まされましたよ。こいつら怠けて、パチンコ屋に行ったり、飲み屋行ったり、また夜これを探しに歩いて、明日出港するのに来ないわけですよ（笑い）。

翌日また探しに行って、あんなして、長いのが 1 週間待たされたこともあります。何で探さねばならんかという、百万あまり前借りさせてあるから、このまま捨てて行ったら、このまま逃げたら、これは全部ペアでしょう。これ達を掴まえて、首に縄巻いてでも連れて行くという、あんなしてよ（笑い）。

もう揃わないから 2 人で行きよったです。夜も昼も、ずっと 2 人で操業やるわけ、投縄、揚げ縄も最初から終わるまで、もうずっと立ちっ放しでしょう。神経も疲れるし、身体はクタクタ、それに体力も段々落ちてくる。もう 67,8 過ぎると、足も悪くなり、体力が衰えてきたせいか、仕事は相当きつくなってきましたねえ。延縄はカゴに入れてあるから、これ持って運ぶわけだが、シケの中、15 メートル位の風が吹けば、もうアマンカイ、クマンカイ（あっちにも、こっちにも）、トーリ（よろめいて）ですよ。もう体はガタガタになっているわけ（笑い）。それでも仕事は止めるわけにいかんでしょ。もう我慢しながら、どうにか、どうにか、頑張っていましたけどねえ。

あやわ衝突も 70 歳 やむなく辞める

そうしていたら、1 回大変な命拾いしました。いつものように投縄したあと、潮上りするためもう GPS に打ち込んで、寝てましたら、後ろから汽笛が鳴っているです。大型船が危ないから、どきなさい、どきなさい！！と合図しているわけ。レーダーも回って、警報もなっているけど、疲れて寝ているから分からんさあ。

段々近づいて来て、大きな音、汽笛に起こされて、ハッと飛び起きたら、目の前は大きな山、真っ黒な船体がこっちに向かっている。もう大慌てて、急いで舵切ったら、横スレスレに船は走って行ったですよ。ああ助かった、危機一髪



マグロ釣り上げたら、釣でこう引き寄せて引き揚げると、お手本を見せる國吉さん。まだまだ若者並にお元気。（2015 年 6 月）

でしたねえ。あと少しでも起きるが遅ければ、一卷の終わりでした。あんな大きな船と衝

突していたら、もうひとたまりもないです。今思い出しても、キーブルダチャー(総毛立つ)しますよ。それでこの仕事辞める決心したわけです。

これ以上無理して、このまま仕事を続けていたら、何が起きるか分かん。それに足も相当悪くなってましたから。70歳でこの仕事を辞めました。その時に越成丸もこっちで売りに出して、売ったわけです。あの船はかれこれ12年位は乗っていたなあ。

そしたら、ウチが船を放した翌年から船員がこんなになっているんですよ(笑い)。インドネシアの青年達が来るようになって。ウチが辞めて1年過ぎたら、今度はインドネシアの青年達がこんなしてマグロ船員に來たわけです。彼らは真面目で、仕事熱心ですよ。

私もあと1年待っておけば、彼らを使って、仕事を続けることができたのに(笑い)。

時々はそう考えましたよ。まあ、しかし辞めてよかったです。

今ですか? 今は膝の痛みを除けば、健康です、それに毎日忙しく、卓球、カラオケ、グランドゴルフとかを、皆と楽しくやっています。

— お話は面白く、興味深くもあり、とても勉強になりました。

大変ありがとうございました。

(了)



那覇地区漁協のマグロ延縄船。台風が接近したため船が動かぬようロープで係留固定している。(2015.07.25)

儀間 真松 ぎま しんしょう (陸漁船主組合)

1934年(昭和9年) 那覇市垣花に生まれる。82歳(2015年時)。

叔父が南開丸を所有、尖閣諸島へ一本釣りに行ったという。戦後南開丸1号、3号、5号、8号、18号を新造。深海一本釣りでは尖閣諸島、マグロ延縄では先島・尖閣間海域でも操業。のちフィリッピンから南シナ海、パラオ方面に南下、50代半ばで引退するまで沿岸・沖合いから遠洋のマグロ延縄に30年間専念する。今回氏にこれまでの体験を語ってもらった。南方でのマグロ船の体験も貴重なものである。



10・10空襲前 ヤンバルに避難

昭和9年垣花住吉町1丁目107で生まれた。10・10空襲(那覇の大空襲1944年10月10日)の時は9歳だった。その前に、読谷辺りに大きい爆弾落として煙が上がるのを見たんですよ。読谷飛行場への爆撃かなあ？ その時は朝早く、アンブシ(建干網)といって、網で浅瀬に網張って、潮が引いたらこれに魚が掛かるから、よくこれを盗りに行きよった。ウチらは入れん。まだ子供だから、他所が入れた網から魚を盗るわけよ(笑い)。垣花のクリ舟揚げる所にも、こういう浅瀬に入れてあったから、ここによく行っていた。丁度その時に、こんなして大きく煙が上がっているのを見た。それから那覇も、こっちも危ないからと、すぐヤンバルに避難して行った。皆で荷物担いで、全部歩いてねえ、最初は北谷に行って、あっちにどの位いたかなあ、読谷辺りで、10・10空襲で那覇が燃えているのを見た。

ウチの親父は長男で、その弟の三男マチュー叔父さん、名前はウチと同じ儀間真松だが、南開丸という船を戦前持っていた。12,3ト位の船で、それで尖閣に一本釣りに行きよった。戦前12,3トの船は、殆ど尖閣に行っていたというから。あの時は、ミーグスク(三重城)の向かいが船着場だった。今軍港で入れないさあ、ヤラザー(屋良城)といってグスク(城)があるが、あっちの傍の海を利用していた。

10・10空襲で、垣花の船は、殆どやられたというが、南開丸もやられたかどうかは知らん。戦後までは残ってないから、今度の戦争で失くなった。

ウチらは、そのあと読谷から、ヤンバルの羽地仲尾次に行ってから、最後は久志村(現名護市)の辺野古、あっちで終戦迎えた。そして、1カ年位で解放なって、それから那覇の壺屋にきて、そしたら垣花の元の家屋敷にはもう戻れんですよ。それから若狭の重民町にいて、あそこで結婚してから、今のこっちに、安謝に家造ったわけ。



10.10空襲で炎上する垣花、漁船の大半は焼失・沈没した。
(那覇市歴史博物館提供)

戦後 南開丸 3号、5号、8号、18号造る

避難先の辺野古でもクリ舟で魚獲っていた。もうこっちに、若狭に、安謝に来て、最初はクリ船からイシマチャー(石巻落し漁)なんかしたねえ。イシマチャーは石にエサと釣針巻いて、縄入れる、底に着いたら、こう引っ張ると、石が落ちて、代わりに魚を釣るわけ(笑い)。これは一時だけやったかねえ。これする時は石をいっぱい積んでいったから(笑い)。

終戦からしばらくしたら、1949年頃かなあ、軍政府が漁船造らすことになったさあ。ガリオア船という船を。この時、ウチらは、戦前の南開丸の名前とって、南開丸1号と3号の2隻造った。南開丸1号はウチの次男叔父さん、サンルーヤッチーの船。だから1号はウチとはあまり関係ない。ウチの兄貴(儀間真栄)と三男のマチュー叔父さんの2人で造ったのが南開丸3号。この2隻とも米松(米国産松)で造ったガリオア船で12,3ト位あったと思う。これはマグロ船。そのあと、兄貴達は南開丸5号を造った。この5号は14,5トの一本釣り船で、これは糸満で造った。あとからはマグロ船に替わって、ずっとマグロ船だった。ウチは若かったから、この5号と3号造った時は、この船に乗っただけ。

そのあと、8号と18号を兄貴と一緒に造ったわけ。8号は14,5トもあって、あれは宮崎で造った。18号はフィバー船で20ト以上もある、これは高知で造った。2つともマグロ専用船。この18号は、今はウチの次男(儀間聡)が持っている。もうあれは造って30年以上になるが、今も現役で頑張っている。

飯炊きの時 あわや遭難 先輩達 死覚悟で晴着

18,9歳(1952,3年)の時、南開丸3号で、これで一本釣りしていた。その時は、ウチは飯炊きで乗っていた。宮古の伊良部沖で操業していた時に、台風(註:1953.8 ニーナ台風? 最大瞬間風速42メーター)に遭った。で、海はもうこう大シケ、波は普通はこれ位に見えるが、こう上から来るからねえ、船に被さるさあねえ、上から下に、右から左に大揺れさあ、その時に上から来る波で引っ繰り返ったり、割られたり、そういうのがあから。そうしていたら、船のアンカーロープを、これを前の方に置いていたら、これが落っちて、ペラに絡まって巻いて、してエンジンが止まったわけ。

もう絶対絶命さあ、もう遭難すると思った、そしたら先輩達にびっくりしたよ。皆出港する時は、外出用の洋服を着けて船に来て、これを包んで、入れ物に入れてから、作業着に替えて寝るんだが、その外出着を取り出して、皆これに着替えたわけよ。

いわば晴れ着さあ。今日もう逝く時だから、もう皆助からんと思ってたから。どうせ死ぬんだったらいい洋服を着けて死ぬという考えだったんでしょねえ。とてもびっくりした。そして、しばらくしたら風が弱めになって、あの時から波も段々静かになって、助かった。もう先輩達は死を覚悟して、あれでもう終わりと思って晴れ着に着替えていたわけよ、あの時にホウトク丸だったかねえ、なくなった船もあった。ウチらは幸い生き延びただけ。

南開丸 5 号 尖閣へ 一本釣り 台湾船いた

そのあとは、一時は失業して、那覇公設市場で魚売りをしていた。

24,5 歳(1958,9 年)の頃かなあ、南開丸 5 号に乗って一本釣りした。その時に尖閣に行きました。最初は一本釣りはヤマギタでやった。あれを 10 位付けてやったんじゃないかねえ、すぐ三叉サルカンとか、ナイロン糸とかが出て、今の一本釣りのやり方になった。

尖閣行ったら相当マチは獲れた。チョウチンマチ(ハチビキ)から、クルキンマチ(ヒメダイ)から、アカマチ(ハマダイ)から、シチューマチ(アオダイ)からから、よく獲れましたよ、ビタロウ(フェダイ類)も。

南開丸 5 号で、5 名位乗っていたかなあ。ウチは三男で、長男の真栄、次男真厚兄貴も一緒だった。長男兄貴は 6 つ上で、ウチと一本釣りも、マグロ船も、ずっと一緒にやっていたが、病気してから陸(オカ)に上がって、儀間石油という石油業をやったわけ。もう亡くなったが、生きていたら 86 歳です。



北小島の沖合いで違法操業する台湾漁船。(高良鉄夫 1968)

最初行った頃は、内地船はあんまり見えなかったが、台湾船はいたよ。結構台湾船もよく見よった。時たま、あれ達の縄が、アンカーロープに引っ掛ったりして大変だった。潮が速いから、

縄で、ウチらのアンカーロープに当たって、擦って切れるさあ。あの当時は台湾船は、延縄みたいなものしていた。マグロ延縄じゃない。何獲っていたのか、見てないから分からん。マンビカーとか、マチ類とかも、いろんなものを獲っていたんじゃないか。

(尖閣諸島の写真を見て) こっちがクバシマ(魚釣島)、こっちがトイシマ(南北小島)ねえ。この近くはよく操業した。シケたら、クバシマの近くに船持って行って、北風だと南に、南風だと北に、反対側はカタカ(島陰)なるさあ、アンカー入れて避難しよった。島に上がった人いない、用事もないし、ウチらは魚獲らんといかんわけだから(笑い)

このトイシマは尖って、険しいから、あれは人が登れる所はない、近く行ったら鳥がいっぱいいるねえ、もう近い所は大変よ、上に巣造っているのかどうか知らんが。

こっちのユクン(久場島)にも行った。そんなに島にくっ付けたことはなかった。島が見える位で、操業やって、別に、仕事をしにだから、島の近くまでしか行かない。

アカオ シケだと 島にくっ付けて 避難

アカオ(大正島)も、波も荒いし、潮の流れが速い。(大正島の岩山の写真を指して) これはあれよ、大シケの場合、こっちから風吹いたら、この後ろの方にねえ、船を引っ付けるだけ、引っ付けて、もう島に渡れる位着けて、アンカーを下ろして、避難しよった。アン

カーは浅瀬だから掛かる、深くはないから。それに潮の流れも、うんと島にくっ付けると、これに引っ掛けて潮は止まるからねえ、外側はシケても、島の近くは何でもない、静かだよ。アカオでは、アカマチ、シチューマチ、何でも獲れた。こっちは漁はよく獲れるが潮が速いから、沖縄の船はアンカー入れてするが、あんまり操業できなかった。内地船はずっと帆を揚げて、流し釣りやっていたねえ。あの当時は、トイシマと同じで、この辺は全部、海鳥はいっぱいいた。すごい鳥ですよ。あれは海に下りてきて、魚採っては、またあそこに休みに、そういう風に。危険なこと？ そうねえ、尖閣には何回か行ったが、別に危険な目には遭わなかった。

1 航海 2 ト水揚げ 潮が速いと 宝山・大九へ

して、あの時、尖閣行ったら、1航海で大体2千疋、2ト位は獲れた。あっちは、魚はこんなにいますからねえ。だけど尖閣は潮が速いですよ。潮が速いと、魚は食うのは食うんだけど、潮の流れが速くて、縄入れたらこんなになるからよう。あんまり速いと、アンカー入れては操業できなかった。20マイルから30マイル東の方に流れていくから、潮は流れが速くて、アンカー入れて、縄入れようとしたら、縄は落ちていったら、こんなに、直線状になってねえ、潮にもたれて、もうアンカー釣りではできないから、そのまま流してだが、もう長くは操業できなかったねえ。内地船は、帆を上げて、帆で流し釣りしていた。

ウチらは、尖閣行ったら、あんまり潮が速いと、別の所に行きよった。殆どは宮古の宝山、宮古の南側。大九とか、また与那国の近くねえ。ああいう所やりました。宝山とか、大九とかは、少々シケでもアンカー入れたら、大丈夫。台風以外では、大丈夫でしたよ。

那覇地区の船 尖閣行かない 行くのは県外船

あの当時はもう一本釣りが盛んでしょう。那覇地区だけで一本釣り船は30隻以上はいたんじゃないか。尖閣には殆ど行ってましたよ。あっちはいい漁場だから、行ったら、あの当時は斤だったから、3千斤位(1800疋)位は揚げていたんじゃないか。

だけど、皆が獲ったら、魚はやっぱ少なくなる。次第次第に漁が減ってきましたよ。だから大きい船は辞めている、マグロ船に替えたりして、また年齢的に引退して少なくなっている。今はもう読める位、何隻かしか残っていない。それもミニ船、1人か2人乗りの小さい船になって。

今は、宝山、大九なんかに行って、水揚げは500疋位というから、前の3分の1も獲りきれない。



尖閣諸島は潮が速い、県外船は艦に帆を揚げて流し釣り魚釣島周辺で操業している鹿児島漁船。(宮崎卓己 2014)

それと、沖縄が日本復帰(1972年)したあと、内地船が来ている。前は外国だったら、簡単には来れんさあ、国内になったから、いっぱい来た。熊本、鹿児島辺りの船ですよ。今沖縄に基地して、尖閣に行っている。あつちは潮が速いからねえ、内地船は帆を揚げて、帆にもたして、流し釣りやっている。

尖閣 中国公船 来る 中国サンゴ船 宝山に 集まる

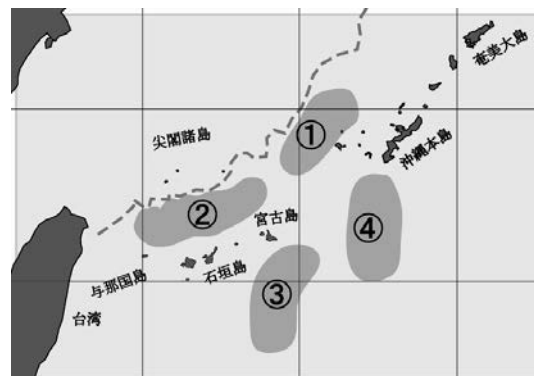
今話聞いたら、もう尖閣は中国(公)船が入って怖いんじゃない。あの当時は何ともなかったけど。中国船、昔は来ないですよ。ウチらが行った時分はいなかった。来たのは最近から。それに今、宝山、大九とかも、中国のサンゴ船で大変だそうですよ。何か警備艇が来ても逃げもしないというから。もう一本釣船は、あそこにもう怖くて行けないと言っていました(笑い)。反対に、日本船が中国領でやったら、ぶっ捕まえて、船も没収して、そのまま中国に連れていきますよ。中国船があんなして日本領でやっているのは、捕まえても、どうせ返すはずだからと、日本を軽く見ている。日本政府も日本領ではやるなという指示を出せばいいのに、ああいうのは中国にしないさあねえ。それに中国は尖閣は自分のものと言って、盗りに来るはず。だから日本政府はこのためにアメリカと手を組んでおかないと、基地があるというだけで、簡単にはできんさあねえ。だけど、ダー基地に反対する人もいるさあねえ。こんな人は、尖閣はどう考えているか分からんさあ(笑い)。

一本釣から 儲けいいからと マグロに転換

そのあと 27,8歳位(1961,2年)かなあ、南開丸5号も一本釣りからマグロ船に替わった。マグロ船に替えたのは儲けがいいから、一本釣りは大体水揚げも知れてる。あんまり大きい金額揚げきれんさあ。マグロ船は揚げる時が大きいからねえ。

それで、南開丸は3号、5号、8号、18号、4隻とも皆マグロ船やった。

(沖縄周辺漁場図を指して)、マグロの漁場は、久米島がこうあると、こっち①久米島西漁場と、喜屋武岬から下側、こっちの方④沖縄本島南漁場でよくやった。それと南に下がると、この宮古・八重山の下側、こっち③宮古・八重山南漁場です。こっちもバチとか、キハダ、ウシシビ(クロマグロ)が獲れる。



主なマグロ漁場図 ①：久米島西漁場、②：先島北西漁場、③：宮古・八重山南漁場、④：沖縄本島南漁場

あとはこの上側、宮古・八重山と尖閣との間、こっち②先島北西漁場がある。尖閣は浅いから縄入れることできん、中国から大陸棚がずっと続いて浅瀬だから。海図に深さが書いてあるから、これ見たらすぐ分かる。

尖閣を越えたら大陸棚から落ちるから深くなる。だから縄入れるのは、このフチミグワー(大陸棚縁・百尋線)の外側になるわけ。して、アカオ辺りも浅瀬になるから、あんまり島に近づけない。投縄はもう島の手前がギリギリですよ。だけど、アカオ辺りで入れたら、やっぱりこの辺は潮の流れが速くて、縄がよく切れたから、あっという間に縄流される。アカオから久米島辺りまで流される(笑い)。その位あっちの潮は速い。だから揚げ終わったら、あの辺まで探しに行きよった。

また、これ探すのが大変だった。あの当時はラジオブイも方探もないさあ。大体、潮の流れ見て、見当つけて、探しに行くわけ。昼だと浮きに立てた竿旗を探す、夜だと電灯点けて、サーチライトで照らさんと分からん(笑い)。縄切れると何10マイルと流されるから、ダルマ灯点いていても見えない、近くなったら見えるけど。だから縄切れると道具を失くすことがよくあった。

船員5~8名 延縄長さ 約20マイル 釣針1000本

南開丸に乗っていた船員ねえ、船の大きさでも違うが、大体5、6名から7、8名位は乗っていた。して、今は投縄は一斉に6時からやる、船が多いと一斉にやらんと、縄が流れてもつれるから。その当時は隻数が少ないから、いつやっても、どこで入れても大丈夫だった。だから、船員は早番と遅番に分けて、投縄、揚げ縄やった。

投縄する時は半分ずつ寝かして、24時間夜明けまでする場合もあるから、投縄は朝6時からスタートすれば、終わるのが大体12時ごろ、4、5時間位だから、午前中で終わるけど、揚げ縄が時間掛かる。

揚げ縄は午後2、3時からやっても、最低9時間位は見ておかんといかん。揚げ終わるのは夜の9時、10時には終わりよったが、魚の食付きがよかったら、時間掛かるし、

また縄切れしたり、何かしたら、もう夜明け、朝の8時、10時までかかる場合もある。だから早番と遅番に分けてやりよった。

延縄の長さは大体25マイル(約45キ)、あの時は、この縄にラジオブイないから、両端の浮球に旗竿立てて、大きな旗上げたよ。この旗を目印に縄



1960年代の投縄光景。船をゆっくり航行しながら船尾から投縄する。今は投縄機があって、殆ど機械化されている。
(「かつお・まぐろ総覧」より)

が探せるようにと、して、釣針はそんなに入れなかった。ひと鉢が225メートルで、これに枝5本、釣針5本付けて、200鉢位入れたから、やっぱり全体で1000本近くは付けた。今は大体1700本位かなあ、多い船が2200から2300本位は付けている。

延縄 マグロの外 カジキ・サメも

マグロ延縄といっても、マグロの他に、サメから、カジキから、色んなのが食うからねえ。カジキは売れましたよ。だけど、サメは厄介さあ、縄揚げる時、サメに食われて、魚の頭だけ残る。だから被害も大きい。それによく釣り針に引っ掛かってくる場合があった。大体がウフバニー(ヨゴレザメ)とか、イッチョー(ホホジロサメ)、ナカグワー(ヒラガシラ)、ナンジャー(ヨシキリザメ)といって幾つ種類もあるさあ、ナンジャーといった青いのが、ちょっと細長いのが、あんなのもよく掛かるねえ、あの時分はヒレも、肉も売れよったから、船に揚げたよ。

サメは暴れるさあ、だから、釣り針に掛かって来た時、そのまま揚げきれんから、やっぱし鉤で掛けて揚げる。暴れるよ、だから舷門といって船の端っこまで持ってきてから、鉤でこう引っ掛けて揚げて、こっち(頭部)を、包丁でやるわけ。そしたら暴れなくなる。

これは危険を伴うのでやっぱし注意せんとねえ。1回は、船員が普通だったら、怖がるが、一度は、チューバー(豪胆な)船員がいたさあ、此奴がこういう風に、サメを素手で掴まえたよ、そしたらガブッと手を咬まれて(笑い)。もう血がゾロゾロ噴き出した。皆大騒ぎしたけど、幸い大きな怪我ではなかった。傷口見たら歯型が大きく残っていた(笑い)。



マグロ延縄に掛かったサメ、暴れるから鉤で引っ掛け脳天を一撃して船に引き揚げる。(仲田吉一 2007)

あの当時はカマボコ原料で、サメの肉は売れたよ。今は沖縄では売れない。持

ってきても買わん。だから、掛かったら釣り糸切って海に捨てているはず。だけど内地は今でもサメ持ってきて、四国の高知とか、千葉の勝浦なんかでは、水揚げして、セリに出しているというから珍しい。食べているのか、何にかに使っているのかねえ。

南方のパラオ近く行ったら、サメ捕ったら捕まえられるよ、警備艇に。たまに臨検うける場合に、だからサメ捕らん。サメは捕っていかんということで、だから、ヘリでも切つて、残りは売れないから捨てて、これ魚槽に入れておくさあ、調べて、これで捕まえられた人もおる(笑い)。

マグロ船 一番シャチが怖い

マグロ船が一番怖いのはシャチよ、もうあれが来たら全滅の時もある。200本食ったら200本釣り針の口ばしだけ揚がってくる。あのシャチは賢いもんでねえ、クッター(此奴ら)が食べているわけさあ、口ばしだけ残る。頭だけ。たまにはシャチが釣り針に引っ掛かってくるのもあるんだが、これ捕つてもしょうがないから、切つて捨てる。

もう一番あれに、タイミングが悪く当たったら、漁持って来ない、今でもそんな。これ

はどこでも。シャチは喜屋武岬（沖縄本島最南端）から1,2時間走って、ここで縄入れても、こっちでもあるさあ。先島と尖閣列島の間でもある。どことってない。

だけど、漁がある所にはもう確実、シャチがいる。これはシャチマーシ(追い回す)といって、シャチに追われて、魚が一箇所に塊って、群れるから、漁が揚がるわけですよ。

シャチに追われて、魚は集まって塊って獲れる。これはシャチがマーシマーシ(追い回し回し)しているわけさあ。シャチは一匹じゃないよ。大群で来てそれに賢いから、魚を囲んで、真ん中に魚は塊まるから、尻尾を引っ張ったりして食っていくという話だけど(笑い)。

シャチマーシで大漁しても、獲ったといったらもう2日は待たん、もう翌日からはもう頭だけ(笑い)。だからねえ、シャチマーシ当たったなあと言って、あんなに漁があるのは、シャチが近くにいるわけさあ、あれはもう大群で、4,5匹位見えたら、もう下にはいっぱいいると言うから。だから、マグロ船はシャチ見たら、その時は縄を入れないで、漁場を移動するか、時間いっぱい走ってから入れるかだ(笑い)。ハッサビ



シャチが4,5匹見えたら下は大群（「ウェブサイト」から）
 ヨー(感嘆詞：もう大変!) これでやられて、4,5日も、もう空っぽの船もいるよ。シャチにチャアタイ(ずっと遭遇)して、何も獲れないで帰ってきた船もいる(笑い)。

マグロ追って 次第に 南に下る

大東島回りも上等です。今はあの辺はミニ船といって、小さい5ト未満だが、あれでようやっている。結局ミニ船だと、そんなに遠くまでは行かないから、沖縄近海ですよ。

ウチらの船は12,3トだから、ここから段々、南へ下がって行きました。北緯20度位に行きましたよ。このフィリピン近くになるから、あっちもいい現場です。20度といったら、沖縄は26度だから、1日3度位進むとしても、2日走れば行けるから。また、そこから20度線越えて、南シナ海の新南群島辺りまで、10度線近く、パラオ近くまで行きました。

さっき尖閣は潮が速いと話したが、潮流れが速いのはこっちだけじゃない。南下して漁場に行く場合、フィリピンの西の方、バシー越えていくわけ。あっちはずっと波が高い、台風みたいに波が大きいからねえ。帰る時も怖くて大変だった。波はこうして上から来るから、悪い時は一波で、船を叩き割られたりしたのが何隻もあるよ。バシー越えて。あっち入ってから、帰る時は北に向かって、東にバシー海峡を抜けて、台湾との間を曲がって行くから。一度は帰る時、台風発生しているから、台湾の高雄に緊急入港したこともある。3日位いてから出港した。また、インドネシア近くなるが、3度線位だが、もうこっち(海図の⑤海域)は潮の流れが東向けに、相当流れてくる所がある。あそこで操業したが、波の高さも、こんなに高くて、もう大変でしたよ(笑い)。

南シナ海 フィリッピン パラオ 0度線近くまで

(海図を指しながら) これフィリッピンさあ、これはパラオか、パラオの近くはよくやったがねえ、島から10マイル位離して、南の方、こっち(③)で。

して、これフィリッピンとインドネシアになるが、この辺(④)はよくやりよったねえ。

2度3度位、して、潮流れ速いからねえ、南シナ海はあっちこっちに島があるからねえ、こっち近く(②)、この辺の島近くでやって、警備隊に捕えられた船もいる。

南シナ海の西下側、ボルネオ海の上の方になるか、こっち(②)の下側に来るとあんまり深くはない。浅瀬になるからこっちではやらなかった。

で、パラオの東上にグアムがある。ウチはグアムには行ったことなかった。あちは許可取らんと行けない、別の船はよく行っている。こっちに伊良部マグロ漁船主組合があるさあ、あの人達もあっちを基地にして、今もやっていんじゃないか。パラオはよく着けよったが、あちは水でも、何でも高くて、経費掛かって大変だった。して、パラオからずっと下に下がれば、これ0度線。

あんまり下がったら、インドネシアだから、あちの警備艇が危ない。も

うギリギリこの辺(⑤)まで、こっち付近でやった。して、潮の流れは速いから、この位まで行きよったが、あちは何でもない所だが、島にあんまり引っ付いたら危ない、許可持っていたら話は別だが。あとは、この10度線近く、パラオの上の方、こっち(④)はよくやりよった。だけど、この7,8度辺りから台風がよく発生する。次第次第に発達しながら、上に、北に上がって来るから、その時は南に逃げんと行かん。



南下して、フィリッピン、インドネシア、パラオ、0度、赤道近くまで行った。南方行く度に満船大漁

南開丸8号、僚船と 7,8度線で 台風に遭う

この辺には台風が発生して、このグアムは台風の発生して通る道よ、これから北に上がる。台風は下にはなかなか行かん。下に行けば安心だ。だから普通は、フィリッピン、沖縄の南、こっちは半分15度線だが、今この辺やるんだが、台風時期にこっちでやったら危ないわけ。時期的に。だから南下中でも台風発生したら、今はもう何日にどの位まで来ると、予想は4,5日前から分かるわけ。前はそうじゃなかった。

だからウチが3号休んだ時に、機関長が南開丸を持って行ってねえ、で、真功丸という船と2隻、その前にこの辺(①と③の間)でやって、漁があったから、台風が走ってきて、し

たら、いい漁場で、折角獲っているからと縄を流していたよ。台風が接近してきたら、下に逃げればいいのだが、慌てて2隻とも、上に逃げたわけ。

したら台風は西より走っているのを、コース変えて、北西よりになって、2隻とも、台風巻き込まれたわけ。真功丸は船諸共ひっくり返ってねえ。沈没して、一人も助からなかった。ウチの南開丸8号は、船長部屋から、上は全部剥ぎ取られて、人間は何でもない、帰ってきていたけど。下に、南に逃げれば何でもないが、これ達はもう台風が近く来るまで、もうこっちでやるといって、台風が変わるはずと思ったんじゃない、こっちで流している時、もう近く来たから、上に逃げて、翌日台風巻き込まれたわけよ。もう40年前のことだが。

南シナ海で 威嚇砲撃？ 警備艇に追われる

南シナ海はいい漁場ですよ。バチは相当獲れる。あそこに小さな島がいっぱいあるわけ、無人島で人は住んでない。だが家もあるし、考えたら、あれは軍がいたはず。駐屯地になって、あの当時はフィリピンか、ベトナムとか、何か3箇所位で、奪い合いして、そういう話があったんだが、でも島に着けても何んでもなかった。

あとでは、中国がこっちは自分なんか物として、領土を奪い合いしているさあ。そのせいか何か知らんが、一度危険な目に遭った。

丁度フィリピン近くだった。あそこでバチを獲っていた時に、ちょっと台風が接近したからねえ、縄揚げてから、小さな島が沢山あるわけよ。それで、島の近くに船寄せて行って、無人島と思ったら、人がいっぱい見えるわけ、したら、ああこれ危ないからと引き返そうとしたら、船員が、「船長、近く行ったら、ヤシの木があるから、このヤシをもらおう」と言うから、そうかといっ、島の近くに着けようとしたが、やっぱり軍隊がいたら危ない、領海侵犯になるからと、ある程度まで持って行って、引き返そうとしたよ。



南開丸8号(14ト)は大漁船で、南シナ海で威嚇射撃受けたら、台風でブリッジ飛ばされたり、思い出多い船だった。

そしたら、島の方からウチらの船めがけて大砲を撃ってきた(笑い)。目の前に、船の表に、1メートル位前に落ちて、ドーンと大きな波が、2階位の高さの水柱が上がった、3発も。あれは迫撃砲だったかも、命中していたら、船はもう沈没していた。外れたからよかったけど。もうびっくりして、チャーヒンギー(大遁走)、もう止まらんよ(笑い)。

あれは威嚇したんじゃないか(笑い)。して、北の方にドンドン逃げて行ったら、何時間かねえ、したら、今度は後ろから船が追ってくるわけよ。あれは警備艇じゃないかなあ、もう後ろ振り返らんで、またチャーヒンギー(笑い)。して、しばらくしたら、引き返して行ったから、安心したけど。あっちはフィリピンに近かったから、フィリピン軍の警備艇じゃなかったかな。そのあとから、南シナ海では、無人島でも、島に船着けるもんじゃないなあと思った。あそこは相当バチが獲れる、ほんとにいい漁場よ。だけど、今は何か中国がいるみたい。今行ったら、中国に捕まえられるから、今は行けないさあ。

台湾船怖い 魚 縄 ブイ盗られる

マグロ船はフィリピンからも来るが少ない。殆ど台湾船ですよ、今は中国のマグロ船もいるというが、あの当時は台湾のマグロ船が多かった。怖いのは台湾船よ、この沖縄近海でもそうだったが、南方でも変わらん。フィリピン近くでも、ラジオブイ付けたらねえ、夜見たら、盗っていくわけよ。もう盗んでいく、もう大変だった。もう見たら、盗っていく(笑い)。縄も勝手に揚げるしねえ、大変。台湾船見たら、もうジュンニ(ほんとに)怖いよ。この付近からもうウロウロしたら、台湾船見たら、縄入れませんよ。こっちが投縄した縄も盗るし、魚も盗るし、浮球といって沖で、これも盗られるし、もう悪質ですよ。

また、縄が引っ掛かる場合もあった。交差したり、絡まったりして。そういう時は無線で連絡できないさあ。連絡できなくても、お互い漁民だから、もし切るんだったなら、また結んでいくのが当たり前だが、あれ達はよく切りよったからねえ。切られたら、これ探すって、揚げ縄は相当、時間掛かる。普通 8 時間かかるのが、もう 15 時間も、15 時間も掛かるわけよ。もう台湾船の場合はどことない、沖縄近海でも、南方行っても。パラオは沖縄から南に 8 日位、ウチも長いことパラオ近くでやった。あそこも台湾船が多く来ていたがねえ。だから被害が多かったから、あっちでも、台湾船見たら、あれ達が離れて遠く行ったから、投縄する場合が多かった。

南行くと メバチ、キハダ 1日で3ト 100本以上

マグロ船が何で南に行ったかという、近くでやって漁がない時は、自然と南に走って入れるから、皆南下して、漁やるようになる。最初は 1 日、2 日位走って、沖縄の南の方でやりよったが、このまま 5 日位走ったら、もう 10 度線位まで行けるから、フィリピン近くでやった。して、あっちはもういい漁ですよ。もう行く度にすぐいっぱいだった。氷だとあっちにまですぐ無くなる、いっぱい積んでいても無くなるけど、冷凍機付けているから大丈夫だった。安心して操業できるから。

ウチが南方行ったのは 30 年前、30 代(1960 年代)から 50 代(1980 年代)の頃ですよ。

やっぱし、あっちに行けば、すぐメバチとか、キハダとかいっぱい獲れた。もう行ったら確実に獲れよった。食う時なんか、1 日で 1 魚槽 3 ト位詰める場合もあった。3 トといったら 100 本以上の数だよ。今は 10 本、14,5 本食べばいい。やっぱし数は大分減っているわ

け。皆獲り過ぎてなくなっている。だから新聞見るとクロマグロを制限しようと話も出ているさあ。あの頃は幾らでも獲れたよ。南開丸3号、5号、8号はあんまり大きくなかったが、それでも12,3ト位はマグロ積んできたかなあ。あの当時は内地送っても高いし、こっちでも高かったから、相当儲けたよ（笑い）。

マグロ 種類で 肉質で 値段雲泥の差

マグロは種類によって値段が違う。一番高いのはクロマグロ、安いのはトンボで、クロマグロが5000円したら、バチは1000円、トンボは200円台よ。そんなに差がある。

して、同じ種類でも値段が違う。同じバチでも3000円のものもあるし、400円のものもある。肉質で変わる。一本釣りの魚は、マチとかは、今日獲ったら皆同じ値段さあ。マグロはそうでない。同じ日に揚げても、この船は3度位離れてやって、別の船はこっちでやって、こっちは高い、あっちは安いと。同じキハダでも、メバチでも、場所によって、日によっても肉質は変わってくるわけ。

尻尾からこれ位を切って、値段付けるから、身を見て真っ赤か、真っ赤だけではダメ、指でこうして摺り潰して脂乗っているか見て、値段は肉質で決まる。同じ日に獲った魚でもこっちは550円、あっちは5000円とするから（笑い）。

同じキハダでも、メバチでも値段は雲泥の差がある。これは獲る時には分らない、何が食っているか分らんですよ（笑い）。

だから持って来てみて、ああ今度の魚の肉質が上等だったと、同じ漁場からやっても、この船のものは高いが、別の船のはちょっと安いとって、こんなだった。勿論、獲ったあとの冷凍の仕方によっても肉質は変わる。冷凍調整で、冷凍強くしたら、肉はカチカチになって、肉は焼けて、白く、身は悪くなる。弱くしたら、ちょっと匂い出すわけ。だから冷凍調整も難しい。温度計当ててから、-1度、-1.2とか-0.8度とか温度計に映るから、この船によっても違う。

あれが上等だからと、そのやり方としたら、また変わっていく。船によって熱の入れ方が違うから、冷凍としたら1時間で温度が上がる船とか、4,5時間も上がらん船とか、だからマグロだけは難しい（笑い）。



メバチのブロック肉 肉質で決まり、値段はピンからキリまで。他の魚と違って、マグロだけは難しい。

どこでも 値段よかった 相当儲けたよ

あの当時はマグロは値段はよかった。こっちに水揚げしても、内地に持って行っても、とにかく量さえ持って来れば、金になりよった。今はもう正月前なんかは大量の船が、泊

港には入らんですよ。こっちに入らん位船いたから。

ウチらも、そのまま高知と鹿児島に行って水揚げすることもあった。漁場からすぐ向かって。焼津とか、三崎に？ いや、あっちの港は北の方の魚、南からの魚は質が落ちるから行かん。北の海の魚は寒いから脂が乗って美味しいわけ、三陸なんかは冬でも大シケよ、台風並みで、よく転落事故もあるんだが、持って来れば金になる。その代り量は少ないが、高いわけえ。質は間違いない。南からのものと比べにならない、殆どトロみたいに脂乗っているから。だからウチらが行く所は、高知と鹿児島、その位。前は宮崎も行きよったけど。とにかく量持ってきたから、相当儲けた。それでこの家も造ったさあ。

して、儲けてきたら、次も儲かるからと、酒場に行って、持っている金は全部使ってきた(笑い)。もうあの時はもう船から上がったら、毎晩午前様だよ。30万位ポケット突っ込んで行って、帰ってくる時は、もうタクシー賃もない位、財布はすっからかん(笑い)。今考えたら、ハッサビョー(感嘆詞：情けない) あんなして酒に投資しなければ、3軒も4軒もアパート造っていたのに、あの時はここまで頭回らん、若かったから、いつでも儲けられると思っていたけど。しょうがないさあ(笑い)。

50で引退、息子が引き継ぎ パラオ近海で 操業

マグロ船は50近くになってから辞めた。今は息子が南開丸18号を引き継ぎ、船長してパラオ近海で操業している。パラオに入漁料払ってねえ。今度も正月前入ってきて1週間は家にいたかなあ。今はインドネシアの青年達を2,3名乗せている。殆ど若いの、20代から30代の青年達。今はこっち(那覇泊港)にコンテナ改造して、部屋を造って、入港したらこれに泊まらしている。3年の契約で乗せて、1人10万円支払っているというが、いい収入だから、仕事させようと思えば、いつでもいるからす



30年前に新造した南開丸18号(19ト) 今尚現役で活躍

る。沖縄の船員は来てもねえ。金は借りには来るんだが、仕事というとなかなか来なくて(笑い)。船員もインドネシアの青年達がいい、使いやすいし、まじめで、仕事熱心だ。

たまには逃げる人はいるんだが、でもこれには個人では金貸さんから、被害はないわけ。沖縄船員は前借させたら、長らくなる人は、何百万と貸している人もいるから大変ですよ。

バブルあと マグロ厳しくなった

バブルのあとはマグロ船は厳しくなった。その前は漁が多い時は内地に送ったが、安いから送れんさあ。安くてもこっちで処分しなければならぬ、こういう状態が殆ど、だか

らマグロ船は厳しい、皆聞いたら、タクシー運転手でもそうと言うさあ。皆景気悪いと。

今はいいものは内地に送るが、内地には外国から沢山来ているから安い、その上に相場の変動があって、毎回変わるから厳しいです。前はもう確実だったわけ。

今は外国から来るから送ってもダメ。こっちも安いからし、送ろうか、どうしょうか、迷っている。もうしょっちゅうこんな状態（笑い）。前は送れば高い、金なる。こっちでも高く売れた。マグロ船は少なかった、船も大きかったけど、今は船もミニ船でやっている。またあの当時の倍なって、いつも漁は多い、もう全然前とは違うわけ、だからマグロは厳しくなっている。で、今は船が少ない時に入ったら、いい値出るんだが、船がいっぱいいたら大変。息子は、前航海の前も、マグロいっぱい持って来てねえ、経費ギリギリだった。いっぱい持って来て、200 円、300 円よ、マグロがよ、あれだけ経費掛けて、たった 200 円、300 円、もう大変だから。

集魚灯で竿釣り セリ値落とす

今マグロ何で安いかというと、集魚灯といって小さい船から、1 人か 2 人乗って夜電気点けて、電気やって、もう久米島辺りで何 10 隻、皆こんな小さな船が、ミニ船ですよ、これ達がセリをいっぱいさせるわけ。あれは大変、電気点けてやっているから、この久米島

の南の方、何時間走って、そこでは延縄じゃなくて、竿でマグロの一本釣、すぐエサ掛けて、電気点けたら、魚寄って来るからねえ。

このミニ船が何 10 隻も集まって、もう 4,50 隻位はいるというから。これも影響しているさあ。

こんな船が多くなって、量もあるし、5,6トから 7,8ト位は毎日来る。魚が小さかったら、ウチらにはあまり影響はしない。だけど



セリ市場にずらっと並んだトンボマグロ。近年、集魚灯・竿釣りミニ船が急増し、延縄船は苦しい戦いを強いられている。

適当に大きいのが大分入っている。大きいのでは 20 疋、30 疋、小さいといっても 14,5 疋位。これがセリをいっぱいさせる。それに日帰り、2 日帰りで獲るから、魚は新鮮で、きれいさあ。今は久米島の若者が帰ってきて、これがいい収入だから、これやっているのが多い。沖縄の南部でも、与那原、あっちもいるんだがねえ、一番久米島が多いよ。

また、これを仲買が、問屋が買って、請けてやっている。だから、これが相当影響している。ウチらマグロ延縄船は、近海は魚取り過ぎて少なくなったからと、遠く行くさあ、経費は掛かるし、魚は安くなっている所に、こんな状態だから、もう大変ですよ。

船 修理維持 金掛かる

今の南開丸は18号は、登録は19トとしているが、20ト以上はある。なぜかといえば20トを超えたら毎年検査になるから、これは3年に1回位、臨時検査して、6年に1回定期だとあるから。殆ど皆そういう風なやり方していた。

船は3年に1回臨時、6年に定期検査にすごく金掛かるねえ。最低1千万、2千万は掛かるよ。ちょっとあっちこっち修理したら、魚槽なんか、冷凍設備が防熱が効かなくなったりして、あれこれしたら3千万、大きい時は3千万、2千万は掛かる。この船造ってから30、40年近くなる。この間の修理代だけでも、ゆうに1億位は入っている。エンジンも、臨時検査、定期検査に全部上げて悪い所を取替えさあ、あれでもエンジン5、6百万では少ない方、これ以上かかる。これ19トでそうだから、正式に登録して毎年検査だったら大変よ。殆ど皆こんなになっている。

この船は前の方が低く、前の方上げて、また下の方にこういう風にしたら、波に突っ込まれないから、この位伸ばして付けてねえ、また上の部屋造って。殆どのマグロ船はこうやっています。また艫の方に引っ付けて大きくなしたり、船大工は1日2万円から2万5千円位、それが4、5名入って、1ヶ月も2ヶ月位も掛かるから、人件費だけでも相当なもんよ。とにかく船は修理、修理すれば使える。だから修理費代が相当掛かる。

だけど、金掛けないと、故障で戻って来るか、魚槽が悪いと、魚持ってきても金にならん、自然に金掛けん船は、自然にもう潰れていく。船はもう金掛けきれなかったら大変。

じゃ金掛けた分、これが戻ってくるか分らんさあ。相当頑張って儲けんといかんけど。今はマグロ船は相当厳しいですよ（笑い）。



南開丸18号を前に親子で、儀間真松さん(82)と息子聡さん(56)。(2015年那覇泊港にて)

宮良 貞光 みやら さだみつ

(船大工)

1938年(昭和13年)八重山竹富町・鳩間島に生まれる。79歳(2015年時点)。学校卒えると、5年ほどカツオ漁に従事する。21歳(1958年)に船大工を志し石垣登野城の井上造船所に見習で入る。26歳には鹿児島県山川造船KK、さらに大分県東九州造船、鹿児島県山川造船KKで研鑽、29歳に那覇地区漁協造船、丸長造船所5カ年間工場長を歴任する。

48歳には宮良造船所経営。その間数多くのマチ船・マグロ船を建造、マチ船の多くは尖閣諸島に出漁している。氏が建造した船は優れ、沖縄に船大工宮良ありと、その技量の高さを轟かせた。61歳(1998年)鹿児島マチ船修理中に火災事故に遭う。これを契機に船大工を引退する。今回氏に船大工の歩みの話を伺った。豊富な漁業経験を有する氏の話は、多岐に亘り、興味深い内容である。



鳩間島 夏 カツオ釣り 冬 西表で米作り

僕のシマ(古里)の鳩間は、八重山で12番目に小さい島ですよ。だが、夏はカツオが釣れるし、トビイカも釣れる。僕の島は竹富町でも一番豊かな島と言われていた。イカ漁は旧7月頃から始まって、甘露の頃はアマイカとって大きかった。十五夜の頃が最盛期、糸満、久高、石垣の漁師は、全部鳩間へ来ましたよ。2ヶ月から3ヶ月位かなあ。僕ら小さい頃は夏休みは、殆どこれの内臓取りを加勢して、アルバイトみたいに。全然金もらわなかったけど(笑い)。

島の周りは魚が豊富だから、糸満系の人達も寄留してました。金城、玉城とか、上原とか、あそこに住んでいた。屋敷もあった。石垣の玉城亀一さん、尖閣列島によく一本釣りで行ってた亀一さんよ。あの人の屋号はハトマヤーです(笑い)。

僕らの先祖も、石垣の宮良から鳩間に来た。元々は玉津だが、鳩間に移住してから宮良の姓になったみたい。夏はカツオ釣り、イカ釣りして、冬は米作り、代々半農半漁です。水田は島にはない、西表の上原や船浦に行って、あそこでお米を作っていた。田圃しには、サバニで行っていた。僕なんか小学5年位から、従兄弟と2人で、サバニに帆をかけて、西表を往復しよった。鳩間には、薪はないから、夏休には従兄弟2人で薪取りに、あれは前に帆を揚げて、僕は舵とって行ったよ。

上原の前に、ハトパナレという離れ島があるが、あそこも、尖閣列島と似ている。海鳥から山鳩なんか、こんなだよ。ひよこ、卵いっぱい、もう集められる位だ。竿で叩いたら鳩が何匹も落ちる位おった。また、海には時々イラブー(イラブウミウナギ)が巻いている時ある。時々これを捕ってくる人がいるよ。だけど陸のハブと混じっている時が



西表島の北上に位置する鳩間島、面積は約1k㎡と小さいが、カツオ・イカが豊富な島

あるからよくやられるらしい。僕の親父(宮良石戸)は危ない、絶対採るなど行って行か
さなかった。僕らは旧3月かなあ、カツオ船のエサを、こっちに採りに行っていた。も
う島が動く位、寒くて震えていたねえ。今はウエットスーツがあるから何でもないけど、
あの時はパンツ1枚でやるから、蒼くなるまでエサ採るといって大変だった。

カツオ船 4,5 隻 カツオ工場 3,4 箇所

八重山にはカツオ船は鳩間、石垣、波照間、与那国と4箇所しかない。当時、鳩間島
の人口600名ほどカツオ船4,5隻おって、カツオ節製造工場3,4箇所あった。

船は大喜丸というのがおって、あとは大吉丸、福吉丸、魁丸、新福丸とかおった。大吉
丸は18ト位の大きな船だった。エンジンも50馬力。あれは配給船でしたよ。八重山復興
博覧会(1950年)の頃、ガリオア資金で造った新造船、機械も上等だし、遠くまで行けて、
冬は突台付けて突き船にした。大吉丸は八重山でも有名だった。船員は15,6名は乗ってい
たかなあ。船は大きいし株船だった。あれは何年度だったか、水揚げ高が沖縄県一になっ
たこともあった。簡単にすぐ破れましたけどねえ。

鳩間はカツオ漁盛んでしたから、僕
の島から石垣に行く連中なんかは、全
部艦の飾りとか、一番、二番、三番に
座る優秀な釣り手が沢山いましたよ。

クルミヤ(屋号)玉城さんの玉福丸
に乗ると、親父の兄さん叔父(宮良長
康)さんは、艦の角一番竿、親父(宮良
石戸)は2番に座っていた。前の方は
大城武雄さんよ。カツオ釣らしたら、
シマ(自分の故郷、鳩間島の意)の人は
皆上手だったよ。



カツオ船・大喜丸が大漁し、甲板で祝い酒酌み交わす。
1958年 提供小底武二(「ばいぬしまじま」より)

僕が乗っていたカツオ船は大喜丸3
号で、11ト位あったかな。その前に大喜丸1号がおったらしくて、これ母方のお祖父さん(島
袋真那)なんか株でやっていて、カツオの儲けの計算とかは、僕の母(宮良よし子)の実家
でやっていた。この大喜丸3号は、終戦直後は船動かしきれなくなって、与那国の人が買
っていったんです。与那国でやって、これが大漁船でしたんで、また与那国から鳩間の人
が買ってきて、鳩間のカツオ船で使ったんです。母の弟次男叔父(島袋秀吉)さんが船頭して
ましたから、この大喜丸には、僕は3カ年乗っていましたよ。

漁場近く 自分でエサ採って 1日2,3航海も

鳩間はエサは自分で採って、波照間とか、石垣のカツオ船はエサ採り専門がおった。
漁場も近いから、6月頃からカツオの時期は、自分でエサ採る。その時季なったら昼間で

も採れますよ。島の周りはリーフばかりですから、バカジャコ(ミナミキビナゴ)と言って浅い所にいてカツオが一番好むエサがあるんですよ。朝エサ採る前に、夜が明けたらすぐご飯食べて、太陽が上がったらすぐエサ採る。太陽が上がらないうちは出てこない。バカジャコなんかは、エサを採って、すぐカツオ漁に出るわけですよ。出て12時頃まで現場に行くのにかかるから、その前にご飯を食べておく。

僕が自分の船に乗っている時、1日2,3カブ(航海の意)することもあった。石垣や波照間はこのことではない。1日2,3カブの時は、今度はエサは、慌てているから伝馬船が入って来たらカツオ積みに来るんですよ。もう伝馬待たない。全部海に捨行、捨行したら伝馬持っている人が潜ってから、(エサを)伝馬に乗せて行くわけです。もう放ったらかして、また海に、こんなして、1日カツオ船が2,3カブするのは沖縄県で鳩間だけだと思う、エサが豊富だから。与那国なんかはリーフがないから、鳩間にエサ採りに来ましたよ。

カツオ来ないと 真北へ10時間 尖閣へ

僕が小学校(昭和25,6年)の頃かなあ。鳩間から尖閣列島へカツオ船も行ってた。

大吉丸(船長吉川米三)は大きかったから行ったけど、大喜丸とか小さい船は行かなかった。旧盆8月後から島の近くではカツオは釣れないから、与那国の近くに行く。与那国近くで釣れなかったら、今度は尖閣列島へ行くわけ。

尖閣列島は、八重山からは、鳩間からが一番近い。

ノース(真北)にきったら尖閣列島にすぐ上がる。西表のニシ(北側)に10時間走らしたら、魚釣島にまっすぐだ。石垣からだど、登野城から行って観音堂廻って曲がって行くから2,3時間位長い。鳩間島からだど、ノースに真っ直ぐ走らして行く。カツオ船はあの時分は焼玉で7ノット位だから、10時間走らせば、尖閣列島はもう目の前よ。

僕の島は離島だから氷もないですよ。大吉丸は、夕方エサを採って、すぐ走らすんですね、エサ積んで、すぐそのまま走らして、朝すぐ一番に釣って、漁してすぐ帰るわけ。もう帰らんと、氷がないから、魚が腐れるから。

尖閣列島には大吉丸しか行かなかった。僕の親父も、兄貴(宮良貞夫)も行っていない。行った先輩達はもう皆亡くなっている。僕の記憶には、魚は沢山、あそこはもうカツオばかりじゃなくて、マグロ、カジキも獲ってあった。丁度潮の流れがいいみたい、結構釣って来るのは釣って来ましたが、やっぱり氷もないから、年に1,2回しか行かなかった。



鳩間島から尖閣諸島は真北へ直進、船10時間走らせば、もう目の前。

冬場 突き台据えて 尖閣へ カジキ突きに

大吉丸は、尖閣列島には、突ん棒でも行っている。カツオ漁を終えて、冬場、カジキ突

きに行ってます。カツオ船も突台はあるけど、低いからカジキ追ったら、波に触るから上げるわけ、その上にもう1つ据えて、突船見たいに台付ける。で、冬は突ん棒が終わったらこれを外す。突ん棒船は最初から違う、突船はうんと出ます。人が座れるように4メートル以上出ます。カツオ船の1.5倍位前に出て、高さも出きるだけ高くする。

突台には2人立って、右が先導、あの人全部合図して魚を見ておって、向こうに行かせ、あそこに行かせと言ってやって、大吉丸はホースビットの上に突き台を作った。この部分に高く上げて、長く延ばして冬の間は突ん棒船にした。石垣の尖閣列島で突き船やっていた篠原さんの基本丸なんかもこれでした。

あの頃、台湾帰りの名人がいましたよ、ミンタマー(大目玉)の大田守成、通事三郎さんとか、その先輩達が大吉丸に乗って行っていた。その中に2期先輩で僕を可愛がってくれた大城一唯さん。静岡にいて亡くなったけど、前に会った時に聞いてみた。

兄貴、冬はカツオ時期終えて、尖閣に突ん棒しに行った時、儲かっておったか？ いや、あんまり儲からなかった、おるにはおったが、なかなか漁は。そんなに配当が沢山なかった、経費いっぱいだったと思う。あそこの潮は半端じゃないよ。鍋洗って誤って鍋の蓋を落としたら、あつという間に見えなくなった、1,2と数えんうちに、もう20メートル位先行っている。潮の流れがすごく速い。7ノット以上で潮引くんじゃないかなあ。

結局、尖閣列島はカジキはいるのはおる、沢山おったとが、金にはならなかったと言っていた。これは氷の関係もあったのでは、与那国はカジキは本場だけど、石垣に氷積みに行きよった。鳩間は全くなかったから。

トビイカ漁で遭難 夢に助け船？ 9日目 救助

鳩間は今の時期(10月頃)、トビイカが釣れるんですよ。沖縄から、本部から、渡名喜から、久米島から、僕の島に、トビイカ釣りに沢山来ましたよ。僕が小5年の頃1948年9月でした。僕の親父も、親父の兄貴と2人、母親の長男弟(島袋源助)と三男(秀市)叔父さん、全部で8名かなあ、サバニ4隻で、トビイカ釣りに行って、漂流したんですよ。風が変わるの分らないで、北風と思って、帆をいっぱい揚げたら、流れたらしい。当時カツオ船も4ノット位しか走らんのに、あれよあれよと言う間に、手を振っている間に、どんどん流されてしまっ。サバニ、2隻は捨てて、柱2本を横に渡して、残った2隻を一緒に縛って、離れんようにして、流れて、あの時分は今みたいに通信とかもないから、ずっと流されたままですよ。

もう食べるのもなくなって、喉渇いても小便も飲めるものじゃなかったと言ってましたねえ。



トビイカ天日干し、島は豊かな漁場に恵まれている。後方に西表山並が見える。提供鳩間昭一(「ばいぬしまじま」より)

もう皆ダリテ(意気消沈して)、で、長男叔父さんがしっかりしておったから、首で吊らしたら大変だからと、首吊るような道具は全部縛って捨てて、もう死んで元々だから、頑張ろうと皆を励ましていたらしい。そしていたら、何日目かに、三男秀市叔父さんが夢見たらしい。丁度沖縄から八重山に行く勝栄丸という船がおって、この船がこっちに来るから、もう少し頑張れ、頑張れと言って、お父さん(真那)が自分に夢見せたって。沖に船が見えて、この勝栄丸という船に、大浜長三さんと言うて、僕の叔父さんの同期生で、機関長しているのが乗っていて、この勝栄丸がこっちに来るよ、こっちに来るよ、と騒いだもんだから、長男叔父さんは、ああ弟はもう完全に狂ったんだなあと思っていた。しばらくしたら、沖に船が見えた。もう皆喜んで、大声で呼んだり、着物振ったりして、助けを求めたんじゃないか。船も気が付いて、段々近づいてきたわけ。そして、横付けして、機関場にいる人見たら、大浜長三という人が乗っていた。もう皆びっくり(笑い)。



島袋源助長男叔父と秀市三男叔父、秀市叔父が助け船来る夢みせられた。

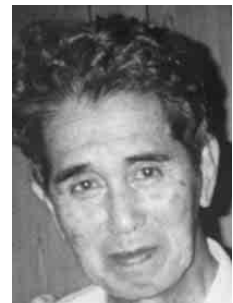
結局この船に遭難して9日目に、宮古と沖縄本島の丁度中間位で、助けられたんです。今でも叔父さんはこのことを話しますよ。お祖父さんが見せた夢の通り助けられた話、ほんとに不思議な経験したよと(笑い)。

叔父 尖閣探索 芋 野生化 木にぶら下がる

当時の新聞にこうあります。「クリ舟十余隻遭難す。二十五日午後四時頃鳩間を出港し、同島北方十五哩の沖合いでイカ釣りに夢中の処、折からの風雨のため五十二隻の内三十三隻は辛うじて島に辿り着き、三隻は川平に、二隻は久場島(※編者注：クバシマこと魚釣島の意)附近を漂流中の処、糸満人のモーターに救助され、後十隻余は皆目わからず、乗組員二十七名行衛不明になった・・・」(南西新報 1948.8.30)。

丁度その時に僕の母親の一番下の弟、四男叔父(島袋栄光)さんは、遭難した親父達の船も、もしかしたら、クバシマ(魚釣島の意)付近、尖閣列島に流れ着いているんじゃないかと、建国丸(船主慶田城勇)というカツオ船から探しに行ったんですよ。あの時は、島に上がって、歩ける所、全部歩いて、オーイオーイと呼びながら、探したって。

魚釣島にカツオ船の納屋跡があって、近くは川が流れているから、奥に水飲みに入っているかも分かんからと、あそこに上がって行ったら、芋が、八重山ではムイアッコン(野生化した作物)というけど、もう自然の芋さあ。植えて食べないもんだから、これが葉っぱもこんなに大きくなって、土じゃないよ。木に蔓が巻いて、瓢箪みたいに下がっていた、と話していた。あの芋食べたの? いや、食べない、それどころじゃなかった。中はプーカ(空洞)



島袋栄光四男叔父。尖閣に上陸し捜索した。

なっていたから、食べられんじゃないかなあ。あの当時の主食は芋ですから、漁に行く時は、カシガー(かます)一袋 60 斤、100 斤(60 疋)入れかなあ。芋をカシガーに入れて船に積んで行くんですよ。私の頃は沖縄 100 号、またコーリャンコーという美味しい芋があった。あれを持って行った。芋を沢山持って行く時は、一応陸に上がって、穴を掘って入れて土を被せるんですよ。そしたら腐れることはない。長くなったら芽が出る。また芽を切って植える。宮古は尖閣列島で、カツオ節製造したと言いますから、そういう具合にやっておったんじゃないか。で、食事は大体が芋、お汁は魚汁、野菜はカンダバー(芋蔓)ですねえ。

だから、古賀さんは、芋を沢山植えていたはずですよ。僕の叔父さんが魚釣島に上がったら、こんなに大きな芋が、多分あの芋は、古賀さんの頃に、昔に植えたものじゃないか、ずっと食べないもんだから、芋も大きくなって、中はプカプカーして、木にぶら下がって、こんなにあったと言っていましたよ。

大きくて 上等なチャーギ いっぱいあった

この四男叔父さんは学校卒業したらすぐ山師していたから、山に丸太伐りに、チャーギ(リュウキュウマキ)を伐りにも行くわけ。あの魚釣島に、こんな大きなチャーギが、山の中に、谷間に、こんな上等なのがいっぱいあったよ。もう勿体ない、採りに行けないかなあと言っていた。そのあと石垣の新坂造船所(所長新坂藤一)に行ったら、チャーギが、船材に使う杉の丸太、あのベンコー(弁甲)みたいにいっぱい積まれていた(笑い)。

尖閣列島から持ってきたわけ。新坂の長男吉朗兄さんが採りに行ったんじゃないかなあ。

あの当時、萬重丸という貨物船がおった。昔のダンバー船(だるま船)といって石炭積む船、あれを改造して、機械入れて、材木積む船で、西表から、薪とか、建築資材とか運んでいましたよ、僕が中学の頃まで。萬重丸で、尖閣列島からあのチャーギを運んできたんじゃないか。あれは船材に使わないから、建築屋か、家具屋か、何かに売ったんじゃないか。家の建築資材としては高級だから。

また、南小島、北小島ねえ、このトリシマにいっぱい海鳥がいて、宮古の人に聞くと、カツオドリとかは、肉を塩漬け、干物風にしてお土産にしていたという。僕の叔父なんかはあれは食べられない、骨ばかり多くて、西表のガラサー(カラス)と全く一緒よ、食べる身はない。台湾の人はよく孟宗竹で編んだイカダに乗って、島に上がって、卵採ったり、鳥採ったりしたらしい。僕の叔父さんは、竹富町役所において定年退職して、今 85 余りなんだが、あの時のことは全部憶えているはずですよ。

鳩間でも サバ 跳ね釣り講習

尖閣列島で一時サバ漁、サバの跳ね釣りが盛んでしたねえ。あの跳ね釣りを教えに、僕の島にも長崎から講師が来てましたよ。僕が中学校卒業した年だったかなあ。鳩間にも来て、あれは一本釣です。釣竿で、この鉤がないもの、カツオ釣るみたいに、竿 2 つ

で釣るとやっていた。あの当時はナイロンなかった。このナイロンを持ってきて細い糸でやった。サバの跳ね釣は、サビキジつけて、魚をカマボコ見たいにすり身にして、こういう風に釣るといって、僕の島でも講習してました。

そのあとからサバ漁が盛んになりました。僕が那覇に来た頃かなあ、那覇港の三重城寄りの湾に琉水(琉球水産社)があって、あそこが一番サバをやっていた。遠洋マグロもやって、銀嶺丸とか、銀洋丸だとか、大きなマグロ船もおった。サバ船は、琉水丸5号、13号とかおって、何隻かおって、尖閣列島に行ってサバ獲っていた。

サバ船は100ト位大きな船もおったんじゃないか。僕の知り合いに佐良浜の人で伊良部晃という人がおりました。寿々(すず)丸というマグロ船持っていたけど、若い頃、この琉水丸に乗って、尖閣列島に行ってサバ釣したらしい。集魚灯の電気照らすと、サバが集まってくる。もう底が見えない位おる、7,8トの船だったら1晩、2晩で満船するんじゃないか、その位ウジャウジャおるよと話していた。

何でサバ釣りやらんかと聞いたら、あれは金にならん、売れないと。それに鮮度も悪い、長持ちしないからと(笑い)。僕が小さい頃は、僕のお祖父さんが、西表の船浦で、あの当時電気ないから、松脂を焚いて、サバニに乗って松明で集めて釣っていた。サバじゃなくてグルクマー(グルクマ)、サバの種類だけど。

中学卒業して カツオ船乗る 厳しかった叔父

中学卒業したら、すぐカツオ船に乗った。大喜丸3号に、母の次男秀吉叔父さんが船頭していたから、この叔父さんは大変厳しかった。エサが採り難い時には、僕に海に下りれ！いや、あそこはサメがおるから怖い。サメは来ない、俺が見ているから下りれ！。釣り竿を振り上げて、僕を海に飛び込んで泳がす。とにかくとても厳しかった。

一度は、下りれと言われて、下見たら、大きなカマンタ(エイ)がいた。あれはハネの長さが3メートル位あった。びっくりしたよ、食われるかもしれないから、怖いさあ(笑い)。

お前、何で下りないか？ カマンタが！ カマンタが人食うか、バカ、早く下りれ！ いや、オジー下りれ。そこは八重山丸が転覆して、丁度沈んだ所でしたよ。屋良部崎の所、何がおるが分からんから、その時は絶対下りないと反抗したけど(笑い)。またどこで



カツオ一本釣光景、1961年頃。海鳥が群がっている。鳩間は優秀な釣手が多くいた。(「八重山写真帖」より)

も僕を下ろして、泳がしよったねえ(笑い)。与那国の一番サメの多い所、シンゾネってあるんですよ。東崎から4キロ位、あそこはサメが沢山おる。あそこでも泳がしよった。エサ

撒く桶が、誤って流れたわけよ。僕にこれ取ってこいと、船はこっちに、あれは反対に流れていくわけ。5,6名いるけど誰も行かない。早く下りれ、あれがないと、どんなしてカツオ釣るか？ 後ろから手に竿持って、叩こうとする。仕方ないから、飛び込んで、400メートル位は泳いで行って、取ってきた。家帰って、お祖母さんに話したら、バカ！お前は泳げと言えば、泳ぐのか、サメに咬まれたら、どうするかと叱られた。そして叔父さんに、お前この子を何と思っているか。サメに食われてもいいと思っているか。あそこに行ったら殺されるから、行かさん、明日から、絶対行くなよ（笑い）。

だけど、明るる日朝早くきて、僕を起して、また連れて行くんですよ（笑い）。もう僕は海に行ったら鬼だった。がむしゃらに頑張った。カツオを釣る時なんか、底見えぬ海を、大体潮も見えない所を、エサがあっちで面舵側に回ったエサを、これ掬え、自分は綱手繰るから置いて来いと、またそうやって、もう僕はうんとこき使われたわけよ（笑い）。

一度は僕が、叔父さんを海に突き落としたことがありますよ。カツオの群れ見つけて、皆一斉にカツオ釣っている時に、魚が僕の耳にぶつかったから、下手くそと言って、海に落としてやったよ（笑い）。叔父さんか船に上がってきたから、何かあんたは？ あんな魚釣り方があるか。耳に当って血が出ているよ。ああそうかと言って何も言わない。普通だったら殴りそうなものだけど、悪かったと思ったんじゃないか（笑い）。

鳥巻き見て 大判小判か マグロか 分かる

僕の島では鳥巻き見てすぐ分りますよ。これカツオの大判、これ小判だと、鳥巻き見てすぐ分るんです。また群れも違う。カツオドリは口も長いし潜る、ウンケーと言うけど、このウンケーが騒いだら大判ですよ。もう真っ直ぐバーンと落ちたり、急降下でドーンと落ちてきます。また、エサ撒きする時、船の面舵からエサ投げると、横から飛んで来てエサ皆食べるから、竿でウンケーを叩き落とす時もあったよ。

小判の時はミズネー、ミズナギドリよ。小判の時は動きも遅いし、低く飛ぶんです。またあまり上にいない、海面スレスレに来る。

尖閣列島で獲れたカツオ。大吉丸が釣って来るのは大判でした。ホンカツオでした、シマガツオならあそこまで行って釣って来たら引き合わない、節にならないから。

あとマンビカー(シイラ)とか、マグロとかの鳥巻きもすぐ分ります。マグロの鳥巻きは鳥が散っています。何月頃だった頃か忘れたけど、鳩間の東から平久保崎まで、全部マグロだった時もありました。こりゃもう何で、マグロの縄入れたら、もう船が沈む位は釣ったんじゃないかなあ。鳥巻きはおるけど、見ていたら、もうダイシビ(キハダマグロ)と分っているから、カツオ船はエサは入れなかったですよ。鳥巻き見えるから、近寄ったらこれマグロでしょう。鳥の動き見ても、鳥が散らばっている。量が多いから、鳩間の東から平久保崎まで、マグロがずっと並んで泳いでいたですよ（笑い）。

カツオ追って カジキ来ると モリで突く

カツオ船は、鳥巻き見て、カツオを追って行きますから、カツオがこんなに釣れている。それが急にいなくなると、見たらカジキが必ずいる。カツオを追って来ているわけです。カツオ船はモリをちゃんと準備してあるから、これでカジキ突く。

大喜丸の機関長大工ツネオ兄さんはカジキ突くのが上手だった。三本モリがあつて長さ4メートル位のあれに、モリはツバクロといって抜けないようになっている。

当時の和船は人間1人しか、一番ジョー（竿）に座れんけど、ホースビット出した船は前に3名並べる。だから多く魚釣れるわけ。大喜丸はホースビットがあつた。

機関長のツネオ兄さんは、ホースビットにおつた。カツオがパタッといなくなったら、カジキが来ていると分る、ハネが見えるから。モリを持って構えたツネオ兄さんは、もう構えたら間違いなくカジキを突きよつた。ほんとに上手だった。あの時、僕は機関場におつて、機械に油を差しておつた。兄さんがカジキ突くのが楽しみで、憧れでもあつた。

僕の母の従兄弟が与那国の婿でおつて、カツオ船の時期は鳩間に来ていた。冬なると与那国に帰る。冬は与那国はカジキ、突き船の本場。僕がカツオ船でよく働くから、叔父さんが、お前冬なつたら与那国に行こう。突き船乗せに、目ん玉(視力)もいいし、カジキ見るのも上手だからと、連れて行こうとしたよ。親父が冬は米作るから田んぼ耕さんとならないからと反対して、僕を突き船には行かさなかつた（笑い）。

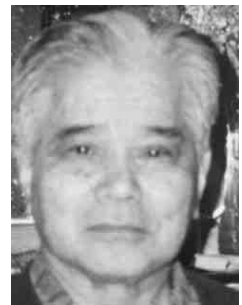
こき使われ 跡継ぎと 期待されたが 船下りる

秀吉叔父さんは、僕が25歳なつたら、自分の代わり交代して、大喜丸の船頭させようと考えていたみたい。目もいいし、勘もいいし、だから石垣港に、海から夜入ってくる時は、あの崎とウラン崎と、灯台合わせて入ったら、目をつぶつて、前見らんでも入って行けるからと教えておつた。あっちこちの山当て、島当てのアテモン(当てる方法)も教えてくれた。エサ採る時も、潮はどこに行く、どこにエサおるから、あそこで網下ろすんだ。だからエサある所、向こう見たらすぐ横付けさせた。このエサ採りは、普通は、伝馬船で網は張るさあ、後ろは浅瀬に掛ければいけど。

叔父さんは、わざと7尋位ある深い所に掛けてきたりした。また、これ外してこいと言って（笑い）。僕はもう頭にきて、外れん所に潜れるわけないだろう、潜らんとそう言ったら、何で人が潜れるのに、お前は潜れんか。意地がないからだ。バカ、潜れ、早く潜れ！と潜らしよつた。僕ももう意地から潜っておつた。

こんなうるさい叔父さんだから、僕をうんとこき使うさあ。だけど、どんなにこき使われても、僕は鬼なって頑張っていた。こんな僕見て、島の人は、戦前戦後を通じて、こんなに働く者は見たことないと言つておつたよ（笑い）。

叔父さんも、僕は鳥巻き見るのも上手だし、エサ廻りさせても、働かしても何でもでき



秀吉次男叔父。僕を船頭跡りと期待していた。

る。これ海人するために生まれてきたような者だ。自分の跡継ぎにさせようと考えていたわけ。だけど、僕は船大工したいから、船下りる、と言ったら、大変がっかりしていた。

井上造船所に入り 船大工 修行

僕は船が好きだった。だから学校の工作の時、木彫りのカツオ船なんか作った。鳩間に拓南丸というのがあった。あれが好きだったから、あれと全く似た船作ったら、島の人が感心して、船大工した方がいいと言っていた。僕も船大工したいと思っていた。

石垣に井上造船所(所長井上重行)というのがあった。そこをお願いしたら、師匠の奥さんが反対しよった。石野裕雄さん1人いて、あとは全部逃げて行ったから、もう弟子は取らないと(笑い)。それを僕の親父がお願いして、やっと入れてもらった。隣に桃原造船という大きい所ありましたよ。あそこ職人10名位おったんじゃないか。あそこは休みになると、皆手に時計はめて、ピカピカの革靴履いて、遊びに行く(笑い)。僕は井上に3年おって、1日も休みなし、それに、朝から晩までずっと働いて、ずっと動いているもんだから、すぐお腹すく。いつも夕方なったら、ひもじくて、チャーガタガター(いつも震えて)(笑い)。

島から持ってきた薄っぺらの毛布1枚で、もう3年頑張った。顔もこんなに腫れて、親父が訪ねて来て、僕の顔見て、驚いていたよ。何で、どうした? 寒くて眠れない。何でちゃんとと言わんかと叱られて、上等な毛布を買ってくれたよ(笑い)。



井上重行師匠

宮崎の吉田造船といって、日南で有名だった。あそこの親父のお父さんが言っておった。台湾から、南方から帰る時に、優秀な連中は、皆宮古八重山に下りたんだって、新坂さんとか、僕らの師匠兄弟とか、大富さん、桑田さんとか、皆優秀な船大工だったよと。

師匠も言っておったよ。自分は八重山に下りないで、そのまま宮崎に帰ればよかった。下りたからさあ、このカマジサー(無愛想)と一緒になると(笑い)。奥さんも宮崎で、新坂さんの娘よ(笑い)。



中央に井上師匠、前列右端：石野裕雄先輩。波照間のカツオ船大黒丸を新造で応援に来た桃原造船所等の船大工と一緒に。(井上造船所、1959年)

万漁丸(ずい徳丸?) 尖閣で沈没 造船所 傾いた?

ある時、造船所にカツオ船の望遠鏡があった。万漁丸と書かれていた。これ何?と聞いたら、自分がガリオア船造って、材料が余ったから、この船、万漁丸(ずい徳丸?)造ったと話していた。篠原光次郎さんの基本丸が突船やっていた頃で、船長は有名な大嶺さん。図南丸の船長もしていた。大嶺が船長やるというから持たしたら、尖閣列島で転覆(1952年3月)した。カジマーイ(風廻り、春一番?)というのがありますねえ、あれを分からんで、船転覆させて、もうそのまま捨てたさあ。人間が助かっただけでもよかったよと言っておった。

あれで師匠は失敗している。あれまでは沢山船造っておったから、弟子もいっぱいいた。あれからおかしくなっている。僕が来た時には波照間の石野裕雄さんが1人おった。僕が来た当時8年なるといっていた。その上に4,5名おったけど、金もらえんから皆、那覇に逃げて、あの裕夫兄さんは正直だから、ずっとおったわけ(笑い)。

師匠ですか? とてもやさしかった。一回でも怒られたことない、神様みたいな人だった。宮古に弟の井上重貞さんがいて造船所していた。性格は反対、あの人は短気だった。僕が3年我慢したのは、船大工したいから、師匠が夢の大工だったから。僕が最後の弟子で、お前が師匠に一番似ていると、奥さんにも、息子の和士兄さんにもよく言われたが、師匠の真似できん。もう仕事は丁寧ですごかった。船の部屋造るでしょう。僕らはこれだけの鉋(カンナ)使うよ。師匠は90センチの長い鉋で、ピッシャーピッシャーと、もう左甚五郎と一緒にさあ、もう真直ぐになるまで、僕らはそんなことできないねえ、もう名人だった。

那覇に出る 琉球造船皮切りに 九州の造船所で 腕磨く

井上造船所を辞めて、沖縄に来ました。琉球造船がこっち(泊港)にありましたんでねえ。大嶺組って八重山シンカ(仲間)が4名から5名位組み作って、下請けしている。大嶺晃用さん、あんなこんなで八重山から来たけど、使ってもらえんかなあ。俺も井上の弟子だ、よし、明日から来いと。それで琉球造船で働いておったんです。それから自分でしたり、那覇造船にいたりして、26歳(1963年)には、鹿児島島の山川造船に研修に行きました。山川造船は造船所と鉄工所があって、鹿児島では一番大きな造船所で50名位おった。

あとから大分臼杵の東九州造船に行つて、2カ年間また修業してきた。

あそこは木船では日本一大きく、全国から優秀な船大工が集まっていた。船大工は200名位以上おったんじゃないか、僕は180番だった。東九州では、現場に出ても仕事するし、原図も引く



東九州造船所(大分臼杵)、全国から優秀な船大工200人余りが集まっていた。木船では日本一の造船所だった。

し、一番勉強になりましたよ。北海道とか、青森とか、あの辺からも、突ん棒船とか、カツオ船、マグロ船なんか、全部注文きて、高知、四国辺りは東九州が間に合わしきらんから、あそこに廻るだけでした。高知の船で同じ型で12隻位造ったんです。で、型板は丈夫に作って、1ヶ月に4隻下ろす時もありましたよ。6隻並べて造ったら6隻一緒に下ろす。1月で、完成しない内に下ろして、また入るわけ。これは岸壁に横付けしてから仕上げてました。もう屋根が空いていることなかった。僕は造船課で主に原図場、型作る所に配属された。そしたら原図場の親父が、僕の原因見て、お前すごいなあ、自分が20年余りこの原因引いているけど、こんなにドンピシャリいくの見たことない。お前はどこの学校出たか？ 鳩間中学校です。鳩間中って、大きいか？ 全校で60名位、と言ったら、目を丸くしていた。そのあと、お前がやるのが一番正確だからと、機関台なんかは、私が型はとったりしました。

沖縄戻り 50隻あまり 船造った

沖縄に帰ってきたら、自分で造船所やったり、また那覇地区漁協造船所とかに勤めたりしてました。そしたら僕が43歳(1980年)かなあ、琉球バスの長濱弘社長がスピリポート社を組織替えて丸長造船所を造った。そこに呼ばれて、今度は丸長造船所に5カ年間工場長としていました。またそこを辞めて自分で造船所やったりした。

これまで造った船ですか？ 数えたことはないが、5,60隻位はあるかなあ。カツオ船も、一本釣り船も、マグロ船も造った。木船から、ファイバー船から、いろんな船造った。

(幸真丸を造っている写真指して) これはミーグワ太郎といって、もう亡くなっているけど、那覇地区の國吉真太郎さんの幸真丸(3ト)造っている所。表の肋骨組んでいるのが僕です。こんな船で大九、宝山に行った。これまで5ト未満の船は向こうに行っていないが、この3ト船が初めて行ったわけです(笑い)。

あれから5ト未満が大九、宝山、尖閣列島まで行くようになったのは、この船が魁ですよ。

とにかくいろんな船造りました。

思い付くだけでも挙げてみると、一本釣り船、底延縄船では、生榮丸(船主：我那覇生義 7ト)とか、慶豊丸(渡慶次次郎 15ト)、第一漁徳丸(山城弘吉 7ト)、第八協有丸(宮里弘 15ト)、瑞幸丸(渡嘉敷真厚 15ト)、大福丸(我那覇生常 7ト)、真隆丸(國吉真隆 4ト)、勝漁丸(志堅原勇 15ト)とか造った。また伸三丸(石垣真三郎 8ト)と成吉丸(宮城政弘 8ト)、徳吉丸(宮里政徳 7ト)と3号幸徳安丸(伊差川盛忠 8ト、のち船名替え、8号安洲丸)は同じ形で4隻造った。漁伸丸(國



幸真丸(3ト)を建造中、1964年5月

吉真勇 6ト)は最期の木造船だった。大きい船は皆尖閣列島へ行っていました。マグロ船も沢山造りました。徳豊丸(國吉真一 23ト)とか、弘奈丸(山城弘行 15ト)、姫丸(田端某 7ト)、生福丸(与那嶺幸栄 15ト)、得将丸(山内得信 15ト)とか、造りました。

鱸丸型 肋骨 どうなして曲げた？

鱸の丸形作ったのは宮里弘兄さんの第八協有丸と山城弘吉の第一漁徳丸。そのあと高江州昇兄さんの安洲丸も丸型にした。鱸が普通角船だけど丸船だった。洋船みたいに、昔の和船型の肋骨だったら、大概の人は組めますよ。洋型の肋骨を組んで船を造れる人は一人もいない。洋型の丸型の船を造れるものは、僕だけだと思う。

丸型の船造ったら内地から船大工が見に来て、言っておった。あんた 9メートルの船の外板を、どんなにして曲げたの？ それにしてもよく曲げたなあ。ドラム缶を半分切って水いっぱい入れて、焚いて、これに苛性ソーダを入れると曲げやすくなる。傷もなく曲げてあるから、大きな船ならRがあるから曲げやすいけど。こんな 10ト未満の船を、どんなにして曲げたのかと珍しくしていた。

また肋骨を組みなさいと言ったら、斜肋骨を組めるのはいない。肋骨の組み方が違う。丸型の船を斜肋骨、カントフレームといって、裏墨出し型は難しいよ。日本型の船に洋型の船を造れと言ったら、正肋骨にしたらカントフレームが全部斜めになってしまうと釘を打ちようがない。斜肋骨という独特なものがあるそれをスマントを組んで造れと言えど造れない。僕が丸鱸を造ったが、沖縄では僕 1人しか造らなかった。

糸満、琉球造船の大工があんたみたいに原図描いて、どこも削らんで合うというのを初めて見たねえと言っていた。

大シケ 船走らしても 波に乗り上がる

山城弘吉は言うていた。僕が造った第一漁徳丸、彼はこれで、相当尖閣列島行っている。新造船造って行った時、親父と叔父 3名で行って、もう大シケで、この船避難できない。もう全速力で機械を回して、こんなにして走って、もう後ろから波受けて、もう突っ込むなあ、今度はダメだなあと思ったが、ポンと上がったっていたよ。これで助かった。

宮良さん、最高の船造ってくれたよ、と感謝していた。僕はその時は、弘兄さんの協有丸と弘吉の第一漁徳丸 2隻並べて造っておった。僕の家内の親戚の安仁屋宗栄さんも船造らしたけれど、船ないし、待てないから、



徳豊丸(23ト)の斜肋骨とビーム(梁)取付け。(1969年8月)

宮崎の東造船に行ったんです。東造船は宮崎でも一番仕事が上手な人でした。あの人の所で泰久丸を造らしたんです。造って、沖縄に持ってきたら、もう前が低くて突込んで、どうにもできないと言うわけ。沖縄の海の事情あまり知らなかったんじゃないか。僕がそれを頼まれて改造したんです、前の方を。そしたら造った東造船の棟梁が見に来て、宮良さんそれにしても見事だねえ。自分が造った船かなあと思う位変わっている。形が全然違うよ。沖縄にすごい船大工がおると話は聞いたけど、あんただなあと言っていました。

気に入らんと壊し 納得するまで 造り直す

相棒の久高成一が、自分は宮古から八重山から馬天から、あっちこちで働いて仕事したけど、大将みたい仕事できる人はいない、沖縄一だ。お前、またアンダグチ(おべつか)して、嘘つけ！と言ったら、ブリッジとか造る時は、普通壁なんか細かい両刃鋸でやるけど、よくガンドノコであんな細い仕事やるさあ。あれなんか人が真似できん。それに図面引くさあ、原図、肋骨の型出したら、少しずつ削りながら全部合わせていくけど、大将は全然削らんままで、ピシャと当るさあ、こんなのは初めて。

いや、削らんでも合うのが当たり前、当らんのは正面図、側面図がおかしいからよ。僕は徹底的にやるから、自分が納得いくまで追求してやる。だからピシャと合うわけ。僕は職人達に厳しかった。造らして、気に入らなかつたら、何遍も直せさせた。それでもだめだったら、船主を前にしてでも、全部ぶっ壊して捨てた。ちゃんとやれ！ 手間は俺が払んだからと。自分の納得いくまで、仕事させていた。だから、経費はいつもオーバーして、殆ど儲けはなかった(笑)。



上段：左より第八協有丸(船主宮里弘 12ト)、国丸(同松川国男 5ト)、第三安洲丸(同高江州昇 8ト)、
下段：同、伸三丸(同石垣真三郎 8ト)、漁伸丸(同國吉真勇 5ト)、瑞幸丸(渡嘉敷真厚 15ト)。

いずれも一本釣り、底立延縄を操業し、尖閣諸島を主な漁場として操業する。

糸満の松川国男さんの国丸の前に、上原亀市さんの市丸を造った。糸満の漁師達が言っていた。こんなに魚を釣る船はいなかったねえと。この船造って 2 ヶ年目、糸満旧正だから与那国沖で大漁して帰ってくる時に、多良間で浅瀬に乗り上げて、船割って捨てた。

そしたら船長が僕の所にまた船造ってほしいと来た。いや造らん。あんたのは何回造っても性が無い。船粗末にする人は 2 回も 3 回も同じことする。もう造らん、別の人に造らせと言った。

造った船 大半 尖閣に出漁 大漁船に

吉本春起が、尖閣列島にカーミカキヤー(亀捕り)しに行った。向こうで泳いでおったらあのウキムルー(カンパチ)よ。群れて、もう前が見えない位おって、前には泳げなかった。もうそれどころじゃない。底(立)延縄なんかで、皆向こう行っているさあ。これだったら 1 時間で満船するんだから、食ったらもう船沈めたんじゃないかなあ (笑い)。尖閣列島には、あんなに魚がおるかなあと言うておった。

僕は那覇地区とか、糸満、浦添漁協、宮古八重山とか、あっちこっちの船を造りました。大きい船だと皆、尖閣列島に一本釣りとか、底(立)延縄、電灯潜りで行っています。

僕が造った船は皆大漁船だと言っていました。那覇地区でも、糸満、浦添漁協でも、1 番から 3 番は、大体が僕が造った船だった。僕が造った船だから大漁するのではなく、船主が優秀だから、腕のいい船長だから、番に入ったわけです。

浦添の志村武尚は、僕が造った尚丸を尖閣列島に持って行って、電灯潜りをやり始めた。そのあとから、あっちで電灯潜りが盛んになり、浦添の美紀丸、秀吉丸とか、那覇地区の得将丸、八潮丸とかが行き出したわけです。志村は尖閣列島でもういっぱい潜っているから、どんな魚がおって、どういうものがあるということは知っている。一本釣りも、マグロ、ソデイカ釣らせて、グルクン(タカサゴ)の追込みさせても、あれに敵うのはいない。

高江州昇兄さんは、那覇地区では一本釣りさせてもあの人に敵う人はいなかった。安州丸は尖閣列島に通って、毎年水揚げはトップクラスだった。あとから一本釣りからマグロ船に替えたけど、マグロ釣らしても優秀だった。最初にこっち(沿岸)でホンマグロ揚げる船は安州丸と決まっている。僕はあの人の子の船 2 隻造った。志村も、昇兄さん、弘兄さんも八重山から、こっちに来た八重山上がりですよ。

八重山上がり 優秀 尖閣漁で活躍

一本釣りでも、マグロ船でも、八重山上がりが全部トップクラス。何でかと訊いたら、この志村が言うていた。君は分らないが、自分達が小さい頃は、今はウェイトスーツもあるけど、あの頃はパンツ 1 枚着けて、朝 8 時から 12 時までずっと泳いで、ご飯食べて、また陽が暮れるまで泳がされておった。口も蒼くなって、寒くて死ぬんじゃないかと思う位鍛えられた。また潜りでも、20~30 尋(約 30~45 メーター)ナーも潜らんといかんさあ。

途中でバーキレテ(息が切れたら)、舟の上から見ているから、危ないと思ったらすぐ引き

揚げてくれる。息吹きかえして少し休んで、また潜って、もうこんなきつい仕事を続けていたら、もう 40 歳までは命は持たないと思った。あの時の苦労を考えたら、今のは遊びだよ。仕事の内にも入らん。そういう苦労があったから八重山上がりには優秀、那覇地区でも、糸満でも全部優秀。だが、八重山上がりといっても、純粹の八重山の人には漁師いない、皆寄留民よ。石垣市は、大川、登野城、石垣、新川の 4 カ(字)があるが、登野城の一番東と新川の西は寄留民。新川は沖縄本島から糸満、アガリグヤー(東小屋)、イリグヤー(西小屋)は宮古・糸満辺りが多い。

松川国男兄さんも八重山上がり、今はヘルニヤで漁師を辞めているが、私の造った糸満の国丸という 3 トの船で、尖閣列島まで一本釣りに行っていた。

お前、この船どんなして造ったか？ シケたら、普通の船はアンカー入れて、潮引いたら、艫が前になる。国丸は違う、全然後ろ前なることない、すぐ風に向かうから、仕事がやりやすい。皆が珍しくするよと言った。あの頃ファイバー船はよく転覆しよった。尖閣列島は潮が速いから、底にキールを高くして、400 本のバラス入れて、上から樹脂を流して固めた。それで船を安定させた。彼は魚釣らしたら、カジキ釣らしても、アカマチ釣らしても、糸満ではいつもトップですよ。

宮里弘兄さんは一本釣りや底延縄の名船長だった。僕が協有丸造ったら、尖閣列島で釣ったタイを、僕の所に持って来た。これどこから？ 尖閣から。沖縄にタイがいるわけないだろう。お前は分らん、滅多に揚がらん魚だ。わざわざ持って来た。だから、文句言わんで食べれと(笑い)。

宮城政弘は、八重山から来た当時、19 歳位で他所の船から歩いて、22,3 歳で独立した。僕が造った漁徳丸を買って、これを成吉丸という船名にして、一本釣りで尖閣列島行きだした。儲けたから、あれを売って、今度はマグロ船、ファイバー船を造らして、那覇地区でのミニマグロ船というのを彼が初めたんですよ。

僕がその船を改造したあと、朝早くドアを叩くもんだから、何かと思って開けたら、魚持って立っていた。クサフルヤー(クロマグロ)当たった。2 日で 500 万円あまり揚がったと報告に来た。彼は一本釣でもベストスリーに毎年は入っていた。

彼は成吉丸で、ずっと尖閣列島を行き来していたから、とても尖閣列島に興味を持っていた。



尖閣諸島に頻繁に行き来していた成吉丸(8 ト)と宮城政弘船長。

魚釣島の掘割 サンゴ隆起して？ 船入れない

この宮城政弘に、尖閣列島のことを聞いてみたんですよ。魚釣島の掘割のことを。

マサー、あそこに船避難できるんじゃないか？ 古賀さんがカツオ船やった時は避難港みたいに造られていたが、あそこには自分の船は入っていけない。何で？ 浅くなっているから。昔はカツオ船は入っていたんだらう。うん、その後からサンゴ礁が隆起したのかなあ。底にサンゴは生えてるか？ いや、サンゴは生えてない。石はそのまま、海苔が生えているだけだ。じゃ、サンゴは隆起してないじゃないか。サンゴは生えてなければ深さは元々これだけしかなかったはずよ。

でも、船が入れる所でないよ、伝馬舟なら入って行けるけど、機械船は入って行けない。政弘は、自分達の船は1.5～2メートルも喫水もあるから入って行けない。幅もないし、避難できる所でない。潮が引いたら干上がって船を壊す。波も荒いからガッタンゴットンすると言っていた。

今の船はキール式だと、プロペラだけでも直径1～1.20メートル位もあるから、喫水が2メートル以上はないと、海が深くないと、船は入って行けない。不思議でしたよ。サンゴが生えてなければ深さは元々なのに、今はなぜ船が入って行けないのか？ これがよく分からなかった。

(古賀開拓時代の写真を指して)。これが当時の写真、この写真を見て、やっとその理由が分かった。私はここを見たわけ。艫のここを、ここに舵を吊るすんです。ここにロープを付けて、ペラと舵を上げり下げたりできる船型ですよ。2艘のカツオ船が棹をさしながらバックして掘割の中へ、接岸しに入ってきていますねえ。機械付けたなら舵が触る。プロペラが触るから、船を傷けないために、エンジン止めて、舵もペラも上に上げて、棹さして後ろに寄せて来て接岸するわけです。古賀さんの時代はこのやり方じゃないとできない。これだと喫水が浅いから十分入れます。今の様なキール式の船と違って、ペラを上げ下げできるジョイント式の和船です。昔は沖縄の船は大体がそうだった。

僕が那覇に来た頃このタイプはあった。那覇造船所にいた時、石灰を作る隆起サンゴ礁をチービンから運んできた運搬船はこの式だった。僕も1隻やりました。エンジン据えれというから見たらこのタイプの船で、舵も上に揚げて、シャフトもペラも上に上げる様にして、ずっと浅瀬に入っていく式でやった。

ジョイント式で底が触らん位途中で上げて、下ろさせて、止めておく。僕が造ったのが最後の船だった。熊本の有明海で使う海苔養殖の船は今でもこのジョイント式でやっているはずですよ。



古賀氏開拓時代の魚釣島掘割。2艘のカツオ船が掘割を行き来、長棹をさして船を進め、岸壁へ接岸。(明治43年)

舵とペラ 揚げ下げ式 水深 6、70センチで 航行

ここにシャフトがあって、プロペラがこうあったら、ここにジョイントがあって、この中に入るようにペラも、舵も、上げ下げできるわけ。この上げ下げ式にすれば、喫水は実際はまだ勾配がある、6、70センチの深さもあれば、船は置けるんです。普通は水深 2 メートル以上ないと船が置けないですが。この写真を見るとプロペラを上下装置で上げる様にしたジョイント式で、舵も岸壁に来たら後ろに上げるわけです。あとは竿をさして中に入って来ます。

帆を付けて機械付けたなら舵が触る。ペラが触るから、船を傷つけないために、エンジンを止めて、舵もプロペラも上に上げて、棹さして後ろに寄せて来て接岸する。このジョイント式で上げ下げして入って来たら 6、70センチ位の浅い所でも行き来できるはずですよ。

(舵・プロペラ上げ下げジョイント式図を指して) この図見るとよく分かる。舵はこう吊して、また外して置いたりできます。またペラのシャフトがこうあって、こっちがジョイント部、これで上げ下げできるわけです。

で、ペラをキールンに触らん位に、上下装置で、上に上げたら、パッとボルトを挿して、ペラが下に落ちないようにする。船を航行する時、下に下ろすが、シャフトとジョイントがうまく噛みあわないと、少しでも芯が狂うともものすごく振動します (笑い)。

鹿児島山川造船におった時にも、十島村のこのタイプの船を 6、7 隻造った。各班で 1 隻造って、僕の班は慣れているからと 2 隻造った。

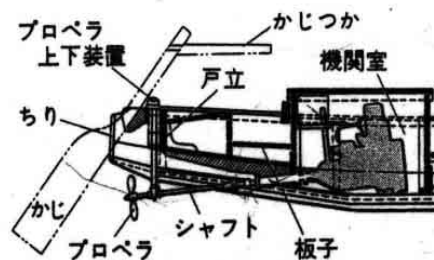
僕が中学の頃、西表から石垣に建築資材とか薪とかを運んでいる運搬船は三本マストで、機械は付けないで、この式で西表の川に入って行きました。西表は干潮になったら入って行けないから、舵を上げたり下げたりして入って行き、船を奥に置いて、材木を満載したら 1 メートルから 1 メートル 20 も入るから、その時は満潮に棹さしながら出て来ました。

そして帆を立てて、石垣へ向いました。僕が小学校の頃まで、風が反対だと、よく鳩間に入って来た。あの船が入って来たら、天気が破れて、もうシけるんですよ。島は石垣とは反対方向なるから (笑い)。

結局、古賀さんの船は、舵とペラが上げ下げのジョイント式だから、掘割が浅くても入



艫を前にして、棹さして船を進めている。舵とペラ上げれば、水深 6、70センチでも航行できる。



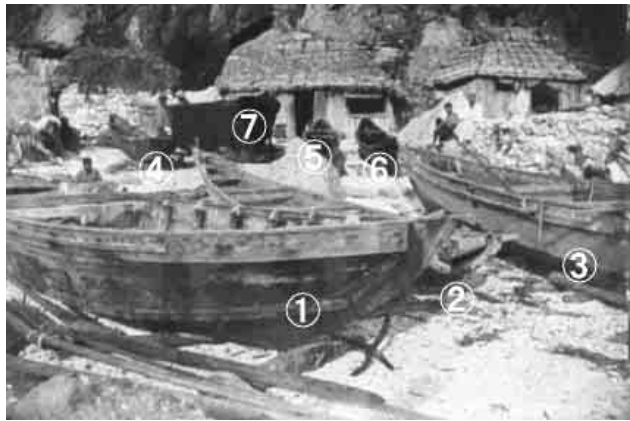
舵・プロペラ上げ下げジョイント式図

って行ける。2,3トのカツオ積んでいる船でも、6,70センチ水深もあれば行き来できます。後ろを岸壁に向けて入って来るんです。外で方向転換して、後ろ向きの方が操船しやすい。

尖閣列島は島の周辺でカツオは沢山釣れるといますから、古賀さんの時代は、相当押寄せてくれば、機械付けない船でも、帆を立てて帆船だけでも十分やれたのではないかな。でもやっぱりカツオ漁は発動機船じゃないとできないですねえ。

古賀さんのカツオ船 大きさ 7,8ト?

(南小島の船置き場の写真を見て)、これは南小島の洞窟の前ですか。天気が悪くて、船を陸揚げしているのかなあ。これ(⑦)は船みたいだが、真っ黒くて分からん。これ(④⑤⑥)はサバニです。このサバニはエサ採る時に使った。エサ採る時に網張る時に、2隻か3隻位並べて使ったはず。潮が引いたらカツオは下ろせないから沖でアンカー下ろしてから、これにカツオを積んでから浜、納屋まで運ぶわけです。



南小島の船置き場 ①②⑥：カツオ船、前掲写真と同一船か？
③④⑤：サバニ エサ採り使ったか？ ⑦：不明 (明治43年)

この3つ(①②③)はカツオ船ですねえ。アンカー1つ見える。こっちの艫見ればやっぱり舵とペラが上げ下げできる装置ですよ。この3つの船は魚釣島の写真、

掘割に入ってくる船と一緒にようです、同じ船か、同じ型の船ですねえ。造りで分かる。3枚ハギですから、キールがあって、和船の場合はカーラ(敷、船底板)といいます。左右に棚(側板)が付いて併せて3枚作り、3枚ハギです。この上棚と下棚の継ぎ手がよく擦れるから角木を入れた。この船は入ってない。入ってないけど、その代わり側からこう板をくっ付けてある。これ見て分かりますよ。

昔は帆船だったはずだからこんなに出ている、機械がなかった頃はこれに櫓を付けて、八丁櫓といって、両弦の後ろの方に、前は櫓が返せないから、4名ずつの8名で漕ぐ、これが櫓の土台、横に入っているこれです、これが8丁櫓の出た所です。

大体の大きさ？ ちゃんと見えてないからよく分からない。当時の船だったら、全長45尺だから13メートル位か、幅は長さの4分の1未満で、和船は幅は余りなかった、狭かったです。8尺から9尺、2メートル40位か。深さは船の幅の2分の1が標準と決まっているから1メートル50位。喫水は80から90センチ位か。船は恐らく満潮時に入ってきた。満潮時なら1メートル50もあったはずだから。で、船の全長13メートル位、幅が2メートル40位。深さが1メートル50

位の寸法だと、屯数は排水量、積載量を基準するが、僕の場合は長さを基準に見ると7、8トン位になるかなあ。

巻揚げ 尖閣 岩礁デコボコ コロ使えない

鳩間島は、僕が中学卒業した時に、カツオ船は深い所から回ると速いから、近くから入れるようにと、漁協が部落全部男の人はテコなどを持って行って、干潮時に相当潮引くから、このサンゴ礁、平サンゴ、テーブルサンゴとかできていたから、これを割って、幅40メートル、長さ20メートル位のウキバ(簡単な掘割)を造った。だから船は遠回りせず、こっちを通って船は入れる様になった。テコだけで発破使わずに、割とサンゴは軟らかく割りやすかった。これは2年に1回位かなあ、またサンゴができて浅くなるから。

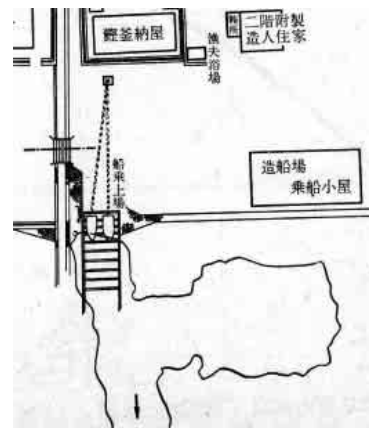
だけど魚釣島は、サンゴ礁じゃなくて、硬い岩、岩礁だから、古賀さんはあの掘割造るのは大変だったんじゃないか。発破使わんとあれはできない。大変難儀したはずよ(笑い)。

(古賀村の見取り図の船巻揚げ機を指して)

これは私達の時分まで使っていました。石垣でも、鳩間でもやっていた。固定したものに船からとったロープを巻くんです。八重山辺りは干潮と満潮の落差が1メートル80~2メートルもあります。大潮の時は干満差は2メートルもある。昔の人は潮の干満を利用して入って来て、魚を下ろしたりした。また船を陸揚げする時は干潮の時には、またコロを敷いて、これをタグラサンと言ってましたが、これで船を揚げて行くんですよ。2人と2の8名位で押しながらグルグル回す。人間がいる。時間が掛かる。

鳩間では船が3隻あったが3隻ともこれを持っていた。冬カツオ漁が終わったら、船を陸に揚げて置く。巻き上げるとビービーと鳴るから、ビービーで揚げるとも言った。重量でオイルをかけながらやるけど、重さでビービーと鳴る。今これ作れと言ったら私は造れますよ。それから焼玉ができて、ウインチ(巻き上げ機械)をギア(歯車、伝動装置)でやるようになった。今の巻き上げ機はこれの応用です

あとこっち、これはコロじゃなくて、線路みたいに木を敷いて、滑らしていますねえ。今もこれ東北の方ではやっている。魚釣島は岩礁で、デコボコだから、コロなんか使えるわけない。こうして線路みたいに組んで、木を組んで横に敷いている。船をこれに持ってきて、上から引っ張って、これは、コロ下ろしじゃなくて、スレート下ろしとか何とか言いよった。これがそうです。これ木を敷いて、船乗せて、タグラサン回したら、軽く揚がりますねえ。僕も安洲丸3号を造る時に、これに似たヘッド下ろしをした。線路のようにキール2つと仮板敷いて、グリス塗って、この上を滑走させていました。



明治40年代の古賀村見取り図に記された船巻揚げ装置。手前は掘割。

尖閣 中国の伝統的漁場?! 絶対嘘 来たのは最近

最近、尖閣列島に中国公船が押しかけて来て、怖いから、皆行かなくなっています。

魚は間違いなく釣れる。だから尖閣列島は中国のもので、伝統的漁場だったと言っている(笑い)。あれは真っ赤な嘘ですよ。島を盗りたいから、あんな大嘘言っている。

終戦後すぐ大吉丸が行った時も中国の話聞いたことなかった。那覇地区のオジー達も戦前、尖閣行っていたというが中国船の話ない。戦後も行ったし、糸満からも行っていたが中国船見なかったと言っていた。

大正時代に漂流船が流れてきて、古賀さんがそれを助けたもんだから、向こうから感謝状がありますよ。僕は八重山の博物館で見たことある。もうその程度ですよ(笑い)。

1968年に石油が出るようになってから、中国は尖閣は自分のものと言い出して、中国船が来るようになった。78年に武装した中国漁船が200隻余り押しかけてきた。あの時大変だった。でもその後しばらく来なくなつて。来たのはほんの最近ですよ、漁船が来て操業するようになったのは1990年頃じゃないかなあ。保安庁が尖閣警備しているからよく知ってますよ。どうだったかをちゃんと情報公開すればいいのに(笑い)。

とにかく、前は来ない。中国の船は進貢船みたいな船、あの船形から見ても、漁船じゃない。ただ人と荷物を積んで運ぶ船、あんなのです。ああいう船形ではカツオ釣ったり、マグロ釣ったりできるわけがない。カツオは生きたエサ使って、鳥巻き見て追っかけていくし。また一本釣りもできない。それに中国は海図を拡げて、尖閣列島へ来るといった操船技術はなかったはず。中国の伝統的漁場だというなら、どんな船で来て、どんな漁をして、何を獲っていたのか、ちゃんと見せてほしい(笑い)。

一本釣り船 燃料タンク修理 爆発事故 遭う

1972年に復帰したが、丁度復帰前後からだった。沖縄では一本釣り船は段々少なくなった。マグロが儲けがよかったから、大きな一本釣り船は、皆マグロ船に替えて行った。成吉丸、協有丸、安洲丸とかもマグロ船に替って。それに僕らの仕事も、新造船もマグロ船が多くなってきた。國吉真一兄さんの徳豊丸なんかはその魁です。那覇地区で一本釣り船は段々少なくなった。今度は鹿児島、宮崎とか、長崎、大分とかの船が来るようになった。復帰前はアメリカ統治だから入れなかったが、復帰したら、もう自由に来れて、操業できたから。もうこの泊港は県外船でいっぱいだった。こっちを基地して、宮古八重山から、与那国、尖閣列島に行っていた。もう2,30隻余りはおったんじゃないか。大体が19トンの大きな船だった。

あれは平成10年2月6日だった。鹿児島の第18幸洋丸(船主田畑19ト)の船主が僕の所に来て、燃料タンクが仕切りが全部はがれて、燃料入れても、もうバッテリーバッテリーとして、もう仕事ができない。片一方に積んだら、片一方に傾いて、船員がもう仕事やり難いと言って、海にも出られんお願いだからやってくれと来た。いや、僕は忙しい、またこんな危ない仕事やらんと断ったが、困っている様子見て、仕方なく引き受けたよ。

燃料抜いて、1日は冷やしておきなさいと言ったが、タンクに燃料も残っていた。これを抜いて、タンクの中で、暗いから電球点けてやっていたら、バッチと電球の割る音と同時に爆発、タンクの中は炎に包まれた。タンクのマンホールは直径 30 センチ×40 センチの楕円ですよ。もう入る時はようやく入ったけど、飛び出る時は一瞬、飛び出しました。目を閉じててもマンホールは見えたから。あとで警察も、病院の先生もあんな狭い穴から外に脱出できたのに驚いてました。もう一瞬で飛び出したら、もう機関場は全部炎でした。僕は火ダルマのまま、もう我夢中でヘッドカバーに乗って、デッキに飛んで、すぐ海に飛び込んだ。救急車が来て、病院に運ばれた。

全身大火傷 意識不明 4ヶ月3日後 目覚める

救急車が来て、担架で病院に運ばれた。もう真っ黒く焼け焦がれているから、もう家内が来て見たら、これ人間かなあと、サツマイモ焼いて転がしたようだった。全然助かると思わなかった。医者も言っていた。自分も120%諦めていた。あのロシアの子供が北海道に来て手術して帰ったという、あの先生に電話したら、こんなに焼けておったらとても難しいと言われた。開き直って、だめで元々、やるだけやってみようと、もう手術も、体も衰弱して、できないで3回に分けてやったらしい。友達がしょっちゅう見舞いに来ておったらしくて、包帯で全部巻いて、口から鼻から、管通して、もうミイラ男みたいに巻かれておっって、これ生きているんだなあと。で、先生、包帯はいつ取れるかと聞いて、その時来てみたら、顔はもうこんなだったって。

これ見てびっくりして、この男は自分の顔見て自殺する。苦しませないで、そのまま死なしておけばよかったのにと、友達なんか思ったらしい。あとで、それ聞いて、お前達の言いそうなことだと笑いましたが（笑い）。

幸か不幸か、僕は全然目が覚めない。意識は回復しないまま、けど包帯は取れて、段々よくなっていったんじゃないかなあ。皮膚も再生してきて、髪の毛も、眉毛も生えてきた。事故に遭って丁度4ヶ月と3日目でしたよ、ぱっと目が覚めたらベッドの傍に次女が座っていた。今日何日？ と声掛けたら、びっくりして、もうそれから病院中が大騒ぎ、先生と看護婦さんが飛んで来ました。宮良さん、あんたの生命力には参ったよと先生が言ったから、いや、これは先生の力と医学のお陰です。ありがとうございますとお礼言いました。

僕はベッドに4ヶ月と3日間、ずっと意識ないまま眠っていて、その間に不思議な体験、臨死体験もしましたよ（笑い）。

今でも 時々 木船造っている 夢見る

傷は回復して、殆ど身体は元のままです。(衣服を指して)、だけど、この辺見たら少し真っ白らカーの所も少しはある。事故に遭ってから体力が相当衰えました。もう前のように仕事できない。皆に迷惑かけたらいかんから、工場閉めて、船大工を辞めましたよ。もう辞めてから15年はなる。今でも木造船を造っている夢をよく見ます。糸満の松川国男兄さん、あの人もヘルニアで海の仕事辞めて、国丸も売って、もう5年余りなる。その話したら、僕もアカマチばかり釣っている夢見るって、じゃ一緒だなあと(笑い)。



松川さんと国丸の写真の前に、思い出話に花咲く。仕事辞めても、お互い見る夢は、現役時代のことばかり

あの当時は忙しかったが、楽しくて、元気あった。一本釣船の慶豊丸と成栄丸を2隻並べて造った時があった。僕はその時は責任棟梁。図面も原図も全部引いていたから、そしたら別の大工の棟梁が、僕に、お前若造の癖にと、酒食らって何じゃかんじゃと言っていた。頭にきたから、今日は身体2つに割いて懲らしめてやると、こいつを掴まえて製材機の所まで引張って行ったよ。そしたら驚いて泣いて騒ぐから、造船部の親父が飛んできて、ヌーガ(何事か)! ミヤラー(宮良)、ヌーガ! ?と言いながら、僕がスイッチを入れるの見て、急いでブレーカー落としたわけよ(笑い)。あの頃は僕も若くて、誰も怖がって寄り付かない位元気あった。今はあの時の百分の1も元気ない(笑い)。



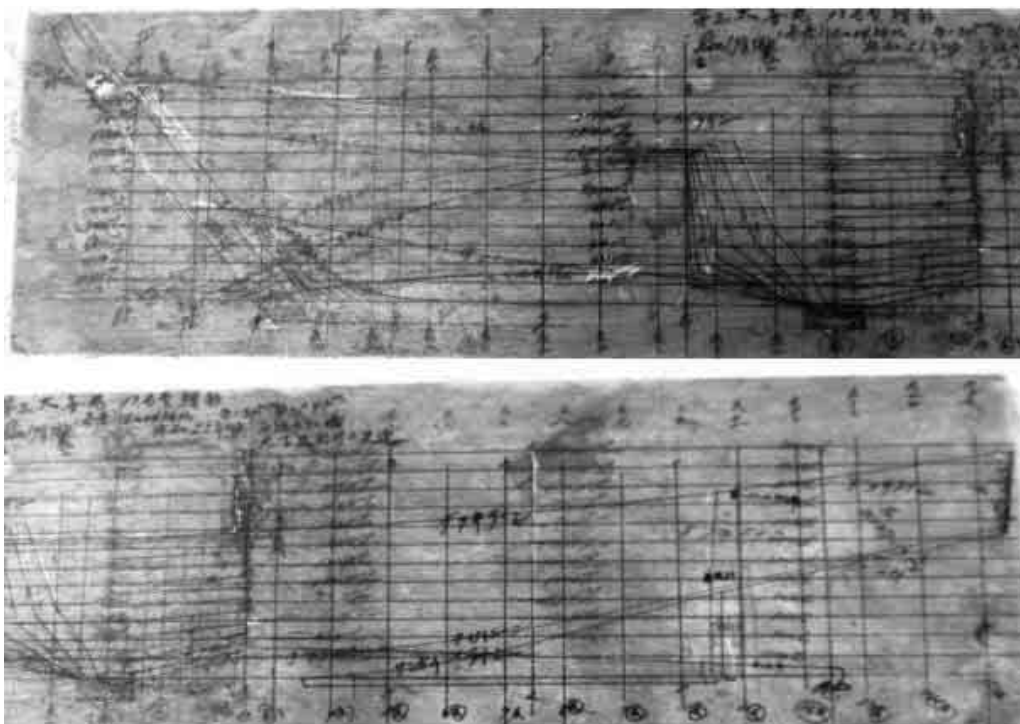
今でも木船造っている夢を見る。造船場で忙しく動き回っている途中でよく覚める。写真は徳豊丸(23ト)の造船光景(1969年) 左:船体肋骨組み、中央:1つ1つ骨組をていねいに仕上げる 右:船体仕上げ

あの頃は漁も盛んで、船も沢山おって、港は活気があった。船造る人も多かったから那覇だけでも造船所は4、5箇所はあった。もう当時の海人はもう皆年取って亡くなっておる。おっても引退している。子供は継がないし、漁師はなり手もない。

今は船造る人もいないから、船大工も段々少なくなっている。船造っても、今はファイバー船ですよ。もう木船は造らない。あの東九州造船所は木船では、日本一でしたが、向こうも仕事なくて、会社閉めてます。あつちは全国から優秀な船大工が集まり、木船の造船技術は最高でした。これが消えてしまうのは残念ですねえ。僕が船大工になったのも、木船が好きで、もう懂れて、ほんと魅力があります。奥が深くて、やり甲斐ありますよ。

小さい頃に見たカツオ船第三大喜丸（船長吉川蒲戸 13ト）、あれ素晴らしい船でしたよ。この10分の1の模型の船図を引いてみました。もし夢が叶うなら、あんな昔のカツオ木船、もう一度造ってみたいですねえ（笑い）。

（了）



板に描かれた木船の設計図、第三大喜丸13ト型カツオ船図、(縮尺 1/10)。上図：表部分、下図：艦部分。

高橋 一雄 たかはし かずお（鹿児島県 指宿漁協）

1956年(昭和31年)鹿児島県指宿市に生まれる。59歳(2015年時)。

3代に亘る漁家、鹿児島県立水産高校を終え、遠洋カツオ、マグロ船に乗る。大型マグロ船(300ト級)の船長を勤め、29歳(1989年)下船、家業の栄丸(19ト)に乗る。以来尖閣諸島、沖縄近海に出漁。30年余に亘り深海一本釣を専業する。尖閣漁場の特長として、近場で浅場深場の漁ができ、マチ類など底棲魚の好漁だが、漁は次第に減りつつあるという。

氏は、近年漁業の全国的衰退に伴い、那覇を基地に尖閣に出漁している鹿児島県外船も、高齢化、船員不足等に加えて、後継者がなく、氏ら現役世代で終るのではと懸念している。氏らの国境漁業の果たしている役割を考えれば、実に憂慮すべきである。

**高校卒業し 遠洋カツオ船 マグロ船に乗る**

私は鹿児島水産高校卒業して、すぐマグロ船乗った、外国の方に行く大型のマグロ船に。水産高校出て、すぐマグロ船乗ったのは、鹿児島の指宿からは、私なんかが最初ですよ。2クラス70名位卒業したが、あとはトロール乗ったり、大型のタンカーとか、貨物船なんかに乗ったり、マグロ船は少なかった。

卒業生の半分位船に乗って、あと半分は陸(おか)の仕事だった。

私なんかはマグロ船に乗ってから、あとからは5,6名から7,8名乗るようになった。もう最近に乗る人もいないし、今は減船して、マグロ船は少なくなったもんねえ。あの時は焼津の昭和漁業株式会社、同じ会社で、カツオ船も、マグロ船も持っていた。学校から紹介されて行ったら、マグロ船帰ってくるのに半年、1年かかる、航海が長いもんだから、カツオ船に先に乗った。カツオ船の船頭していた竹内光政兄貴がまたマグロ船の船頭していたから、とにかく入ってくるまで、弟の征夫さんのカツオ船に乗ったですよ。



マグロを追って世界の海をマグロをかけ回った。延縄に掛かったメバチを引き揚げる。アンゴラ沖、1975年頃?

カツオ船 1年位 トラック諸島で操業

カツオ船も1年間乗ったけど、昭和丸という300トの船で25,6人乗っていたかなあ。あの当時は、カツオ船はトラック諸島といって、あっちの方まで行きよったですよ。

大漁した時は1日15トから20ト位、あそこは平均に天気もよく、風だった。で、12,3日から15日位操業やるから、250トから300ト位獲れました。それを焼津に水揚げした。

カツオ船は魚釣る人が上手いか、下手かによって、釣る場所が違う。船の前の角が 1 番魚食うから、こっちに座る 3 人が 1 番上手い人、ここは魚釣るのが上手くなければダメ。

それから左舷に上手な順に、1 番 2 番 3 番と座るわけですよ。年数が上の人とか、腕がいい人なんかは順番に並んで釣って、下手っぴーはどうでもいいような場所ですよ。だから私なんかは 1 番端っこ、こっちの方で釣りながら、バケツにエサ持っていったりして(笑い)。ここにエサ撒きがいて、エサがないと言ったら、下の者が甕から、バケツにエサ掬って、持っていくわけですよ。(笑い)。エサの小魚をバラ撒くと、カツオは急いで船に寄ってきて食いつく、海水を散水すると、カツオは興奮状態なるから、擬餌でもバン



揚がったのは粋のいいカツオ。獲物を前に疲れも吹き飛ばす。トラック諸島付近の漁場近海にて、1975 年頃か？

バン釣れるわけ。カツオが食いつくと、竿を勢いよく後方に投げるようにして、釣り上げるんですよ。そしたら、針が空中で外れて、魚は甲板にうまく落ちわけですよ(笑い)。釣り針の返しがないから。だけど、食いが悪い時は、普通の釣り針にイワシを付けて、エサを泳がして釣るが、これが釣針だから、魚釣れたら、このまま脇にこう抱きかかえて針を外して、魚落として、またイワシを釣針に付けてやるわけですよ。

遠洋マグロ船乗る 7 年目で船長する

こんなして、カツオ漁 1 年位やっていて、マグロ船に乗り換えた。このマグロ船も、同じ昭和丸とか、昭恵丸とかで、300 トンから 400 トン、乗組員は 22 名位でした。

航海日数は 1 年から 1 年半、行く時は太平洋、大西洋を操業したり、パナマ越えて、またカナダ沖で仕事したり、アフリカとか、地中海の方も廻っていったりした。南だと、オーストラリアの西側とか、アフリカのケープタウンの沖とか、またアフリカの西の方で仕事した。20 から 29 までマグロ船に乗っていたから、もうあっちこっちの海行って、海では世界一周廻っているようなもんでしたよ。

結構マグロは獲れました。大漁ですと 1 日 5 トンから 6 トン揚りました。アフリカのケープタウン沖は、寒くて、シケが多かった。カナダ沖も寒かった。西アフリカ沖は天気もよく、風いでいた。アンゴラ沖は結構大漁でしたよ。

でも、今乗っているこのマチ船は、マグロ船と比べたら、仕事自体楽だよな。マグロ船はもう睡眠が少ないもん。うん、マグロ船やったら、朝方の 3 時か 4 時位から、縄をはえて、4、5 時間はえて、それで仮に 9 時位に終わったら、昼過ぎの 12 時、1 時位に、縄を揚げ始めるから、それまでご飯食べて、ちょっと寝て、仮に 1 時位から揚げ出したら、最

低でも11時間、12時間掛かりよったから、それから片付けして、投縄で、あとはもう自分の時間がないわけですよ。大型の場合は2交代で、縄入る組と寝る組がありよったけど、操業続けてする時は寝不足でしたね。

ラインホーラーといって、縄を巻く機械があって、それなんか巻き込まれたりして、またこうハンドルを持って、居眠りしたら、釣りをそのまま巻いたりして、それで釣り掛けたり、吹っ飛んだりした事故が結構あったですね。

寝不足で集中力なくなって、それに、陸(オカ)のみたいに、土曜半ドンとか、日曜日休みとかない。仕事する時は揚げ縄が終るまで毎日きつかったです。体力的にも50位までが限度かねえ。40代でも、シケやら、連続操業が何日も続けば、かわいそうだという位、僕なんかまだ20代だったからよかったです。

でも、いろんな経験して、よかったですよ。結構沖縄の人も、宮古の人とか、沖縄本島の人とか、マグロ船に乗ってました。僕も5年目で、一応免許とって、マグロ船の船長もしましたよ、今でいう大型の3級、370トかなあ、遠洋マグロで焼津から出て、焼津まで帰ってきて、1航海、航海日数は1年近くでした。



遠洋マグロ船第七昭恵丸(370ト)と操舵中の高橋一雄船長

29歳 船下りて 家業継ぎ 栄丸乗る、

マグロ船は高給取り、船長もしたから？ いや、そうでもないですよ(笑い)。でも待遇よかったかもしれない。一番いい時代だった、給料に歩合、給料はしれたもんだけどねえ。歩合が結構大きかったよ、あの頃は漁がありよったし、景気もよかったからねえ。鹿児島でも、マグロ船は串木野、あそこにも大型のマグロ船がいっぱいいます。

自分達が辞めて、あとからはマグロ船は下火になって、ウチがいた昭和漁業もマルハの大洋漁業に買収されて、個人でやらなくなった。船も減船するようになって、串木野なんかのマグロ船もだいぶ減ったもんねえ。私が船下りて帰ってきたのは29。そろそろ30になるから嫁さんも貰わわんといかんし、それに、ウチも船主だから、もう弟の吉則なんか高校卒業してから、ウチの船乗ったけど、ウチは長男だから跡継ぎせんといかんし。その時は



初代栄丸と父の高橋吉助。景気よかった建網時代

小型船舶免許持ってなかったから、それからだねえ。私が栄丸に乗ったのは30だから、その時には親父達はもうこっちにきて、尖閣諸島にも行っていました。こっちの泊港には、鹿児島的一本釣り船はいっぱい、地元(沖縄)もいっぱいおったし、今は全然いなくなった。船を辞めたり、マグロ船やらが増えたけどねえ。

南下する前 鹿児島で 深海底刺網 景気よかった

ウチの祖父さんなんかの時代は、小さな船で鹿児島湾内で仕事しよったです。

この栄丸造ったのは親父達の時代、で、ウチの親父の兄弟でしよった。親父が一番長男坊で、次男坊(高橋貯次郎)がいて、叔父さんなんか、兄弟で、建網(深海底刺網)しながら、4月5月まで建網しよったんじゃないかねえ。タルメ(メダイ)網というて、こう目の大きい、黒味がかった、ちょっと大きな魚を獲っていた。あと夏場は一本釣りしよった。ウチが高校卒業したのは昭和49年だから、復帰2年後です。その頃は尖閣なんかの話は聞かない。こっちの建網が近場でできたもんだから、それに漁があったですよ。私なんかは20前後の時かなあ、マグロ船から休暇で帰ってきて、このタルメを2、3日、4、5日手伝って、すぐ10万から15万もらえたりした。



メダイ (タルメ) スズキ科の魚
冬場が旬、刺身、煮付けで美味しい

あの頃は景気よかったし、ある程度魚古くなくても値段よかったですよ。そのあと養殖が盛んになってきて、段々廃れていって、それからです。ウチらが一本釣りに力入れてやるようになって、鹿児島近くでやって、十島、トカラ辺りまで行って、段々南に下がってきたわけです。

鹿児島指宿の船 復帰10年後 沖縄来る

建網も結構景気よくていい感じだったけど、それが漁がなくなって、これでいかんねえと言って、沖縄にきたんですよ(笑い)。

昭和47年の沖縄復帰の頃は、鹿児島船はまだ来てない。海栄丸、福栄丸とかの熊本船は早かったですよ、復帰してからすぐ来たはずですよ。鹿児島めぐみ丸とか、日吉丸とか、鹿児島市内の船も早く来た。鶴丸とか、指宿の船では田川さんの豊丸とか、芳栄丸(船長高木徹19ト)とか、網はしないで、一本釣りした船は早かった。めぐみ丸と一緒に来てねえ。芳栄丸なんか最初から一本釣りやりよった、この久米島の西とか、だから早く



初代栄丸から数えると、尖閣諸島での操業は30年になる。
写真は魚釣島沖のポイントに向かう栄丸(宮崎卓巳2013)

から尖閣に行っていたはずですよ。ウチなんかの船は遅かった。みつ丸(船長宮崎次雄)、高吉丸(船長高杉義男)とか、皆一緒にこっちにきたですよ。僕が26(1982年)位だから、復帰して10年後かなあ。沖縄が日本復帰しない前は、アメリカ統治だから、こっちに船は着けられないし、水揚げもできない。最初に来た熊本船も復帰してからしか来なかったですよ。

栄丸には30から乗って、親父は68に引退した、私が38の時かなあ、8年位一緒、親父が下りる1年前には、親父と交代で船長しやったから、平成7年まで乗ったかかなあ。僕が沖縄来て、今年(2015年)で30年間なるよねえ。

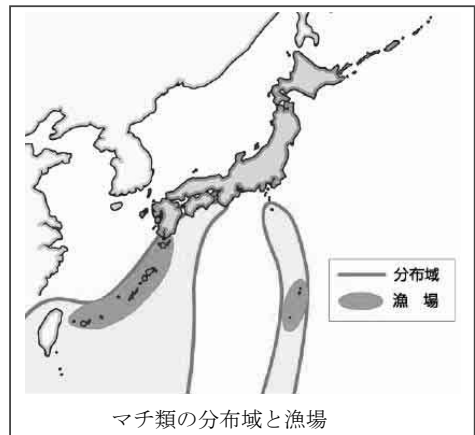
鹿児島から 尖閣、南西諸島へ 産卵期追って

鹿児島船は、1年の半分は、南に下りて、沖縄を基地にして、尖閣とかでやって、台風時期になると鹿児島の方に帰って、12月位からまた南に下りて、その順繰りで仕事やっている。

尖閣行くのは大体12月位、そこから与那国に移動して、そのあと宮古の方、東の宝山、大九とかに行く。7月、8月なれば台風時期だから、もう鹿児島の方の、奄美大島とか、あっちの海へ。

こっちの基地いるのは大体12月～5、6月位までかなあ。7、8月の台風時期になったら、こっちで漁できないから、大島、鹿児島へ帰る。

尖閣は3月位まではいいけど、あとは潮が速いから、よっぽどいい時期に行かなければ、なかなか漁はできない。だから大体が12月、正月前に行くか、正月あと、3月いっぱいまで。そこから与那国辺りに行って、4月5月と段々上の方に上がっていくわけ、産卵期を追うような形で、高吉丸さんも話してましたか、大体そんな感じだねえ。



魚の腹割ったら、こう子どもが入っている時もあるし、お腹の所から出ている白い卵ねえ、見たら分かるよ。その時期は、魚もまた脂があって、魚を箱に詰めていたら、脂でデッキが滑るよ、1番最盛期、産卵期の頃はねえ、1番脂の乗っている頃は、一番匂いというか、産卵期だから、1番漁があって。

やっぱし、魚自体も美味しいし、1番いい時期の魚だから。



尖閣諸島での一本釣りの操業光景、産卵期の魚を追って、12月から翌年の3月まで、島周辺で操業する。

尖閣行けば 水揚げ4、5ト 1日500、600キ 揚がった

こっちから尖閣行く場合は、最初は大正島に寄って行く。丁度大正島が1昼夜位かかるもんだから、久米島の南通って、直行で行くわけだけど、今日の朝に出港でして、明日の朝に着くわけですよ。丁度あそこで1日仕事をして、そこがダメだったら、また魚釣島の方に10時間位かけて行くわけです。丁度また夜走って、次の日から仕事できるわけです。

乗組員ですか？ 来た当時はいっぱいおって、7、8名乗っていたけど、今は5、6人ですよ。

尖閣行けば、1航海で4トとか、5トとか、揚げよった。そこで1週間から8日9日操業してねえ、漁がありよった。1日500から600キは揚がりよたもんねえ。そんなに獲れんですよ（笑い）。最低でも1航海3トは、持ってこれよった。

魚ですか？ 主にアカマチ(ハマダイ)、シチャーマチ(アオダイ)、クルキンマチ(ヒメダイ)、マーマチ(オオヒメ)とかです。あの頃は値段もよかったもんねえ。平均に800円とか1000円とかしよったもん。

尖閣 近場の浅り深り 漁できる

尖閣では同じ場近くで、浅りの魚も、深りの魚も釣れる。水深180メートルから150メートルでシチューマチ、クルキンマチが釣れて、またその近くでも、アカマチが200メートルから250メートルで釣れる。それに量も多く釣れるから、浅りでシチューマチ、クルキンマチを3時か4時位まで釣っておって、夕方なつたそこから30分位走ってきて、すぐまた深りの方に行って、アカマチなんかを釣るわけよねえ。



荒海に浮かぶ魚釣島、尖閣諸島は島近く、浅り・深りで漁ができ、いろんな魚の獲れる絶好の好漁場である。

夕方は食いがいいです。アカマチなんかも昼間はあんまり食べなくても、夕方なつたら、バタバターと、この魚どこにいたんだろうと思うほど釣れるんです。

夕方に結構当たる場合があるんですよ。

また浅りは浅りで、マーマチなんかも夕方なつたら沢山くる場所がある。昼間はあまり食わなくても、時間によって食う所あるのようねえ、どういうわけだか分らん、浅りでも、深りでも、時間によって釣れる場所は決まっています。

夕方なつたら食うような場所があつて、あつちはアカマチの時間ですよ、マーマチはこっちという感じで（笑い）。皆各々自分のポイント持っているわけですよ。勿論、朝早くも魚は幾らか食いますよ。でも1番やっぱり夕方がいいようねえ。夕方は早ければ、普通は4、5時位から日没位までねえ。

前はカンパチ ミーバイ 結構揚がった

尖閣ではカンパチとか、ミーバイ（ハタ類）みたいな奴もねえ、だいぶ少なくなったけど、ミーバイは結構揚がりましたよ。アーラ（深海ハタ類）も、昔は結構揚がりよった。アーラは鹿児島が値段はいいのよ。だから、ある程度荷ができれば、和数がまとまったら、飛行機便で送ったりする。

熊本の船で底縄の右豊丸、光丸なんか、底延縄であれ専門でずっとやっている。尖閣の方でも、あれがずっと東シナ海、あの辺ずっと、棚口（大陸棚縁部）の方でやってますよ。時期によって、こっち（那覇泊港）に船着けて水揚げしている。アカマチなんかも食うやろうねえ、殆どアーラミーバイかもしれない。自分達でポイント、ポイントを場所は分かっているから。



底縄船右豊丸が水揚げした見事なアールミーバイ。尖閣諸島、東シナ海は、まさに底魚の宝庫である。

尖閣 シチューマチ クルキン 小さい

けど、尖閣の魚は小さい、宮古八重山と比べて小さいけど、あつちは漁がありよったからよかった。最近台湾船が来たせいとか、あんまり漁がないようねえ。だけど尖閣の魚はあんまり大きくなならない。尖閣はシチューマチでも、クルキンでも、平均に魚は小さい、昔から。こっち与那国とか、宮古島付近に比べたら平均に小さい、何であそこの奴は小さいかなあと思う。

小さいけど、量は相当揚がりよった。1日に500から600和も揚がりよったし。船も20隻位いよったのに。獲り尽している？ いや、私らが行き始めた頃から小さいですよ。もう30年位なるけど、種類が違うか知らんが、元々小さかったです。



次々と釣り揚がるアカマチ、シチューマチ、クルキンマチ。またたくまに魚槽は魚でいっぱいになる。

シチューマチだと、たまには1和サイズもいるけども、普通は700から800グラムが一番上の方で、小さかったら300から400グラム位小さい。クルキンマチも大きなのは1和サイズもいるけど、小さいのはグルクンみたいな小さい、200グラムあるのかねえ

アカマチは大きいのだ2和とか3和位、けど数は少ない。あとは1和半とか、1和位、宝山、大九とかに比べたら、尖閣の魚は平均して少し小さいかなあと思う。

鹿児島でもアカマチは釣れますよ。尖閣と比べたら、1和半から2和位で、少し大きい。自分達がやっている所は、鹿児島近海、指宿、薩摩半島、あれからはあまり上の方に行かなくて、南の方だけです。自分達が行くこの場所でも、アカマチも、シチューマチも、クルキンマチも釣れる。クルキンは漁は少ない、少ないけど形は割り方大きい、800グラムから1和はある。鹿児島では、殆どシチューマチ。このシチューマチだけで70~80%ある。あとはアカマチ、クルキンマチ、マーマチが少し、まとめて20%あるかなあという感じ。

マチ類は値段的に沖縄の方がほんといいですよねぇ、小さい魚でも。だから助かっている。もし鹿児島で漁している時でも、鹿児島はある程度大きい奴でなければ、あまりいい値段しないから、小さいのは沖縄に送る、船のコンテナで。それでもやっぱり鹿児島よりいい値段が入ることが、ちょこちょこあります。台風来たらなお更ねぇ、だから、こっちは平均に小さくてもマチは値段がいいから、助かっていますよ。

魚少ない ポイント移動移動 流し釣り

沖縄の小さい船なんか、一本釣りはアンカー入れてやりおるもんねぇ。1人とか2人乗っている小さい船は。ウチらの船は、アンカー入れんで、帆を立てて、流し釣りです。

これだと同じポイントに間違いなく持っていけるから、それに今は一回ずつポイント、ポイントに上っていくやり方している。昔は魚がいたから、同じ所でずっとやって、そこからずっと流して行きよった。例えば、ここに魚いるでしょう、このポイントに道具やったら、ここの魚が食わなくなるまで、次から次から、交代交代で、ずっと入れて行きよった。同じ場所から何時間も仕事できた。昔は魚があっちこっちずっといよったから、そこから流していけば、また別の魚群に当たったりして、ずっと魚が揚がっていきよったけど、今は魚少ないからねぇ、限られた場所しか食わないから、こんなやり方しない。ここに道具やって、ある程度魚釣れたら、次のポイントに移動する。まあ魚探に反応があって、魚食うような奴も、そんなあと2,3回入



魚釣島南側沖を流し釣りしている栄丸 (高杉忍 2014)

れて行ったら、これ自体食わなくなっちゃう。それよりも1回ずつ上って行った方が、これが長持ちするというか、また釣れたら、何回も入れて、その魚を引っ張って行ってしまった分、元の所に行ったら、あまり食わなくなったりする、魚がどこかに散らばったみたいになって。それで、今のウチらの流し釣りは1回1回行んですよ、ポイントポイント移動して、その方がよく釣れるから。

大波 横から受けないよう 船回して 操業

尖閣で危険な目に遭ったことですか？ まあ、あっち行きや、潮が速いから、波が大きいですもんねえ、シケの時なんか、やっぱり波が大きいから気を付けなきゃ、だから天気の良い時なんか大きな波がたまに来るから、潮上りちゅうて、仮に風が北からでしょう。潮は南か、西から速かったら、魚釣る時は、船を北に向けて、風の方向に向けて、波を見ながらぐるぐる回すわけですよ。だから1回1回船回す時は、もう波を見て、今だなぁと思って グルーと回ってから、まあ真っすぐしてから、こう大きな波を受けるか、ある程度後ろ側の時に、大きい波受けるかして、回る時に大きい波受けないように仕事しているわけですよ。横波なったら転覆したり、大きい波だったら怪我したりしますから。それを心がけて、仕事してますよねえ、まあ潮が速いから波は大きくなるもんねえ。シケても、尖閣に比べたら、こっちの宝山、大丸なんかは、まだまだ波は小さい方ですよ（笑）。

尖閣潮速い 手製爪アンカーで ロープも700メートル

それと、尖閣なんかのように潮が速い所だと、アンカーがあんまり強かったらダメ、岩を噛んだまま、無理して引っ張れば、ロープが切れたりして、捨てちゃうから。爪のついたアンカー使う。これはあれ爪が伸びるから、それでアンカーが岩から外れる。また潮が速かったり、風が強かったりしたら、違った場所が噛んだりして、持ち上げたら、2本も3本もこう伸びている時あるよ。アンカーを揚げて、伸びた爪は、パイプ入れて、キリッと人間の力で、また曲げて、元に戻すんですよ。

アンカー入れる場所？ 尖閣では普通だったら、この辺(大陸棚)でアンカー入れるけど、波が大きくて、風が強い時なんかは、潮の速い時でも、この端(大陸棚の縁)の方に入れるわけですよ。今からこう落ちていくような角の所に、こっちは水深が150メートルでしょう、こっちから段々下がって深くなっていくから。下がり際の所に、ちゃんときれいに掛かるように、また、あんまり行き過ぎたらアンカーロープ切れるから、この縁の所にある程度きれいに掛かるにして。アンカーが海底から外れない時ですか？ タイラップという細い持ロープを、アンカーとアンカーロープに結んである。思いっきり引っ張ると、タイラップが切れて、アンカーが持ち揚って、外れやすくなるわけですよ。私なんか、アンカーロープは700メートル位持っている。だから天気が、風が強かったり、波が大きかったり、ドンドンと波が来ても、ある程度クッションみたいにして長ければ長いだけ、アンカー流されない



右：唐人アンカー（主に港での係留用）、
左：手製の爪付きアンカー（漁場で使用）

ですむわけ。普通は、大概 100 メーター水深あったら、まあロープは 200 メーターから 250 メーター位、もう天気の悪い時は、100 メーター水深に対して、ロープは 300 メーター位、潮が速かったり、風が強い時なんかは、だから 200 メーターに対してロープは 600 メーター位長くしますよ。

サメ釣って 共食いさせて いなくする

一本釣りやっていたらサメなんか多いですよ。尖閣は昔よりうんと増えている。だから島の近くでは、サメが多くてあまり漁はできない。魚釣島の周りにずっといるような感じで、ちょっとこう離れた場所だったら、そんなに出ない所もあるけど、前はそこまでひどくなかった。島の近くでも結構操業できたもん。幾ら魚釣っても、もうサメにやられて、全然道具ごしやられたり、さらわれたりするもんだから、1 回、2 回遭ったら、もうすぐその場所から逃げちゃうわけですよ。だけど、たまにサメ釣ってから、切って、落として、共食いさせます。今度もまた、与那国の南の中ノソネという所で、サメ釣ってやったけど、私と高吉丸とねえ、共食いさせた、あれでやりあだいぶ違いますよ。4、5 日は持続(もた)せるかは、その時の条件だけどねえ。1 匹で効く時もありや、3 匹位釣れなきや、効かない時もあるしねえ。サメの種類ですか？ あれ何サメと言うんだらうねえ、かなり大きいのは 100 疋か 150 疋、トラザメというのかなあ、模様の入ったもの、300 疋位あるような大物、もう気持ちが悪い位のサメ。もうどこもない、あっちこっちにいるから。水表面にセビレ見えて、もう魚追っかけて、その辺を泳ぎ回っているのよ (笑い)。

サメを釣ったら、全然船に揚げない、船にぶら下げておって、サメは首のここ、頭と付け根の柔らかい所、ここ切って、神経まで切って、あとエラの所切ったり、腹を割いてやって、もう泳げないようなにして、そのまま落ちていく状態にして、ポイントの所まで持って行って落とすわけです。そしたらサメがそれ食べに来る。やっぱり血が呼ぶわけでしょう、生臭い臭いがするから。四方八方から集まって、共食いしあうから、サメいなくなるわけです。サメ釣って、殺して落とすまでには 1 時間あまりかかるから、だいたい船は流されています。だから主な自分達が仕事するポイントまで持って行って、そこに落とす。潮を見たりしながら、それをやるだけでも、だいたい時間食いますよ (笑い)。

小さいフグの大群 釣糸も 食い千切ぎよった

昔、尖閣行ったら、小さいフグがよく釣針の糸を食いちぎったが、あれも一時期だったですな、2、3 年か、4、5 年あったかねえ、魚揚げよったら、大群でパッと食べに来た。こんなフグが、それで歯が強いでしょう、魚食べようと思ってするんだらうねえ、やっぱり、今度は釣りの道具まで、幹縄あるでしょう、それを食い千切るわけよ。そしたら道具が半分しかなかったり、3 分の 1 しかなかったりして、もうやられて、仕事やれなかった。このフグがいたら、逃げよったですよ (笑い)。逃げて、遠くの漁場行って、やった。何年間か、こんな時期があったです。今はもういない。最近見ないもん。このフグは大群で来よった

ですよ。大きさは20センチそこらねえ、(魚図鑑めくって)フグの種類多いもんねえ。

ああ、これ、これじゃないかなあ、このヨリトフグみたいな感じだった。これは10年前(2000年頃)かなあ、3,4,5年続いて、パツパツ止んだ。あのフグはどこに行ったんだろうねえと思う位、最近は、尖閣では見ないですよええ。

イルカ おどし玉と超音波で 追っ払う

魚盗られて困るのは一番はサメだが、イルカにやられることもある。あれは頭いいから、最初は全然気が付かない、何で魚揚がるらないかと、回り見たら、水面をポッカポッカと飛び跳ねているわけよ、イルカが。しまったと慌てて(笑い)。

あのイルカが付いたらもう全然仕事ならんです。これがイルカを撃退する機械とおどし玉です。これは陸地で、色んなイノシシやら出るでしょう、爆竹みたいに大きな破裂音を出して追っ払う。これとこの機械と一緒にやれば割り方効果はある。

このおどし玉は、ここ導火線があるからライターで火を点けて、海に放り込めば、鉄筋のオモリが縛ってあるから、水中に沈んでいって、ある程度50メートルから100メートル行く間に、バーンと爆発するわけですよ。ものすごい音がする。昔は火薬の量は今の3倍位あった。事故があるようになってから、だいぶ火薬の量は減らしている。あそこに今イルカがいるからと狙いを定めよって、様子見ながら、あまり持ちすぎたわけ。これを手に持ったまま、爆発して、指なんが吹き飛んだりして、そんな事故があったもんだから、今は火薬の量も少なくなって、導火線も改良したんですよ、これは丁度、発破投げて漁するダイナマイト、あれを小さくしたようなもので危険物だから、講習に行くと、事故例といって、こんな事故ありましたと、毎年の報告がある。1年に1回講習受けないと、使えないように厳しくなっています。



撃退用のおどし玉(上)と超音波発生装置(下)。この2つを使えば、イルカ撃退には効果がある。

して、こっちの機械は、超音波発生装置で、これを水中に入れると濡れて、ピッピーと音が出るわけ。イルカが嫌うような特殊な周波数の音が出て、イルカはこれを嫌って逃げる。これをおどし玉と一緒に使えば、イルカには割り方効果あります。また表面に来るサメにも、このおどし玉は割り方がいいと言いますが、サメの場合は、やっぱり共食いさせた方が効果がありますよ。

一本釣り 最初の頃 針金使った

一本釣りは、昔は手繰りだった。幹縄も200メートルも、300メートルもあるから、これを手繰りで揚げたというから、先輩達は大変だったはずですよ(笑い)。

そのあとで、太鼓に巻いて、手巻きの木で作ったローラで手巻きして、それから電気とか、今の油圧になったわけです。こっち(沖縄)の幹繩は、前は木綿を豚の血で染って使ったんですか。ウチら鹿児島は違う。最初の頃は針金だった。一本物の普通の針金で、市販されている針金でした。だから切れやすく、弾力がないし、ピーンと張ったら、簡単にこう切れたり、また油断すると、ちょこっと折れたりして、また折れた所からすぐ切れていくから、先輩達によく怒られたそうです。

今の幹繩はワイヤーだから、弾力もあるから、ブリッとなっても、7本よりとかのワイヤーだから、折れないし、撚りにも、纏れにも強いです。

親父達がやり始めの頃は、針金だから、下手すれば、すぐ撚りが入って、グジュグジュなって、ポキッと折れるんですね。また底に行きよったら、底でグリグリと折れたみたいになって、巻き揚げている途中で折れてしまうんだねえ。自分で気付いて、見ておかなければならなかったですよ。

撒きエサ入れる袋も、傘の布なんかで自分達で作りました。熊本の船なんかは今もそうしているんじゃないか。あれチビキなんか、尻尾の長いハマダイよ、あれなんか獲る時に、傘で作った袋だとエサがいっぱい入る。

撒きエサにはイワシ入れて、魚が食いのいい時なんか、いっぱい入れて、集めるんだ。僕らが買う撒きエサ入れは限られているからねえ。

とにかく、一本釣りも、手巻きのローラーから、今は自動で揚げ下げできる釣器になって、幹繩もワイヤーになって、最初の頃に比べたら、相当便利になりましたよ。

アホウドリ 船見たら 近づいてくる

尖閣行くと、アホウドリは結構多いですよ。慣れたもんでねえ、すぐ寄ってきます。

カツオドリなんかも飛んできます。

アホウドリは船の近くまで寄って来て、エサ盗ったりしますよ。自分達が釣っている魚をたまに啜えて、お腹空いているんでしょう。引っぱり合いすることあります(笑い)。

そして流れて行ってねえ、魚外れて流れて行ったら、自分達がこう船を廻って取りに行こうかなあと思ったら、もう先にパクンと啜えて、遠くまで行っちゃって、もう救えない(笑い)。



釣器：左は駆動装置、太鼓に幹繩のワイヤーが巻かれ、撒きエサ袋が見える。



アホウドリは船見たら、魚食べに寄ってくる

クルキンマチなんかなお更ねえ。シチューマチはもう平べったいから呑み込めないから、あれは、クルキンマチは、丁度呑み込める大きさなもんだから、スタイルもあし、呑みやすいから、少し丸っこいから、シチューマチみたいに平べったくないからねえ。

マチ類・底棲魚 定着せず 幾らか移動 ？

シチューマチとかは、底に棲んでおって、幾らか移動するということが最近分ったみたい。釣ってきた魚に標識打って、また流したりしているわけです。ここで流した魚がちょっと離れた漁場に移ってきて、また釣り揚げられて、して、標識見て、ああここに来ているんだと、報告があったと、鹿児島県の水産試験場の人が話していました。それを専門に研究する人達が。奄美大島と喜界島の上の方に、大島新ソネ、アッタソネとあって、その間位かなあ、こっちから、このどっちかに移動したって、その話聞いたんだけど、どの位の距離を移動したのかは分らないんです。200メートル深さに棲んでいたら、エサ追って、プランクトンとか、小魚追って、一緒にあれに乗ってくるか知らんけど、200メートル深さを移動するのかねえ。だけどポイント見ていたら、魚体が小さい所は大体小さい、大きい魚の所は大体大きい、小さい魚は食わない。幾らか移動するだけであって、全部が全部移動するんじゃないかと。標識付けて、魚を放流したら、これが別の場所で揚がったから、マチは移動するという調査結果は出たという話でしたが、また標識の付いた魚が揚がったら、協力して下さい、写真でも何でも撮って連絡下さい、お願いしますということだから、これからどの位の距離を移動しているか分るはずですよ。

中国公船に追われる 漁船へ嫌がらせ 仕事を邪魔

尖閣で、中国の公船に、海監とか言いよったかなあ、高吉丸と一緒に追われた時の話です。一昨年(2013年)の2月でした。あの時は大変だったですよ(笑い)。魚釣島の近くで操業していたら、まさかずっと追っかけてくると思わんし、高吉丸に、今日はいつものよりだいたい近くまで来るねえと、話よったらもう、段々近く寄ってきて、したら、保安庁から電話で、あっちに逃げて下さい、こっちに逃げて下さい、島のこっちに回って下さいと言って、自分達がこっちに逃げれば、また中国船がこう来るし、保安庁の巡視船が、中国船との間に入って来て、逃げやすいようにしたからよかったけど。



日本の巡視船が目の前にいるから、まさか危害は加えないと思うけどねえ。

我が物顔で、尖閣諸島沖会いを航行、領海侵犯を繰り返す中国公船。断固たる警護と取り締まりの強化が望まれる。

結局、ウチら漁船に対する嫌がらせ、仕事を邪魔したんですよ。ずーとなんだから、朝

飯食う頃から夕方までずーと、もうあんなに追いかけて回されたから。高吉丸と、もうこれでは、尖閣では仕事にならんと行って、与那国の方に漁場を替えて移動しました。

そんなことが 1 回あって、その後、尖閣に行っても別に何も無い。でも、今でも、中国公船は来てますよ。あの時は魚釣島の西の方で追いかけられたが、大正島とかはあまり見ないです。やっぱり魚釣島と久場島の間をよく巡回しています。中国公船見たら、ある程度 4、5 マイル近くになったら、もう島の方に早めに逃げちゃう（笑い）。あまり近くならないうちに。大概領海内で操業していますよ。その方が安全だし、安心だから（笑い）。

指宿 港がら空き 船員不足で 段々辞める

親父の代に前の船だけど、栄丸を造って、親父の弟、叔父さん達が一緒にやってあって、弟が乗って、また僕が乗って、僕が乗って 30 年になる。今は弟と僕がいるけど、あとはあっちこっちから募集かけて、船員を雇っているけど、もう皆長く続かなくて困っています。

10 何年乗っていた人が今年 2 月まで乗って辞めて、あとは一番長い人で 3 年位、あと 1 年以内の人が 3 人いる。まだ仕事教えんといかんしねえ。どこの船も乗組員いなくて大変だよ。

鹿児島島の指宿もだいたい船が少なくなった。港の中はがら空きなんですよ。もう辞めた船がいっぱいいいて。前は 19 トンが 15 隻位いて、10 トン位のエビ船が 8 隻から 10 隻いたんですよ。また小さなタルミ獲る建網も、小さい船も沢山いたから。もう正月なれば皆帰ってくるから、船着ける場所がない位に岩壁はいっぱいしていた。

今何隻かしかいないもん。後継者がいなかったりして、乗組員がなかったりして、もう段々辞めていってねえ、今大きい港できているのに、この港は何のために造っただろうと思う位、船は少なくなって、がら空きですよ。

こっち（沖縄）も後継者が少ないからねえ、殆どマグロ船なんかはインドネシアの人使っている、今現役の人が年取って辞めたら、あとは誰が継ぐんだろうねえ。

子供引き継がず 後継者なく 自分の代で終り？

昔みたいに、親が乗っておりゃ、息子は当たり前に乗っていたから、私ら代までは後継者もできたんだけど（笑い）。今は息子も自分で好きな仕事があれば、もうそっちの方に行



1980 年代の指宿漁港の正月光景、帰港した一本、釣建網、エビ船で満杯。今は廃れてがら空き、船も疎らである。（高杉忍 1980）

ったりして。親も、その辺は無理に船に乗れともう言いきらんしねえ（笑い）。

また息子達が、もし船に乗るなら、現実の問題として、3千万から8千万は借金せんといかん、自分の代だったら、今の船を整備して行けばいいから、あと10年位は使えるから、息子乗ってしまったら、あと20年30年先あとを考えんといかんから。今の船使えないから。借金せんといかん、中古船買うなら、最低3千万、船造るなら、装備全部入れて、8千万円はかかるから。昔は海の仕事は割り方お金になりよったんですよ、だからできたんです。今はそんな苦勞する割には、もうお金にならない。漁も少なくなっているし、魚の値段も安い。私なんか息子も2人いるけども、息子達のことを考えれば、それもできん、そんな苦勞もさせたくないし、だから、もう無理して船に行く必要ないからと言うて、自分で好きなことやっている。勿体ないんだけど、でも船に乗れば苦勞すると分かっているから、あんな苦勞はさせたくないなあというのものもある。もう自分の代で船は終わっていいかなあと（笑い）。残念で、少しさびしいけど、もう仕方ないです。

私ら若い頃は、海洋立国、水産立国日本といって、世界の海を、七つの海を駆けまわる海の男というのは憧れでしたよ。先輩達は皆格好よかったです。だから自分達も、夢のある仕事だから、船乗りになったり、漁師になったわけです。それに海の仕事は景気もよくて、活気もありましたよ。やりがいもあったし、きつかったというより楽しかったですねえ。今は漁業も、何も、衰退しているから、若者は、海の仕事に夢は持てないはずですよ。

考えてみると、私らの若い頃が1番幸福だったんじゃないかなあ。皆夢というか、希望もあって、あの時は輝いていましたから。やっぱし、日本は資源がないし、海洋立国、水産立国でしか生きていけないから、政府もそのことは真剣によう考えてほしいですねえ。

（了）



海の仕事は若者の憧れだった。誰もが、笑顔と希望に満ちて、皆輝いていた。
遠洋カツオ船昭和丸の甲板上で仲間達と 1975年 長崎港にて

高杉 忍 たかすぎ しのぶ (鹿児島県 指宿漁協)

1961年(昭和36年)鹿児島県指宿市に生まれる。54歳(2015年時)。

深海一本釣専門の漁家、水産高校専攻科を終え、在学中に船長免許取得し、父親の高吉丸(19ト)に乗船。25歳には尖閣諸島、沖縄近海に出漁。以来30年余に亘り深海一本釣りを専門とする。1980年代は那覇泊港を基地に鹿児島船籍等、九州のマチ釣り船は3,40隻を数えたという。

氏によれば、同鹿児島船団は、鹿児島近海～尖閣諸島～与那国・八重山～宮古・宝山へ、魚の産卵期を追う形で、南下北上し、漁場をローテーションし、魚を獲り尽さず漁業資源を保全する操業形態を採っている。また平成3,4年頃に尖閣諸島に国籍不明の不審船がたむろし、危険に遭遇した。これきっかけで船体に日の丸を書くようになった。いずれも興味深い話である。



祖父から漁師 錦江・鹿児島湾で ボラ獲ったり

ウチはもう祖父さんの代から漁師です。鹿児島の指宿市の岩本です。こっちは主な漁協は2つ、岩本と指宿漁協があって、指宿漁協で合併した。結局は自分達の漁場が狭かったんですよ。まともな岩本漁協の漁業権は1ヶ位しかなかった。それで指宿漁協と共同漁業権にもらって、それで6,7ヶ位の漁業権があったんだけど、この狭い漁場で、刺網でボラを獲ったり、タコとか、イカなんか獲ったりしてました。

バジョウカジキは錦江湾、鹿児島湾に入ってきたから、またそれも獲ったりして、1トもない小さな舟でやりおったです。

結局それだけで食っていけないです。それで自分の親父(高杉義男)なんかは、一時期タグボートをやったんです。そのタグボートで、屋久島とかいろんな所に行っていたら、丁度大分の船が深海底刺網(建網)をやっているのを見て、ああこれいい、これいいということで、親父なんかは刺網を始めたんです。始めた時期は、自分が生まれた頃かなあ、5ト位の漁船の進水式の記憶も微かに頭に残っています。で、それから宮崎から船買って来てやって、それも微かに記憶に残っている、だからもう50年近く前のことです。



1970年代の初代高吉丸(10ト)、鹿児島近海で建網でメダイ漁に専念、左より弟美好(8)、父義男(40)と僕(13)

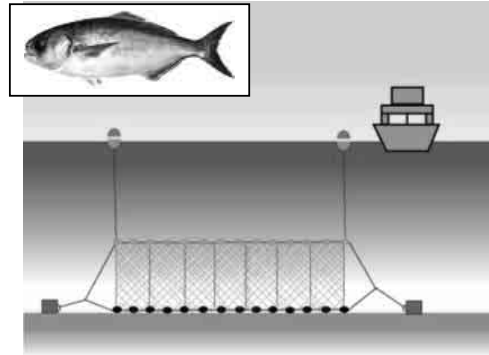
深海底刺網 屋久島辺りで メダイ1ト すぐに獲れる

深海底刺網でメダイを獲って、メダイ主体でやりよった。外洋に出て、屋久島近海、あの辺でやったら、1ト位すぐに獲れたんですよ。建網は水深100メートルから200メートル、深海一

本釣りと同じ深さです。メダイ、シチューマチ（アオダイ）、クルキンマチ（ヒメダイ）、マーマチ（オオヒメ）、全部掛かりよったです。相当獲れましたよ。獲れたもんだから、それならということで、今度は船の規模が段々、5トから10ト、10トから15トと、次第に大きくしていったですよ。自分が小学校2年生頃、木製の19ト型の船を造って、そこから後の記憶は大体残っているんだけど、もうその頃には、屋久島から、奄美大島まで来たんです。

（深海底刺網図を指して）この網1枚を1区画で、高さ15メートル、横幅が70メートル位です。これを14枚位入れよった。大体それ以上はやれない。船の後ろの方に積むのは山盛りになって危ないから、14枚位が丁度よかったです。それと船の前の方から直接網入れられん、風があったり、波があつたしたら、網がプロペラに巻いて、危ないから、後ろに持って行って、船の艦から入れるわけ。プロペラは網入れる所の前にあるから巻く心配はないですよ。

刺網は70メートルの14枚だから全体の長さが1200メートル位ですよ。網を入れるのに30分位掛かるし、揚げるのは最低2時間は掛かりますねえ。この底刺網をピンポイントで落として、海底に網を建てるから、潮が速かったら自分が思った所に入れられない。潮の流れが1マイル以上だとやれないですよ。入れても網はきれいに建ってくれないから、やり直しがきかない。漁法としてはベタ風の時しかできない、それとメダイは寒いと200メートル位の深さに上がるので、冬場しかできないという欠点はありました。



メダイと深海底刺網(建網) 1反：高さ15m×横幅75m、 全長1200m(15反)

メダイ値崩れ 刺網辞め 深海一本釣り 専業

僕が24,5位頃だったかなあ、そのメダイが値段がしなくなったんです。あの時に深海底縄も流行って、それでメダイも多く獲れて、底刺網と競合して魚価が下がったんです。

それに鹿児島は養殖がすごいですよ。丁度養殖が始まった頃だったもんだから、養殖ブリとか、カンパチとか、そういう兼ね合いもあつたりして、結局メダイの魚価が下がったんです。それに一本釣りとも競合したりして。さっき話したようにメダイは夏場は300位メートル、400メートル深さに下がるんです。寒くなると、段々上がってきて、冬場は100メートル、200メートル位の浅い所に上がってきます。だから、自分達も皆、冬場にはこのメダイを狙って底刺網をやって、夏場は一本釣りをやりおったです。一本釣りも底刺網と同じ200メートル位の深さだから、鹿児島近海で、メダイ、シチューマチ、クルキンマチ、マーマチ、全部掛かるわけだから。魚の鮮度はというと、底刺網の場合はどうしても悪くなるんです。時間掛かるから、最初の頃は網を夕方入れて朝揚げよったんです。夜明けに揚げたから、12時

間位網入れ放しだから魚が弱るわけですねえ。だから今度はそのやり方も変えて、夕方 3 時から 5 時に入れて 8 時頃には揚げよった。日が沈んでしまったら網揚げて魚が活着しているうちに処理しよった。いろいろ試したんだけど、結局やっぱり、一本釣りの方が鮮度がいいもんだから、それにメダイの方は値段は安い。そういうこともあって、底刺網を辞めて、自分達が一本釣りを 1 年中、周年操業するようになったんです。鹿児島はカツオ船の本場、また串木野とかは、マグロ船も盛んでしたよ。一本釣船は、自分達の指宿の他に、鹿児島市内とか奄美大島とかにおった。指宿も一本釣船、建網船、エビ船とかが沢山おったから、もう盆・正月に帰ると、船は港に着けられない入れない位いっぱいでした。海の商売は儲からなくなったし、後継者もいなくて廃船して、港はがら空き、あんなに金掛けて港を拓くせんでもよかったのと思う位、船はポツン、ポツンです（笑い）。



出港待ちの深海一本釣鹿児島船団、左端が高吉丸、指宿和泉漁港にて。（宮崎卓己 2013）

深海一本釣り 元々自由事業 平成 許可制に

深海底刺網ですか、あれは許可制になっていて、北緯 31 度から 29 度線までだった。

自分達が許可出ている 29 度線だと、奄美大島から十島村位まで許可だったと思う。それ以上は南に下がって操業できなかったです。今も、この許可書を持っていますよ（笑い）。これ失くしてしまったら、それ許可はもう出ないから、継続で、ずーといかしています。

底立延縄も、東海ナワとって、許可事業もあるんですが、あれは元々許可事業でないです。自分達が建網をやっている時期に底延縄が相当流行した、自分達もやろうかなと思ったんだけど、一本釣りでもいいんじゃないということで手を出さなかったですよ。

今は深海一本釣りは許可制ですが、これも元々は許可事業でない。自分達が最初ここ（沖縄）に来た時は、許可制でなかったから、どこでも操業できたんです。あの頃は東京都だけが、小笠原でやる時だけが、一本釣りは許可制だった。戦争のあとアメリカの占領下になったもんだから、そのあと 1968 年 6 月に日本に復帰して、許可制になったんですよ。僕らも小笠原に一本釣りでよく行きよったから、この小笠原の許可証もそのまま持っています。これも継続でずーといかしています。

で、沖縄県の一本釣りが、許可制になったのは、自分が幾つだったけなあ、30 歳？ 今から 20 年前になるかな、平成になってからです。平成 14 年かなあ？ 沖縄県知事の許可事業になって、それも鹿児島県はそういう許可は出なかったから、もう自由事業だったんです、沖縄県もそうだったんだ、いろんな地元の漁船との兼ね合いがあって、許可制にな

って、自分達はその前から来ていたから、すぐ許可はもらえたわけです。許可範囲ですか？
沖縄県全部やれる、尖閣諸島まで操業できます。

操業海域拡大 南西諸島～尖閣へ

一本釣りだけやるんだったら、鹿児島近海でやるより、沖縄の方がいいということで、こっちにきたわけです。僕は沖縄には来たのは23位だったかなあ、今54だから31年前、みつ丸の宮崎卓己なんかと一緒に頃です。彼はこっち来たのは、1年か2年位早いかなあ。今の船の前に15トの新造船造ったんだけど、ちょっと事故があって、今の19トのみつ丸に造り直したんです。今度は船が大きくなったもんだから、自分達とか、みつ丸さんも19トの新造船、大きな船に造り替えたから、それなら漁場を広く持とうかということで、沖縄に来たわけです。そしたら、沖縄近海とか、尖閣諸島とかは殆ど手付かずだったから、先にこっちに來ていた熊本船、海棠丸さんなんか、昭和47年、1972年5月15日の復帰の翌々日に来たそうです。その前は尖閣諸島の手前の27度、28度線で主にやっていたようです。アカマチ（ハマダイ）、ミーバイ（ハタ類）を主に釣りよってねえ。そうしながら段々南に下がってきたみたい。そうして、

尖閣諸島に行ったら、北から季節風が吹けば、潮が止まって、魚は釣りやすいもんだから、漁獲は相当あったわけですよ。そういう情報も自分達にうすうす入ってきましたねえ。で、自分達のグループは、岩本・指宿の船は、大体一緒位に、南に下がって行って、こっちに來ました、1,2年で全部來ましたよ。尖閣諸島に行ったら、アカマチとか、シチュウマチとか、クルキンマチとか、いっぱい釣れたから、もうこっ



尖閣諸島で、船尾に流釣り用帆を立て、操業中の高吉丸

ちで商売できるわあ、ということで、皆こっちの方に来るようになりました（笑い）。

那覇を漁業基地 九州船籍30隻余り

前の高吉丸は自分が20の時進水した船、造った船を10年で借金返済、FRP船で、船体はどうもなかったから、30で新しいエンジンに替えて、それを今度は38で事故で壊して、場所替えて壊して、その時に今の船が売りに出たから買って今乗っているんです。

こっちに九州船籍の一本釣り船は一時は相当いました。もうこの泊港はいっぱいです（笑い）。とまりん（泊港ビル）横の公園の所に、沖縄県漁連の製氷所があったんです。だから、全部ここに来て、全部でなんぼだったんかなあ。自分達が來た頃は、熊本の天草の組は3隻、海棠丸と明星丸、それに福栄丸。大分が2隻、第一宏栄丸がいて、それに宮崎船がい

て、(遠くの船揚場を指して) あそこにめぐみ丸、あれは宮崎の船、あそこに廃船して揚げ
てある。

鹿児島組は、今来ている 5 隻の他、喜久丸、昭進丸、幸丸、鶴丸、高洋丸、八代高洋
丸とか、それと私達漁協の船が 12 隻位かなあ、結構いました。また瑞宝丸とか、琉宝丸と
いう船もいたし、あれは沖縄県の船籍だったけど、奄美大島出身で大島にいて、またこっ
ちに来ていた億丸という船もいた。全盛期の頃だと、全部で 30 隻位はいたんです。それが
バブルあとから、年取ったり、船員不足とかで辞めたりして、今は 6,7 隻位に減りました。

尖閣行けば 1 航海 1 週間 10 日で 3 トン~5 トン水揚げ

全盛期ですか、結構船が来てましたから、1 隻で水揚げできること殆どなかったもん、毎
日 2 隻ずつ順番待ちして水揚げ、だから新垣水産(委託仲買業者)には、3 トン枠に 5 トン位水揚
げしよったから、マチだけで、毎航海、
自分達は多い時は 5 トンは持って来ました。
1 週間 10 日で釣りがよったです。だから、
それだけ船がいて、順番待ちになるん
です。氷がなくなって入港して来るん
ですよ。氷が足りなくなって、それだけ獲
れたんです。また魚もこっちでも売れたし、
鹿児島にも送っても売れた。だから、頑
張って働いただけは金になりよったです
(笑い)。すごかったですよ、5 トンは今な
ら考えられない。尖閣諸島に行ったら、
最低で 3 トン、4 トンですよ。



魚釣島沖合で、アカマチの大物釣り上げている

アカマチ、シチューマチ、クルキンマチ、全部です、ミーバイも。だから鹿児島にも送
ってですよ。鹿児島にも水揚げに走っている船もいるし、泊港に来る船もいるし、相場見
て、照らし合わせながら、市場の状況で走りよったです (笑い)。それだけ儲けがあるわけ
だから、あの時は新造船は 10 年に 1 隻ずつ造りよった (笑い)。

尖閣での大漁満船 13 年位? 続いた

この好景気は、バブルが弾けるまで、続いたんじゃないかなあ。向こうに行って 4 トンか
ら 5 トン釣れたのは、自分が 38 歳(1998 年)位までかなあ。

最初 25,6 の頃からだから、13 年位は好景気は続きました。そのあと位からおかしくな
ったんですよ。丁度バブルが弾けて、魚も値段しなくなった。で、オイルショックで燃料
代も騰がったし、魚も釣れなくなった。魚価も安くなって、全部同時期にきたんです。

だから、自分が船を買った時には 38 だから、それが丁度境目 (笑い)、それからあとに
魚の値段も下がったし、釣れなくなったし、燃料代も上がって (笑い)。何十隻も、尖閣に

行って、魚を獲り続けてきたから、向こうの魚いなくなった？ いや、そうではないと思う。自分達が釣っていた時は減らなかったです。あとからGPSが流行して、台湾船が入った。台湾船の遊漁船みたいな船が来たんですよ。それから減りましたねえ。急に魚が、釣れなくなった。クルザーみたいな遊漁船で来て、あれに20人位乗って来るんです。その船が何十隻もいて、電動リールで皆釣りよったもんねえ。台湾の人達は、救命ジャケットなんか着て、両舷に並んでいるんです。

あの船が来てからおかしくなった。船は領海にも入りよったもん。保安庁の巡視船は、これ見て、「こっちは日本の領海、出ていきなさい、出ていきなさい！」と言うだけ。

あっちはスーと来て、魚釣って、またスーと出るんですよ。巡視船が見えなくなると、また入って、また釣って、もうイタチごっこ（笑い）。巡視船は1隻しかいなかったから、上陸されなければいいという感覚で取り締まっていた。だから、マイクでただ警告するだけ（笑い）。台湾の遊漁船は何十隻と、尖閣に来る。もう季節に関係なく、だから、向こうで魚を釣り放なし、それで少なくなったんじゃないか。自分達の場合は、尖閣では1年中獲らんですよ、時期的に来て釣るだけだから、それまでは、漁場は痛めなかったです。

魚産卵時期 タイミングよく 漁場ローテーション

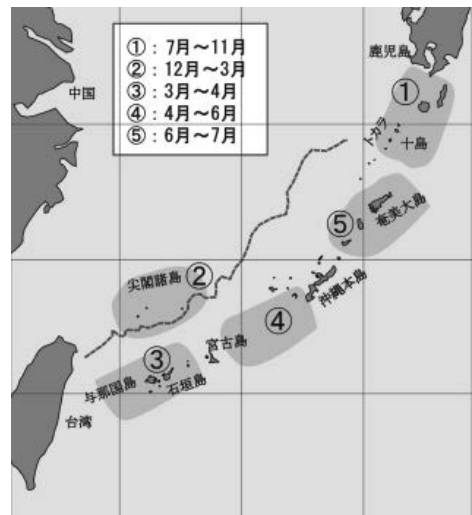
結局、尖閣ではずーと釣り放しじゃないから、今でもそうです。1年のうちで、向こうで釣って歩きよったのは3,4ヶ月位です、夏場は鹿児島近海行って、冬場はこっち来て、漁場を転々と廻りながら釣って、大体がその繰り返し繰り返しです。

魚の産卵時期に合わせて、漁場を循環というか、ローテーションしているわけです。

マチ類の産卵時期は、鹿児島近海は7,8月位始まるみたい、こっちの与那国近海は3月位から。だから丁度タイミングがいいですよ。

尖閣辺りも2月3月かなあ、もしかしたらまだ早いんじゃないか、尖閣の魚は形が小さい、700、800グラムが一番大きいもんだから、産卵時期はそんなに気にしなかったです。与那国近辺の魚が型がよかった。目立って、尖閣の場合は魚種も多かったし、魚自体が多かったから、それで産卵時期を気にしなくても釣れたんです。

与那国近辺の場合は、産卵時期3月4月5月になってきて、その時期には潮の流れが緩むもんだから、与那国から八重山辺り、そのあと宮古周辺の漁場に行けば、それが確実に産卵が目で見れたわけです。自分の目で確認して、もうお腹は大きくなって、捌いたら子供を持っています。卵を今にも生みそうにしてお尻から出ています。オスだったら精子を出して、メス



①鹿児島・十島・トカラ、②尖閣諸島 ③与那国・八重山沖 ④宮古・宝山・大九 ⑤沖永良部・奄美大島

だったら卵出してという感じです。

それを大体見るのが与那国と八重山近辺では3月4月ですわねえ、宝山とか、宮古周辺では、大体4月から6月頃になります。産卵期は段々北上して、6月7月には沖永良部辺りです。8月から10月頃は鹿児島、十島、トカラ辺りになります。

自分達は、この産卵時期に合わせて、漁場をローテーションしているわけです。夏場は鹿児島近海で操業して、冬になると南に下りて、尖閣から、与那国方面に行つて、今度は北上して宮古方面に行つて、次は奄美大島方面でやつて、鹿児島に行くわけです。でも今言った漁場のローテーションは大まかな目安ですよ。どの時期にどの漁場に行くかは、実際は各船の事情で決まるわけです。自分達の組でも12月いっぱい鹿児島近海でやつて、1月なってから尖閣に行く人もおりますから。

漁場ローテーション 漁場痛めない

鹿児島の方に7、8月に行けば、丁度梅雨が明ける産卵時期になって、それが10月から11月頃には、鹿児島近海、トカラ、十島辺りを一通り廻る。その頃は台風時期は過ぎているから、今度はまた南に下がる、沖縄の方に行くんですよ。

12月から3月には、尖閣に行くから、その時は丁度タイミングよく、一番潮がよくて止まっている時期です。そこでやつて、今度は、北からの季節風が終わつて、南からの風とか、東の風が吹くようになったら、尖閣は潮が速くなるから、やり辛くなります。

そしたら、今度は与那国方面から宮古方面の漁場をやつて、段段東へ、東へ廻つて来んです。沖縄で梅雨に遇つて、梅雨が明けた頃に、今度は鹿児島に行つたら、また梅雨に。自分達は梅雨前線に2回遇うんです（笑）。

このローテーションを順繰り順繰りでずっとやつてきた。それも産卵時期に行くわけだから、魚の食いがよいから大体が大漁するんですよ。自分達はそこで、いったん釣つてしまえば、もう釣らないわけです。結局3、4月ごと漁場をローテーションしているから、自然に漁獲の保護しているというか、獲り尽くさないから、漁場は痛めないわけです。船の動きも丁度タイミングがよくて、これは沖縄に来始めたらですよ。

小笠原・南シナ海 鮮度問題で行かず

前は南シナ海も、小笠原も行きよつたです。小笠原に行くんだったら11月から2月いっぱいかなあ。南シナ海は3月の中旬から5月いっぱい位。で、小笠原は尖閣諸島の代わりなんです。代替みたいな感じで、小笠原に行く人は、尖閣に行かないで、小笠原は距離が遠いもんだから、片道4日、3昼夜半位かかるもんだから。

尖閣の場合はここ(那覇)からだったら1昼夜で行くから航海は早い。尖閣の方で操業できたら満船しよつたから、もう最低3千疋、4千疋位釣れよつた。小笠原に行つたらアカマチ主体、あとミーバイ系が結構釣れよつたから、形も大きいし、だから、小笠原に行つて満船して、月1.5航海の一発勝負をやるか、それとも、尖閣に行つて、日数掛けずに、航海の

回数を掛けるかという感じなんですよ。

南シナ海の場合は、一応尖閣を釣り終わって、八重山与那国方面ですが、その時の兼ね合いで行きよった。一応産卵時期になった時に、水温が上がりきらないで、八重山が食いが悪いなあという時に、南シナ海に行って、操業やって、だけど、あっちも片道3昼夜から4昼夜位掛かって、行きよった。南シナ海も日数が長くなるもんだから、魚の鮮度が悪くなるんです。1週間操業しても、水揚げする時は、11日目の魚になる。一番新しい魚でも5日目の魚になる。だから鮮度が悪くなるんです。小笠原もそうです。昔は、あまり鮮度にこだわらなかった。自分達も消費者も魚であればいいという感じだったが、今は違いますから、鮮度が悪いと値段は3分の1。結局はいくら量持ってきても鮮度が悪いと、値段は叩かれるし、4ト持ってきて500円で売ったら200万です。沖縄近海とか、尖閣の魚を2000キ持ってきて、1000円で売れば200万だから、燃料代も高かったから、採算が取れない状態になって、南シナ海にも、小笠原にも行かなくなった。それで、こっちで、尖閣とか、与那国、八重山方面で、ずっとやって、日数を掛けず鮮度がいい魚を持ってきた方がいいから。それが消費者に好まれるというか、売れるんですよ。

尖閣 夏場でも 潮止まれば 大漁

尖閣諸島は12月から3月頃まで、冬場行きますから、冬場行って操業できたら満船しよったから、もう最低3ト、4ト位釣れよったです。けど夏場はダメです。潮が速くて漁できない。最初、尖閣に5月6月に来たけど、夏場ですが、それでも魚が釣れた。潮の合間合間の潮がわしというのがあるから、止まったら食うわけ。その潮が止まる時期が2日3日ある。それに遇えばパッパッと釣って、1日1ト位釣れたもんねえ（笑い）。

尖閣ではもうこんなに食うんだあと思った。潮が止まる時期ですか？ これはベタ風の時、だから南西の風、南系統の風が吹いたらダメなんだけれど、ベタ風なったら潮が止まりよったから、その時に2日3日で釣って帰って来れたんです

よ。潮が止まるのはやっぱり、天気に関係しているか知らんが、潮が速くても、急に風になって、4,5時間位潮が止まることある。また満ち潮から引き潮、あの合間にも止まる。その潮がわしの時がいい。そういう時間帯だと1,2時間で、200キ、300キ釣れるもんだから、それで結構商売になったんです。あとは月の満ち欠けも関係していたみたい。自分の記憶では、月の出が一番止まりよった。やっぱり大潮の時はダメなんです。大体旧暦の7,8



夏場の尖閣は潮が速いが、潮が止まり、ベタ風ともなれば大漁。魚釣島沖合を潮見ながら航行中の高吉丸。

から 15 日までが一番魚が食う時期というか、月の出の時間帯が魚の食いはいいです。夕方の時間帯ですよ。

僚船減って 情報なく 漁場状況 分からん

夏場でも潮止まる時なら、尖閣はいい、だけどその間は潮が速いもんだから、天気が悪くなったら潮は止まらなくなるんです。南の風が吹いたらもう止まらん。

宮古とか、与那国とかは、南の風でも潮が止まっている所があるから、やっぱり、海流の関係じゃないか。台湾海峡から黒潮が上がっていく。尖閣はこの黒潮の通り道にある。南風の風が吹いたら潮止まらなくなるから、この時は、宮古方面に逃げよった。

前は船数が多かったもんだから電話 1 本で分りよった。無線 1 本で、電話 1 本で、電話がない時代は無線だったから。今度は定時連絡を自分達で決めていた。その時間に全部の船の情報を交換してやりよったんです。だから魚も探しやすかったですよ。1 回港出たらどここの漁場が今は潮が止まっているから、あぁどこに行ったらいいんだろうと判断ができた。今船数が減ったもんだから、潮の流れというのは分からない。漁場の状況も分からん。自分で行ってみないと分からない。船数が多かった時は、お互いに情報交換するから、助かったけど、今はもう自分で判断して、自分で動くという感じ。

乗組員 8,9 名 ロラン時期も 魚多くて 釣れた

前の高吉丸には最初の頃は 8、9 名乗ってました。今は 5 名で、釣機も前と同じ 10 台あった。自分達は 20 年前から同じ人数でやりおったです。

5、6 名が一番効率がいい。釣機は 1 人で 2 台持って、前は交互というか、ずーと交互に入れ放して流して、釣りよっただけど。今も 1 回ずつ釣っている。

今みたいに GPS じゃなくて、最初はロランですよ、ロランでポイント探すのは大変だった（笑い）。だから毎晩ロラン数字で、A 波 C 波この兼ね合いがあるから、どっちかに寄せるんです。最終的には、ロランの C 波がノーイース（北東）から、サーウェス（南西）に走っている線に乗せて、真直ぐ走って行くわけ。尖閣辺りでは、雨が降ったり、雷が鳴ったりすると、ロラン利かない場合もあるから必死だったです。宮古と慶佐次に基地局があったから、宝山辺りは大体しっかりですよ。宮古より東の方はよかったんだけど、西の方になると悪かった。与那国の南も悪かった。あのブラウン管式のレーダで、島から何マイル離れていると、いつもそれでやっていた、今なら考えられないです（笑い）。

それでも昔は魚がいたから。自分が 27 歳の時に GPS が出た。最初は衛星は 7、8 個しかなくて、それで 1 日 3 時間位よくて、あとはダメだった。段々衛星が増えていって、で、よくなって 1 日中 24 時間使えるようになったんです。一番最初 GPS は高かった、300 万しましたからねえ（笑い）。今は 50 万位であるけど。魚が相当獲れて、儲けていたから、買ったわけですよ。今は設備が良くなって、もう GPS 使えば、間違いなくポイントに行けて、ピンポイントで魚が釣れるから、昔に比べたらもう夢みたいです（笑い）。

今まで獲った魚 海底地形 頭にある

この GPS が出来て、便利になったから、勘鈍りますよ。頭が悪くなる(笑い)。けど、これまで操業したことは、その時のようすは、ある程度記憶にあるし、それに日誌も書いているから、そのポイントの海底地形は大体こんな感じと覚えています。2,30 年前のものであっても、自分が獲った魚は大体記憶は残っています。またどの辺に行けばどんな魚が、どんな瀬が、海の底は見えないが、海底地形はもう頭に出来上がっている。それが頭に浮かばないと、こんな海の仕事はできないです。

して、仕事に行く場合は、漁場は天気なんかには左右されるから、潮の流れも天気に左右されるから、天気予報図見ながら、自分達の経験で、帳面なんかも見ながら、頭の中の今までの経験を入れて、同僚船と話しながら、漁場を決めて行くわけです。さっき言ったローテーションの魚群であっても、何月位に、どこの漁場で、どれ位釣っているとか、その情報は頭に入っているけど、条件が違えば、違ってくるわけです。

尖閣ならば、尖閣で同じ漁場で仕事するとしても、海流が変わっていたら、去年はこっちのポイントでいっぱい釣っていても、今年は食わない場合もあります。その反対の場合もある。1月からの漁場だったら、最初1月から食う漁場もあるし、2月後半から食う漁場もある。その時、その時の条件で決まる。また今年も1月から食う漁場であっても、海流は1日で変わる場合もある。1日目はその現在位置で釣りやっていて、それで潮の流れ変わってくるから、あんまり同じ潮はよくない、ある程度潮は回って行った方がいいから、その海流を見よって、今どっちの方に動いて行くかを見る。海流は段々変わってくるから、どっちに動いて行くと予測して操業するわけです。頭の中に今までの経験が、情報が、入っていますから。



1人左右の釣機2台で、次々と魚を釣上げる



釣り上げた魚は箱詰し、魚槽に保管する

サメ被害 腹いっぱいして 食い止める!?

前は、尖閣には台湾漁船が結構サメ釣って歩きよったです。一緒に仕事しよったから分かりよった。そのあと、警備が厳しくなって、台湾船は領海内とか、近くに来れなくなっ

たでしょう。したらサメが増えたんじゃないか。台湾船がサメを釣ってくれよったから。台湾船はサメを持ち帰りよったですよ。自分達も結構鹿児島では水揚げしよったから、これカマボコの原料です。すり身で使いよった。オナガザメもいい原料 ホオジロザメもいいです。だから水産高校の実習船時代、オナガザメとか、ホオジロザメとかは、全部身まで持って帰りよったから、それは船員の小遣いだったんです。

今このサメが、尖閣でも、与那国でも、宝山、大九でも、あっちこっちで増えて困っています。マグロ延縄だと、サメに食われても、胴体とか、頭とかが揚がってくるけど、自分達の場合は全部食べられて、何も揚がってこない。一本釣りだと、道具が小さいから、サメに食われたら、釣機が途中で止まったり、道具自体が切られたりする。ワイヤーを引くのが軽くなったり、重くなったりして、機械の動きが変わるんです。それで、ああサメにやられたと分かるわけ。魚探でもサメは分かります。

そしたら、もう思う存分食ってみると、思い切り魚を釣るんですよ。マーマチとか、タイクチャーマチ（オオグチイシチビキ）、ああいう形が大きい魚の場合は止めないで、そのまま釣り続ける(笑い)。マーマチだと大きいのは4和、5和にはなるから、タイクチャーも大きいし、食ったら和数上がるもんだから。サメに思う存分食ってみろ、お腹がいっぱいなるまで、食わせるわけ。思う存分ですよ、もう極端な話だから(笑い)。そしたら、サメは食わなくなります。だけどシチューマチとか、クルキンマチの場合は小さいし、シチューマチでも1和そこらでも大きい方だから、幾ら釣っても、食わせても、あんまり効かないです。もうタイクチャーとか、マーマチは図体が大きいから、効き目ありましたよ。これは冗談みたいな話ですが、ほんと、自分達はやりましたから(笑い)。

サメ釣って 殺して落とす 共食で自滅？

あとはサメを釣って、サメを殺して、腹割いて、海に落とすんですよ。落して、今度はサメ同士で共食いさせる。そしたらサメはいなくなる。これだと1週間位は持ちますよ。自分達が漁師になって、最初宮崎のカツオ曳縄の人達から聞いたんです。共食いさせたら食わなくなる、と聞いて、やったんですよ、共食いして、ほんとになくなった(笑い)。

これに似たようなことを、中学時代にテレビで見たことがあります。クストーという海洋学者のテレビ番組で、人間が檻に入って、海に沈んでいって、サメを水中鉈で突いて、発破で、爆発物で、一発で殺すんです。そしたら肉も飛び散り、一面血だらけ、そしたらサメやって来て、散り散りになったサメに、いっぱいサメが食って、その食っているサメに、またサメが食って、もう全部が団子状態になって、それ見たことがあるんだけど。ああ、あれがこの原理かなあと思った。だから、生きているサメに、サメが食って、血がドンドン流れているもんだから、もうサメは馬鹿になって、興奮状態、獰猛になって、見境なく咬み付くもんだから、皆咬み付き合って、共食いして、最後は自滅するような感じ。

実際に、これやったら、魚探で大体分かりますよ。魚探に小さな横線が、海底地形とは別に、スーと横に送られていくから、サメは魚探で映るんだけど、1匹のサメ分だけの小さ

な魚群がこう落ちていくわけです。最初は小さい反応だったのが、今度は横線が3本も4本も増えていって、魚群はどんどん大きな塊になっていくんですよ。自分達は魚探しを持ってないが、ソナーを持っているなら、これはよく分かるはずですよ。ここには、サメが集まったなあと。

海上に黒塗り密輸船？ 不審船 尖閣付近 たむろ

僕が30歳の頃かなあ、平成3,4年(1991,2年)かなあ。確か1,2年間位だったと思う。あれ密漁船かな？ いっぱい出て来て、もう黒塗りの不審船、タバコとの密輸船と聞いたこともあるが、とにかく尖閣にはああいうのがいっぱいいた、たむろしてました。

自分達が夜走って行けば、久米島の辺まで追尾されよったから、この黒船が追尾するんです。何でか分からん。密輸船を取り締まる船か、何だか分からん。中国の船と思うけど、警備艇か、密輸船か、何か分からない。

今の中国のサンゴ船みたいな船で、100ト前後の鉄船、これが沢山いましたよ。

何隻位か、これも分からん。あっちこっちにいるもんだから、まとまっていないわけ。1隻単独で行動して、バラバラでいるもんだから。レーダー見ておけば、灯点いた船が消えて追尾されたり、もういろんなことありました。あの時はまだ船舶電話がない時代だからとても怖かったですよ。

1度は魚釣島の西の20マイルで操業したら、大型の貨物船コンテナ船だったかなあ、それに中国の船が2隻横付けして、何やらしているわけです。何万トもあるような大きな貨物船は、15ノットから20ノット位は出るから、普通はそれに横付けできるわけない。わけ分からんで止ることないから、あれ話し合いが通じている密輸船で荷物の受け渡ししていたんじゃないか。

それを見て、やばいと思っていたら、1隻が突然自分の方に向けて走って来たんです(笑い)。もう慌てて逃げて、緊急無線を打とうとしているんだけど、慌てているもんだから、無線機の周波数合せきらんですよ(笑い)。1隻単独行動やっていたから、もう驚いて心臓はドキドキ、破裂しそうになりました。同僚船の所へ急いで走って行って、そうこうしてたら、離れていったから、助かった(笑い)。攻撃されたら、やっぱし怖いですがねえ。

危険な目に？ そのあと船体 日の丸大書

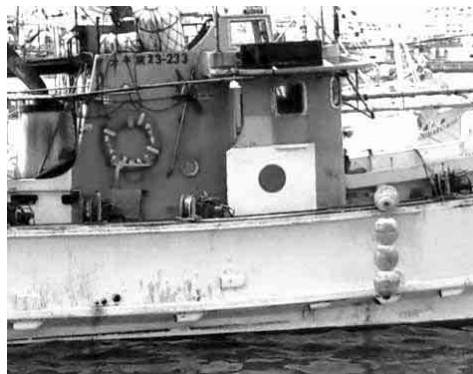
あの時の不審船に比べたら、今の中国公船は怖くないです。目の前に海上保安庁の巡視船がいるから(笑い)。中国のサンゴ船も怖いけど、宝山、大九とかにいっぱいいましたよ。



「追跡や臨検が頻発、外国船へ威嚇射撃も」と報じる新聞。(沖縄タイムズ 1992.11.28)

あれ達はぶつかってくるから。もうわけ分からんから。だけど、あの不審船、密輸船の時が一番怖かった。あの時は近くに巡視船はいないし、知らない所で沈没させられて、うやむやにさせられたりしないかと。夜は灯が消えたら真っ暗、向こうが灯消して、追尾してくる。真っ暗の中来るでしょう。レーダー見ていると分かるから、6マイルから7マイルまで近づいて、灯が点いていたのがパッと消えて、レーダーに映っている。3マイル、2マイル、1マイル、ああ、これダメだと思って、大体0.5マイル位でサーチライト照射して来るから。

自分達は、これやばいから、エンジンかけて作業灯点けるように準備しておって、サーチライト照射されたと同時に、もう日の丸揚げてあるから、ストップして、作業灯を点けて、「日本船ですよ」と見せた。そしたらスーと通って行きよった。やっぱり取締船だったのかなあ、尖閣ではいっぱいいたみたい。



平成3,4年時の不審船事件のあと、「日の丸」が船体に大書された。写真は高吉丸の船橋。

1回は僚船の高治丸は、自分達の船は気が付かなかったけど、魚釣島で、追尾されて、船に着けて、飛び乗って来るように構えていたって、結局飛び乗らないで、そのまま走って行ったけど。自分達の船は、その前までは船体に日の丸書いてなかった、操舵室とに、日の丸を今皆書いてあります。それから日の丸書くようになったんですよ。その時までには後ろのマストに、いつでも日の丸揚げられるようにやってみましたけど。

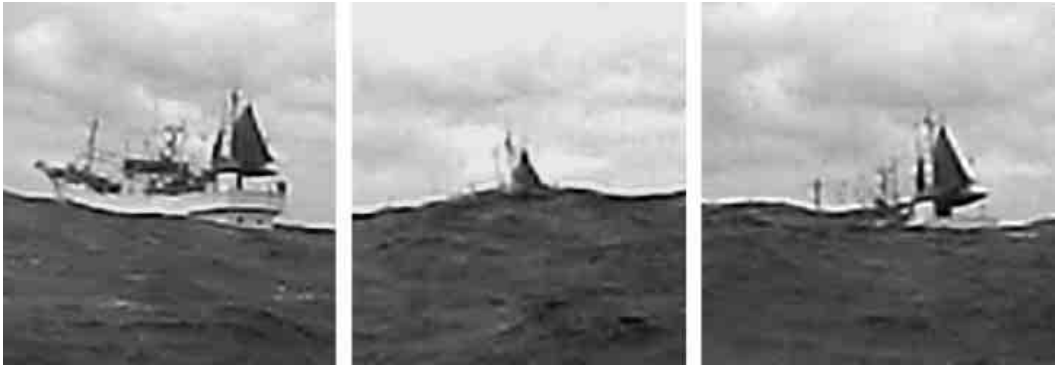
大シケに 小船 波間に隠れ ぶつかる危険も

尖閣にこっちの浦添辺りから電灯潜りで行っていたのは結構見ましたよ。また、こっちな那覇地区からもマチ釣りに。こっちなマチ釣り船は、アンカー釣りで、それも小さい船でいっぱい来よったから、だから、シケになったら怖かったのは、沖から魚釣島に走って行くのに、那覇地区の船はアンカー釣りだから、10トあるかないか位の船で来て、アンカー釣りやっているもんだから、シケてもそのままアンカー入れて止まっている船がおったんです。波と波の間に入って見えにくい。自分達の船は19ト型だから見やすいし、それに流し釣りして帆を上げている時もあったから、見やすいわけよ。

船が小さいと波と波の間に入ってしまふ。見えにくいから怖いわけ。自分達走って行くのに、前見ておるけど、レーダーの反射は悪いし ぶつかる恐れがある。シケてもそのままアンカー入れ放しでやっている船もいるから（笑い）。天気がよく、潮もよかったら、シケても、沈むもんかというわけで、反対に潮が速くなって、潮が南から、風は北からになったら、三角波が立って、危ない、船は風に立たないから、潮に立って、後ろに波をかぶったりいろんなことがあるから、島に逃げるんだけど、それが今度は、潮が速くなくて、風だけ強い場合は、そのままアンカー入れて止まっている時があるんですよ。そういう時

にぶっかる可能性がある。シケて島陰に行こうかなあという時は怖いです。

夜だと反対にいいんです。夜は灯を点けるから、見やすい、シケていても、灯が点くから、波の上に灯が点く、シケた昼間だったら、うす暗いし、今度は船体も白い、白いというのは波も白いから見えにくいですよ。夜なら灯ですぐ確認できる。



尖閣諸島で大シケの中を波の谷間を行く僚船。小さな船だと波に隠れると見えない、衝突しないか危険だ。

大型船は、真正面から見て、赤と青の灯があつて、前と後のマストにもあるから避けやすいです。それが昼間だったら、どこが中心だか分らない。夜だったら船の進行方向は全部分るから、あゝ灯が変わった、赤が青に変わったから、どの方向に向かっていると分かる。それが昼間だったら分らん。尖閣の場合は、昔アンカー釣りしていた船、こっち(那覇地区)のマチ船が結構いました。それが今は引退して辞めたり、仕事替えていないですねえ。

尖閣のアホウドリ 自分達で餌付け

尖閣諸島行ったら、アホウドリはいっぱいいます。船が島の近くに来たら、飛んで来ますよ。一番南小島の東側が多いです。北小島も一緒、5,6マイル、10マイル位の所に。

船が1隻いたらドンドン集まってくる。

船が2,3隻だと分散しているが、確実に2,3羽はいます。自分達が餌付けして、魚投げて食わしよったもん(笑い)。

サバとかアジとかを、そしたら、丸飲みしつづつと、船に寄ってくる、ドンドン寄ってくる。エサ投げれば、2,30羽来ることあります。向こうはもう一生懸命、自分達の傍に来れば魚あるから食べさせる。シチューマチだと平たいから食べられない、呑み込みきらん。アカマチは呑み込める、クルキンマチならよかった。クルキンはそこそこ5,600グラムまでは丸呑み。



船見ると、エサの魚あるからとすぐ集まってくる。船1隻の場合、10羽ほど群がってエサねだる。

大きいのは喉の所を齧って、小さいのはゴックン丸飲み。やっぱり1羽だったらダメ、2羽から3羽いたらもう丸呑み競争。丸呑みしてもすぐ帰らん。お腹いっぱいなるまで、ずーと船の後ろ付いてくる（笑い）。サバだったら、3匹か4匹食いよった、丸呑みして。喉に尻尾が見えたりして。アホウドリはほんと可愛いですよ（笑い）。活着ているのをキャッチして呑み込むと魚が暴れている、喉見れば分かりよったもんねえ（笑い）。また甲板に降りるといふか、たまに釣針食うもんだから、待ち揚げて、針外して、甲板の上に降ろすと飛べないです。ウロウロして、くるくる回っているだけ。あのカツオドリも飛べないですよ。あれもいっぱいいるから、甲板に飛び込んできたら、出れない、飛び立てないです。カツオドリも、アホウドリも、崖の上に登って飛び降りて滑空するから、そういう状態でないと飛べない、水面に降りたら、水面を足ビレで蹴って滑走やって、飛び立っていくわけだから。あの水鳥達は、船の上に降りたら飛び立てん、捕まえて海に逃がしてやらんといかん（笑い）。



小さいクルキンマチを、一気に呑み込むアホウドリ

（了）



高吉丸の乗組員の面々、左より高杉忍船長(54)、村崎安三(70)、尾上功一(33)、下野耕一(55)、中村大志(39)の各氏。(2014年撮影)

丸山 文博 まるやま ふみひろ（熊本県 樋島漁協）

1965年(昭和40年)熊本県天草郡樋島に生まれる。50歳(2015年時)。
父親の代に深海一本釣を専業、1972年日本復帰の3日後沖縄に来る。
以来那覇泊港を基地に尖閣諸島に出漁、父から家業を引き継ぐ。

18歳に海栄丸(19ト)に乗り、30数年間、深海一本釣に従事する。

熊本船は3隻が早い時期に尖閣諸島に出漁していたが、現在海栄丸1隻だけである。氏は熊本から沖縄に移り住み、沖縄嫁をもらい、那覇泊港を漁業根拠地にして、今なお南西諸島、尖閣諸島での一本釣に専念している。

一時は、南シナ海、小笠原海域まで遠出している。氏にこれまでの一本釣体験の話を伺った。
30数年に及ぶ貴重な体験だけに、我々に多くことを教え、学ばせてくれる。

**天草の樋島 一本釣船 10 隻いた**

— 海栄丸は熊本船籍ですねえ、熊本からだど、意外な感じがしました。九州から尖閣諸島に行った船、カツオ船とか、サバ船とかは、主に鹿児島と長崎からでしたが。

丸山：深海一本釣では、鹿児島、熊本、長崎、大分、宮崎の船が行ってましたよ。尖閣諸島には、福岡と佐賀を除いた九州各県からですねえ。それに熊本は、鹿児島とは隣同士

だし、長崎より沖縄に近いさあ(笑い)。鹿児島では昔から一本釣が盛んだから、この一本釣を鹿児島から習ってきて、俺達の先輩とか、親父達なんかは、やったかも分かん。熊本で一本釣り船といえば、皆俺達の島、天草郡樋島の船だよ。樋島という所はちっぽけな島で山が多くて、農業なんかでとてもは食っていけないから、漁業に従事する人が多いさあ。ウチの親父達は、俺が生まれる前はトンネル掘りに行ったりもしていたから。親父

は20過ぎ位から漁師やっている。樋島には当時船は10隻位おったはずよ。一本釣も、延べ縄(延縄)も何でもやった。種子島近海でイセエビとか、あんなも捕りよった、カゴとか、網とかで。今の福栄丸の野口登美さんが10代の頃、野口さんのお父さんがやっていたと、今の船長達は乗り子として、親父も一緒に行ったと言うていた。当時は俺はまだ子供だったけど、そういう記憶はある。

他の部落の船だと、延べ縄が多いですねえ、皆延べ縄で五島に行ったり、奄美付近の十島行ったり、また佐賀の漁師はイカ釣りやっているし、一本釣りはホント少ない。延べ縄だったら、人数の割りに、船員が少なくすむから。

— その一本釣を続けてきて、奄美大島から南へと 漁場を広げてきたわけですねえ。



二代目海栄丸(19ト)と丸山文夫船長

丸山：樋島に10隻位あった船は、昭和50年から53年頃に高度成長期に、5隻が船を造り替えるんだとって、木船から今のFRP(ファイバー)のマグロ船に替えたわけ。当時成功してよかったんだけど、今度マグロ船減船とかで減船されて、今は1隻も残っていない。

で、残りの4隻がそのまま一本釣やったわけ、ウチの海栄丸(19ト・丸山文夫船長)、明星丸(19ト・山中船長)、福栄丸(19ト・野口登美船長)、豊清丸(19ト・白浜船長)の4隻がねえ。野口さんは20歳位、今60歳だから40年前からこの一本釣専門に始めて、ウチの親父なんかはそれの大部前からやっていたましたねえ。

最初の頃は、鹿児島辺りとか、種子島とかで、それから徐々に徐々に、漁場が南に下がってきて、その頃にはもう白浜さんの豊清丸は辞めてました。それでウチら3隻は、奄美大島から沖縄、宮古、八重山に下がってきて、尖閣諸島に行くようになったわけですよ。

ウチの親父達は、大正生まれの先輩達から、終戦直後ですか、トカラ列島とか、尖閣諸島とかに、向うでマチが釣れるからと、一本釣りで行ってたという話を聞いていたようです。それで沖縄が復帰してから、尖閣諸島に行こうとこっちに來たわけですよ。

熊本船 復帰の3日後 沖縄に

一 沖縄は昭和47年には日本復帰したから、それでこっちに來たわけですねえ。

丸山：そうです。ウチの親父達、熊本船3隻は、沖縄県が日本復帰した日(1972年5月15日)の次の次の日には、沖縄に入港しています。復帰後3日目には入港して魚を売ると來たんだけど、まだそういう状態じゃなくて、魚は売れたが、全部売れなくて、残りは鹿児島に持ち帰ったそうです。親父は沖縄には自分達が多分一番で來たと言っていましたよ。

もう43年前の話です。その時は、親父は昭和15年生まれだから32歳、僕はまだ7歳ですよ。復帰前は、アメリカの統治で、沖縄本島の港に入れなから、熊本船は鹿児島を基地として、沖縄近海から、宮古、八重山、与那国まで、ずっと仕事に來ていた

沖縄の港に入らずに、与那国とかでは、風が吹いたりしたら島影に隠れたりして、仕事やって、4昼夜かけて鹿児島に帰っていたようです。

沖縄が日本復帰したからが、こっちの港(那覇泊漁港)に船着けれるようになって、ホラ前は仕込みなんかできなかったけど、今は氷を積んだり、燃料積んだり、魚を下ろしたりができるさあ。こっちを基地にしたら、漁場も近いから、尖閣諸島に行くようになったわけ。

で、親父の弟達、叔父さん達も、一緒に來て、あっちの魚は釣れ方から見ると、そんなに魚が釣れるのか思う位、もういっぱい釣れた。一本の針に、もうアカマチ(ハマダイ)



深海一本釣船・海栄丸(19ト)、那覇泊港基地に周年操業

なんか、2匹共一緒に食って、びっくりしたと（笑い）。漁はもうそんなして釣れる位、沢山あったと言っていましたよ。

18歳船乗る 30年余り 尖閣で一本釣

— こっちを基地にして尖閣諸島に行って、丸山さんは幾つの歳に船乗ったですか？

丸山：僕は18歳(1979年)から乗っていますよ。もう時期なると親父と一緒に、尖閣には毎年、こっちからずっと行ってましたから、かれこれ30年余りになりますねえ。

18歳からもっばらこっちにいて、だから僕なんかも思春期に、子供の頃付き合っている女の子もいたけど、もうダメさあ、熊本には帰らんから。もう親父達も一生懸命やっていたから、帰らずに頑張ろうと言えば、帰らずに頑張るしかない。で、ずっと頑張って、そんなことやったら女の子も、もう友達も全部なくなったよ。だって帰れないのに。

そのくせに親というのは勝手なもので、早く嫁さん探した方がいいよと言う（笑い）。

でも、縁あって、今の家内に出会って一緒になったんだけど、やっぱり、それだけずっと沖繩にいるということです。子供達2人はウチナーンチュ(沖繩の人)。僕は内地の人だけど、家族はもう皆沖繩の人ですねえ（笑い）。

親父が船辞めたのは5、6年前です。65歳で辞めてから、今は隠居しているけど、元気です。僕は長男だからやっぱし親父のあと継がんといかんから。20歳で小型船舶操縦士の資格はとったけど、親父がずっと頑張っていたから、引退間際に船長なった（笑い）。船長としての実績はまだまだ、これからですよ。

ウチの海栄丸に乗っている6、7名、前は親父の弟達、叔父さん達がいましたが。

(船で仕事中の船員を指して) あれが僕のすぐ下の弟の丸山仁、こっちは三男(史朗)、こっちは一番下の叔父(明男 65)とその長男(明任)、残りは見えないねえ。全部身内だけの6、7名。俺の責任は重大さあ、皆生活させて食わさんといかんから（笑い）。だけど生活もあれだが、一番気を使うのはやっぱり航海安全ですねえ。事故でも起きたら、もう一族が減るから（笑い）。



海栄丸の甲板で、左より後列：丸山文博船長(50)、弟の丸山史郎(45)、丸山仁(48)、中列：従兄弟・丸山明任(38)、後列：長男の知哉(20)、甥の航平君。

30隻余県外船 沖繩基地に 尖閣諸島へ

— 那覇泊港を基地に尖閣諸島に行った県外船は、他にどこから来てましたか？

丸山：前はあっちこっちから来ていたけど、今は熊本船と鹿児島船だけですよ。

熊本船は年中ここにいます。海栄丸と福栄丸はずっといる。沖にいつておる間いないだ

け、年から年中いますよ。それで12月から翌年の3月までは尖閣諸島に行ってます。

鹿児島島の船は7月頃までこっちいる。12月頃から来る。で、6、7月から11月まで5、6ヶ月位は鹿児島島の近くの奄美諸島とか、トカラ列島とかをやっている。

前は相当来てましたよ。もう30隻あまりもいたから、俺達熊本船に、長崎船やろ、鹿児島船、宮崎船、大分船も。今の宏栄丸というこの船よ。この船の元々の持ち主は大分の人だから、この船がこっちに來ていたから、めぐみ丸、鶴丸、菊丸とかは宮崎船だから、鹿児島島に移り住んで鹿児島船だけど、元は宮崎の人なの。長崎も結構おったけれど、こっちに入港しないわけ、常駐しないで長崎に帰って行く船が多かったですねえ。東シナ海の大陸棚を下りてきて、尖閣諸島近くに来てますよ。俺達の漁場が一緒の所までねえ。大分船、熊本船、鹿児島船なんかは、前は南シナ海まで、一緒に行って。この宏栄丸は香港まで行ってましたよ。この船すごかった、大分の人がやっている時は、あっちこっち行っている。



尖閣への出漁を待つ熊本船と鹿児島船、右端は福栄丸

南シナ海・東沙諸島へ 4、5昼夜で 行けば 釣れた

— 沖縄を基地にして、南シナ海に、深海一本釣りに行ったわけですねえ。

丸山：俺達も南シナ海にも行ったんだけど、さわりの程度ですよ。この人達プロだったもん。南シナ海で主にシルシチュー(シマアオダイ)とねえ、あとはクルキンマチ(ヒメダイ)、とマーマチ(オオヒメ)。アカマチはあんまり釣れてなかったねえ。

沖縄から4昼夜、香港沖まで行けば5昼夜ちょっと掛かる。ほんのゆっくりゆっくり行ってよ。もう燃料も焚くかんように、もう積んでいる燃料も限られているさあ。

行きさえすれば釣れていたみたい。だからすごく大漁してきてましたよ。南シナ海は東沙諸島。その北西側に10時間位走らして、ベイカバンクといって瀬があるんですよ。そこによく行っていた。それからまた70マイル位走ると香港の近く、香港の南の方の瀬に、こっちまで行って。僕らもそっちまで行ったことある。今位のメンバー7名位で、時期は気象見て判断して、もう台風の時は行かない。長男が生まれる2、3年前まで行きよった。

4カ年位行ったねえ。(1988年～1991年?) 4年ってみっちりじゃないよ。1年のうちに行く時は4航海、行かん時は2、3航海、全部で10数航海位。

で、宏栄丸は、僕らが行く前の頃は1年の半分は南シナ海に行って、それでうんと儲けていたはずよ。向こうは、あとクルキンマチ、マーマチも乗せてきよった。

僕らはシルシチューとクルキンマチ多かったねえ。シルシチューに当れば速い。ほら大きいからねえ、仕事も速いんだけど、結構量はありましたよ。行った甲斐はあった。

あの時は値段はよかったから、僕達も少しは儲けたから（笑い）。

1 航海 水揚げ5,6ト 主にシロシチュー 値安かった

— 中国は、南シナ海でも領有権を主張してますねえ、中国船は多かったですか？

丸山：中国の船はあまり見なかったけど、台湾船は沢山いたよ。台湾船は延べ縄船が多かった。しょっちゅういたよ、カンパチ、ウチムルー（ヒレナガカンパチ）よ、あんなの獲っていたみたい。だから台湾船探して、僕ら喜んでましたよ。台湾船がいるから、この辺に魚がいる、漁礁があるってねえ（笑い）。釣れたらそこにブイを入れよった、ブイのアンカーを。もうこれがないと仕事できないですよ。だからすぐ入れよった。どんなに釣れても、2回目にその魚探しきらんのに。ローランがいうこと利いていないさあ。大体の場所は分かるけど。あっちの深度は魚探で、120、130メートル位、どんなに深くても150メートル位、100メートルちよいの所もあった。潮の速い場所もあれば、いかない時もあった。

だけど、南シナ海の魚は魚質がちょっと違うんじゃないかなあ、魚のセリに卸したあとも、1隻目は幾らかよかったけど、2隻目は安いとか、そういう魚の状態だから。

やっぱりあんまりいい魚じゃなかったねえ。主にシロシチュー、全部が全部、各船そんなでしたよ。だから船が何隻も続いたら安くなりよったもん。こっちの魚もそうだけど、どんなにシケている時にも安くなりよった。量が多いのもだけど。やっぱりいい魚だったら、ある程度値段は持ちますよ、量が多くても。でもメチャクチャ量が多かったからねえ。1隻5、6ト全員獲って来よった。遠いから経費も掛かるが、それでも儲けはあったから、皆行っていたんじゃないか（笑い）。

3月～5月 航海2週間弱 黒潮に乗って 帰り速い

— 行ったのはいつの時期ですか、1航海何日位ですか？

丸山：南シナ海行ったのは、大体3月終わりから5月始めに行ったのかなあ？ 3月4月までは冬の季節風が向こうにもあるわけよ。こっちにもあるけど、寒い時期はダメだった。行く時は台湾よりずっと東側を通過して、黒潮が通らん所を蛇行していくわけですよ。最初は何回か、与那国から直接行けば船がへんに動かん、でも近距離ではありますよ。最短距離で行こうとしたら全然船が動かん。それよりもずっと遠回りして行った方が船が走る。遠回りだけど、船の速力倍違うのに。航海日数は2週間までいかない。仕事7回位で帰ってくればよい。5昼夜で走って行っても、帰りは4昼夜半で、帰りは速いですよ。



黒潮本流に乗れば、10ノット以上は走る、帰りは速い

黒潮に乗ってくるから、台湾の後ろ通り、台湾が見えたら、黒潮は結構速い速い、与那国までは、もうほんと。だからここを船が走る時に、北の風に遭うと、もう目茶苦茶シケますよ。潮はこっちから、風はこっちからだから。

台湾から与那国までは10ノット以上で走る。僕らの船でも、台湾の近くは13ノット位ですよ。

黒潮は八重山・宮古からは離れて流れているから、その上通っていけばいいさあ。八重山はすぐ近く黒潮だけど、宮古島に寄せると走らんけど、離して走ると船速い。

アカオ(大正島)辺りに持って行かないけど、結構速かったですよ。

今は、中国が南シナ海の領有権主張しているさあ、紛争地域だし、もう行けない。20何年前に行ったきり行かない。あの時僕は新米だったから、いつも拿捕されたら大変という気持ちがあったねえ。その点、小笠原も遠かったけど、向うは安心して行けたさあ。

小笠原 冬場毎年行った 5ト水揚げ

一 小笠原も行ったわけですねえ、漁はどうでしたか？

丸山：小笠原へは毎年冬行っていた。年明けた1月から。いい時は3航海位、悪い時は1航海、2航海でしたよ。行ったのは27年位前、2年位行ったから。(1987年～88年か?)

小笠原は沖縄からは行っていない。鹿児島から4昼夜、北硫黄島まで。

鹿児島港を朝8時に出港して、錦江湾をこう出て、もう出る時には夕方だからねえ。錦江湾は結構速いですよ。で、夕方佐多岬を通るから、佐多岬を通過して、それから4昼夜目の朝の4時頃、北硫黄島が見えていたのに。冬でも、あつちは3時半に夜が明ける。もう4時5時といったらここに太陽ある。沖縄に比べたら1時間半位早い。九州では6時といったら夜も明けないけど、小笠原は早い、でも夜も早い。

1航海、2週間はゆっくり掛かってましたねえ、2週間では足らんから。硫黄島は全部廻ってましたよ。北、南まで、小笠原の許可貰ってからねえ。あの東京都の許可、許可持ってないとやっぱり難しかったもん。だから今でも持ってますよ。小笠原の漁業権は、行かないけど。漁は、結構ありましたねえ、いい時はすごかったよ。

俺なんかがいる時5ト位。小笠原は冬だから、結構長い日数やって、10日位操業当り前だった。だから魚の鮮度はあまりよくない。あの当時だから売れたけど、今だったら売れないはず。魚は殆んどアカマチ、8割アカマチだから、3ト半、4ト位は獲ってくれば、もう500万位は売れたもん。ない時もありましたよ。遠いから経費は相当かかりましたねえ。でも当時は油は安いから、燃料が安いし、氷も。積み込んでいっても100万円以上積んで行ったはずよ。俺詳しいことは知らんけど、燃料10キロ以上は使った。僕らのこの仕事、10キロ・1万リットルといったらかなりの量ですよ。

マグロ船は30キロとか、簡単に言うけど、僕らの一本釣の水揚げがそんなにないさあ。

今は油も相当高いし、もう小笠原に行くのは無理だが、行ってみたい魅力ありますよ。

やっぱり先輩達が行って成功しているから。今は僕らが行かなくて、宮崎の船はしょっちゅう行っている。静岡の船とかもいるみたい。そういう話を人から聞いてますが。

燃料 高騰 3倍以上 魚値段 一緒 もう遠出できない

— そのあと南シナ海、小笠原に行かずに、もっぱら南西諸島、尖閣諸島ですか？

丸山：そうそう、もう今は燃料も高くなって、もう前のように遠出できない。もう沖縄基地に自分で決めているからさあ、もうこっちだけ、与那国と尖閣諸島だけ。九州にも行かんよ。ただ奄美海域まで仕事に行きますけど、それより北にも行かない。

燃料の重油は、前は30円代でしたよ。もう何年前かなあ。今は約100円、3倍以上。

一番安い時は29円か幾らで済んだ。前は消費税もなかった、今は90何円に消費税だから100円越える。それに比べたら魚の値段はずっと一緒よ。他のものは皆値上がりしているけど、インスタントラーメンでも当時4、50円しかなかった。今は100円近くする。それでも魚の値段はずっと一緒か、横ばい。それだけ俺達漁民の仕事は苦しくなっている。

沖縄を基地にしているから、もう遠くには行けないし、行かないです。

で、4月から6月、7月から9月の春と夏は、夏は台風時期もあるから、尖閣なんかに行かない。与那国から宮古・八重山、沖縄本島、たまには奄美海域とかに。

尖閣は10月から3月までは冬の時期がメイン。だけど一昨年(2013年)は行けなかったさあ。中国の海警に追いかけて、ああいうこともありますよ。とにかく仕事はそのパターンでやっています。

大正島から操業 徐々に西へ 魚釣島へ

— 尖閣諸島は10月頃行って、向こうでどのように操業するんですか？

丸山：最初の10月頃はこの大正島、大正島から、徐々に徐々に、西に行くわけよ。

大正島で釣ってから、何日か釣って帰ってきて、その間には3週間位は掛かるから、だから尖閣諸島には10月の終わり頃か、11月の初めには行きます。

これも天候次第です。北の風が早く吹けば、早く行くねえ。黒潮が北の風になるとちょっと緩むから。昨日まで北の風だったけど、今日は南東の風になると、黒潮に油を注いだみたいにゴーゴー来るよ。

尖閣では潮の流れが風向きでは全然違うんだから、昨日までなかった潮が今日はすごいです。昨日まで例えば500疋釣れた魚が、今日は100疋も釣れないよ。そんなに変わる。だからもう明日からダメになるねえ、低気圧が、ほら冬はこないけど、秋になると何日かおきに来るねえ。低気圧が来て、明日からもう南東の風が吹くならもう諦めておいた方がいい。それから2日間は今日は南、南西と

回るでしょう。それから前線通過で北の風が3日間吹くさあ、その3日間位はいいけど。



魚釣島沖での操業光景。潮の流れと風見て、一本釣の縄入れる。魚食い付いてきたようだ！(宮崎卓己 2014)

そのうち1日位風の時はあるから、大体がこれの繰り返し。夏場は潮が速くて、潮が悪い、だから魚も釣れないですよ。魚釣島辺りはやっぱり夏は潮の力強いから。だけど、冬場で、どんなに潮がよくても、魚は釣れない時は釣れないですよ。魚が釣れる関係と潮の関係はよく分からない、丁度いい時に行かんと漁はダメですねえ。

— 大正島は突き出た岩山、潮が速く、アンカー入れるのは難しいと聞きましたが？

丸山：アンカー入れてますよ。シケている時はちょっと入れ難いけど入れます、島の南側で。あんまり陰にならんけど、リーフがあるから、もう洋上にいるよりずっとまし。

でもその時は潮の流れやらんと、潮がシマガッテ、潮が西から速い時は船が島に寄って行くわけよ。油断したら座礁するから、だからできるだけちょっと島から離して、陰じゃないけど、陰っぽい所に入れて、やっぱり島がないで全然違う。4メートル、5メートルの波でも島の近くに行けば風だもん。眠る時もそこで大体ねえ。大正島では、島の近くでは仕事はあまりやらん。すぐ近くは深みに魚がない、漁場は遠いよ。尖閣の魚釣島みたいにすぐ漁場にはなっていない。ちょっとやっぱりこう離れていて。また瀬がねえ、東側は悪いけど、西側は結構緩やかなだわけ。大正島ではやっぱりクルキンマチ、アカマチですねえ。水深300メートルまでやらんけど、大体が200メートルより深い所で。

島近くで操業 シケたら避難 最高の漁場

— 魚釣島近辺だと、すぐ島の近くが漁場だから、操業しやすいわけですねえ。

丸山：、あそこだとすぐそこに島がある。そこからすぐ漁場なのに。尖閣の魚釣島近辺だと、魚釣島、南小島、北小島、それと南小岩、北小岩とかあるさあ。この島なんかが全部ツルツルツル漁場でこう繋がっている。だから操業しやすい。シケた時も、島からすぐ出たら、もう陰になるから、何ともない所からできるから、シケもあんまり考えなくていい。もう漁場が目の前だから、幾らでも仕事できるさあ。もうあんなのは最高ですよ。漁も丁度いい位獲れますよ。あっちやったり、こっちやったり、深い所から浅い所まで、それぞれにやったりで。ほんとは大正島から、尖閣の西までは、魚釣島の西までいい漁場です。ほら一昨年は、海警が来ると行って行けなかったけど、去年まではずっと行っていたから、10月からずーと行って、今年の3月入ってまでか、ずっと尖閣に行っていた。やっぱり行って、ほんの何航海でも行ってましたよ。



魚釣島近くで操業している僚船。(宮崎卓己 2013)

— 尖閣諸島は最高の漁場なんですねえ、勿論、久場島にも行きますか？

丸山：勿論、久場島も行きますよ。魚釣島のすぐ北東にある漁場だから、よく行っていたねえ。だけど、今は海上保安庁から、久場島では仕事するなど言っていた。今中国の海警が廻っている一番近い島だから、もう久場島の14マイル位来るわけさあ。もう久場島も12マイルから入れないようにするけど、僕らみたいな小型漁船がやっているのをレーダーに映ったら、やっぱり彼らも見に来たいみたいねえ。海警の奴らも。だから海警が今久場島北西側14マイルに来ましたよと、9マイル位、僕らも島にいるわけがないさあ。島から4マイル離れた所で仕事していたら、彼らが9マイル位僕らから近寄れば、ほら島から14マイル位の所になるさあ、で、相手から8マイル、9マイル、見えるわけよ。今日みたいな天気だったら、見えたらやっぱりヤバイだろうと仕事止めてから逃げるわけよ。だから久場島にはあんまり行かないでと言うよ。海上保安庁も、水産庁も。

結構あつちは潮が速いからよ。魚釣島の西の海上通った黒潮がこう蛇行した時に久場島の北を通るみたい。久場島も丁度当る場所にあるから西側は潮が速いよ。あつちはアカマチじゃない、シチューマチがよく釣れる。大陸棚に上がった所に島があるから。で、水深は100メーターから100数10メーターだねえ、アカマチがいるということはまずない。

以前水揚げ3,4ト 今2ト 半日魚探し

— 同じ19トの鹿児島船の話だと、水揚げは3トから4ト位と聞きましたが？

丸山：前はねえ、今は2トちょっと釣れば帰って来るよ。前は4トから4ト半釣って帰ってきた。5トも6トもと言うのは大げさだけど、最低で3トから4トは釣って来てた。

ほんで、1人釣機でボンと縄入れておけば、5、6匹とか、10匹とかバンバン揚がっていた。1人2台、浅い所でやれば、やっぱり1人2台あるから、倍は揚がらんけど、釣れるポイント行った時は、漁獲がぐんと上がるから。

鹿児島船はもうプロだし、ベテラン揃いだから、ずーと魚がいる所に行って、やっている。俺なんかは魚探して1日の半分は走っている。GPSに釣れるポイントは一応あるけど、そこに行って魚が釣れなければ、また違うポイントに行かないといかんさあ。

そこが漁場であっても、潮の関係で、魚探に反応がなければ、次から次探して行く。

Aに行ってダメならBに、またBからまたCに行って、漸く魚のいるDに行くが。

でも先輩の鹿児島船はずっとやっているから、Aがダメなら一発でDに行くわけよ。

もう探索する時間もなく、魚を釣って次の漁場、魚のいるポイントに行くまでは1時間以内、30分以内で行って魚を釣るわけ。俺達はそういうことができないから、まず経験がないから、あっちこっち行って、漸く魚が釣れるさあ（笑い）。

尖閣では行った先、行った先、魚が釣れたのは昔の話よ。もう獲り過ぎたかも知らんが、今はもう昔のように魚は釣れないんだからねえ。

— お父さんが船を持っていた最初の頃は、相当釣れたわけですねえ。

丸山：あの頃はあの頃で、相当釣れていた。でもあの頃はこんなGPSが発達していない

から、前釣ったポイントに行こうとしてもAローランで確実に行けんわけよ。近くに行っても、ほんの微妙な所を当りきらんで違う所に行ったりで。でも行き当たりばったりでも相当釣れていた。行く先行く先に魚がいたから、魚に恵まれていたかも知れん（笑）。

僕が船に乗った最初の頃は、ローランが利かないからメーウキを大部積んでいた。魚が釣れると、そこにアンカーブイ入れて、ポイントを目印にしてねえ。アンカーブイは、海底があつて、海面があつて、アンカー入れて、浮き付けて、それに目印の旗をこう立てるわけ。ブイ付けたら潮の流れで、沈んでしまうわけさあ。ブイがあつて旗でポイントが分かるようにと。あとになったらローランが利くからと、ローランもほんとに上等上等に替えていってから。大部上等ローランを付けてましたよ。Aも、Cも。

ものすごい波かぶる 危険考えたら 海行けない

— 18歳で船に乗って、尖閣諸島に行った時は、危険、怖いと思いませんでしたか？

丸山：特に危険？ もう怖いと言え、今は中国船ですよ（笑）。18歳に行った時に怖いですよ。それは様々でしょう、人間の考え方ですよ。俺なんかそんなこと考えてなかったもん。それ考えたら海行けないはずですよ。でも、尖閣行ってシケていた時は、最初に行った頃なんか、もう見えませんよ。

雨合羽着てから、人の目の前もよく見えていなかったから、皆そうはず。今新しく、自分の息子がちょっと船に乗りましたよ。ほら何十年ぶりに新人だから、皆自分が乗り初めた時のこと忘れてる。あの子にすごい期待したのはいいけど、できないって。すぐの子はもう目の前すら見えてないから（笑）。やっぱり、皆は自分と同じ位できると、もうそういう気持ちで、もうそれが人間なんでしようけどねえ。



少しシケると、雨、風、波のしぶきを被る。雨合羽着ても用なさない。尖閣の冬はものすごい。（宮崎卓己 2014）

雨合羽着ていても、ものすごい波を被るさあ。もうウエイトスーツと一緒に、雨、波、なおかつ身体は一緒になるからねえ、あれ着ても、しぶきとか湿気で、やっぱり荒波は悪いけど、この大雨もすごいですよ。大雨の時も話にならん。3月から10月の冬の時期に行くから、あつちは潮が速くて、風と波がぶつかって荒れると、半端じゃない、もうすごいですから（笑）。

台湾船 結構いた オキ縄・セ縄？

— その頃、尖閣諸島には台湾船が来ていたようですが、どうでしたか？

丸山：台湾船は結構いましたよ。突ん棒していたのを見ました、今はいないなあ、今は

前にはいました。カツオ船みたいな、前にモリ持って立っていたから、あれは明らかに突ん棒船です、突き台があって、3人位乗っていたんじゃないか。あんまり沢山乗っていなかった。突ん棒船の他は、一本釣船と延べ縄船がいたわけよ。延べ縄は何を獲っていたか分からん。オキ縄か、セ縄(マチ縄)だったか分からん。でも台湾船はセ縄はあんまりいないみたいだった。だけど分からんさあ、彼らは何でもできる人だから。その時その時で何でもやるから。もうほんと何でもやるよ(笑い)。

台湾船は、筏を積んで、竹筏にも乗って? そうそう、確かにいましたはねえ。尖閣でも前は。だけど台湾の方に行けば、アジシコートが見える所に行けばもっといましたよ。それとか紅頭嶼の近くにもいました。あの辺で仕事した? いや、僕らは仕事できないさあ。12カ所の領海があるから。南シナ海に行く時見たただけだから。

尖閣 アカマチ狙い シチューマチ 小さい

— 尖閣諸島のシチューマチは、小さいと言われてますが?

丸山: そうですねえ、今も小さい。ほんと小さい、あとの魚は結構でかいですよ。クルキンマチも、マーマチも、同じ水深でねえ。マーマチなんかも120メートルの水深、この辺(南西諸島)も一緒だ、尖閣の奴は結構でかいよ。シチューマチだけ小さい。前はこの板箱に、あっちから、こっちから入れて、真ん中に入れる位の大きさだったけど、今こんな小ちやい(笑い)、ますます小さくなって、今は50匹位入るはずよ。もうイワシか、小さいタイがいるでしょう、あんなものよ。小さいのは何でかなあ。確か宝山なんかのシチューマチは大きいです。3倍位はあるから。

— 尖閣諸島で釣れなければ、宝山とか、大九とか、釣ってくると聞きましたが?

丸山: そうそう、海棠丸の場合だと、まずは尖閣にアカマチ狙いに行くわけ。

アカマチ釣れなくて、シチューマチ、クルキンマチ釣るんだったら宝山・大九に。あっちのは形が大きいから。だけど尖閣である程度釣れたら、それでそのまま帰ってくるわけさあ。尖閣は黒潮の通り道だけど、宝山は黒潮から外れているから、よっぽどじゃないと1週間位いても3日は潮が悪くても、あと4日はどうにか、4日ちよつとずらしたら魚が釣れるという感じ。それにアカマチは宝山にはあまりいない。宝山にアカマチ狙いに行く船はいないはずよ。



尖閣はアカマチ狙いに行く。釣り上げたアカマチ

那覇地区辺りマチ釣船は行っているか分からんけど、僕等はアカマチ狙いで尖閣に行きますよ。だけどアカマチだけ狙っていても仕事ならん。釣れる時に1日2、300疋釣れるけ

ど、釣れない時はもうほんの僅かだから、これでは仕事ならん。何でもかんでも釣れる魚を釣って来るさあ（笑い）。

アホドリと共存 サメ・イルカ どうにもならん

— マグロ船もそうですけど、釣った魚は、サメとかに食べられますか。

丸山：アホドリは尖閣諸島沢山いますよ。俺達が釣った魚、小さい魚なんかもって行かれるけど、これは愛嬌可愛いですよ。もうアホドリとは共存してやってますよ（笑い）。

だけど、サメとか、イルカにはもうどうにもならん（笑い）。でも潮によって、サメが食う場合と食わん場合がある。一日のうちでも、何回か変わる。これ不思議だよ。

サメが近くにるか、いないか分からんけど、時間が来たら、サメにスイッチが入るか知らんけど、魚を横から食い盗るわけさあ。海の中だから見えない。でもある程度の時間が来たら、パッと一斉に盗らなくなる。サメは全くいたずらしなくなる。これ不思議だ。何かのスイッチがあるはずよ。潮の回りとか、何かの月の加減とか、何かかが、これ俺達が理解不可能。それでやっぱり船が3隻位いたら、沢山釣っている船にはサメがすぐ行くみたい。沢山釣っている方に行くから（笑い）。

サメの種類？ 尖閣のサメは上がってこないから分からん。宝山、大九のは、たまに船の近くまで、こうやって、ジョーズの映画みたいに口開けて魚に付いてくるから、これを釣るから分かる。アオザメとか、イタチザメですよ。尖閣のはそんなのじゃない。見えない所にいるから分からん。サメに魚盗られたら、道具根こそぎなかったりして（笑い）。

イルカも魚盗りますけど、針まで盗らない。魚啜えてから引っ張るみたい。でもサメは全部、魚を丸ごとパックと食べるわけ。そういう感じがする。まれに半分ちょん切ったり、頭しか揚がらなかつたりするサメもいるけど、海の底に潜って上がってこないから分からん。イルカだとすぐ分かる。船と一緒に飛んだり跳ねたりしているから。その時は低周波数装置あります。あれはイルカには効くけど、サメは何も効かん。

だからサメにやられたら、こっちが逃げるしかないですよ（笑い）。

中国海警 押しかけて 仕事できない

— 今とくに、尖閣諸島で、漁に支障きたしていることは何ですか？

丸山：僕らも、一昨年は尖閣は2、3回しか行ってない。2航海位しか行ってない。早い時期に行ったから、3航海行きましたねえ。でも向こうで、去年の暮位から国有化が何とかいって、中国がうるさくなってから、



尖閣諸島に押しかけた中国公船(下)。退去を命じる海上保安庁巡視船(上)。(「ウェブサイト」より)

もう行かなかったですねえ。先に行った鹿児島船があつた中国の海監、海監からちょっとにらまれたみたいで、海上保安庁がこっちに船を回避しなさいという回避ばかりで仕事にならなかったと言うてました。今は、海警が来ている。だから怖くて、海上保安庁は、行くとは言わないけど、もし事故があつたら、保障できませんよ、とやっぱり言うもんねえ。だからそんなこと聞いたら、もう行きたくなくなる。行っても、中国の海警に見つかったら何しに来たかという格好で、追廻すから、前のように自由には仕事はできないですよ。もう 12カ月の領海内で操業ばっかし。

尖閣は中国から盗られたら日本は終わりです。だけど自分達漁師に言わすれば、全然行かれんわけだから、もう半分は盗られた格好やもんねえ。今 1 番支障きたしているのは海警さあ。政府は早くどうにかしてほしいですねえ。

最盛期 僚船 30 隻超 今減って 6,7 隻

一 今年になって、沖縄を基地にした一本釣船で、船辞めた人がいると聞いてます。これも尖閣諸島に行き辛くなったためですかねえ。

丸山：鹿児島船も、沖縄基地にした船は 6 隻から 4,5 隻になりました。尖閣に行き辛くなって辞めたのは分からない。事情はいろいろあつたと思うけど。僕らの仲間は、前は 30 隻以上いたのに、今はもう 6,7 隻かなあ、もう相当減っている。仲間が減って、僕達は仕事にしんどいですよ。情報がないさあ、もう尖閣に行くにしろ、冬はやっぱり尖閣か、与那国しか行かんから、尖閣にいる船にどんなですかと聞いたら、どことこの島辺りはあまりよくないよ。どこか移動しようかねえと言ったり、どどこは漁はいいよと言ったりで、結構船が多いといろんな情報が入って、動きやすかった。皆の情報はすぐ聞けたさあ。

今は情報を聞く相手もない。だから僕達も仕事しんどい。

操業船 大半中古船 新造すれば 1 億円近い！

一 丸山さんの海栄丸は、後継者も育て、いよいよこれからですよねえ。

丸山：長男は学校卒えて一時は船乗っていたが、今大学行っている。次男は水産高校 1 年で卒業したら船乗る予定。その意味では後継者も問題はない。だけど、このまま一本釣を続けて行くにはいろんな悩みがあるさあ。油の問題とか、魚の値段とかは別にしても、問題は多いよ。一番の悩みは船のことですねえ。この海栄丸は途中で買ったけど、最初の船は、俺がとにかく憶えている船は、昭和 43 年か 44 年に親父達が木船を造っている。

この初代海栄丸に乗って、親父達は沖縄来た。そのあと昭和 53 年に FRP を新造して、僕が乗ったのがこの 2 代海栄丸。これが老朽化したから、平成 11 年に今の 3 代の海栄丸と買い替えたわけ。いずれも 19 トン。20 トン以上になると、国管轄になるから、検査が難しくなる。沖縄の船も 19 トンばかりでしょう。19 トンより大きい船はいないですよ。

今の海栄丸はもう 14 年になる。まだまだ使えるけど、やっぱり中古船だから、いずれ買い替えるか、新造しないといかん。この間造ったマグロ船は、1 億 7 千万と言った。

俺達みたいな船は最近造る人がいないから知らんけど、この間つい 1 年前に下ろしてきた船がそのこと言うたよ。俺達みたいな一本釣船でも、1 億近くは掛かるかも知れん。

正直言って、今でも経営は苦しいさあ。維持するだけで精一杯よ。船の買い替え、新造なんてできっこない。船が使えなくなれば、もう廃業するしかないさあ。

一本釣船 尖閣国境の守り 国 育成策を、

— 丸山さん達一本釣船が行って、そこで操業していることが、尖閣諸島を実効支配しているわけです。それに一本釣を辞めれば、これを再生させるのは難しいはずですよ。

丸山：ここ那覇地区からは前は一本釣船が尖閣へ相当行ってましたねえ。これも行かなくなつて、俺達の熊本船とか、鹿児島船、宮崎船、大分船とか 30 隻は行っていたねえ。

だけど、今は段々少なくなつてもう 10 隻にも満たん。これもこのまま減って行って、尖閣に誰も行かなくなると、中国の思いのままになるかもしれない。

確かに、日本の船が、俺達が、尖閣に行つて、そこで操業していることが、尖閣は日本のものとして、実効支配していることになるわけだ。

一本釣の船は、皆中古船で、いずれ船を買い替えるか、新造するか、せんといかん。

だけど経営が苦しいから、船使えなくなると、もう廃業するしかないよ。

それに一旦廃業したら、漁師を集めるのも大変だし、一本釣船を再興するのは、もう不可能ですよ。一本釣を続けさせるためにも、国の方から、船の買い替え、新造のための補助とか、資金援助とか、何かがあればいいんだけど。

— 尖閣諸島での一本釣を絶やさないためにも、政府による育成補助策ができるといいですねえ。今日は有難うご座いました。 (了)



一本釣船の操業を見回りに来た海上保安庁巡視船。国境漁業は厳しい。そこで操業していることが日本の実効支配の有力な証。(宮崎卓己 2014)

兼島 秀光 かねしま ひでみつ (渡嘉敷漁協)

1934年(昭和9年)、渡嘉敷村に生まれる。81歳(2015年時)。

慶良間諸島は沖縄カツオ業の発祥の地。戦前同島で造られたカツオ節はキラマガツーとして名を轟かせた。氏は中学卒業と同時に1950年3月15歳で鰹業組合「源三丸」に就労。エサ採り見習いを経、本船に乗る。琉球水研の依頼を受け、同年11月源三丸は尖閣諸島で深海一本釣試験操業することになり、飯炊きで同行した。氏のカツオ船体験は15歳から18歳まで僅か2,3年である。那覇にきた後はもっぱら陸(おか)の仕事に従事するが、故郷渡嘉敷島と慶良間カツオ業に対する誇りと思いから、少年期のカツオ漁体験を基に、のち「慶良間の鰹一本釣り・キラマガツー」を著わす。氏は15歳で飯炊きで行き、尖閣諸島に40日間滞在した。少年の目に映った65年前の話など、いろいろとお聞きした。

**慶良間 沖縄カツオ漁 発祥地**

一 慶良間諸島(渡嘉敷村と座間味村)は、サンゴ礁の海がきれいで、国立公園地域でもあるし、観光地として有名ですが、沖縄のカツオ業の発祥の地なんですね。

兼島：今はカツオ業は辞めてますが、沖縄のカツオ業は慶良間が発祥地ですよ。

明治初めの頃に、宮崎の漁師が慶良間近海に来てカツオ船を操業していたわけです。座間味の人がこれを見て、当時の松田和三郎村長が入漁料を半分する代わりに、島の人も船に乗せてほしいとあって、乗せて、やり方習わせたんです。習ったもんだから、それで座間味は船買って、明治34年には、カツオ漁をやり始めたわけです。隣の渡嘉敷もこれを倣って、座間味に人間やって、実地訓練させて、明治37年には、渡嘉敷もやり始めていますよ。漁場はもう目の前ですから。慶良間からカツオ業が起って、沖縄中に段々広がって行ったわけです。慶良間のカツオ業と言えば、戦前からキラマガツー(慶良間節)が有名ですから。僕は那覇来てから知ったです。あれは味といい、姿といい、沖縄一のカツオ節だった、最高の品だったと、だから値段が高くて、自分達には買えなかったと、皆言っていました(笑い)。もうこのキラマガツーの恩恵を受けて、島は相当豊かになりましたよ。



渡嘉敷島の全貌 (「ウェブサイト」より)

「慶良間の旅」という明治39年の記事には「渡嘉敷島は座間味島と同じく瓦葺きが多く見られ、その後も毎年4,5軒ずつ増える有り様は、20年待たずして全村瓦葺きになると思われる」とあります。僕も戦前は9,10歳位だから島の家並みは憶えています。1番奥の方に茅葺家が2つ3つあった位で、あとは皆瓦家でした。石垣囲いされた赤瓦の家が立ち並んで、ほんときれいなたたずまいでした。

父 エサ採り専門 戦前 南方に出稼ぎ

— 沖縄では赤瓦が豊かさの象徴です。カツオ業の恩恵を受けて赤瓦の家並みだったわけですねえ。お父さんもカツオ業をなさっていたわけですねえ。

兼島：ウチの親父はジヤコトヤーしていた。このエサ採りを若い青年を 5,6 名位使ってやっておった。戦前源三丸の組合の支部としてこれ専門にやっておった。竹で編んだ生簀があったんですよ。口は人が入る位の大きさしかないけど、大きかったですよ。浮きは丸い竹の浮き付けて、孟宗竹を四角にして、これで浮かしておったです。僕が 7,8 才だったかなあ、この生簀の中に白い鳥が飛び込んで入った。カモメの 1 種でした。親父がこれを捕まえてきて、僕におもちやでくれたことの憶えていますよ（笑い）。この生簀は渡嘉久という所の港に浮かしておった。カツオ船は朝早く、あっち廻って、これからエサを掬って行きよったです。戦前はこういうエサ採り専門を置いてやっていたけど、戦後はこのやり方やってないです。



戦前の渡嘉敷島のカツオ節工場（「島尻郡誌」より）

昭和の 3,4 年頃ですか、世界的、全国的に不景気になったから、皆南洋に行ったんです。トラック島とか、ポナペ島とかに、出稼ぎで行きましたよ。カツオ船やって、船もろ共、

一緒に行って、トラック島で成功した人も沢山いますよ。ウチの親父はボルネオに行った。あっちで漁業しないで、樵(きこり)したんです（笑い）。従兄弟の北村盛夫兄さん、戦後源三丸の事務長していた、あの人も呼び出してやったといえますから、相当稼いだんでしようねえ。あの時分 70 坪の屋敷買って、家も造って、赤瓦の家も造って、塀はコンクリートですよ。渡嘉敷でコンクリートの塀は初めてだった。セメントも樽に入ってきたらしい。僕が生まれる 2 年前だから昭和 7 年。親父が 38 かなあ。40 になってないです。

それが昭和 20 年 4 月 1 日に、アメリカ軍が慶良間に上陸したら、もう戦で片っ端からやられてしまったわけです。あの渡嘉敷の赤瓦の家並みはやられて失くなりました。

親父も戦死して、僕の家も焼けて失くなったですが。あのコンクリートの塀だけは残ってますねえ。艦砲の穴も空いて残っている。戦争で、親父の写真も何もかも無くなっているから、あの塀だけが親父が残した形見です。もうずっと残さんといかん。

戦後のカツオ業再興 上陸用舟艇から ガリオア船

— 「慶良間鯉一本釣り・キラマガツ」を読ませてもらいました。あの本には、戦争で、木っ端みじんにやられて、戦後ゼロから出発した渡嘉敷のカツオ漁が、兼島さんの体験を基に書かれていますねえ。戦後のカツオ業を再建していく様子がよく分かります。

兼島：僕は終戦の年は 11 歳だから、終戦後の昭和 25 年頃からのカツオ漁しか知らなです。戦後の渡嘉敷のカツオ業は、米軍払い下げの上陸用舟艇、L S T を改造したのを使って始めんです。

カツオのエサ採るサバニにもない。燃料タンクを切って、あれをサバニ代用でつかってました。

L S T は最初は V P 型といって幅約 5 メーター長さ 20 メーター位の小さな船、あとでひと回り大きい L C M 型というのに代わった。あれは鉄製で四角だからスピードが出ない。それに少しでもシケると出漁できない。僕が中学校卒業し、3 月に鰹漁業組合に入った。入った時は V P 型だった。8 月にはこの船にちょっと乗って、それから L C M 型に替わった。これにも 1 ヶ月位しか乗っていない。僕は漁師初めてだし、船にも慣れてないから、船底で眠っていたら、もうドスン・ドスンと船底に波が当たる音して、今にも船が壊れて沈まないかと怖かったです。いつも心配でしたよ（笑い）。近くのソネにはカツオはこんなにいっぱいおる。おるけど、船があんなだから、行っても、思うように獲れなかった。

昭和 25 年には、ガリオア資金（米国占領地域統治救済資金）で、本格的なカツオ船ができたんです。渡嘉敷に 9 月頃にガリオア船が回航されてきた。源三丸、漁集丸、裕昇丸、広栄丸の 4 隻だったかなあ。僕が乗った船は源三丸。戦前の船にあやかって、源三丸という船名付けた。この新造船が回航してきた日は、僕達は、丁度 L C M で出漁してましたよ。阿波連崎の南で流木に遇って、カツオを大漁して帰る所だった。

港口で源三丸にばったり出会って感激したですよ。新造船が回航してきたら、もう村中が大喜びでした。皆浜に出てきて、村挙げて祝い、お祭りみたいでしたよ。戦争終わって 5 年経っていたから、戦災からようやく立ち直りかけてます。村の復興にはカツオ業が一番だと皆考えていました。

男達は若い人達から年寄りまで、殆どはカツオ船に乗ってました。また女の人達は工場でカツオ節製造の仕事やってました。島にこれという仕事もないですから、経済的にも相当助かったはずですよ。



米軍上陸用舟艇 L S T の V P 型（小型）、これを改造してカツオ船に使った。（「沖縄戦記録写真集」より）



燃料タンクを 2 つに切って、エサ採りのサバニ代用で使った。（「甦る沖縄」より）

カツオの頭 ハラワタで 食も 潤った

— カツオ業の盛んな宮古の池間島、伊良部島では、終戦直後の食料事情の悪い時でも、カツオの頭があれば、食うのには困らなかったと言っていましたか？

兼島：渡嘉敷でもそうでしたよ（笑い）。カツオ船が大漁してくると、サバ二で、カツオを浜に運んで水揚げします。製造場には持って行く前に、浜で解体して、頭とハラワタ(内臓)は切って捨てるんです。捨てるもんだから、海はカツオの血で真っ赤になって、足の踏場もないほどに頭とハラワタですよ（笑い）。これは誰でも取っていいから、解体始めると、これもらいに、大人から、子供から、浜に、わんさと集まりますよ（笑い）。血で真っ赤に汚れている海に入って、一生懸命、頭やハラワタを拾い勝負、取り勝負です。これをバケツや一斗缶入れて、自分の家に持ち帰って行くわけです。これはとても重宝でした。



水揚げしたカツオは浜で解体される。頭とハラワタは切り取られ海に捨てる。（「座間味村誌・上」より）

カツオの頭は、お汁に入れて食べたり、塩煮しておかずにしたたり、残った物は直火で乾かし、子供のおやつにもなりました。骨や尻尾はダシになります。またハラワタ

はきれいには拵えて、おかずにしたたり、塩煮して食べた。また塩辛作りしました。ウフゲー(腸)とハラゴウ(腹皮)の塩辛があったです。あれはお茶うけとかお酒の肴には最高でした。

あとカツオ節の削り皮もありましたねえ。あれはダシ汁とか、おかずに使いました。

終戦直後は、飲まず、食わずの苦しい時代に、僕らの渡嘉敷島が、ひもじい思いもしないで、皆暮らしていけたのは、やっぱりカツオ業のお蔭です。どこの家にもカツオ頭やハラワタがありましたから、食も潤っていたと思います。カツオにはほんと感謝しています。

— カツオ船に乗ると、最初はエサ採りのテンメーカーサからやるわけですねえ。

兼島：そうです、僕は中学卒業して、3月には15歳でカツオ船乗って、最初はテンメーカーサー、伝馬船でカツオのエサ採りし、あとで港に回航する仕事ですが、これからやりました。カツオ業は厳しく辛い仕事ですよ。漁期は2月頃始まって10月までで、出漁する日は朝が早いです。もう午前3、4時には皆浜辺に集まってきますから。伝馬船は浜辺から離れた所に置いてあるから、浜にきたらすぐ裸になって伝馬船を近くに寄せることからやりました。これがテンメーカーサーの仕事でした。当時栈橋がないから、皆はこの伝馬船に乗って、港の真ん中に停泊している本船に乗り移るわけです。それからエサ採りです。カツオ漁は大漁になるか、不漁になるかは、エサのよしあしで決まります。それにエサに使うスルー(キビナゴの稚魚)、サレーラー(タカサゴの稚魚)、ウフミー(テンジクダイ)とかだった。あれは回遊魚なので、大体採れる場所が決まっている。多く採れるエサ場は、他の

船との場所取り争いですよ。一番先に着いた者が勝ちだから、うっかり朝寝したに皆に叱られ、時には置いて行かれることもあるから。だから最初の時は、母はよく起してもらいました（笑い）。このテンメーカーサーのことは「キラマガツ」に詳しく書いてます。

このテンメーカーサーは、普通 2 ヶ年位させられる。だけど僕の場合はこれを 5 ヶ月やって、船に乗せられた。だから 8 月頃には船乗りました。船乗って、今度は船で、3 ヶ月間、沖に出てカツオ見つけたら、これ釣る時にエサ運び、生間（エサの生簀）からエサ運びしてました。そうしているうちに 11 月、カツオは来なくなるから、もう休漁ですよ。カツオ船休むかと思っていたら、これから約 1 ヶ月間、尖閣列島という所に行くから、お前は飯炊きで乗れと言われたんですよ。

傭船で 尖閣へ 深海一本釣試験に

— そのあと、11 月に尖閣諸島に一本釣の漁場調査で行くことになったんですね。

兼島：カツオ漁は 1 年中できればよいが、カツオは水温が 20 度以下になると活動も鈍るので、渡嘉敷のカツオ漁期は 4 月から 10 月頃までです。11 月から年明け 3 月頃までは休漁にしていた。カツオ漁は 11 月頃から休漁になります。そしたら 11 月の半ば頃に、尖閣列島に行くことになったんです。後で聞いて知りましたが、源三丸組合に水産試験場からの依頼で、目的はアカマチ(ハマダイ)とか、シチューマチ(アオダイ)とかの漁場調査です。この航海は 1 ヶ月位の予定で、中堅以下の若者を 20 名ばかり募集していたそうです。



渡嘉敷島のカツオ船「源三丸」(30ト)

僕は 15 歳だから何とも言われなかったけど、強制的に連れて行かれました。一番下っ端の飯炊きで（笑い）。

源三丸（門元安雄船長）は、夕方 7 時に渡嘉敷の港を出航しました。阿波連崎を回り、座間味・久場島から尖閣列島向けに針路をとり、7 時間も走れば、もう島影はまったく見えなくなります。渡嘉敷から、1 昼夜は掛かかります。当時尖閣列島はユクンクバシマと言っていましたねえ。最初はアカオ（大正島）です。あそこには慶良間から 22,3 時間位掛かかります。

あの当時の船で、源三丸で、60 馬力かなあ。アカオから魚釣島までは、3,4 時間？ よく憶えてない（笑い）。

出航して間もなく、お茶を出したんですよ。カツオ船の場合、航海中にお茶がないとよく催促されましたから。そしたら誰も飲まないです。ただ黙り込んでましたねえ。皆尖閣列島は初めてだったと思いますよ。しかも 1 ヶ月余の遠洋航海ですし、これまでは日帰り操業ですから、黙って煙草吸ったり、考えごとしたりしてました。

明日の夜明けに、アカオに着くことになってました。皆夕食を済ませ、明日からことを考えて早めに寝ました。僕は気持ちが高ぶっていたから余り眠れませんでした。

翌朝皆の朝食を作るため6時に起きたら、もう目の前はアカオが見えましたよ（笑い）。

島の異様 潮の速さに 驚く

— 最初にアカオに着いて、そこから魚釣島、南北小島に向かったわけですね。尖閣諸島に行ったら、何が一番印象的でしたか。

兼島:アカオに着いて、アカオは島というより海の真ん中にそびえ立つ岩礁と言う感じ。

で、そこから3,4時間、北西に向かいました。そしたら今度は青々と木の生い茂った島が見えてきた、それが尖閣列島で一番大きい島、魚釣島が見えてきました。

島は山頂から海岸まで急な傾斜になっていて、クバやアダン等が生い茂り、まるでジャングル、それに周囲は切り立った断崖で人を寄せ付けない感じ。まるで海賊島ですよ。

双眼鏡で、魚釣島を見たら、石積みで囲った昔の工場跡があって、池のようなものがあるのが見えた。先輩達があれは昔のカツオ製造工場跡だと教えてくれた。隣の南小島、北小島は岩山の島です。もう海鳥の群れはすごい。あれにはびっくりしましたよ。

私達はこの魚釣島を拠点にその周辺を調査することになっていた。ここは昔から潮の流れが早く三角波が立つことでも知られているらしいが、風が変わると急に嵐がきたかと思うほどでした。ここにいる間夜中に2回も船の停泊場所を変えたことがありますよ。それだけ波が高く、潮の流れが激しいところでした



急峻地形、断崖絶壁、鬼が島の如き魚釣島 南小島は両端に尖塔が聳え立つ、上空は海鳥が乱舞
(野原朝秀.1971)



(高良鉄夫.1950)

空一面 海鳥の群舞 太陽の光遮る

— 海鳥の群れにびっくりしたわけですね。琉球大学の高良鉄夫先生が、1952年と53年に上陸した時の写真がありますが、太陽がかき曇る位おつたといいますから。

兼島:尖閣列島行ったら、もうあの鳥の群れ見てから感激してねえ、あんな体験はもうできないです。あの南小島と北小島はあんなに鳥がいるもんだから、皆トリシマと呼んでいた。カツオドリとか、アジサシとか、オオミズナギドリとかという鳥ですねえ。

(1953年の写真を見て) そうそうこんなになりました。とくに朝晩は、ものすごいです。朝早くねぐらから飛び立って、エサの魚採りに海に行って、夕方戻って来るんです。もう何十万は、何百万羽ですから、数えられないです。鳥の群れがもう雲みたいになって、上空飛び回って、太陽の光を遮って暗くなるんですよ(笑い)。海鳥のエサは魚ですよ、あれだけの海鳥がいるのは、尖閣の海は魚が豊富だからかもしれない。

朝夕のあの鳥の鳴き声、昼間は少し静かだけど、もううるさいですよ。何とも譬えようがない。強いて言えば子豚がピーピーグワグワですかねえ。何千頭、何万頭の子豚が一斉に泣き喚いている、あんな感じでうるさかった(笑い)。

印象的だったのは、夕方にねぐらに帰る時には、ツバメが電柱に止まるみたいに、絶壁の岩棚に舞い降りてずらりと並んでいるんです。腹が白黒だったりしていたから、あれはカツオドリだったですねえ。あの光景が好きだったから、僕はしょちゅうあれ見て楽しんでましたよ(笑い)。夕食終えて、日が落ちて真っ暗になるまで、双眼鏡で毎日見ました。



北小島のアジサシの群舞。(岡田潤治 1953)

1 回だけ、このカツオドリが掛かってきたんです。源三丸は、サワラを捕るため船尾から曳き縄を流していますから。またこれが大きいんです。羽を広げると1メートル半から2メートルはあって、胴体はアヒルくらいの大きさでした。死んでいたのでお汁に入れて食べてみたけど、鳥の味はしなかったです。それに臭かった(笑い)。

台湾船 帆柱に 鳥ぶら下げられていた

— 高良先生は、1953年に行かれた時に「群れなす海鳥数千万羽」と報告してます。それが10年あとの1963年に行ったら、台湾船が乱獲して、もう往時の面影はない。海鳥の楽園は絶滅に瀕していると嘆かれています。やっぱり、台湾船は海鳥を捕ってましたか？

兼島: そうです。僕らが尖閣列島に着いた時、台湾船が少し離れた所に停泊してました。船の形で、あれは台湾船だとすぐ分かった。帆柱を横倒しにして、何か沢山掛けられていたんですよ。あれ何かなあと思って双眼鏡で見たら、羽毛をむしり取られた海鳥が、柱いっぱいぶら下げられていました(笑い)。もうびっくりしました。他の台湾船、あれも突船だった、前に突台が出てますから、どの船見ても、皆帆柱に鳥を殺して裸にして掛けてました。あとで、サバニ班が、あれ達は、2,3人が棒切れを持って、島に上陸して、この海鳥を殺して取っていたのを見たと話してました。この写真にあるみたいに、島には海鳥がいっぱいいます。これ見ると、ヒナや卵もいっぱいでもう足の踏み場もないほどですよ。ねえ。

あれ達は傾斜になっている所に、下から上がって行って、鳥は驚いてもすぐに飛べないそうです。滑走しないと飛べないから、だから人間が下の方から追い掛けると簡単に捕るわけです。草むらで卵を抱いた鳥を、次から次に頭を叩いて、殺して取っていたとサバニ班が言っていました。



南小島のカツオドリ死骸。羽毛むしりとして放置。
(新垣秀雄 1952)

あんなにいっぱい鳥は何に使うのかなあと思っていたら、噂では台湾では鳥は焼き鳥にして屋台で売って、卵はお菓子の材料に使うそうです。台湾船は尖閣列島には魚獲りに来たんじゃない、あの海鳥を取りに来たのかなあと思いました。台湾船は、皆帆柱に、鳥を殺して裸にしてぶら下げてましたから (笑い)。

尖閣諸島 魚の宝庫 各地から 漁船集まる

一 高良先生は 1950 年 3 月に行かれた時、漁場の賑わいに驚いています。

それで 52 年の調査には琉球水産研究所から知念正男技官を連れて行ってます。新聞に、「魚釣島近海は冬期になるとカジキ突き船やカツオ釣り船が各地から集まり、あたかも国際漁場の感を呈する。波の荒い時は海水とともに魚が甲板に飛び込んでくる」(「尖閣列島あれこれ」 沖縄タイムス 1952.5)に書いてます。どんな船が、どこから、どの位来てましたか？

兼島：尖閣列島は昔から魚が豊富な所と言われてましたから、八重山・宮古は勿論、台湾からもたくさんの漁船が来ていました。台湾船は殆んど突ン棒ですよ。サメ釣りですか？僕は突船しか見ていないから、他にどんな船が来ていたか分からん。

先島から来た船は、毎日位見よったですよ。数見られるということじゃなくて、よくたまたま見よった。源三丸よりは小さかったような気がするけど、25ト位、あまり大きくなかったです。カツオ船は見たら分かるんですよ。あれはあまり設備してなかったから、一本釣り船ですかねえ。カツオ船かどうか分からん。操業するのは見ないで、船だけ見たんですよ。

尖閣列島の調査団 明日現地へ出発 尖閣列島の調査団 調査七名は二日 乗で赤島明五日 基本丸で尖閣列島 へ乗り込み、両島 で十日程滞在、次 の調査地へと四つ の編んで航路を 高良鉄夫、大塚大助 飯塚一と源三丸三 名陸機動物の分布 多和田技官(資源 局)有用植物の分 布を調査 知念茂高(水産統 覧所)海産資源の 分布を調査す		短評 此大どう分鏡予 降船へ突入、だ 降船には陸機の共 通運命、間隙は復	
		尖閣列島へ調査団 日本漁船は既に基 地化、調査から施策 へスピード要す	

高良調査団を報じる地元の新聞。短評欄に「尖閣列島へ調査団、日本漁船は既に基地化、調査から施策へスピード要す」とある。(自由民報 1952.04.04)

内地のカツオ船ですか、これも分からんです。見てないから。ああ、こっちに書いてますねえ、多和田真淳先生のこれ

には「魚釣島の南岸に 5,6 隻の発動機船が波間に見えかくれする・・・よく見ればそれは二本マストの日本船らしいので・・・」(「尖閣列島採集記」琉球新報 1959.7)とありますねえ。やっ

ぱり、ヤマトの大型カツオ船も来ていたんですね。

僕の場合、飯炊きだから、あまり船見る暇なかった。ただ糸満の船が 3 隻シジャー（ダツ）とかを囲って獲ると、台湾船が突船しているのを見たんです。それ以外の船が傍から通るけどどんな仕事しているか分からん。仕事しているの見なかった。離れているから。

夜に魚釣島とかの島陰に停泊する時ですか、電灯点いているから分かるけど。あの時に錨入れて泊まっているのは、大概是、僕達の船と糸満の船、それと台湾船とかの 3,4 隻位でした。そんなに多くなかった気がします。

島周辺で エサ採り 手繰りで 魚釣る

一 源三丸は、尖閣諸島での底魚の漁場調査、試験釣りが目的ですねえ。1950 年といえは魚探も漁具も不便な時です。垣花(那覇地区漁協)の場合はトイチーというオモリ付けた縄に目盛を付けますから、これで水深を測って、一本釣の縄入れて行きます。魚探が出る間で戦前からこのやり方していたようです。源三丸は水深はどんなして測ってましたか？

兼島：僕は飯炊きだけしていたから、どんなして測っていたか分からんです（笑い）。

ただずっと縄をどんどん入れて行って、仕掛けが、底に着いたら、これで釣り始めていたんじゃないかなあ。潮の流れが速いから、仕掛けを底に着かせるのは難しいと皆言っていました。一番きついのは手繰りだと言っていましたよ。あのアカマチ、シチューマチ、クルキン、マーマチとかを、深さ 100 メーターから 250 メーターから釣り上げるもんだから、もう皆大変だったようです。今は電動という便利なのがありますが、あの時は手繰りで上まで揚げていくから、これが何 10 回もでしょう。もう手袋もなかったから、夕方なったら、皆手赤くなって腫れて、痛そうでしたねえ（笑い）。

あとで、密貿易で香港行った人が、この手袋とか、タオルとか持ってきたわけです。お土産として持ってきて、僕達も 1 ダースずつタオルをお土産としてもらったですよ。

一本釣りのエサですか？ あれはカツオとかサワラとか獲って、これを細かく切って使っておったです。冷凍ないですから、エサ採りは、サバニ班が、サバニ 1 隻に、2,3 人乗って、側に竿出して曳き縄で、毎日、獲りに行っていました。だいが獲れましたよ。

尖閣列島はもう魚多いです。それを夕食に食べたり、捌いて一本釣のエサにしました。だからあのサバニ班は、あっちこっち廻って、島にも上陸しているはずですよ。

魚の宝庫だが 潮の流れ速く 操業時間 僅か

一 源三丸は、尖閣諸島のどの辺で試験操業しましたか？ 向こうは魚の宝庫と言いますから、どの位獲れましたか？

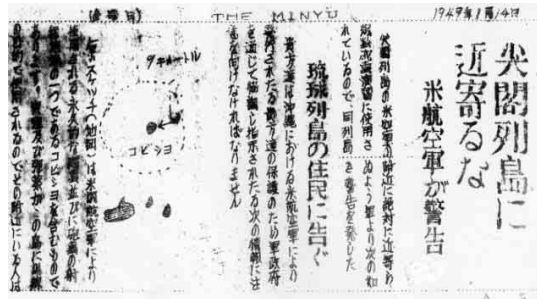
兼島：北の方にあるコウビトウ(久場島)という所は、米軍が何か爆撃演習するとか言っていましたねえ。そこには近寄らなかつたです。魚釣島と南小島、北小島、大体がこの 3 つの島の周囲でやりました。魚釣島と南小島の相中でも多くやりました。この相中は潮の流れが速いんですよ。ソネになっていると思う。海図には海底地形、水深が載っているはずだ

から、これを目当てにして行って、やったんじゃないか。結構獲れましたよ。

で、このマチは底にいますから、これ手繰りで上げる。最初は魚が抵抗するから、重くて、相当きついけど、ある程度上まで来たら、魚のお腹に空気袋がありますねえ。あれが膨らんで、口から袋が出ますよ。あれで軽くなるから、したら手繰り寄せるのは簡単にできてましたねえ。尖閣列島は魚の宝庫です、だから相当獲れました。5,6匹位一緒に揚がってきますからねえ、提灯みたいに。しかし、毎日ではできません。

毎日できたら、4,5日ではもう船いっぱいになります。仕掛け下ろしたら、魚はすぐ食ますから。アカマチ、マーマチ、シチューマチなんかすぐ食いますよ。大体150メートルから250メートルの同じ層にいますから。また、これがこっちで釣れるように小さくない、2,3和です。大きいのは5和位あるし、皆大物ですねえ。

だけど、潮の流れが止まる時にしかできない。1日に何時間しか操業できません。ずっと潮の流れが速いんです。あんまり速いと、仕掛けが、底に着かない。底に着かなければ魚は食わないから、何時間かしかできません。だから、そんなに沢山は獲れない。それに波が荒くて、大変でした。こっちが風吹いたら、島のあっち側に移動して、またあっちから風吹いたら、またこっち側に移動して、夜中に、2回ずつ移動する時もあったです。



米軍爆撃演習地コビシヨへの立入禁止を報じる新聞。地図まで掲げ、近寄るなど警告（民友1949.1.14）



琉球水産研究所の調査船・凶南丸における一本釣試験光景。左：縄入れ、魚が食付くのを待っている。右：釣り上げたアカマチ。1951年源三丸においても同様な光景であったらう。（豊見山恵盛1963）

結局、尖閣は潮の流れ速いから、オモリが底に着くまで、魚が食付くまで、どんどん縄流して釣るわけです。もう潮の流れと対抗しながらの仕事ですから、それに源三丸は元々カツオ船だし、皆一本釣は初めてです。馴れない仕事だから、しかも毎日同じような繰り

返しですよねえ。もう夕方には、皆へトへトでした。腰が痛いとか、腕も上がらんとか、大変疲れていました。釣った魚をダンブル入れて、道具を片付けて、夕食も早目に済ましたら、皆黙って、すぐ横になって眠ってましたよ（笑い）。

一本釣不馴れ 源三丸に なぜ 尖閣調査を依頼？

— 源三丸は元々はカツオ船ですよねえ。一本釣りは馴れてない。しかも尖閣諸島は初めて行ったと言いますから、なぜ、専門の垣花の人達、那覇地区漁協に調査を依頼しなかったのか不思議です。あの人達はガリオア船ができれば、すぐ尖閣諸島に行ってます。

向こうは、戦前から行って、潮も、風も、島の地形、漁場もよく知っているから、チートーで、水深測って、ポイントに縄を入れてやって、4,5 日では満船したと言ってましたねえ。

兼島：言われてみればそうですねえ。ウチらは一本釣も初めてだし、尖閣の海も初めてだから、あっちの海知らないから、釣れる時には、相当釣れるけど、ずっとできるわけじゃない。もうしょっちゅう漁場移動ばかりして（笑い）。けど素人の渡嘉敷になぜこの話が来たんですかねえ、僕もよく分からない、それに子供だったから（笑い）。

サバニ班がサワラとかカツオを曳き縄で獲ってくるでしょう。それを夕食に食べたり、捌いて魚のエサにしましたが、あの時一本釣で釣ったマチは食べなかったです（笑い）。

釣れたら、これ製品だからと、すぐダンブルに入れて、食事の材料にも使わさなかった。結局 40 日間やって、ダンブルいっぱいになったから、帰ったのかなあ。これも分からん。

糸満に着いたのは分かるけど、あとあの魚は全部どこに持って行った分からんです。

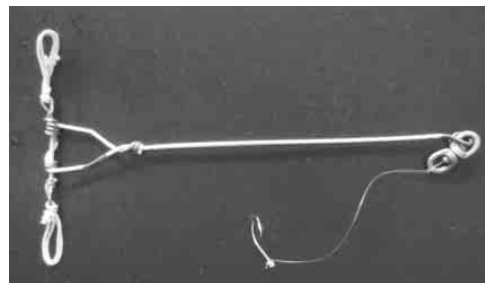
試験場に持って行って、魚の種類、大きさや重さ、どこで釣ったとかを、報告したんですかねえ。船の上で、魚の大きさ、重さを測ったりですか？ いや、そんなことしていたのは見ませんでした。僕は飯炊きだったから、その辺のことは全く分からんです。

ヤマギタ使わず 新漁具で 漁場調査 試験釣り？

— 気になるのが一本釣漁法です。那覇地区漁協は 1951 年の頃は針金を曲げて作ったヤマギタを使っています。このやり方は 1953,4 年頃に三叉サルカンが出るまで続けてます。

源三丸の時は、ヤマギタ使っていません。もしかすると 1950 年 10 月に米国民政府から「琉球列島における外国為替及び貿易手続」の布令が出て、貿易庁が廃止され、民間貿易が再開されます。それで内地から新しい漁具が入ってきたもんだから、これを、源三丸に支給し、試験的に使わせて、尖閣諸島で、試験釣り 漁場調査を頼んだわけですかねえ。

兼島：この辺のことになると僕は分からない。あの時、針金曲げたこのヤマギタは使っていませんでした。今の一本釣のやり方でした。



針金曲げて作ったヤマギタ。これを 6,7 個連結して一本釣りする。1953,4 年までこれが主流。

幹繩はカツオの場合は月桃の茎を使った。あれを紙縫りにして。一本釣の幹繩は木綿糸でした。あれを豚の血で染めていたようだったかなあ。それと内地からきた赤染めの縄だったかなあ。これは支給されたかどうかは分らん。これに幹糸 7,8 本付けて、あの当時テグスイはなかった。細い麻糸をテグスイ代わりに使って、釣針付けていたと思うが、はっきり憶えてないが、針金は使ってなかった。

源三丸がやったのは、新しい漁具使ったやり方だったんですか。一本釣り専門の那覇地区より、2,3 年進んでいたわけですねえ。64 年前のことだから。あの当時の人は殆ど亡くなっています。先輩達が元気な時にもっと詳しく聞いておけばよかったですねえ。

飯炊きの苦勞 20 日過ぎたら 野菜使えない

— 兼島さんは 15 歳で飯炊きで行ったわけですねえ。源三丸の乗組員 15 名から 20 名の船員に、船上で食事作って、毎日食べさせるわけですから、大変だったと思いますが。

兼島：15 名から 20 名の食事大変ですよねえ。3 食食べますから。米、芋や肉の他に野菜も積んでいきます。20 日頃過ぎて、白菜もカマスに入れて氷室で保管していたが、葉っぱは枯れて黄色くなって使えなくなりました。玉ネギ・芋、ニンジンなどの根菜類は大丈夫でしたけど。あのサバニ班が、毎日サワラとか、カツオなんかを曳き縄で獲ってくるから助かりましたよ。毎回刺身？ いや毎回はしない。煮付けとお汁ですよ。お汁が主ですよ。あれもこれもできなかつたです、炊事場が小さいもんだから。

でも、おかずは毎日不自由なかつた。刺身も、煮付けもあるし、お肉も持っていたので。だけど、船上生活が長くなると青物が欲しいですよねえ。一度は、変わったものと、サツマ芋を使った混ぜご飯を作ってみたんです。初めてだから、水の計り方を間違えて、幾ら炊いても、水が減らない、とうとうお粥のようなご飯になって失敗しましたよ。もう不味いし、それに焦げていましたが、誰も文句も言わず黙って食べてくれました（笑）。

手作り石油コンロ 薪要らず 大助かり

— 船上飯炊きは、皆薪で焚き付け、管理・補給に大変苦勞したと聞きましたが。

兼島：カツオ船の場合は日帰りだから、自分で弁当持ってきましたから、飯炊きはいない。けどお茶沸かして上げんといかん。炊事場もせいぜいお茶沸かす程度で小さいです。

源三丸も最初の頃は、お茶沸かすのにしばらくは薪使ってましたよ。カマドをこうして造って、薪使っていた。お茶沸かしたり、あんなのやりよったけど、それだけでも大変だった。もうキブシ(煙)パーパー(もうもう)して。

それを吉浜生得機関長が見て、これでは不便だから、薪使わん方法を考え出したんです。

あの人はアイデアマンでしたから。小さいパイプから少しずつ石油垂らして、あの時は焼玉エンジン、燃料は石油でしたから。この石油を少しずつ垂らして、このやり方で火を点けるわけです。丁度石油コンロの原理です。この装置を作ったんです。

で、この装置使ったら、とても便利でしたから、ずっとこれ使ってましたよ。尖閣行っ

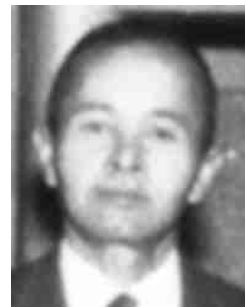
た時も、薪使わんです。この装置でしたから、とても楽でした。1 人でもやれたんですよ。もし薪使っていたら、とてもできなかった。それに薪は、シケたら、波被って濡れます。濡れたら、もうキブシ(煙)バァーバして焚付けるのに苦労します。だから自分は濡れても、薪に合羽被せて(笑い)、濡らさんで、いつでも燃えるように乾燥させておかんといかんです。それに薪の補充も大変ですよ、あれだけの人数でしょう、40 日航海だから、薪いっぱい積んで行ってもすぐ不足します。不足したら、尖島列島に上がって、採って来んといかんから、これもまた大変な仕事です。

吉浜機関長 アイデアマン 生間水抜きも

— あの時分に石油コンロみたいな装置で、石油で飯炊いたというのは、画期的です。吉浜機関長さんはアイデアマンですねえ。あの頃に尖閣諸島に行った船で、燃料の薪が不足し、魚釣島に上陸して、崖から墜落死した事故が起きてます。これがその記事です。

兼島:「冷凍の死体 魚釣島から運ぶ 去る 19 日津堅島に帰港した神栄丸(25ト)は同船機関士…當間幸正さん(36)の冷凍死体を乗せていた。調べによると同船は 3 月 10 日頃本島より 240 マルの俗称鳥島近海で漁労中、薪不足を来し、4 船員は魚釣島に上陸、薪採取に出掛けた。その中にいた當間さんは最初から山鳥とその卵をとるため一行からはぐれていたが間もなく同島南寄の崖から五丈下に変死体となって発見されたもので崖には捕った山鳥 1 羽と卵が置かれてあつたという」(沖縄タイムス 1951.3.31)

この事故は 3 月に起きているから、源三丸が行く 8 ヶ月前ですねえ。僕らも薪持って行ったら、絶対に合わないです。40 日といったら相当積んで行かないといかんから。吉浜機関長には助かりました。炊事道具とかも、色んなものも作ってもらいましたが、今でも感謝しています。



吉浜正得機関長

あの生間(イケマ: 船内生け簀)から水は吐き出す装置もあの人が考え出したんです。あそこでカツオのエサ・雑魚を養ってますでしょう。普通の場合は船底に穴 5 つかなあ、空いて、海水が循環するようになっているんです。漁終えたら急いで帰る。カツオ船同士が競争する場合はあるんですよ。船軽くするために生間の水抜かんといかん、この時は 4 つの穴皆閉めてからに、1 つだけ空けて、そしたらこの位の 15 センチ位かなあ。板を厚さを 1 センチ、進行方向に反対に斜めにして、船底から 20 センチ位出すんですよ。出したら、船が走るから、これに水圧掛かるから裏側は真空になって、水がこのパイプから出て行く。この方法でやりよった。普通ならポンプで吸い上げるけど、だから、ポンプ使わんで、あの時分モーターないですから。吉浜機関長は工夫好きなアイデアマンでしたねえ。

安次郎さん 怪我し 八重山に 急送

— 尖閣諸島は潮の流れが速く、波が荒い所ですが、危険な目に遭いましたか?

兼島：40日間いましたけど、大シケで、船が危ない目に遭うとか事故はありませんでした。ただ1度だけ、作中に誤って1人だけ怪我しました。甲板員の吉浜安次郎さんです。夜漁場を移動する時に荒いから船長に代わってラット掴んでいたら、これをうっかりしたんでしょうねえ。昔のラットはこんなに大きいですからねえ。これを掴んでやられて、波の力で回ってからに、片方の手を強く叩かれて、大怪我してました。ああこれ重傷、危ない、それで、一番近いのは八重山の病院だからと、もう操業を中止して行ったんです。

船を八重山に向かって走らせていたら。その時並走している船が見えたんです。宮古の一本釣船かなあ。荒波で波の谷間に入ると、船の姿がしばらく見えなくなる（笑い）。消えるんですよ。そして波の中から、また喘ぎ喘ぎ浮き上がってくるんです。顔出しては沈んで、また浮き上がって、これの繰り返しです（笑い）。これ見ていたら、ほんと怖くなりました。僕らの船も同じように、沈んだり、浮き上がったたりして走っているのだと思って（笑い）。

尖閣列島は波が荒いから、風が変わると風下に船を移動させることが何回もありましたが、船が波間に隠れて走るのを見るまでは、何も感じなかったです。だけど、あれ見て怖くなりました。尖閣列島は、波が荒くて、大変に所に来たんだと（笑い）。

安次郎さんを八重山の病院に運んだ時、丁度野菜を切らしていたもんだから、僕は島に下りなかったけど、誰かが石垣の市場に買いに行っ、野菜をいっぱい補給しました。それで青野菜の入った魚汁を作り、皆に美味しく食べさせることができました（笑い）。



吉浜安次郎機関士

魚釣島、南小島 仮工場で カツオ製造？

— 源三丸が行った1950年前後は、尖閣諸島はあわただしいです。島の周りで冬場はカツオ釣れるもんだから、1948、9年から50、51年頃は、宮古池間の宝山丸と石垣の発田重春さんが、魚釣島に仮工場を設け、ナマリ節を製造していたようです。高良鉄夫先生は、1950年3月に発田さんの所に2週間滞在して、戦後初の魚釣島調査をなさっています。

また、その頃には、宮古伊良部のかもめ丸が、南小島でもナマリ節を製造していたようです。そんな様子はありませんでしたか？ 高良鉄夫先生は、1950年3月には発田さんの所に2週間滞在して、戦後初の魚釣島の調査をなさっています。



1948～51年？まで、魚釣島工場跡でカツオ節製造した石垣の発田重春さんと納屋。（田中一郎 1952）

兼島：気付かなかったです。飯炊きで行ったもんだから、僕は島には上らない。40日間いても、皆毎日忙しくしていました、サバニ班は上がったか分からんが、船のシンカ（仲

間)は誰も島に上がりません。それに源三丸は、他所の船には1度も着けませんでした。だから、尖閣におった40日間他所の人と話したことがなかったです。サバニ班はあっちこっち廻っていたが、あれ達から島でカツオ製造している話は聞いたことがなかったです。僕らが行ったのは、11月中から12月ですから。魚釣島のレンガ造りの水槽見たですよ。だけどカツオ節製造していたら、煙が上がってます。あそこはそんな様子はなかったです。南小島の漁場移動する時に近くを通りました。あそこも煙上がってませんでしたが、よく分かんず。島でカツオ製造していたのは1月から3月頃だったんですかねえ。

宮古八重山の船も沢山いましたよ。いましたけど、確か一本釣だと思う。だけどカツオ船かも知らん。何の仕事していたか分かんずけど。船は沢山いました。

糸満船 シジャー獲り 20歳若者 刺されて死ぬ

— 糸満の船も終戦直後にはすぐ尖閣諸島に行ったそうです。シジャー(ダツ)獲りに。糸満の金城亀吉さんなんかは、上陸用舟艇を改造した船で行ったそうですが、51年にはガリオア船ができてますから、その時にはちゃんとした漁船で来ていたわけですねえ。

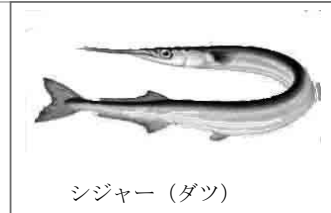
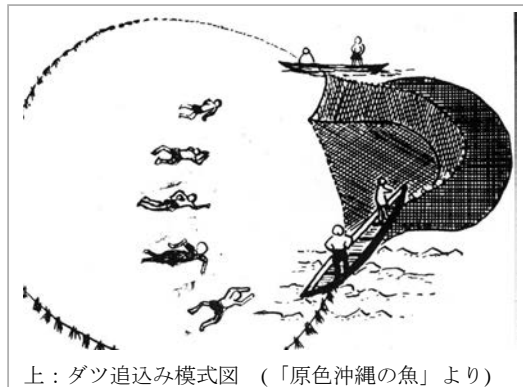
兼島: そうです。渡嘉敷も最初は上陸用舟艇を改造した船でカツオ船やりました。

そのあとガリオア船の源三丸になりました。糸満も3隻大型船が船団を組んで来ていました。あれは50ト位の大きな船でしたから、ガリオア船だと思います。シジャー(ダツ)とか、トゥブー(トビウオ)の追込みで、3隻一緒に来てました。1隻は運搬用の船、運搬用はこっちに待っていて、あとの漁船2隻で追込みするわけです。

サバニ2艘に若い人達が乗って、袋網を張って待機してます。で、漁船2隻が遠い所からロープが円を描くように引っ張ってくる。こうして囲んでから、締めて来るわけです。ロープには白くひらひらした物を付けていて、魚はこの白い物に驚いて逃げます。

ロープを引っ張っている船から2、3ヶ所前には、サバニ2艘が袋網を張って待っているから。2隻の船がシジャーを囲ってサバニの近くまで来ると、サバニに乗っていた者たちが一斉に海に飛び込み、一気に魚を網に追い込むんです。

この時にシジャーに刺されて亡くなった人がいた。20位の若者が、こめかみを刺されて死んだと聞きました。もうこの事故遭ったのは、丁度こっちに来た翌日だから、すぐ帰るわけにも行かない。まだ漁もないから、だから死体は氷漬けしていたと言っていました。もう僕は直接は見なかったけど、あのサバニ班が見ていた。あれ達はあっちこっち歩き廻ってますから。



バケツ大で ダイナマイト漁 魚浮いて 流れてくる

兼島：もう1つ糸満船の話です。ある時波が高くて操業できないので、錨を入れて停泊していたら、遠くから沢山の浮遊物が流れてきましたよ。最初は網の浮きかなあと思った。塊まっていっぱい流れて来よったから、双眼鏡で見たら、沢山の魚の鱗でした。ヒレーカーと皮の硬い魚が浮いてきた。チヌマン(テングハギ)なんかは、腹を膨らませて、横鰭を上にして浮いて、沢山流れてきてました。サバニ組からあとから聞いたが、これは糸満船が石油を入れるドラム缶よりひと回り小さい缶、バケツみたいな大きさに、ダイナマイトを仕掛け、それを投げ込んで殺したそうですよ。この糸満船は、さっき話したシジャー追込みの船シンカとは違うみたい。別個に来たんじゃないか。よく分からんけど。

チヌマンは皮が固いので、ダイナマイトで深い所で殺すと皆浮くそうです。僕達が停泊している所に、浮いて流れてきたから、沢山採ったんですよ。タモで掬ってから、あれはすごかったですよ。もう相当な数です。しかしあんまり大きい魚はなかった。殆どはダメだったけど、チヌマンは安い魚だから、商品にならない。それでこれは捨てたかもしれない。とにかく相当な数だった。僕は、これを見て、尖閣列島にはいろいろの魚が桁違いにいるものだと思ったです。あのダイナマイト漁は違法です。やっていけない。だけど、尖閣諸島は、水上警察の目が届かないから、こっちに来て、やっているわけです(笑い)。

台湾突船 突手・乗組員 殆ど沖縄の人

— さっきの話だと台湾から沢山の漁船が来ていて、殆んど突船だった言っていました、あの当時、乗っている船長、突手、船員とかは殆ど沖縄の人だそうです。戦前台湾で突棒やっていた人達ですって。戦後帰ってきたら、戦争で船がやられてないもんだから、また台湾行って、台湾の突船乗って、尖閣に来たんです。宮古、八重山、与那国の人達が多かったです。だから船着けて、自分はどこの誰だから、誰それにと、言付け頼みよったそうですよ。

兼島：台湾の船と聞いたけど、船長・突手は殆ど沖縄の人だったわけですか。カジキは波が荒くならないと出てこない。北風が吹かない。相当揺れる中をフルスピードでカジキを追いかけて、あの突台に立って、モリ投げるでしょう。あれはしかし命がけですねえ。我々にはとてもできない(笑い)。あのモリ投げる突手は、殆どが沖縄の人達だったんですか。戦争でやられて、船がないから、台湾に出稼ぎに行行って、台湾船に雇われて、尖閣列島にカジキ突きに來たわけですねえ。宮古、八重山から突船も来ていたんですか。



八重山の突船「基本丸」。魚釣島掘割前を航行中、高良調査団を南小島から魚釣島へ運んでいる。(新垣秀雄 1952)

(1949年から53年の資料見る) 宮古からかもめ丸(25ト)、得宝丸(15ト)、石垣からは基本丸(ト)、鳩間から大喜丸(20ト)とか、いろいろありますねえ。先島から船は来てましたよ。船の形見て、台湾船でないとすぐ分かりました。周囲には2,3隻見えるけど、何しているか分からん。突船か、カツオ船か、一本釣りかよく分からなかったです。突船なら突台が前に出ているし、それも見なかったから、一本釣船だったんじゃないかなあ。

先ほどの台湾の突船の話ですが、あの台湾の突船に、自分の息子シゲノブが乗っているという噂を聞いて、源三丸と一緒に乗って、この長男を探しにきたオジーがいましたよ。

息子探しに来たオジーの話

— この話は「キラマガツ」に書いてましたねえ。実にかわいそうな話ですねえ。

兼島：長男のシゲノブは太平洋戦争の時、志願兵として軍隊へ入隊し、台湾に行ったまま帰ってこないから、消息を訪ねたら、台湾で生きておって、突船に乗って、尖閣列島にカジキ漁に来たりしていると。その話を聞いて、オジーはもう会いたい一心で、一緒に船乗ってきました。もう11,12月の冬の海だから、波も荒く、北風は冷たく、寒かったですよ。

僕ら若い者でもきつかった。オジーは70余りだったから、大変だったはずですよ。

オジーは、仕事の合間合間に双眼鏡を持って、近くの台湾船を見つめていました。台湾船はいつも何隻かはいました。せいぜい2,3隻はよく見たですねえ。毎日のように見よったですから。船は僕らのと一緒位、30ト位かなあ。どの位乗っていたかはっきり分からん、とにかく4,5名以上は乗っていたはず。オジーは、この中に息子が乗っていないかと、一生懸命だったですよ。しょっちゅう双眼鏡持って、立っていました。もうほんと可愛そうになる位、朝晩、双眼鏡で息子はいるかと探して。

ほんとだったら、あんな年寄りが行く所じゃないさあ。もう疲れて大変ですよ。最後の日まで、それらしき人は見えず、息子の乗っている船に出会えませんでしたねえ。もう帰る時、何隻かの台湾船に遇いましたよ。オジーは名残惜しそうに、双眼鏡を手に、台湾船をいつまでも見つめていました。

そのあと渡嘉敷の人が息子に連絡とったんですよ。台湾まで行って、連絡取れたのがずっとあとになって、息子は帰ってきましたよ。奥さんもあっちで探して帰ってきたけど、もうその時オジーは、お父さんは亡くなったあとだったでしたねえ。

40日後、試験釣 終え 糸満に帰る

— せめてオジーが元気な時に、息子さんに会えていたら、とても喜んだはずですよ。

源三丸は、尖閣諸島の漁場調査、一本釣り試験操業を終えて、帰ってきたわけですねえ。船上での40日間の生活は大変だったと思いますが。

兼島：僕は丸々40日間、尖閣列島でも陸地に上陸しなかったです。だから魚の荷揚げで糸満の棧橋に下りた時、ほんと土の匂いしよったです。ほんとに。どんな匂いかと言われたら分からんけど、何か懐かしい感じの匂いだったように思う(笑い)。糸満は2日位いた

かなあ。魚下ろしてすぐ帰りました。僕は元々は船に強いんです。40日間いても船酔いはやったことない。だけど、40日いると死ぬ思いしますよ。船の上だから、疲れは、全然取れない。もう夕食済んで、後片付けしたら、ほんとは、読書したかったけど、真っ暗で、真っ暗というよりは、疲れて、それに船は揺れますでしょう。それ所じやないですよ。疲れてぐったりでした。そのままバタンキューでしたねえ（笑い）。病気になった人ですか？ そんな人はいなかったですねえ。皆緊張しているのか、皆元気でしたねえ。

僕は15歳で、飯炊きで行って大変でしたが、非常に勉強になりました。普通できない貴重な体験ができて、よかったと思ってます（笑い）。

船35万 チャーターさせ 香港密貿易

— カツオ漁は3月から10月末頃まで、11月からは暇になるから、この尖閣諸島の一本釣り漁場調査の他、また香港に密貿易で行ったそうですが、その辺の話も聞かせて下さい。

兼島：香港への蜜貿易船として、あの時はチャーター代として、35万円（米軍票B円）位で、糸満のスクラップ業者に貸すわけです。大体日数は1航海で30日位、漁船を貸すんです。乗組員10名位を付けて、これは日当、カツオ船組合とは別ですから。

漁船に真鍮の葉きょうとか、鋳物屑とか積んで、香港に持って行くんですよ。持って行って売ったら、向こうは香港ドルだから、持ってきても使えない、こっちは軍票B円だったから綿製品とか、タオルも主だった、Tシャツとかも。それから油、種油とか、メリケンとか、こんな品物を購うてきよったです。これを糸満に運んで来て、那覇で売り捌くわけです。

それが数倍の値段で売れた。密貿易の中で、この香港行きが一番金になりよった。だから、1回行ったら、もう家が1軒建ったそうです。糸満では、香港行きを20日ウェキー（金持ち）と言いよった。1航海20日位で金持ちになれたですから。

源三丸にも船チャーターしたいと話があったわけです。35万で船貸して、船員は10名位募集しましたよ。僕も募集しましたから入れたんですよ。子供には夢がありますよねえ。僕は外国が見たかったから、海の彼方にある香港はどういう所かといろいろ想像して楽しみにしてました。それが行ったらダメと、母に反対されました（笑い）。16歳だから、危ないからと。

あの時、源三丸で行ったのは、船長は門元安雄さんだったかなあ、甲板では吉浜安次郎さん。機関場では新垣敏治さん、小嶺勇さんとか行きました。香港にスクラップ運んで行って、荷物下ろして、上陸できたらしいですよ。向こうに2,3日いて、酒飲んだという話もしよったですから。また皆買い物もしたと。帰ってきた



源三丸機関士新垣敏治さん(左)。休漁期を利用し香港密貿易に行ったメンバー。後方はカツオ工場の煙突。

ら、僕はタオルと手袋 1 ダースをお土産にもらいました。新垣敏治さんは、香港から、柱時計を買ってきておった。あれは上等の黒塗りの時計でした。向こうの家の仏間に長い間掛かってました（笑い）。

スクラップ満船 バシー海峡 一番の難所

密貿易だから違法です。スクラップ積み込む時は棧橋に着けられないですよ。糸満の喜屋武岬沖に船を止めて待っているわけ。糸満シンカはサンパンとって、2、3トンの小さな船で棧橋からスクラップ運んできた。あれエンジン付いていて、渡嘉敷にはなかった。

勿論夜よ。夜中じゃないと危ないから。このサンパンから本船にスクラップを積み替えて、夜の明けないうちにここを出航する。もし警察に見つかったら、荷物も没収されるし、船も使えなくなるから（笑い）。そして一旦慶良間に帰って、時間作ってから、香港に行ったわけ。香港行く航海は、危険なバシー海峡を通りますから。台湾の先ですねえ。こっちをどうしても通らんと行かんです。こっちは潮の流れが速くて、波の荒い所です。荷物いっぱい積んでいるから船遅いわけですよ。台湾に近づき過ぎたらやられる。台湾の兵隊、警備艇にやられるし、離れ過ぎたら、今度は大廻りになるし、大変だったらしい。だから、バシー海峡通るのは何時頃と、こんなのを計算して、出たらしいです。

戦前は、渡嘉敷のカツオ船は南洋のトラックとかに行ってます。トラックで成功した人も沢山いますよ。あの時は船もろ共一緒に行ってますから、バシーは何回も通って馴れている。あの南方行く時のカツオ船は空っぽだから問題ないですよ。僕も渡嘉敷に来た時、船に上がってスクラップ見ましたよ。もうダンブル、生間の中、デッキの上までいっぱいでした。密貿易船はスクラップをいっぱい積んでいる。喫水線ぎりぎりまで積んでますから、危ないですよ。もうバシー海峡を通る時はもう命懸け、通り過ぎるまでは安心できなかったらしいです。

船代金支払い 苦慮 休漁期 何でもやった

一 香港に行けば、1 航海 20 日位で 1 軒家建つ位儲かったと言われてます。一攫千金を狙って、これに夢託して、船チャーターさせて、香港に行ったわけですねえ。

兼島：いや、一攫千金狙ってとか、夢託してとか、そんなものじゃないです。行かざるを得なくて、仕方なく行っているんです。20 日ウエーキで儲けるのは、荷主の糸満シンカです。ウチらは 35 万円で漁船貸して、船員付けて、その日当もらうだけですから。

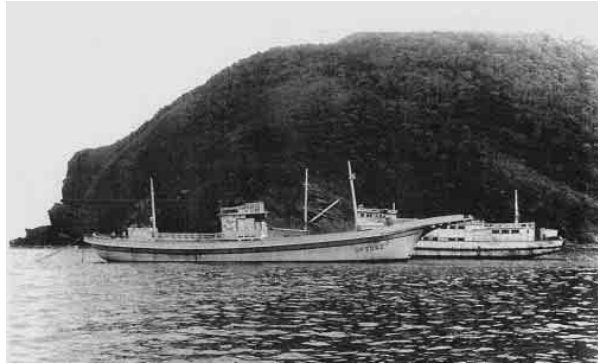
これ仕方なく、毎月の船代を払うために行っているんです。皆ガリオア資金で船買ってますから。休漁期は何もしないと、船代払えなですよ。毎月その代金、月賦払わんといかんから、金稼ぎに仕方なく行ったんですよ。渡嘉敷の船は殆ど全部行ってます。漁集丸も何回か行っている。源三丸も 2、3 回行っている。これは違法ですよ。だけどカツオ船は皆経営が苦しかったから、違法と知りながら、カツオ業を続けていくには仕方なかったんです。危険と分かっても、命懸けで行ってますよ。一度は海賊船に遭った所もあるんです

よ。1隻は、香港から帰りに、海賊船に遭って、荷物皆盗られた。船は放ったらかしになったが、乗組員全員は空のハッチ（生間）に閉じ込められたんですよ。蓋されたもんだから、窒息しそうになって、どうして蓋開けて、出てきたのか分らんけど。命だけは助かって、裸で帰ってきた人達もいましたよ（笑い）。もう危険がいっぱいですよ。海賊船や台湾の警備艇に捕まって、船没収されたら、もう大ごとですよ。

もう行ったら危険があると分かっているけど、こうしないと生きられなかったんでしょねえ。

休漁期は、あのあとから尖閣列島にも、すぐ一本釣りで、渡嘉敷島から、皆行くようになってます。2,3年後から、時々は行ってみたい。僕は2カ年位で船下りしましたから、詳しいことは分らんけど、源三丸の先輩達がそんな話してました。漁集丸も、八祥丸も行ってははずですよ。

八祥丸は、水産試験場に用船されて、尖閣列島で、一本釣りの調査してますねえ。もう少し先輩達から、いろんな話聞いておけばよかったです。あの時人は殆ど亡くなっている。僕が尖閣行ったの15歳の時、もう80歳越えてますから、もう60年以上前の遠い昔のことですな（笑い）。



渡嘉敷島のカツオ船の八祥丸（30ト）。冬場は尖閣諸島で一本釣りも操業。1959～60年には琉球水産研究所に用船され、同島で一本釣漁業試験を行っている。

— いろいろと貴重なお話、ありがとうございました。とてもよかったです。（了）



1980年代の渡嘉敷集落。船も横付けできるような港は整備されている。（「渡嘉敷村誌」より）

金城 芳雄 きんじょう よしお (糸満漁協)

1930年(昭和5年) 沖縄本島糸満町に生まれる。85歳(2015年時)。

14歳(1944年)家族と鹿児島へ疎開、種子島に移住し、以来28年に亘り同島で追込み、トビウオ漁、一本釣りをを行う。19歳(1949年)長崎県五島・小値賀島に追込み漁に行く。43歳(1973年)糸満に引き揚げる。糸満で新規に導入された底延縄漁を始めて、金市丸(9ト)を購入、尖閣諸島を主な漁場で出漁する。氏は種子島に長年寄留し、また終戦直後に五島列島に追込みで出漁した。半生を旅漁で生き、帰郷後は尖閣諸島で底立延縄に勤しんできた。



氏の話は尖閣諸島における漁業は無論、糸満海人の歩みを知る上でも興味深い。

父 13歳で 兄に連れられ 種子島へ

ウチは元々糸満だが、戦争の時疎開で種子島に行っていた。こっちに、糸満に帰って来たのは1972年に復帰して、その翌年に来たんですよ。もう種子島に30年位住んでいました。ウチは親父が、しょっちゅう種子島に、トビウオ獲りで行っていた関係で(笑い)。

親父(金城樽助)は13歳の時種子島に行ったようです。その時長男兄貴(金城亀)に連れられて。昔は弟、妹達の子守しなきゃならん。赤ん坊背負って学校に行った。もうあんまり泣くから、皆からミックワツサ(迷惑)されて、廊下で子守しながら勉強やっていたみたい。それでも泣くもんだから、もう学校やめて、兄貴に連れられて種子島行った。明治38年生まれだから大正5年位ですわねえ。ウチの親父達は大城亀さんという人を頼って行った。その人が一番大塩屋では最初に来た。丁度2軒しかなかったみたい。1軒は種子島の人が潮焚きしてお



父の金城樽助

った。塩屋ジューキチといって、僕もこのジーちゃんを見たですよ。20位の時、もう80位でした。親父と親子位年齢が離れてました。大城さんも言葉も分からんで行ったみたい。もう皆学校も出てないし、大和口(標準語)もできない。ティーヨーヒサヨー(手まね足まね)して仕事はやったようです(笑い)。もう昔の人は偉いですよ。叔父なんかの話聞いたら、食うのが精一杯で、大変だったようです。

金城樽さんですわねえ、この資料(「糸満系漁民の出稼ぎ形態と実態、種子島・大塩屋地域」末尾に掲載)あるように、あとから来たんですよ。大正15年とありますわねえ、親父の兄貴を頼って、親父より10年後です、親父は糸満をずっと行き来してましたから、多分一緒に来たかも分かん。

戦前 糸満サバニ 全盛期 300隻余 トビウオ獲り 集まる、

種子島で、戦前はトビウオ獲りして、刺し網して、ものすごかったようです。トビウオは普通2、3月というんだけど、やっぱり早いのは旧正月位から。この時期なるとあっちに皆行きよったって。種子島の方はトビウオ獲るのは分らんから、皆糸満の人が、サバニ

で来た。喜界島とか、与論とか、大島辺りに、糸満の人が寄留しているから、種子島に皆来て、全盛時代はサバニは 300 隻位集まりよったそうです。島の東側に集まって、トゥバミーで、流し刺網で、トビウオ獲りよった。で、魚は獲ったら、田舎だから売れんから、それに氷も何もない時代だから、エンカン(塩干)、塩漬けて、東京の業者 2 か所があって、ウチの親父は全部そこに送っていたそうですよ。その時期にトビウオ獲って儲かったと言ってました。儲けても、昔の世の中だから、子供が沢山いたから、大変だったみたいです(笑い)。

糸満は漁だけで何にも仕事ないし、人間はいっぱい溢れている。だからあっちこちに男は旅漁で行っている。親父も糸満に帰って、結婚しても、しょっちゅう種子島を行き来してました。だから僕は小学 3 年から 4 年まで親父の顔は分からなかったです。もう向こうから稼いで、お金を送金するだけで(笑い)。



戦前はトビウオ時期になると、種子島にはサバニ 300 隻も集まり販わっていたという

母 糸満で古物商 戦争始まり 種子島へ疎開

母はまた母で、糸満で古物商していた。ボロ切れとか、鉄屑とか、あんなものですねえ。丁度その時糸満には古物商は 2 箇所あったんですよ。また、母は芋を切り干にして、それを何か乾燥して荷造りして、多分内地に送ったんじゃないか。あと動物の骨、豚なんかの骨ですねえ。あれを肥料に粉分、昔はワラで作った入れ物に入れて、1 度は那覇に荷馬車に載せて、後ろからちょこちょこ付いて行って、那覇に売りに行ったことがあるんですよ。母があれ臭いもんだから、あまり買いたくないけど、しかし人が持ってくるものは買わないといけないと、それをまた母は賢くて、売った賃は、あんたに上げるから、貯金しなさいと、貯金して、お金持てました。学校でも貯蓄が一番でしたよ(笑い)。

戦前その頃、隣近所集まって、撮った写真がありますよ。これがその写真です。馬車も、馬も写ってますねえ。この馬車で那覇の方に運んで、車



糸満で隣近所一同で記念写真、両端に馬と馬車が見える。(昭和 15 年頃)

もない時代だから。もう 74,5 年前のものだから、皆亡くなっている。僕も 12,3 歳位だけど、よく憶えてないですねえ（笑い）。

昭和 16 年に、戦争始まって、親父は、翌 17 年には種子島から引き揚げてきました。18 年に弟が生まれたんですよ。それまでは僕と妹と 2 人しかいなかった。

昭和 19 年には、戦争が激しくなって、本土疎開だと言うもんだから、親父は、疎開するのなら、種子島に疎開すると決めて、親戚の人を引き連れて行ったんです。僕が終戦の時は尋常高等科 2 年、今の中学 2 年だったから、当時の政府の指定疎開は宮崎と熊本だったが、縁故疎開を願って、あっちから疎開奨励したもんだから、それで種子島へ行ったんです。鹿児島までは政府の運賃で、鹿児島から種子島までは実費でねえ。

親戚 7 家族 37 名 犠牲者出さず 到着

丁度 8 月位、鹿児島で盆だったから、疎開船は山萩丸、客船じゃなくて貨物船。内地から兵器なんか積んで来た輸送船、大きい船だった。あの時は疎開は命がけですよ。対馬丸とかあるさあ、途中でアメリカの潜水艦とか、爆撃機とかにやられている船はいっぱいあった。うちらも鹿児島着くのに 1 週間掛かったんです。普通だったら 2 日で行けるんだけど。この船長は賢かった。もう沖縄から鹿児島の普通の航路だと、潜水艦にやられるもんだから、コースを思い切り変えて、東シナ海に突っ込んで、もうしょっちゅうジクザグコース、まる 1 週間、もうエンジン止めない。昼も夜も走らして、まっすぐ行かない、だから前に進まないわけ。魚雷を避けるために丸 1 週間ですよ。

その時弟孝雄は生後 10 ヶ月、誕生日は種子島でやったんです。親父は船に乗る時も、糸満では泳ぐことはやっていたから、もしやられた時は、あんた弟を頼むよと言われた。もう部屋にはいなかったですよ。いつやられるか分からんから、夜も甲板の上で眠る。やられたらすぐ泳げるようにと、兵隊さんが、救命道具は子供に着けても意味がない。頭が重たいもんだから逆様になってねえ。足が上って、可哀想だけどやられたら、子供は助かりませんよと話しよったんですよ。

だから僕はもうしょっちゅう甲板におって、やられた時すぐ海に飛び込んで、弟を抱いて泳ぐとって（笑い）。そしたら 1 週間目



種子島に到着し無事を喜んだの記念写真。父は後列右から 6 番目。私は前列 4 番目。右上に戦前使用していたサバニが見える（昭和 21 年）

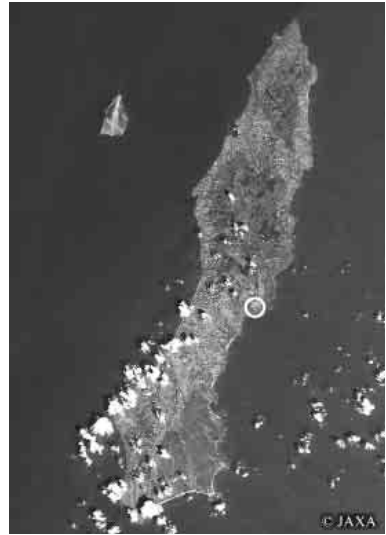
の丁度朝、佐多の灯台が見えた。ウチの親父は大息してよ。ああこれで助かったと（笑い）。親父はアカギ(赤比儀)腹門中のミーブントク(新文徳)だから、親父の親戚と母の親戚、7家族 37 名かなあ。全部、親父が疎開で連れて行ったもんだから、もう心配だったはずですよ。疎開に行ったんだけど、もうやられたら、何もいがないなあ、そう言って、だからウチの親戚は戦さで死んだ人いないです（笑い）。

15 歳、学校行かず 島の周辺で 追込み

鹿児島から種子島の増田に来て見たら、戦時中だから、本がないわけよ。内地から来るもんだから、船沈められてない。潜水艦かなんかにやられてか知らんが、教科書が当たらないわけです。ノートしかないもんだから、ウチは高等科 2 年、今の中学 2 年でした、親父が、もう教科書もないから、どんなして勉強できるかと言うもんだから。じゃ海行こうということで、僕も追込みしましたよ（笑い）。

ほんと学校出ないといかんけど、昭和 19 年 8 月からやって、10 月からは空襲始まったから、できなくなっ行って行かなかったけど。種子島周辺と馬毛島周辺を、あつちを 2,3 ヶ月位やったんですよ、イサキの追込みを。

あの時は、ウチなんかは疎開していたんだが、一応サバニで行ったり来たりしていたもんだから、サバニはあったけど、網はなかった。あつちの組合に一応加入して、仕事はやった。組合といっても元々地元の漁師はいなかった。ウチら糸満の人達が漁するだけで、糸満とか、与論辺りから寄留した人達だけでした。



種子島航空写真。○増田・大塩屋。
左上：馬毛島。（「ウェブサイト」より）

19 歳、口永良部 五島へ 追込みに

ウチが 19 歳(1949 年)の時、追込みで長崎の五島まで行った。五島といっても、小値賀島(おぢか、長崎県北松浦郡小値賀町)という所でやりました。ウチの親父の友達で追込みの親方がおったから、その関係で一緒に行ったんだけど。あの時、追込みは全部沖縄の人だったですよ。終戦 3,4 年後の頃だったから、沖縄に帰れなくて、沖縄が食糧難もんだから、あつちから、政府から帰さないわけです。それで、いっぱい沖縄の人が溢れていたから、親方連中が、今度は追込みやろうと言うことで。

五島は戦前も糸満から来て追込みやっていたもんだから、追込みの本場だったですよ。で、その時種子島からウチの親戚の



長崎県五島列島と小値賀島

疎開した連中3名一緒に行った。トビウオ時期終わった頃だから丁度3、4月頃で、寒い時期だったもんだから、ちょっと早いからということで、屋久島の隣の口永良部に漁に行った。鹿児島から船がやって来て、種子島に着けて、ウチらも乗って口永良部に行った。あっちで1ヶ月位は漁してから、鹿児島に直行して、それから五島に行ったんです。

五島行ったら、ウチらは東江清次組に入った。親方は糸満の人、ウチの親父より先輩、身体が大きく、相撲取りみたいな人で、ダイバン組とって、ダイバンスーと言いつた。鹿児島市内に家あって、玉城元次郎という人が会計しよった。



この人は親方の奥さんの弟さん。東江組には、アギヤーシンカ(追込み仲間)は4,50人位おりました。皆兵隊帰りが多くて、荒くれ者ばかりおって、怖かったです。物も簡単に言えなかった。大変でした(笑い)。五島辺りにはイサギという魚がおるんです。これをアギヤー(追込み)で獲る。これは沖縄にいない。たまにこっちの市場に来ることがあるけど、酢をかけて食べるんだけど美味しい。あれがもう時期的には、泳いでおって、アギヤーで網締める時、泳いでおって、海いっぱいスクルーみたいキラキラキラ光って、もう湧き立つみたいに、ものすごく群れて来るわけです。一網入れたらもう満船しよった(笑い)。

小値賀島2組で追込み 軍艦島潜った 竹島行った人も

小値賀島には2組おって、ウチら東江組は前方組、もう1つは小値賀組と言って、その2組あった。それから長崎に軍艦島とあります、軍艦に似た島が。この軍艦島にも行ったですよ。この前から世界遺産とかで話題になった島です。今は使われてないが、あの当時は炭鉱やりおったから、盛んだったから、その周り泳いでおったら、カッター、カッター、カッターして、音が聞こえました。海の底は炭鉱だから、機械の音聞こえましたよ。削岩機か、何かで石炭を掘る音でしょう。もう懐かしい思い出です(笑い)。

また、あっち今韓国が占領している島があるねえ。下関越えてずっと向こう側の竹島。あっちまで行ってずっとやったと言っていました。ウチは行かなかったけど、あっちまで行った先輩連中から、この竹島の話は聞かされました。



長崎県軍艦島、島の周囲で追込みしていたら機械で石炭を掘る音が聞こえた。(「ウェブサイト」より)

あっちの魚ですか、多分、五島と同じイサキと思う。イサキの群れはものすごいですよ。一網で満船しよったから。でも、竹島は、水温が低くて寒かった。長らく泳げない。追込みは、ずっとスルシカー(オモリ石付けたオドシ縄)で脅しながら、魚追込むから、もう寒くて大変だったそうですよ。

奥さん組 照屋という女親分 いた

小値賀島で追込みしていた時は、ウチらの 2 組ですが、奥さん組といって、こっちで有名な照屋敏子さん、あの糸満出身の女親分、あの人もやりよったですよ。奥さん組って、照屋さんが女棟梁になって、やってみましたよ。基地は、福岡の沖ノ島水産というのがあって、博多に家あって。あの当時から有名だったです。女一人で、あんな荒くれ者、乱暴者を、何百人もですから、どんなして扱ったか、ほんと不思議でしたよ。

一度船員が前借来たらよう。何するかと聞いたら、女郎買いに行くと言ったから、ワンコーレー(私買え)と(笑い)。その位度胸のある人だから、ともかくすごい人だったらしい。

また、船の飯炊きが何を作ろうか、材料に何使おうかと言っていた。そしたら、お前のジブンチカレー(脳みそ使え)と(笑い)。もう万事あんな人ですから、あの人が来たら、荒くれ者の漁師達は、もう皆怖がって、逃げよったそうですよ(笑い)。



左：沖ノ島漁業団長の照屋敏子(右上)と持船の「第六日乃出丸」、右：荒くれ漁師を率いて追込み漁を指揮した。その追込み光景(場所不明)。(「沖縄独立を夢見た伝説の女傑 照屋敏子」より)

地元と騒動起こしたり ハーリしたり

もう糸満の人だけじゃなくて、沖縄中の人が、南方から復員してきた人も、沖縄に帰れんもんだから、もう沢山いました。沖縄の人ばっかし。一度は、軍艦島の内の方に灯台があるんだけど、あっちで密漁してからに、あっちの漁業組合から、5,6 隻来たんです。もう荒くれ者だから、捕まえられたから、海に投げ飛ばして、逃げたんです。もう乱闘事件ですよ。それが新聞に載って、もう大変でした(笑い)。今も名前も覚えている、ウエダコウイチ。したら今度は何十隻来てから、どこに隠れたかな、もう探しきれなくて、とうとう捕まえられなく済んだんですよ。今のような漁業権みたに、それであっちで漁業するのは入漁料を納めてやらんといかんけど、それもしないでやったもんだから、沖縄の海賊組って言われてねえ(笑い)。皆復員してきた荒くれ者でしょう、もう人殺すのわけないよと言って、怖かったですよ(笑い)。

島にヤギを放し飼っている所があって、またそれも盗み食いして。陸(オカ)に持って来

ると分るもんだから、船で捌いてからに（笑い）。

あっちで、小値賀島で相撲大会もしたら、飛び入りしたりしてねえ（笑い）。

また、ハーリー（爬竜船競漕）もやりましたよ。ウチらの前方組と小値賀組の2隻でハーリー一しました。サバニ持っているから。それで誰が決めたか知らんけど、金を賭けたって、これがとうとう喧嘩みたいになってしまっただけねえ。あの当時の10万という金を賭けてから、今度は物別れになって、折角の大漁願いが、喧嘩になってしまったわけです（笑い）。

もう皆元気があって、荒くれ者ばっかしでしょう。怖かったですよ。今そういう連中死んでいないけど、ああでもしないと食えない時代だから、もう生きるために一生懸命だったからいろんなことやったはずですよ。

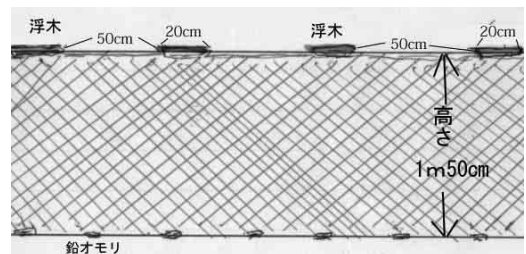
僕は数えて19歳だから、もう怖くて、何でこんな所に来たかな、もう早く帰りたい（笑い）。金がないから家に帰れん。早く計算せと言っても、なかなか計算やらなくて。相当漁は揚がったんだけど、万事あんな調子だもんだから、計算やってくれなくて。僕は子供だし、前借もやられないで、金は送ってやると言うもんだから、そのまま汽車に乗って帰りました。追込みの仕事は、4月から9月まで約半年間位やった。結局金は送ってこなくて、何にもないですよ（笑い）。丁度度遊びに行ったようなもんで、馬鹿なことしたけど、でもいろいろ勉強になりましたねえ。



現在の小値賀島の港、イサキ漁で賑わった古い漁師町のたたずまいが今なお残る。（「ウェブサイト」より）

種子島 トビウオ 流し刺網で獲った

種子島では、トビウオは、トバミーという流し刺網で獲ったです。大体、旧正月から3月、4月までやった。流し刺網の長さは、1反は45尋（67.2メートル）、これの15.6から20ケタ（反）を繋ぐ。20反だと、45尋×20=900尋、900尋×1.5メートル=1350メートル。この1.35キロの長さのトバミーをサバニで、ウチらの場合は大体3名乗って、海に仕掛けてトビウオ獲りましたよ。夕方網入れたら、翌日の朝まで、仕掛けたら、網が潮で倒れたら魚掛からんから網は立てんといかん。それに魚掛かったら網から外して取るわけです。だから夜中ぶっ通しで、櫂を離さず、サバニ漕いでました。大変でしたよ（笑い）。



流し刺網トバミー、1反は幅67.2メートル、高さ1.5メートルを20反繋ぎ、海に仕掛けて、徹夜でトビウオ獲る。

昔は灯もないから、柔らかい木で細長い浮きを作って、もう浮きがちょっと見えるだけで、網は水面にギリギリに掛けて、浮きが長さ 20 セツ位。浮きの間隔は 1.6 尺位 (50 セツ)。網の高さは 1 尋 1 メター 50 位です。トビウオが水面下から行く時にこの刺し網に掛かるわけです。トビウオは風強い日はあんまり掛からない。その上から飛んで行くもんだから。ベタ風の時もだめ あんまり油流した状態の時は掛からんです。丁度風がジワジワした時が一番いいです。相当群れて 群れる時は 1 箇所 14,5 位匹位まとまって掛かるんですよ。1 つの団子みたいになって。ウチらがトバーミーで獲ったのは長トビウオです。

で、この長トビウオが済んでから、1 ヶ月したらヨリトビウオといって、トビウオが寄ってくるんですよ。あの時はものすごい袋網で獲るんですよ。ロープ曳きとかでも。丁度種子島では馬毛島、あの辺が漁場なんですよ。ヨリトビウオはもう浅い所に寄ってくるんです。卵生み来たんだろうと思うんですけど。あれは糸満には来ない。

昭和 30 年代 動力船多くなり 網切られて 廃れる

今はトビウオの追込みは屋久島が本場です。戦前は屋久島にはトビウオ獲りいなかったですよ。終戦なってから与論の人がやってきて、これからやりだした。糸満には与論の人が雇いで沢山いました。この人達から与論に帰ってやって、屋久島にも行ってやったはずですよ。ウチらが種子島でやったのは長トビウオでトバミーでした。これだと 1、2 人でもできますから。主に種子島の東側でやりましたよ。僕の親父が言うには、このトバミーも、戦前糸満の人から始まってですねえ。種子島にも与論の人達が沢山いた、今でも 6,7 軒はいるかなあ。



種子島でのトビウオ漁。最初はサバニ(右下)、のち動力船(右上)で。増田沖漁場に向かう途中。(1965 年頃)

終戦直後はトビウオも多かった。もう相当量は揚がりよったです。それが昭和 30 年位になると、段々動力船が多くなって来て、こっちは宮崎の船とかが通って、網が 1 疋以上もあって長いでしょう。それが曳き縄船とかにやられるもんだから、もう流すのはなかなかできない。船にぶつかって、

網切られてしまってから。夜だもんだから。今みたいな、だるま灯とか、何にもない時代で、無灯火でやるもんだから、自然と衰えて行ったんです。このトビウオ漁が廃れてきたら、あとはマチなんかの一本釣りもしましたけど、ウチらの種子島での大きい仕事はトビウオが主でしたから。トビウオやって、あとは半農半漁です。

網 豚血で染める ものすごく臭かった

あの流し刺網は、種子島でもこっちと同じ、豚の血で染めたですよ (笑い)。

ウチらがいた増田とか、大塩屋とかで漁師するのは、皆ウチらみたいな糸満の人達とか、与論辺りから寄留の人達だけ、だから網染めるのも沖縄式でした。

で、屠殺場に一斗缶を預けておって、それに貯めていて頂戴とって、貯めさせて、それもらってきて使いました。生の血だったらいいけれど、腐ってしまってから大変でした。

あの匂いが、腐ったら、普通の人だったらできない（笑い）。仕事だからやるようなもので、今だったら誰もやらない。もう臭くて、臭くて、それに血は腐って固くなるから、これを藁と一緒に揉むわけですよ。したらこう溶けちゃうから、それで入れ物なんかに、サバニを横にして、1人でできないから、何人かで一緒に、親父なんかと一緒に揉むんです。このサバニの中で、そのままでは固過ぎるから、水を混ぜて薄くしてから、揉むんです。これがまた臭くて（笑い）。そして、木綿の網を持ってきて、舟の中で、漬けてから汁を出しちゃう。それを干してから、乾いてから、蒸すわけ。蒸さんと何もならないから。もう臭くて大変でした（笑い）。今は染粉があるからいいけど、あの頃は何もないし、もう豚の血で染めるしかない。網は木綿でやっていて、木綿だと縫いやすい。血染めにしたら、あれがカチカチなってからに、縫いが少ないですから。もう種子島にいた時の思い出はいろいろありますけど、豚の血の腐ったあの時の臭い、あれはもうほんと大変でした（笑い）。

疎開仲間 次々引き揚げ 2家族残る

終戦して3年位は沖縄に帰ることでできませんでした。食料がないからと言って、で、昭和23年頃から、帰還が始まって、一緒に来た人達は帰って行った。皆帰って行って、ウチなんかは、あっちで畑から田んぼを買ってからに、半農半漁なってしまったんです。半農半漁これいいなあということで、次第次第に土地が大きくなって、畑が3千坪買ひ続けたから、1町歩。田が9百坪か、それにもう動力船時代だからと、サバニ辞めて、和船を買って漁するし、それで動きが取れなくなったんです。

もう皆は沖縄に帰ってしまっていて、残ったのは金城樽オジーとウチの家族の2軒だけでした。それにこの半農半漁は儲けない、もう難儀するばかりで。一番上は小学3年生だし、このままだともう大変、長くは生きらんなあと思っていたら、糸満にいた家内の兄貴から連絡が来たんです。

丁度1972年の復帰の年でした。家内の親父が血圧で倒れたから、もうあんまり長いことないから、孫達も会わした方がいいんじゃないかと、それで、糸満に一応孫の顔を見せようと、家族皆で来たわけですよ。種子島に疎開して、僕は1、2回しか来ていない。20年ぶり来たわけです。



種子島に残ったのは金城樽さんと僕ら2家族。家前の海岸で遊ぶ長男芳浩(3)と長女春美(1)。(昭和38年、増田)

復帰翌 73 年 糸満に帰り 底延縄始める

女房の兄貴がこっちでサバニで仕事しておったです。ウチより 2 つ上で、上原亀市というサバニでは優秀でした。その兄貴が、糸満の方がいいからと帰ってきたらと言うもので、ウチは 15 歳から 30 年近く、あっちにおって、土地も買って生活しているもんだから、いろいろ考えて、親父とも、家内とも、弟とも相談して、帰ると決めたんです。

それで、翌年 73 年にこっちに、糸満に引っ越してきました。

こっちに來たら、亀市兄貴が延縄いいからとやって、それからずっとこっちで延縄やっただんです。あっちにいた時は一本釣りトビウオしかやらなかった。底延縄やったことないです。で、兄貴から習って、種子島から持って來た小さい動力船でやっていました。

この船は弟が中学卒業してから、もう今から先は機械を乗せた船じゃないと仕事できないからとって、今まで使っていたサバニは戦前の舟だから、それでこの動力船を持ちました。船は鹿児島から種子島に漁に來る人がおったですよ。それを譲ってもらった。その当時あの船もまだ新しい船だった。2、3 年位経っておったかなあ。この船を糸満に持って來て、運がよかったんです。あの時糸満では動力船は 4、5 隻しかなくて、皆底延縄してました。この船でいつも漁が上がりよった、いつも 4 日位で満船してました。

種子島 最後の糸満人 金城樽さんのこと

ウチは種子島におった時は増田に住んでいて、最後に残ったのは金城樽さんは、大塩屋におったです。ウチの本家は新文徳(ミーブントク)とって、ウチは六代目に當る。

樽さんはメーミーブントク(前新文徳)。ウチの親父より 15 歳下で、ウチの親父とは従兄になる。大正 15 年には種子島にきて、戦前は樽さん達が、トビウオ時期なると、あっちこっちからサバニシンカ集めてトビウオ獲りしよったそうです。この資料(末尾掲載)に、種子島で中心の人だったと書いてありますねえ。この樽さんが亡くなる前に、言ったんです。

「わしら、母ちゃん儲けるためにここに来ただけど、とうとう沖縄に帰られなくて、ごめんねえ、ここで死ぬのは心残り、残念だ」と泣いて謝り、遺言言ったんですよ。

それから 1 ヶ月もしないうちに亡くなった。それで奥さんから電話が掛かってきて、糸満で遺骨は埋めたいから、ぜひ相談があるから、私に來てくれんかと、呼ばれて、種子島に行きました。平成 2 年でした。糸満でも大きい門中ですから、赤比儀腹というて、幸地腹門中と一緒に。墓もあっちに立派な墓を造っていたんです。けど旅の人でしょう。やっぱり故郷の糸満で埋めたいですよねえ。奥さんは、もう自分が死んでからでもいいから、ぜひ門中に話してくれないか、長くなってウサカティ(門中会費)も出してないも



金城樽さんと糸満にある赤比儀腹門中墓。

んだから、門中の所に行って相談してくれないか。それは昔からあることだから大丈夫と思います。しかしお金がちょっと要りますよ。そしたら、幾ら掛かってもいいから、これだけが心残りだからと、お願いされました。

門中も相談聞いてくれて、一応、3年忌を済ませてからとあって、種子島から、遺骨を持ってきて、赤比儀腹の門中墓に埋葬しました。奥さんも亡くなってから一緒になって。もう樽さんも、思いがかなって、グソー(あの世)で、もう安心しているはずですよ(笑い)。

金市丸新造 宝山・尖閣へ 漁場広がる

種子島から持ってきた船で、いつでも満船したもんだから、これじゃ船は小さいから、大きくしようということで、また亀市兄貴もサバニから降りて一緒にやろうと言うて船を買ったんです。兄貴と私と弟(金城孝雄)の3名共同で、宮崎の目井津から船買って、一緒にやったんですよ。9トのファイバー船を、金城の金と亀市兄貴の市とって、金市丸にしました。その時でも糸満ではファイバー船は初めてだった。皆木船ばかり。その当時はちょっと大きい船だったが、今は大体が皆10ト位だから小さい船になっている。これで遠くに行けるようになった。



底立延縄船・金市丸(9ト)と上原亀市さん

前の船だと4ト級と小さな船から、沖に出よったです。慶良間とか、伊平屋とか、近くでやりよった。この金市丸になってから、漁場が広がって、宝山・大九とかに行くし、尖閣にもずっと行くし、与那国まで行ったんです。

尖閣には、昔からあつちは漁がいいから、潮がよかったら、もう沢山釣れるからと聞いておったから、それで行ったんですよ。あの時分は、糸満から相当シジャー(ダツ)なんか獲りにも行っているし、漁場は豊富な所と分かっていたですよ。

で、行ってみたら、尖閣は漁がよかったです。もうあつちは魚の宝庫です。

コースですか、殆どがこっちから久米島に行って、アカオ(大正島)のコースで行く。アカオの島見てから、あれからずっと行って、尖閣に行きよった。今はもう衛星GPSもあるから間違いないけど、昔は衛星がない時代だったから、最初の頃はロランを持っていたから、ロランでやった。深さ測るのは、前の船ではチートー(深度測定用の縄)でして、金市丸になってからは、魚探があるからそんなことしないです。今の魚探はカラーだけど、最初の頃は白黒でしたよ。

尖閣で 浮き延縄 行く度 満船・大漁

この金市丸の大きな船になったから、浮き(底立)延縄やった。尖閣ではもう全部浮かしの延縄、あっちでは底延縄はもたない。ヤナ(瀬、岩礁の意)に掛かって獲れない。潮が速いもんだから瀬に全部引っ掛けて、ものすごいですよ。あっちは。アンカー掛けておって、ペラが回るんですから。エンジン止めていても、ペラはもうずっと回り放し。だから人が落ちたら助けられん。もうどこ行くか分らん(笑い)。

でも相当獲れました。あっち行ったら、いつも満船ですから。こっちから朝 9 時頃出たら、明日の夕方位に着きよったから、往復入れて大体長くて 1 週間位、漁がよかったら 5 日位で帰って来ます、長くて 1 週間。尖閣辺りでは一番多かったのは、マーマチ(オオヒメ)、シチューマチ(アオダイ)、クルキンマチ(ヒメダイ)。たまにはスギ、タイも獲れましたよ、アーラ(ハタ類)なんかも。向こうのシチューマチは小さい。

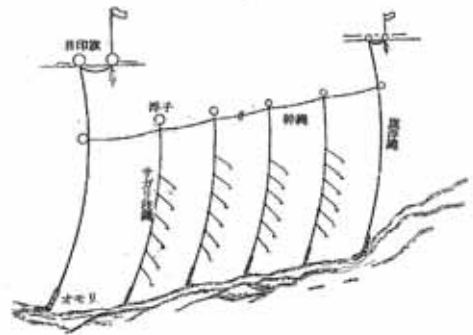
種類の関係か知らないが、ちょっと分らないですねえ。600グラムとこれ位しかないのに、小さい、数はよく食うんだけど、だから、斤目が多くならないわけ。あんまり小さくて。クルキンもあんまり小さいねえ。こっちのように大きくないですねえ。だけど、マーマチは大きいですよ、宝山なんかと比べたら。



写真は魚釣島。尖閣諸島は潮が速い。エンジン停めていても、プロペラはゴロンゴロン回る。(上原博輝 2010)

浮き延縄 長さ 3 呎 底釣針 500 本

(底立て延縄の図を指して) ウチの場合は浮き延縄ですねえ、これが浮球。両端に錨の代わり大きなオモリの鉄筋付けるんです、1 尺筋の大きな太いものを。で、浮き延縄は固定するんじゃなくて、潮に流すんです。それで枝縄のオモリは小さな鉄筋、3 分筋でやっているから、こうして潮に流れて行くんです。流れる所は、結局瀬(大陸棚の意)が、沖に出る潮だったらもうダメだから、外(百尋線から外側)に落ちたらダメです。大体、マチ釣りは 150 メーターから 200 メーター位の線が一番いいわけです。それから落ちたらもう食わないから、だから瀬がこうあるといたら、瀬の流れにあれを流すんですよ。これ(大陸棚外縁)に落ちたら食わないから、ここに落ち



底立て延縄の模式図、目印旗 2 本、両端はく字に曲げた大きな鉄筋。枝縄間が 30 メーター、枝縄 100 本、釣針 5 本×100=500 本。延縄長さ約 3 呎ほど。

たらもうダメ。できたら上せる瀬がいいわけです。

そして、こうやったら、これがこう、ずーと行くわけだから、大体 150 メーターから 200 メーター、250 メーター位までの瀬内でやるわけです。アカマチは 300 メーターから下がるけど、上の方にマーマチがおって、それから中間にシチューマチがおって、その下にクルキンマチが大体おるから、だから 150 メーターから 250 メーター位まですねえ、その線が一番いいです。浮き延縄はすねえ。全体の長さですか、長さは、この間隔が、枝縄と枝縄との間隔が大体 20 尋、1 尋が 1.5 メーターだから、30 メーター、約 30 メーターの間隔でやるんですよ。枝は大体 100 位付ける。そしたら長さは 3000 メーター、3 疋位、枝縄には 5 本付けるから 500 本ですすねえ。

オモリ 鉄筋で工夫 く字型曲げる

尖閣では潮が速いから浮き延縄のオモリの鉄筋が切れますよ。全部捨てる時もあります、あっちの潮はものすごい。もう何回も道具を捨てて、家に戻って来る時もあります。

もうマンタキー(ひと呑み)丸沈みしてから、ものすごく潮速いです。結構慣れてないと難しい。ベテランでなくても、あの潮じゃちょっと、入ったらもうお終いです(笑い)。それで、浮き延縄のオモリをいろいろ工夫しましたよ。

どの位の物がよいか、鉄筋の長さを調整したりして。最初はコンクリートで作った。そしたら、コンクリートは、重いから瀬によく引っ掛かった。鉄筋でやったら、同じ重さで長くして、こう流れて行っても、瀬に掛からなかった。それで鉄筋に切り替えてやった。



延縄の両端はく字型に曲げた大きな鉄筋(1 尺筋)。
下の小さいのは枝縄のオモリ用鉄筋(3 分筋)。

浮き延縄の端っこの鉄筋は、大きな鉄筋を使って、くの字型に曲げたんです。万力でくの字型に曲げてあるから、そしたら瀬に引っかからない。真つすぐだったら、ヤナ(サンゴ礁の岩、魚の住処)にこう引っ掛かって、テグスから切れるから。ほんとは枝縄のオモリも全部くの字型にやったらいいんだけど、投縄の時に、横曲げたら取り出すことが大変なわけですよ。それで両端はくの字型でやっています。そしたらずーと瀬の上も越して、下からも上からも、越して行く。そしたら、皆これ見て、真似して、こんなしてます。だから、今はもうオモリ捨てる人はいないはずですよ(笑い)。

1 航海 4~7 日 1 日 3,4 回縄入れ 水揚げ 1~2 ト

尖閣には夏場も冬も行きよった。もう 1 年中行きよったですよ。冬はシケで漁が出来ない時は、あの大きな島、魚釣島の島陰の方で錨下ろして休みよったんです。

夏だと、あっちは結構潮は速いです。やっぱり島の所まで潮が速いです。だけど場所が変われば、瀬が荒い所もあるし、なめらか所もあるわけですから、

浮き延縄は、1日に何回位入れたかなあ。もう乗組員がしっかりしておれば、大体6回位やるんだけど、やっぱり乗組員が揃わないと、もう3回か4回が精いっぱいですねえ。尖閣だと潮の流れが速いから、縄入れたあと、潮上りしてまた元の所に行くんです。流れた分、上に行くわけだから回数が少ないですよ。

船員は3名か4名、あの当時は殆どが4人乗りだったから。1航海は大体が1週間位。こっちから出たら翌日の夕方には着きよったから。水揚げは1トから1ト半、2ト位釣れました。

魚是那覇と糸満、両方に分けて下ろしよったです。主にマーマチとか、シチューマチ、クルキンマチですねえ。もうアカマチは釣れなかった。もう深さが決まっているから、アカマチだと300メートル下がらんと食わないから。アカオは1,2度やったことがあるんだけど、あっちより魚釣島とか、トリシマ(南小島・北小島)の方が漁はよかったんです。



尖閣行ったら、行く度に満船。写真は釣上げたマーマチ。(上原博輝 2010)

潮速いと 宝山・大九へ 水揚げ半分

尖閣は潮が速い、それでもあっちに行くということは、漁がよいから行くわけです(笑)尖閣行けば、もう1トから2トですから、宝山、大九行ったら約半分位です。

だけど、尖閣は潮が速い時があるからねえ、速い時はダメですねえ。何回も道具捨てたことあった。ヤナに引っ掛けて、道具を全部捨てたり、半分位捨てたり(笑)。

もう潮が速い、やばいなあと思った時は、すぐもう宝山とか、大九とかにひき返して行きましたよ。それから宮古近海に、多良間島ですねえ、ウチは殆どが多良間という所の沖で、あれから今度は家近くまで来るわけです。最初はずーと宮古に行ってから、宮古からこうしてまたこっちに来て、家が近いようにこうして来る、帰れるようにして、反対には行けないから、あっちからこうこうして来るわけです。

浮き延縄にマチ以外のものも掛かってくる、あのサバなんか湧くみたいにありますよ、ヤマトのサバイユ(ゴマサバ)。だけど、あれは持ってきても値はせんし、売れんもんだから、マーマチ釣ってきた方がいいからと捨てよった(笑)。



尖閣は潮が速いと漁できないからと、宮古の宝山、大九移動、水揚げは半分に減る。(上原博輝 2010)

カジキは掛からん。スギ知ってますか？ あっちは、あれもよう多いです。

延縄のエサですか？、最初はイカ使ってた。内地からこれ位のイカが来よったから、1匹掛けでやったんですよ。それがあんまり高くなってから、これはもう引き合わんという事で、それでキビナゴで試してみたら、結構食うから、キビナゴでやっていた。

けど、最近はキビナゴも次第次第に騰がったものだから、1箱1万円程するから、12、3和で、これでは引き合わんからと思って、今度ソデイカの加工した残りの羽で、あれ安いから、今組合で売っているから、あれ使ったら結構よかったです。今は全部その羽に切り替えたんです。簡単に千切れないし、持ちもいいから。

浮き延縄船 最盛期 30 隻余り 台湾船 よく見た

最盛時代は、糸満には浮き延縄船だけでも 30 何隻かおった。浮き延縄で皆尖閣に相当行ったです。皆行って、2 トばかりも獲ってきたですよ。

向こうの魚なくならないかって？
いいえ、湧いてくるわけだから(笑い)。
もういっぱいいます。

他所の船ですか？ 糸満の延縄船以外には、たまには一本釣り船はおったかもしれんけど、那覇の垣花辺りの一本釣りは、大体あっちはアカマチしか釣らなかった。ウチらと漁場がやっぱり離れているもんだから、あんまり見かけなかったですよ。



糸満漁港光景。延縄立延縄船は 30 隻ほどいて販わう。

台湾船はよう来てました。あれ達はもう台湾船はフカ釣りみたいなことをやっていましたけどねえ、こっちにも来ていましたよ、宝山辺りも。前は相当来ていたが、保安庁が喧しくなったから、もう来れなくなって、前はよくあっちで、宮古の池間で、船も一緒に港に入って、話もしたりしよったです。

台湾船はマンビカー？ 多分底延縄だから、マンビカーはあんまり獲っていないはず、僕は見たことない、船に上がったことないから。

取締まり寛大 大きな顔で来よった

ウチが金市丸を買った宮崎の船主の話ですよ。この人は尖閣にも行っていた。一本釣りとか、曳き縄とかで。そしたら台湾船ねえ、今はエンジンは、電気で掛けているんですけど、始動する時には、昔はエアで掛けておったから、エア切らしてから、アンカー掛けして停泊していたら、台湾船が伝馬下ろして、伝馬から、エア切らして、機械掛けられんから、エアのタンクを貸してくれと来たそうですよ。あんた達タンク持っているか？ タンク持

っている。エアをチャージしていっぱい入れてくれんか、入れて上げたら、非常に喜んで、バナナなんか持って来たそうです。やがて台風が来るから早く台湾に帰った方がいい。そんなこと言ったと話していましたよ（笑い）。

あの当時は保安庁の取締まりがあんまりなかったから、もう大きな顔で来よった。

ウチなんか尖閣では親しく話したことはないけど、池間ではしょっちゅうあれでしたよ。入港してからの、もう酒を持ってきて、バナナを沢山持ってきていたねえ。一緒に酒も飲んだです。あその酒は飲めなかったけど（笑い）。で、昔の話をして、昔の日本の憲兵は恐ろしかったよと（笑い）。よくあっちで憲兵から調べられたことがあってと言ってねえ。ウチより年配の人が沢山おって、やっぱり皆日本語が上手でした、日本教育受けていたから（笑い）。台湾船は人数多かったねえ、あれこれ 10 名位乗っていた。若い人達もおりましたねえ。夜なんかも船で宴会してねえ。船で踊っていましたけど（笑い）。どんな踊り踊っていたか知らんが、船の方からワイワイ、賑やかして、沖縄のカチャシー(興に乗った踊り)みたいな歌が聞こえてきましたよ（笑い）。

シケたら 尖閣 島陰へ 宝山 宮古へ逃げる

尖閣では、風強くなったら、シケたら、しょっちゅうあっちに、大きな島(魚釣島)の島陰に避難していた。前はイカ釣りやる前は、冬の方が殆どあっちの方がよかったですよ。シケれば、ほら島陰に隠れるから、宝山よりか、却ってあっちの方がよかった。

宝山は、何も島陰もないから大変です。すぐ宮古に逃げんといかん（笑い）。尖閣だと、仕事ができない時、島陰に隠れて錨下ろせば大丈夫だから。

冬は台風ないから、尖閣に行きよったんです。それで帰りは北風だから、真向かいじゃないから、そのまま直進で帰る。久米島通っても潮があっち向きだからくつつかってくるんです。あっち行く時も、潮上に向けてコース取っておかないと潮にもたれるから、だからあっちから来る時は速いんですよ、流れに乗って来るから。

向こうで危険な目？ あったかなかったかは忘れているから（笑い）。怖いことを覚えていたら、仕事できない。こっち来たのが 41,2 歳、だからあれねえ、70 歳超してまで、やっていたから、かれこれ 30 年以上ですか、あの頃は元気があったんだけど（笑い）。

魚獲り過ぎる 八重山基地にするな！ 氷・燃料積まさん

最初に尖閣行き始めは、糸満から直行で行きました。行ったら八重山で漁する所があったです。西表と与那国の間に、台湾ゾネ、中ソネが丁度 2 つあるんだけど、あっちでも魚よく釣れますよ。2 つはどういう関係か知らんけど、あっちが潮の流れが速い時はこっちが緩いんです。またこっちが緩いとあちは速いんですよ。船も見えているんです。ほんの近い所なんだけど潮が違う、都合のいい所だったです。で、台湾ゾネ、中ソネでも魚釣ったら、八重山に下ろして那覇に送って、すぐもう積み込みしてました。それで尖閣にも八重山基地にして行っていました。したら八重山の人は浮き延縄はあまりやらなかった

から、一本釣りが仕事だったから。浮き延縄は魚こんなに獲れましたから、この魚見て（笑い）。最初の頃はよかったですよ。次第次第にあとでは、魚を獲り過ぎるからと（笑い）。

もう皆八重山から、文句言われて、したたか怒られたから、もう基地するな、氷も、燃料も積ませないと言われましたよ（笑い）。それで、あとからは八重山からは尖閣は行かなかった。糸満から直行で行きました。

北の方にも行きました。奄美大島とか、徳之島ですねえ。あっちもよかったです。あっちから、徳之島で釣ってから、鹿児島に入港することもあったんですよ。こっちがあんまり魚がいっぱいしたもんだから、もうあっちの方に、ウチは鹿児島に行って、それから氷を積んで、して、今度は屋久島にヤクシゾネとあるんです。あっちも漁よくて、また鹿児島下ろしてから、また糸満に戻って来ながら、ズーと伝えて、漁しながら家まで帰って来るんです。1週間位では。あの時の若さがあればなあ、何千万でも買うんだけど（笑い）。

ソデイカ始まって 冬イカ釣り 夏だけ 尖閣へ

イカ釣りはイカ延縄だったから時期が11月から来年の4,5月まで、セーイカ(ソデイカ)に切り替えて、イカの方が漁が多かったもんだから、殆ど冬場はこれやっています。そしたら尖閣には夏場にしか行けない。セーイカ発見する前はもうずっと浮き延縄だったから、1年中、明けても暮れてもそれしかなかったけど。このセーイカが始まってから24,5年位はなるんじゃないか。セーイカ漁は冬だから、セーイカ延縄に切り替えて、尖閣行く回数が減ってきましたねえ。

ウチらは、尖閣に冬は行かなかったんだけど、夏はやっぱり行きよったです。仕事切り替えた時に行きよったです。もうずっと毎年あっちには行ってました。行っても月に1回しか行けない、もう潮の関係で、夏は台風の関係もあるし、1年でやっぱりよう行って3回、4回位ですかねえ。

パヤオできて 延縄下火 小さな船で パヤオへ

糸満には浮き延縄船だけでも最盛期は30何隻かおったが、これが次第次第に下火になったのは、パヤオ(浮き魚礁)ができたてからですよ。小さい船はパヤオに皆分れてしまっただけから、それで浮き延縄が下火になった。ウチはずっと浮き延縄やったんだけど、パヤオが流行ったらパヤオの方に、皆行ったりして、尖閣に行ったのは何隻おるかなあ。パヤオがない頃はたまには皆殆ど行ってましたよ、延縄ばかりだから。パヤオができてからは、皆行かなくなったですねえ。丁度、常太郎さんの常丸とか、ウチらの金市丸とか、4,5隻位しか行かなかった。

金市丸、座礁 小さい船に切り替える

金市丸は、丁度6年償還で、こっちから漁業組合からお金借りてやったんだから、6年でお金返してから、また女房の兄貴は別に借りて、別の船、市丸という船持ったんですよ。

で、最終的には弟と2人でずっと、あの船持って、弟孝雄が船長、僕が漁労長で2人でやってきました。上原常太郎さんはウチなんかが始めてから1年位後から、和船型の常丸に切り替えたんです。この金市丸で、若い頃は頑張ったが、ウチは血圧が高くなってから、10年前から行けなくなって、それでの弟が、13下の弟孝雄が、来年73歳、あれがずっと持っておったんだけど、弟も今度も糖尿罹ってからの海を辞めたんだが、それから乗組員を雇ってから、2、3年やったけど、金市丸は、こっちでのし上げて座礁して失くなった。

平成20年12月頃だから、もう4年位なる。そのあと船は八祥丸。あれは渡名喜から買って来てからに。船を買ってから船が小さいからもう尖閣行かんですよ。あれでイカ漁だけしてます。

中国公船 危険 引っ張られて 抑留だよ！

尖閣行ったら、2トばかりも獲ってきた。もう向こうの魚は湧いてくるわけだから（笑い）もういっぱいいますよ。今でも自由に行けたら、あっちの方に行くんだけど、もう行けない、もう中国公船が押し掛けているから。常太郎さんは今でもずっと行っている。今度、あれが中国公船が出たから、問題が出たでしょう。どうしようかなあ、行こうか、行かないでおこうかと言っていたら、お前あっち行ったら危険だよ、中国に引っ張られて行くよ（笑い）もうあんな所に行ったら大変なことになるよ。そうかなあ。（笑い）あっちに抑留させてから、当分帰って来れんよってと言って（笑い）。



八祥丸での仕事の合間にパチリ、左より金城芳雄(85)、弟金城孝雄(73)（糸満漁港にて 2015.7.10）

落穂 探脈

糸満系漁民の定住 中野 元 なかのはじめ (熊本短期大学助教授)

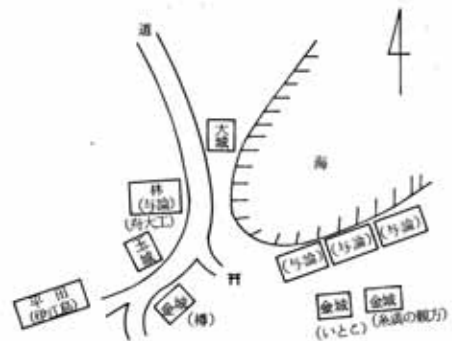
種子島における定住地域

種子島において糸満系漁民が現在でも定住している地域は、西之表市役所商工水産課の協力で調べた結果、芦野、田之脇、大塩屋の三ヶ所である(図1 ※割愛)。ただ、その他として湊、浜田にも個人的な規模で定住があったようである。現在では、いずれも糸満系漁業はしていない。過去を遡ってみると、上の三地区のうち最も典型的な定住状況が存在していたのは、大塩屋地区である。歴史的にどのようにして、いつ頃から定住が始まったのかは、現在生存している人も途中で定住しており資料も残されないことから、定かでない。他の二地域は、その漁業形態は個人的漁業が中心であり、定住規模も個人的ないしは小規模であった。以下、順にみてみよう。

大塩屋地域

大塩屋地域は、糸満の金城組の種子島拠点であったと同時に、糸満出身の人々と与論島出身の人々などが定住した地域でもあった。図2は、現在唯一一人存在されている金城樽氏からの聞き取りで作成した当時(昭和初期)の部落住居図(漁民関係のみ)である。昭和初期のこの地域の資料はほとんど見出せない状況なので、金城樽(明治39年頃糸満生まれ、親の屋号は「新文徳」、本人の屋号は「前新文徳」という)氏の言葉で、当時の生活状況を再現してみよう。

図2 大塩屋の住居状況



※金城芳雄さん注釈、
大城：大城亀(大塩屋に最初に移住した人)
金城(いとこ)：金城亀(芳雄さんの長男叔父)
金城(糸満の親方)：金城家新文徳の一族、名不詳

住居構成

金城樽氏がこの地に来たのは、大正15年であり、当時20歳過ぎのことだったという。この頃には、与論島出身者の人など含めて14~15軒あり、人口も50~60人いたという。また、生産手段である舟をつくる舟大工(林氏、与論島出身、舟は板を張り合わせてつくっていた)もあり、それなりに漁業に関しての経済構造が形成されていたようである。昭和初期は、ちょうど最も活気があった頃のようなのだ。

漁業形態

これらの人々は、全体としてまとまって漁業をしたかという、そうではない。大きくは三つに分けられる。第1は、糸満出身で漁業の親方である金城氏が金城組を組織して追込漁業を種子島近

海で行っていた。ここでは、出漁拠点基地として、大塩屋漁港が活用されていたようである。その人員は、金城氏が与論島、糸満へ直接手紙を出すなどして連絡を取り、いわば外から集めていた。大塩屋の住民＝漁民が追込要員としてなっていたわけではないらしい。金城氏 1 年間を通じて大塩屋に住み、7 月になると外から漁民を 24～25 人ほど集めて金城組を形成し 10 月まで操業していた。集まってきた漁民が大塩屋に逗留するときには、金城氏の住居で寝起きをしていたようである。10 月を過ぎると、漁業も終わるため、それぞれ地元に戻っていった。金城組の活動も、金城氏が昭和 5～6 年頃に大塩屋から引き揚げたのを契機に終わったらしい。

第 2 は、居住している住民で組をつくり、追込漁業を行う場合である。実際、図 2 の金城樽氏とこの金城氏ならびに大城氏の三軒が中心になって組をつくり、追込漁業をしていた。舟を持つてはじめて組に入ることができたという。ただ、舟を持っていなくても漁業に参加することができた。平田氏はそうだった。総勢で 12 人いた。漁業は 5～9 月までは追込漁業、10～4 月までは釣り魚といったように 1 年を通じて種子島近辺と屋久島を中心に行っていた。ただ、この近海はシケが多く、割舟では思うよういかないため、1 年の 3 分の 2 はだめだったという。しかし、日中戦争が始まって昭和 12 年頃から若者が召集でとられるようになってから衰退しはじめ、戦後では兵役からほとんど若者が帰ってこなかったためまったくなくなってしまったようだ。その後、この地域から離れる人も多くなり、現在のようにかつての漁業者では金城氏一人しかいなくなってしまった。

第 3 は、個人的に漁業を営む場合である。与論出身の人は、別に組をつくって漁業を行ったわけでもなく、個人的に操業していた。

(「日本における海洋民の総合研究—糸満系漁民を中心に—(下) 1989 年」より)



最後の帰郷記念写真「金城樽、カマル来沖歓迎会」(1983 年 9 月 28 日 糸満にて)



尖閣諸島は糸満漁協の伝統的漁場、終戦直後はダツ追込み、復帰後は底立延縄船の主要な漁場。上：糸満漁協建物、下：漁協壁に大書された米軍演習区域図。左下に「赤尾嶼・黄尾嶼射爆撃場海域及び空域」表示。

當山 清 とうやま きよし (糸満漁協)

1936年(昭和11年) 沖縄本島本部町に生まれる。79歳(2015年時)。

7歳に家族で八重山に移住、父を戦時中、病気で亡くす。12,3歳にはカツオのエサ採り、ダイナマ漁を手伝う。15歳から18歳に南方へ貝殻、海人草採り。19歳には尖閣諸島・ラサ島へ、スクラップ・真鍮探し。23歳兄に誘われ、糸満に来て、マグロ船に乗る。以来マグロ延縄に従事する。30歳に独立し、34歳に豊国水産を設立、遠洋マグロ漁に乗り出す。オイルショック時には流通加工業に転換、バブル転機に、流通事業に身を投じる。

2005年沖縄鮮魚卸流通協同組合「泊いゆまち」を設立、現在同組合理事長の要職にある。



12,3歳から 潜り、カツオのエサ採り

父當山清福は半農半漁で、小さい時は大阪にいたんです。大阪から沖縄に帰って来て、で、貧乏で子沢山だから、もう郷里の本部(もとぶ)では食っていけないし、一番仕事しやすい所は八重山ということで、昭和16年に八重山に引っ越してきた。2,3年したら戦争が激しくなり、父は防衛隊にいて、戦争中に、僕が9歳の時に病気で亡くなった。弟1人は戦争で亡くなって、2つ上の兄がいて、僕は次男、男3人女1人の兄弟姉妹です。母親1人で、皆を食わせるのは精一杯だから、僕も小さいながら、海の仕事をやりましたよ。もう学校行かんで、もう海学校ばかり(笑い)。13,4

から潜り、主にカツオのエサ採りです。カツオ船の場合、各カツオ節を造る工場があって、船があって、そこにエサ採りの網元があって、最初に入ると、やはり飯炊きから、それを本部出身の具志堅用徳さんの所でやりました。エサ採りは普通クリ船2隻でやって、1隻に7名から8,9名位乗って、カツオ漁は5月から大体9月位までの夏場です。これが終わると、ダイナマイトで魚を獲るわけです。これを専門に冬場は仕事やりました。



カツオ工場の煙突が立ち並ぶ護岸通り。当時夏カツオのエサ採り、冬ダイナマイト漁しかなかった。(「八重山写真帖」より)

15歳から18歳 南方へ 貝殻採り

そういう形で夏・冬やっている所に、南方で貝殻採りが盛んになったんです。フィリピンの西の方の、今の南沙諸島辺り。もうそれが盛んになった時からは決まった収入が入るようになって、高瀬貝とか、広瀬貝とか、貝殻採りに行ったんです。当時は、南沙諸島

という名前は使ってなく、あそこは危険地と呼んでました。まあ字の如く危ない所で、あそこはリーフが沢山あって、航海するのに危険な場所だから、

で、貝殻はあっちで採ると、身は1つ1つ取って、海に捨てて、ダンブルに入れておいて持ってくるけど、貝の中に身が少し残っているから、それが腐って、ガス発生してものすごく臭かった（笑い）。八重山着いたら、これを女の人達が、浜できれいに貝殻を洗うわけ。結構いいバイトになったそうだが。ダンブルから出して浜に揚げるのは僕らがやったが涙が出る位きつかったですよ（笑い）。だから、貝殻洗う女の人なんかは、臭くて、臭くて大変だったはずですよ、よく我慢して仕事できましたねえ（笑い）。

で、僕がこの貝殻採りに、最初行ったのは15歳位、まあ何も分からない子供だから、行ってやったんだけど、大変、ショック受けましたねえ。あれは自分が採ってきた量に応じてお金をもらう、毎日採ってきたのを船で計量するわけだから。誰が何と言おうと、もう採った分だけしかもらえない。僕は潜りは達者だったけど、やっぱ先輩なんかには絶対敵わなかったし、儲けもあんまりなかったから、1航海ですぐ辞めました。

それで、また石垣で、夏場はカツオのエサ採り、冬はダイナマイト漁やって、1年半、2年位経ったら、まあ腕前も大分よくなったので、それからまた船に乗りました。

南方行きは、普通3ヶ月単位で航海でしたから、だから冬場に2航海、夏は台風の問題があって行かないです。私達が乗っていったのは船は南琉丸です。

貝殻と海人草採り プラタス島に行く

19歳の歳、1回だけかなあ、セイホウ丸という南海商会の船で これに貝殻と海藻、海人草を採りに、プラタス（東沙諸島）まで行きました。プラタスも低いもんだから、マストに上がって、皆で島を探すんですよ。隆起した岩礁を目当てに、島を探し当てるんです。

また、あそこでよくサメに襲われて、死んだ人が多いという噂があったから、向こうに入ってきた時にはお神酒で、身を守るためにお神酒をかけて、それであの港の中は入って行って、それから仕事やりました。幸いサメに食われるとかの事故もなかったです。あそこで海人草1トと貝殻を沢山採った。我々は船でしか生活してない、陸に上がって海人草を干して、で、これをカマスに入れて、上の方に乗っけて、下は貝殻入れて、帰ってきましたけど。



採取した海人草を選別して、箱詰めして内地に送る。宮古島での作業光景。（「あたらしいおきなわ」より）

両方採ったから、相当金になりましたよ。この航海で、B円の2万円あまりもらいました。もうこの頃には私は腕も上がって、船員の中で1,2位争う位の仕事をやったし、それに私は

エンジニアと航海の両方できよったんで、沢山仕事をやったからと、一番花金をもらった。2万円の10%、これ頂いたです。あの時は嬉しかったです。船員ですか、30名位だったかなあ。大半が年配の人達で、私の年頃もいたと思います。漁労長は家の隣の人でした。伊江島出身のサンダーヤッチー、知念サブローさんです。

警備兵隊に 気に入られ 服もらう

貝殻採りは、サバニで行って、トモヌイ(船頭)がいて、大体がトモヌイの指示で潜って、30メートル深さ位まで潜って、貝殻採るわけですよ。海人草採りの場合も、サバニは、大体4隻位で行って、1隻には6,7人位です。全部で30人位で採りました。人数もサバニの隻数も、両方とも、大体同じだけど、深さと採り方が違う。

海人草は、ナチョーラといって、浅瀬に生えていて、ねずみ色に近い、群落で密生して、ユラユラ、ユラユラ揺れていますよ。深い所でも大体5メートル位かなあ、割と浅い所に生えています。生えている所は、大陸からの水が流れてきて、チラチラチラチラして、川と海の水が混ざっているのか、ものすごく冷たいです。で、これを採るのは刈るのでなく、手でむしり採ります。素手でやったり、手袋も履いて採ったりして、袋網を持っていますから、これにどんどん網に突っ込んで入れる。で、採った海人草は一旦島に揚げて、そこで、広げて乾燥させて、あのプラタスで乾燥させて、これをまとめてカマスに入れるわけです。プラタスは砂地の島です、山も、木もない、ヤシがちょっとだけ生えた島です。

台湾の領土で、軍事基地があったですよ。中国から蒋介石と一緒に中国人も来ているじゃないですか、あの人達を交えて台湾の人と一緒にLST(上陸用舟艇)が来てました。あれで、食料を運んだり、ここ警備したりして 兵隊さんが相当いて、駐屯地になってた。陸に上がった時に、台湾から来た兵隊さんと友達なって、遊びに来なさいと言われてLSTに上がって行ったんです。行ったら、入口に銃剣持った門衛が、中国人が、いるわけですが、もう分からん言葉でベラベラと言うもんだから、こっちは何言うているか分からん。そしたら、あの人が中で声聞いて、すぐ出てきて、これは自分のお客さんだ、通せと言って、船に入れてくれました。あの人は階級は上だったかも知れん。あの当時、私なんか見たら、もう服装があれでしょう、惨めな生活している人、難民みたいに見えたんでしょねえ。着るもの、軍服みたいなきれいに洗濯された洋服を私にくれてありましたよ。私は19歳だったから、子供ながら台湾の人はいい人だと思いました。

本島から 飛行機の残骸 スクラップ取りに 尖閣へ

兄當山清市が沖縄本島に来て、仕事してましたからねえ、私も八重山から那覇に行きました。19の時(1955年)、その当時は相当スクラップブームでしたねえ。その時代のことは「1953年にスクラップ処分権が琉球政府に移管して55から57年にかけて、スクラップブームとなり、高騰する」とありますが、スクラップといっても艦砲の破片とか、くず鉄はあまり金にならない。真鍮とかが目当て、高く売れましたから。

それで八重山から皆ここに来て、沈んでいる船とか、砲弾から薬きょうなんか取る仕事してましたよ。あれは信管を叩いて爆発させて取るとから命がけです。あっちこっちで爆発事故が起きてねえ。相当の人が亡くなった。それでも金になるもんだから、皆必死でした。皆競争してスクラップ探して取るもんだから、もう簡単にはないわけです。

それで、僕達は船に乗って、尖閣列島に探しに行きました、佐敷の馬天港から。船は突船上がりの木船、25～30ト位、船は共進丸だったかなあ、親方は安里虎寿さん、船長は青山さんという人でした。尖閣列島には、飛行機の残骸とかが、ジュラルミンとか、いろいろあるはずだということで、それを取りに行ったわけです(笑い)。安里さんは与那国の人で、突船は与那国が専門、尖閣列島によくカジキ突きに行っていたから、突船仲間から、魚釣島に飛行機が墜落していたという話を聞いて知っていたかも知れん。あとから聞いた話ですが、2機も落ちていたそうですよ。僕らが行った時は、この飛行機は宮古の人達が取ったあとでした(笑い)。島に上がってみたら何もなかったです。海岸にもスクラップになる船も何もなかった。尖閣列島をあっちこっち探して見たが、何にもないから、今度はラサ島(沖大東島)に行きましたよ。



久場島にはゼロ戦機の残骸があった。沖合いから見えて漁師仲間で噂になっていたという。(新城和治 1971)

ラサ島 座礁した船 ダイナマイトで 爆破

ラサ島に行ったら、座礁した商船みたいな船が沈んでいましたよ。潜って見たら、後ろのシャフトがあって、シャフトが出てプロペラがあって、このペラなんかは全部なかった。ここも金目になるスクラップは、簡単に取れるものは全部取られた跡でした。

よく見ると、ペラのシャフトを円筒に巻いた真鍮が残ってました。これは簡単に取れないから残したわけですよ(笑い)。自分達は、折角ラサまで来たんだから、これだけでも爆破して取ろうと決めました。そこで大きなダイナマイト作って、潜るのは私 1 人しかいなかったから、自分が潜って、ダイナマイトを円筒に縛って、爆発させて、真鍮を取ることにしたんです。海底で爆発させるわけだから、火薬を全部入れて、信管入れたら、ニチビ(導火線)を相当長くすれば、火を点けても、何分間は水の中で燃えて中に入っていきます。私は、はい潜るよと言って、導火線に火を点けさせて、火点けたまま、ダイナマイトを抱いて、潜って行って、ダイナマイトを円筒に縛ったわけです。そして急いで揚がって、遠くに逃げました。すると大きな爆発音、ドカーンして水柱が大きく上がりました。もうこれで、一安心、円筒を爆破したから、バラバラになって真鍮がいっぱい取れると期待しました。だが、潜ってみたら、そのままなんです、もうがっかり(笑い)。

ダイナマイトはこの円筒を割るのには役立たない。爆発させても、丸いから滑って、抵抗がなく効かないわけです。これを取るのを諦めて、今度は陸に上がって、あちこち廻って探したんだけど、真鍮類はなかった。ラサ島の守備隊が置いていったものか、セルロイドみたいな細かくした火薬、あれがいっぱいゴロゴロしてあった。これに火を点けると、バーと明り点いて、上に揚がるわけです、照明弾みたいに。面白いもんだから、自分の船の方に向けて飛ばして遊んでいたら怒られた。船を沈没させるかと（笑い）。

今考えると、あの時あんな悪戯してもよくもまあ事故にも遭わなかった思いますよ。

与那国・台湾行って 突き船で カジキ突き

尖閣列島辺りを全部廻ったけど何もないし、ラサ島行って、結局何もないし、それでどうにもできなくて、この船が突船だったから、今度はカジキ獲ろうということで、馬天から、そのまま与那国に行きましたよ。親方の虎寿さんは突船してましたから。与那国で準備して、台湾の蘇澳まで、突船して、何航海かやったんだけど、うまい具合に行かないですよ。そうしている時に、機関長が破傷風で、大変なことになるって、僕の兄貴も一緒でした、兄貴はエンジニアで機関場に入っていて、機関長が破傷風罹っているでしょう、緊急な状態で蘇澳に入って、すぐ病院まで行ったが亡くなったですよ。で、亡くなって、そのまま遺体を持って帰らんといかんじゃないですか、丁度その時に、お盆なんで、死んでいる人だから、もうどこも取り合ってくれないわけです。お盆の時は台湾では、そういう宗教的なものがあって、この時税関に、非常に世話してくれた人がいたんです。この人が何やかんやの手続きを全部やってくれて、船に乗せて、この人のお陰で無事に帰ってこれたわけですが、何であんな親切な人がいるかと、いろいろ聞いたら、クリスチャンで、クリスチャンだからやったわけですねえ。こんなこともありました。沖縄帰ったら、もう儲けなければ船は解散、で、僕は八重山に戻って、また夏はカツオのエサ採り、冬はダイナマイト漁を1年位していたら、ビルマに貝殻採りに行く船があったので、これに乗りました。

船団組んで ビルマへ 貝殻採りに

20歳（1956昭和31年10月）には、船団組んでビルマ（現ミャンマー）に行きました。その時の船は南琉丸（55ト）、秀福丸（55ト）、生徳丸（35ト）、海幸丸（35ト）の4隻、沖縄から2隻、合わせて6隻、漁師200名位で、船団組んで行きました。僕が乗ったのは南琉丸、総勢35名でした。1年契約でねえ、だけど10月に行って、帰ってきたのは翌年の1月の約3ヶ月間の1航海だけ。結局ビルマに行ったんだけど、貝殻採れなくて失敗でしたから。

船団長は外間完エイさんという人で、海軍兵学校出の人でした。このビルマ出漁を計画したのは光洋水産の玉城仁栄さんで、当時の八重山の水産業界の大家でした。あれは失敗だったんじゃないか。時期的にも、雨季で、あそこの雨季は半端じゃない、天井からバケツで流したようなものすごい雨ですよ。それに風が巻くとすごい風が来る場合もあって船で航海するのも危険、また海も濁っていて、港の中で潜ったら、何もう見えません。

魚の歌は聞こえるけど（笑い）。僕もいろいろ水産をやってきたですが今考えてもよく分からん、あの時分になぜ決断したか、我々が仕事に行く海域をどの程度調査したか、どこの島のどこそこで、何を、どう採れるということまで、細かく書いた指示があったのか、分からないが、行ってみたら、その貝殻らしきものはないし、もう皆落胆して、大変でした。

もう 5,60 年前のことだから、行った場所も、地名も全部忘れましたが、とにかく何箇所かでやっても、貝殻はないわけです。でも中には操業はできた船もあったかもしれない。行く時は一緒に行ったが、途中から、帰りも皆バラバラですから。外間船団長も飛行機で帰ってきたはずですが。だから他の船の状況は分からない。

ウチの南琉丸は向こうでは仕事らしい仕事はなかったです。白蝶貝を採ったりはやってけどねえ。それでアンダマンまで下がって行った船もいた噂も聞きました。あれは領海侵犯ですよ。捕まったら終わりです。

南沙諸島で密漁？ 貝殻採って帰る

さっきの白蝶貝採りですか。あれは一時ちょっと、深めに潜りができる人間を何名か集めて、採りました、私も潜りが専門だったから。白蝶貝は大体 15 メーターから 25 メーター位かなあ、深くて 30 メーター位のものすごい潮の流れが速い所に、口開けています。流れてくるプランクトンを食べているわけです。だから、底に潜って行って、潮に流されながら、これを 1 つ 1 つ採って、網カゴに入れて。息のある間ずっと泳ぎながら採っていくわけですよ。

これは天然の真珠です。これもすかさず採ればお金上げると言われてやったんだけど、このものがどこに逃げたか分からん（笑い）。これは目的外の仕事でした。

で、ウチら南琉丸はビルマでは、仕事らしい仕事はしなかったです。で、最終的に諦めて帰らないといかんから、ラングーン（ヤンゴン）まで行きました。そこで燃料とか、食料とか、全部積んで、そのまま手ぶらで、沖縄に帰るわけはいかないので、帰りがけに今の南沙諸島で、またいつもの通り貝殻採りましてねえ。それで、まあそこそこ金になる位採って一応帰ってきましたよ。

帰ってくると、これは法律的には密航になったわけ。出漁目的地はビルマで、南沙諸島じゃないから。帰りがけにそこに寄って、貝殻採ってきている。これは違反になるから水上警察に呼ばれて、いろいろ尋問されましたよ。どんなことがあったか、どこで何したかと聞かれて、私も呼ばれて、船長も、漁労長も、皆呼ばれたと思いますよ。そういうこともありましたねえ。



採取した貝殻はカマス袋に入れ、ボタン加工用に送り出す。高瀬貝を選別しているようす。（照屋永順所蔵）

もうその頃には自分の考えが変わりつつありましたねえ、貝殻採りとかの裸潜りはかなりお金になりよかったですねえ、頑張れば頑張るほど。もう水深 40 メーター、50 メーター位まで潜ってやるわけです、だけど自分の身体のことを考えたら、そんなに長くは生きられない、50 歳位までしかと思って、それで沖縄本島にきて、別の仕事したいと考えてました。

兄に呼ばれ マグロ船に 賑わっていた糸満

そしたら、23 の歳(1959 年)かなあ、糸満にいた兄貴から、マグロ船儲かるから、こっちに来ないかと連絡があったんですよ。八重山の人は多くがこっち(那覇地区漁協)に来て、一本釣船に乗っています。私の知り合いも、それで尖閣列島へ相当マチ釣りに行ってます。僕の場合は、たまたま兄貴に呼ばれて、マグロ船儲かるというから糸満に行きました。

で、ミーウムテイグワ（屋号）の玉城三郎さんの金聚丸に乗ったわけです。

あの当時のマグロ船ですか、那覇の三重城にあった琉水社が大きな船持ってましたねえ。あそこは米民政府がバックアップした半官半民的国策会社でしたから。それに元々遠洋マグロが目的ですから大きなマグロ船です。

あと民間だと、こっちの那覇地区漁協と糸満がありますが、マグロ船は糸満が中心だったんじゃないですか。遠洋は数える位だが、沿岸は結構おりましたよ。何隻位いたか憶えてないけど、大きな船もいましたし、小さい船も結構いました。

僕が来た当時の糸満は大変賑わってましたねえ。同じ海人の町でも那覇地区と糸満の違いですか？ こっちはただの海人です。糸満は海人でも商売人ですねえ。もう密貿易時代は全部糸満の人達を中心でしょう。あの当時は与那国行っても、台湾行っても、皆あれ達が頑張っていましたから。内地から闇物資持ってくるのも、香港へ葉きょう、真鍮運ぶのも、皆糸満の海人でしたよ。こういう闇商売で金を稼いで、相当資産は持っていたんじゃないですか、ウチの金聚丸も含めて。だから、内地から中古船買ったり、船を造ったりして、割と早い時期にマグロ船ができたはずですよ。あの当時の糸満は相当栄えていました。活気もあったし、丁度景気のいい時代だったです。



糸満の旧正月光景、遠方には大漁旗が風にはためき賑やかに旧正月を祝う漁船が見える。(東風平朝正 1960 年)

糸満から 尖閣へ シジャー獲り盛ん

その頃に、糸満から尖閣にですか？ そうねえ、糸満の先輩なんかは話聞くと、あの尖

閣に行つてシジャー（ダツ）獲つてきて大部稼いだという話は聞いてます。その時期なつたら母船にサバニを積んで行って、あつちに3ヶ月位いて、追い込みで、シジャーとか、トブー（トビウオ）を獲つて、運搬船で持ってきて、こつちに漁連があつた時こつちに下ろしていました。あれはカマボコのいい材料でしたから。あの当時の人ですか、殆どいないです。相当先輩達だから、もう殆ど亡くなっていますねえ。

（1960年2月糸満から尖閣諸島にダツ漁・豊洋丸が沈没し、15名が犠牲になった新聞記事を見せる）。この豊洋丸が遭難した話は聞いたことがある。1960年だと、24だから、マグロ船乗っていた頃ですよ。天気予報が未発達の時だから、いろいろ海の事故がありました。



尖閣諸島にダツ漁で出漁、消息を絶つた豊洋丸(16ト)船長・乗組員15名が亡くなった。(沖縄県公文書館提供)

私の兄貴も大きな台風が来て、あの時糸満の船は大きな事故に遭っている。(註：1957年9月 フェィ台風 瞬間最大風速61メートルのことか?) マースヤー(塩田)のあつた豊見城のヨネの方に全部流されてきているわけです。遠浅なっているから、陸地の方に引っ掛けて、それで相当マグロ船なんかやられて、トッパンスー上原さんの船もやられています。またマグロ延縄の道具に絡まって、ひっかかって、そのまま亡くなった人もいたそうです。

金聚丸に乗る マグロ船少なく どこでも自由に投縄

自分が乗っていた金聚丸というマグロ船は30ト前後位かなあ、3号にも5号にも乗っていた。で、僕が行つたのは3号だった。

あの当時のマグロ延縄の投縄は、今は全部同じ時間に、しかも等間隔で、4マイルとかで、方向も皆同じ方向に入れますよねえ。あの時分はそういうことは全然ないです。僕は漁労長したり、船長したりしていた中では、そういうことはなかったです。まあマグロ船は少なかったから、他所の船とは関係なし、自分の思った通りに、縄で魚を探すような感じでやりました。時間も、方向も、自分勝手に(笑い)。今はマグロ船はGPSがあつて、



1963年の台風で水没しかつた金聚丸3号、引き揚げて修理して長く現役で活躍。(「写真集沖縄戦後史」より)

マグロがいる所、獲れる所は決まっています、すぐ分かるから、皆そこに集まるでしょう。だから同じ方向に、同じ時間で一気に縄入れないと、縄が全部纏れて、仕事ができないわけですから。

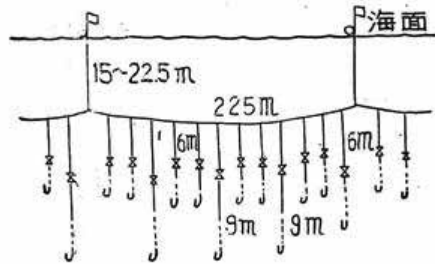
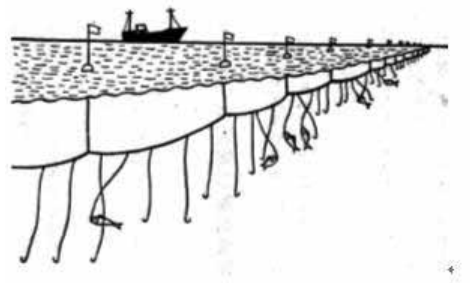
延縄長さ 30~40 マイル 那覇から久米島近くまで

あの当時のマグロ延縄も普通のカゴみたいな物に入れて、束るんです。こう一つ一つ、この大きさが大体 45 メーター、この間に枝縄が 1 つ入る、今は倍の 2 本も、3 本も入るわけです。この 5 つ(束)で一鉢、これにダルマ、ブイを入れたり、1 つのカゴ(鉢)で約 225 メーターの長さになります。

枝の深さが大体 10 メーター位、浮きの長さ 10 メーター位、かなり縄は沈むんです。

で、延縄は大体 250(鉢)から 300 位はやったんじゃないか、 $225 \text{ メーター} \times 250 = 56 \text{ 千}(31 \text{ マイル}) \times 300 = 68 \text{ 千}(38 \text{ マイル})$ 、31 マイルから 38 マイル、ここから久米島近くまで。大きな船の場合は 400 位入れたからねえ。430 位普通入れたけど。400 入れると 50 マイル? 行く、 $225 \times 400 = 90 \text{ 千}(50 \text{ マイル})$ 。

これ揚げる時になったら 45 マイルから 100 マイル近くになっているわけよ、自動的に。潮の流れで伸びる、入れる時はボンボンボンボン突っ込んで入れるわけ、40 マイル近く入れていきます。そのまま放っておいたら潮の流れで引っ張られて長くなるんです。釣針ですか、250 鉢だったら、1250 本位入れましたねえ、今はこれが、カゴが長い、6 本 7 本入れている、当時は 5 本です、枝数が多く入っている。今はずっと下まで下ろしている、400 メーター位下ろしているはずですよ。あの時分は大体 200 メーター、150 メーター位かなあ。



1950、60 年代のマグロ延縄 上：延縄模式図
下：幹縄枝縄の構成 (「かつお・まぐろ総覧」より)

沖縄近海 皆 マグロのいい漁場

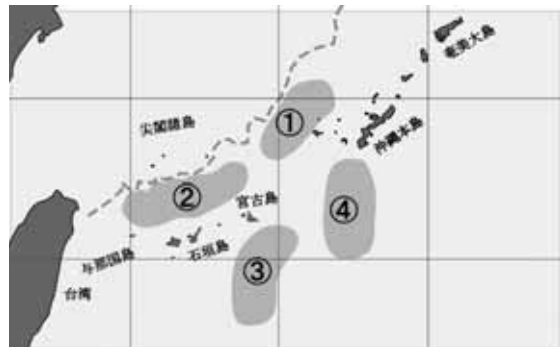
マグロ船が沿岸で仕事するには、5 時間以上外に出ないといかん、延縄が引っ掛かると大変だから。(海図を指して) マグロ延縄は、一番近い所では、この辺(①：久米島西漁場)とこっち(④：沖縄本島南漁場)でやりました。あとはこの辺り(②：先島北西漁場)、宮古・八重山と尖閣列島の間とか、宮古のこっち(③：宮古島南漁場)も割りと漁場ですよ。そんな所でやりましたねえ。こっち(①)は、ここから 5、6 時間近く行くと、トシマグワ(鳥島)といういいソネがあるんです、ここでホンマグロも然り、メバチ、キハダとか、ここでよ

く獲れました。ここは、こっちから投縄すると、ここは黒潮が走っていますから、この流れに乗って大きく回って行って、縄揚げると、大体が元の投縄の位置近くに帰って来ます。けどあまり潮が強い時は縄は切れちゃう、切れても、残りの縄は、鳥島の側に来ているわけ。ここはメバチ、カジキが釣れるから、一番近くて、いい漁場でしたね。

先島と尖閣列島の間のコっち(②)は、台湾の方から黒潮がずっと流れてくるんですよ。

11月から12月になるとねえ、大きいメバチが結構獲れよった。マグロは熱帯的なものだから、この潮の流れで回遊して北上して、ある程度まで行くと、やっぱり戻るわけですよ。この辺りでもよくやりましたからねえ、しかし潮の流れが速いもんで、投縄して元に戻るのが大変、3マル位潮流れていますから。で、尖閣列島も然りだが、この辺は台湾船が多かった。

台湾船がこっちに、沖縄の方に突っ込んで来るのは、黒潮があるから漁場が豊かだからですよ。あそこではせいぜいサバ位のものしか獲っていないから、台湾近海にサバ結構いますから。あれ達が来たら、道具盗まれるのがイヤだった(笑い)。だから、こっちはあまり行きたくなかった。台湾船は当時は延縄もやっています。獲るのは殆どサメ類じゃないかねえ。南にも下がって行きます。インドネシア辺りに南下して行く、船の形見れば、台湾船と分かりますから、中国系だからサメのヒレとか、そういうものが高かったはずですよ。



主なマグロ漁場図 ①：先島北西漁場、②：久米島西漁場、③：宮古島南漁場、④：沖縄本島南漁場

あとは宮古の下側のここ(③)は、南から北のコースに頭突っ込んで行って、ギリギリまで、投縄して、すぐここから逆に縄揚げします。危ないからいつでも縄揚げられるようにと、中に突っ込んでいくわけです。で、突っ込めば、突っ込むほど魚が獲れやすいですから、メバチとか、キハダとか、この辺りも随分やりましたねえ。

1 航海、水揚げ 15ト～20トのうち 20%ほど サメ類

あの当時の近海のマグロ船は大体が49型。49ト以上になると国の許可が必要だから、丁度今の19トと考えたらいいです。乗組員の人数は多かったです。沿岸でも12,3人から15人位は乗っていましたねえ、今は船の装備もよくなって4,5人で十分だけど。

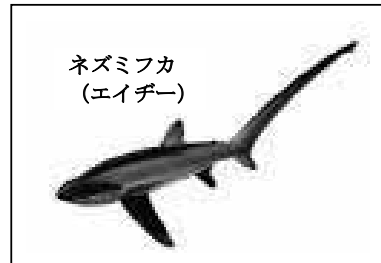
水揚げは1航海で15ト位は積んできたんじゃないか。20トまではいかなかったと思う。主にキハダとメバチ、これに雑もあったけど。結構サメが掛かってきましたよ。

オーナンジャー(ヨシキリザメ)とか、ナカークワ(ヒラガシラサメ)とか、エイヂー(オナガザメ)とか、あの時分はサメはカマボコ原料で使いよったから、売れたんですよ。今はすり身が出てきては売れないから、切って捨てるんじゃないか、市場に全然見えん。そのサメだけで、あの当時は延縄の全体の20%位入っていた。15%位は入っていたかもしれん。

時によってはもうこればかり釣れて困った場合もあった。それに揚げるのが大変でしたよ、マグロの倍位時間が掛かる。今のマグロ船には一本も見えないけど、釣っても海で捨てているのかねえ（笑い）。カジキですか？ カジキも延縄に掛かってくるけど、時期あって、多く揚がるのは大体3月から5、6月位まで。サメはいつでもウジャウジャ、もう年中です（笑い）。

尖閣近く ネズミフカ 多く掛かる

サメで思い出したけど、尖閣列島近くでは、あのネズミフカ（エイヂー）が多く掛かりましたねえ。大陸棚に上がれば、浅くなってくるから、マグロ延縄はできません。（再び海図を指して）、こっち(②区)で投縄したら、長さが40マイルもあるから、たまに尖閣列島近くまで行きましたよ。もうマグロは獲れなくなって、その代わりネズミフカが相当掛かってきましたねえ（笑い）、あの尻尾の長いサメが揚がりました。あれは群れで泳いでいたはず、釣れる時はまとまって掛かっていたから。大体が尖閣近くのこのフチミグラー（大陸棚縁辺りになるのかなあ。延縄にはナカグラー（ヒラガシラ）、ウフバニー（ヨゴレサメ）とか、他のサメもたまには掛かってくるけど、ネズミだとカマボコのよい原料だからよく売れよった。あれは赤みがかつたのと白っぽいのがあって、赤いのはダメ、白い方がよかったです。ネズミフカというからネズミみたいに口が小さい。今も尖閣近く行けば揚がると思うけど。



これは何でエサを取ると思いますか？ 尻尾で叩くんですよ、口が小さいもんだから。それで、延縄の釣針には尻尾に掛かってくるわけです。口には掛からんで、で、これを逆さまで引っ張るから、重くて大変です。ラインホーラー廻して揚げるけども、うキュウキュウですねえ。縄が切れちゃう場合もあります。投縄から揚縄まではしばらく置きますから、これは尻尾に掛かったまま死んでいます、延縄に逆さにぶら下がったままで、でも、ある程度浮力がある間はいいです。これが大量に掛かるともう大変です。全部死んだまま底に沈んで行くから、もう縄全体がそれに引っ張られて、底に突っ込んで行きます。だから、これで縄失くすともう大損害ですよ。こっちにこれ獲りに来ているわけでもないし、獲って売っても、値段は大したことないから、適当に獲れば、あとはここから逃げて、別の場所に移動しましたよ（笑い）。

狙うはキハダ メバチ トンボ獲れず

あの当時は、クロマグロはウシシビとって、時期にはなると揚がったけど、これが今みたいに特別に高いものでなく、値段もつかなかった。脂が乗っているのであまり好まなかった。そのあと内地に送り出してから、値段が高いと分かって、獲るようになったですよ。主に狙ったのはキハダ、メバチですねえ。冬場になってくると、メバチが釣れてくる

し、夏キハダが、沖縄近海では、このキハダとバチを獲りました。トンボ（ビンナガ）もいるけど、当時は今みたいには獲れなかった。キハダ、バチは200メートル位、トンボは250メートルから下だか、トンボがいる深さまで縄を入れてなかったんです。250メートルに縄入れても、枝や浮き縄がなんやかんやして、中で引っ張って縮まるわけです。で、縮まって、枝まで入れると150から長くて200メートル位の深さまでしか入らない。

結局、あの当時の漁具も、幹縄も、いろいろ問題があって、ある程度縄入れたらラインホーラーで巻き揚げきれないんです、重くてポンポン切れちゃう。そんなに深くには入れることができない。今だとあんな道具では、魚は全然釣れませんよ。ビン球も保たない。もうカジキの大きいもんが掛かって、死ぬと揚がらなくて、そのまま全部、下に突っ込まして、沈んで、300メートル、400メートルまで、突っ込まず時もあったけど、もうビン球は完全にパンクしてましたねえ。やむ得なく、両方から縄引いて、こう2つ掴まえて、揚げる場合もあったです。今のビン球は1000メートルでも大丈夫、だけど、昔の道具に比べたら大変な進歩です。我々は不便な道具だったが、それなりに考えてやりましたねえ（笑い）。



揚がったマグロを皆で魚槽に運び入れる。
〔沖縄写真案内〕より

幹縄 コールターで染める

さっきの幹縄とか、ラインホーラーで巻ききれないという話ねえ。幹縄は木綿でしたから、そのままでは軽しい、柔らかい。これをコールターで染めて重くし、硬くしましたよ。一本釣の幹縄は豚の血で染めてましたが、マグロ船のは量が多いから、ドラム缶を切った鍋に入れて、コールターと一緒に炊いて、真っ黒く染めた。今の道路工事の時のやり方と同じです。あとそれ取り出して、遠心分離にかけて、余分のものを取るわけです。

実際にこれで操業している時は大変でした。コールターが飛び散って、顔とか手とかにくっつくわけです。くっ付くと、それが真っ黒だから、もう太陽で焼けて、顔は火傷ですよ、ヒリヒリして痛くて、とくに真夏なんかは、手もこんなで、かぶれて、大変でした。今なら誰もやる人いない（笑い）。それに縄揚げする時、もう4,5回位は縄がスリップするわけです。また揚げる時、コールターだから乱暴扱いしたらバンバン切れちゃう。それに縄があまり沈むと、重みがかかってラインホーラーが無理して、縄が揚がらんです（笑い）。

縄を楽に揚げようと思ったら、縄を長く浮かしたら、楽に揚がるけど、今度は魚が釣れない。で、私が考えたのは、この幹縄をナイロンでやればできると考えて、当時のナイロン使ってやったみたです、そしたら引っ張ると縮まってしまって、もう材質が全然ダメでした（笑い）。だけど、今は立派なものが開発されて、ナイロンだから結構深く入れても重

みが掛からないです。ラインホーラーも二重掛けしても、どんどん揚がる。倍位の底に縄を入れることができるからトンボなんかもよく釣れるわけですよ。マグロ延縄は昔に比べたら、漁具も相当開発され、漁法も相当進歩しています。

サンゴ船への誘い 一蹴 マグロ絶対伸びると

こんな不便な中で仕事して、大変だったけど、やり甲斐がありましたよ。だけど3年位したら、25,6かなあ、船長とケンカして、飛び出して、もう船辞めちやいました。

で、その時、僕も船長なろうと決めて、猛勉強しました。それで試験受けに行って、船長の免許を取りました。で、どの船に乗ろうかなあと思っていたら、また金衆丸の親父に呼ばれたんです(笑い)。戻ってこいと、まあお世話になった親父の言うことですから、素直に従いました。それで、3号持たされて、今度は、僕が船長だから、もう思いのままです。そしたらどんどん大漁して、もう見る見るうちに、マグロ船の魅力にはまって行きました。

丁度、そんな時にこんなこともありましたねえ。一度大変なサンゴブームがあったでしょう。1963年頃かなあ、サンゴが採れるからと皆サンゴ船でした。あの安里虎寿さんねえ、19歳の時、尖閣にスクラップ採りに行った時の船の親方です。あの人もサンゴ船を持ってサンゴ採りしてました。僕がたまたま宮古に船着けたら、虎寿さんとバッタリ遇ってねえ。僕がマグロ船の船長しているでしょう。

これ見て、マグロ船なんか辞めて、自分のサンゴ船に乗らんかと、そう言うもんだから。確かに、あの時はサンゴは儲かると盛んでしたよ。宝山、大九とかは、皆サンゴ船でいっぱいでした。あんたなんかのサンゴの時代はもう終わりだ。マグロは絶対伸びてくる仕事、これからはマグロの時代だとそう言って、彼の誘いを蹴りましたよ。

結局、私は、この金衆丸で、3年間船長して、みっちり腕も磨いて、もう専門の水産高校以上のレベルまで勉強してましたんで、で、天測も全部マスターして、いつでも南方に行つて、どこに行つても、航海ができるという自信がついてました。



糸満漁港で出漁待ちの49ト型マグロ船

30歳で独立 沿岸から 近海・遠洋へ

マグロ船も、段々増えてきましたねえ。那覇辺りでも大型船がどんどん増えた時期がありますから、30歳(1966年)には、今度は独立考えて、兄貴と2人で船買って来て、独立して、34歳に豊国水産という会社つくったです。もうその頃には南下してずっと南の方、フ

イリピン辺りでやっていた。それから船大きくして、インドネシア辺りから、どんどん下がってオーストラリアの東、西、全部やってきたからねえ。38号清豊丸 284トは僕がずっと漁労長やっておったです。そのあと 58号清豊丸 300トかなあ、これに乗り替えて、38号は町田さんという人に漁労長させて、両方で2隻でやっておった。

だから僕は沿岸行かんで、ずっと南方でやっていますから。南方行って大型船とも、内地の船ともボンボンやりあってやってました。あの当時、南方でも、マグロ船が少ない時代でしょう、だから縄は交差しても関係ない、もう早く揚げるのが得だ、もう勝手に、自由に縄入れて、もう早いもの勝でしたよ（笑い）。



マグロ延縄船第38清豊丸（284ト）。インドネシアから更に南下、南緯10度近くオーストラリア海域も操業した。

僕はまる 40歳までやっていたから。今はどうなっているか分かりません。自分は南方行くにも、他所から習ったわけではない、初めから漁労長してやっているから、もうデータ全部集めて、それで、船では、もう大きい船ですから、無線局長もいるわけだから、情報もいろいろ、どこで、どこの船がいて、どこで何を獲っている、こういう情報全部取るわけですよ。全部嘘ついても、僕は全部これを見て、この人は嘘ついているねえ、この人は釣っているかもしれない、ということ全部自分で判断して、自分で、計画立ててやりました。

南方行き、天文航法学び 大助かり

大体フィリピンの方まで南下して、20度線、18度位まで下がったかなあ。

今はGPSで緯度経度がすぐ分かるから便利だけど。あの頃はロラン（LORAN）といって、電波航法という奴で、電波で航海するというもので、軍事専門のものだったんです。これは南方の場所によっては全然は入らない所もあったし、このロランでもはっきりしなかったです。そうなると天測しかない。だけど、沖縄の人で天測できる人はあんまりいなかった。沖縄の遠洋マグロ船は、内地から技術導入で呼んで来てもう沢山金を上げて、やっていた。僕の場合は自分で勉強して天測も自分でやりましたから、その辺りは早々と彼らと肩並べて南方まで下がって行きました。で、この天測は、沖縄水産高校の糸数鉄雄先生から学んだんです。船長免許を取ったあと講習がありましてねえ。実際は意味も分からないで、天測航法の講習を受けました。中学もろくに出ていないから最初は大変でしたねえ、水産高校のレベルでしょう。だけど、聞いている間に、ああこれはできそうだと思うって、参考書を揃えて、それから苦学ですよ。六分儀も買って、もう陸（オカ）にいよいよ、海にいよいよ、もうこればっかりやって、どこでもこれやって（笑い）、もうバッチリできましたから。それで、まあ南方に行って、どこ行っても、六分儀で、船のいる位置

出すことができました。北緯何度何分、東経何度何分とねえ、これ人と競争するでしょう、誰も僕には敵わなかったです。皆の半分の時間ですぐ位置当てましたから（笑い）。

マグロ船ブーム到来 72年で20社 大型船42隻

独立して南方行ったといっても、最初は小型船でちょっとやって、それから自分で船買ってきて、それでやっていて、そうしながら大型船に切り換えてやっていたんです。

新造船の小さい1隻は東九州造船所で造った。大型船は清豊丸38号(192ト)と58号(274ト)の2隻、あれは三重で造った。中古船も買って、小さい船の中古船も、また買って、いろいろやっていた。結局、小型船が3隻位いて、大型船が2隻いて、また大型船の造る前、中古船、内地から買って来たのを僕が漁労長としてずっとやっていました。

もうマグロ船は儲かるでしょう、あの当時は、皆、行け行けどんどんで、もう沖縄に、マグロ船ブームの到来でしたねえ。復帰前の1970年頃には、遠洋マグロ船ブームは異常なほどでした。結局、あれは許可制で、日本復帰すると権利が取れない、国からしかもらえないから、その前に取ろうとして、琉球政府が権限のある間にもらおうと、もう駆け込みですよ。だから水産業に関係のない人まで、マグロ船儲けるからと、力と金のある人達が遠洋マグロ船をやりだしたですよ。船造ったり、船購うてきて、ホテル経営者とか、政治家まで、猫も杓子もです（笑い）。

それで、沖縄県鯉鮪漁業組合というのが結成されました。鯉鮪漁業組合といっても、組合員の8割方がマグロ船、全部遠洋マグロ船です。

(1972年の組合業者名簿を指して) これ見ると、僕の豊国水産を入れて、18社がいます。マグロ船は組合所属は44隻、400ト級が1隻、沖縄三洋漁業の第38三洋丸(494ト)、300ト級が10隻、東幸水産の第一東幸丸(300ト)、共和漁業の第18喜久丸(300ト)とか、あとは200ト級が24隻、100ト級が5隻、100ト以下が4隻、それも末松博則さんの広魁丸(72ト)と大丸漁業の第1文丸(50ト)とかです。まだまだ、遠洋マグロ船ブームは続きます。この1972年の時点でそうですから、皆マグロ船景気に相当浮かれていたわけですよ（笑い）。

オイルショック 次々に船売り 流通業に切り替える

確かに、あの頃は遠洋行くと、1航海で2億余りは揚げました。その時はオイルがものすごく高くなって、それでまあ赤字じゃないんだけど、儲けは少なくなっていきました。僕はそこで決断したわけです。これは俺が船に乗っていかないと、俺が乗って行って成功させたんだ。俺は乗らない、人を雇ってくる。そしたらずっとこれやるわけにはいかんと。

昭和48年あとからオイルショック入ります、昭和53年頃からはひどくなってきましたから。もうマグロ船は商売として成り立たない、流通に転換せんといかんということで、それから船1隻1隻、全部売る決心をしたんです。僕はどンドン事業を拡張して、船にも、陸にも施設造ったりして、手を広げて、昭和49年から昭和50年位で、7億位投資していましたから。もうこれ危ないと思って、船をどンドン売っちゃいました。そのお金が3分

の1もなりません。それを計算通りに、船も1隻1隻売って行って、あんないい船売るのが、と言う人がいましたよ。あの頃はマグロ船も騰がる所まで騰がって、そのあとバブルがやってくるわけですが、その頃には国は減船ということで、マグロ船減船を打ち出してきました。私はそれ聞いて、ウチの船減船せと言うたら、あんないい船、大漁する船、減船できないと、会社の一部は反対したが、大型マグロ船の将来はない、衰退するだけだと言いましょ。自分達の権利なんか1億しましたからねえ、マグロ船の権利が、これも全部売っちゃって、だから皆びっくりしていたねえ、私の行動には、で、取引先の金融機関に同級生が課長していたが、その彼に、全部借りた金払うと言ったら、何やかんや言うて、びっくりしていたけど、事業する人はねえ、先々読まんとダメです。とにかく、僕は切り換えが早かったから、マグロ船を辞めて、流通事業に切り替えできたわけです。

バブルはじけ 遠洋マグロ 大打撃

流通事業ですか？ 沖縄で獲れている加工品のマグロ、全部自分で買って、内地に送って移出していました。仲買みたいで、ここで船が沢山いるのに、買い手が少ないから、一船買い、全部僕が細かい船のものを買って 冷蔵庫持っているから、向こうでバラなして、全部売って、それから内地の方からカジキを、沖縄で相当消費があったもんで、内地からカジキを持ってきて、相当儲かって、この水産物の流通事業それで儲かったんですよ、儲かっていたが、それをやっている間にバブルが来たもんだから、もう止められないです。

これ勿論あの当時現金でやっておれば別だけど、全部金融から借りているんじゃないですか、金融機関から、毎年物価が上がるから、6億投資したのは10億になっているわけですよ、10億になれば、資産は増になるから、いつ売っても2、3億は儲けがあると計算していたわけだが、これが一遍にバブルになったもんだから、毎年資産が減になってくるわけ、もう1月1月減になって、そしたら、残ったのは借金ばっかしですよ、でも、私は切り換えが早かったから借金も少なかった。人様に迷惑かけない範囲内で事業に持っていった。

その時にあぁでもない、こうでもないと頑張ってきた人は全部失っている。全部パーになっている。あの時に大手のマグロ船業者は殆どが倒産しています。皆船も失い、莫大な借金を皆抱えていますよ。あの時の沖縄県鯉鮪漁業組合の解散宣言した時の組合長は私です。私が解散手続きしましたから、その清算処理には相当苦労しましたねえ。

で、今主にマグロ船やっているのは、こっちの那覇地区、伊良部鮪漁船船主組合とか、近海鮪船組合とかの、大体が個経営の5トから19ト型のマグロ船ですねえ、沿岸で、近海だとグアム、パラオとかを基地にやっています。

沖縄の水産振興目的 泊いゆマチ造る

漁師の皆さんは獲ることに専念しているんだけど、水産というのは、獲るだけではダメです。昔は獲って来さえすれば、安くても利益があったからよかったけど、もう時代はどんどん変わって、今は流通のこと、売ることを考えないと、水産業が生きれる時代じゃな

いですよ。この泊いゆまち（魚市場）を造ったのもねえ、20年前に計画して、15年かけてこれを造ったんです。これを沖縄に造るのが私の夢でしたからねえ。

これを造る目的は沖縄の水産振興のため、魚価安定のため、あるいは流通のためです。

今年で設立して10年目になりますが、ここに50の仲買・小売業者が入って魚を売っているわけです。漁連、那覇地区のセリ市場も隣接してますから、その日に水揚げされた新鮮な魚、いろんな種類の魚も売っているんです。尖閣列島で獲れたマチも、近くで釣ったマグロもありますから（笑い）。お客さんが毎日来てくれて、大繁盛しています。こっちの消費、売り上げだけでも大変なものです。今日でも魚の水揚げ40ト位あるはずだけど、そんなに値段は下がっていません。これができてから魚価は安定しています。これができなかつたらどうなっていたか分かりません。生産者もそれを認めています、有難いです。

僕は沖縄県の水産振興にはこれしかないと思って、この計画書を出しても、皆分からなかった、無関心だった。これ造る前まで、皆できると思ってなかった。公設市場からの反対運動も沢山ありましたよ。だけど、僕は毎日県庁行って、演説してました。これは沖縄の水産振興のために絶対必要なんだと言うことでねえ。また議員達を粘り強く説得しました。とうとう最後に、県から1人、県漁連から1人、担当を付けてくれて、この計画を推進して、最後はできたわけです。これがなかつたら今頃沖縄の水産業はペエペエなっています。ここでこれだけ魚の宣伝もするし、大量に消費もしているわけだから、水産業の発展に大きく貢献していると思います。

まあ、そういうことで、このいゆまち事業をもっと発展させんといかん。これが僕の夢だし、仕事ですから。もう79歳になっても毎日忙しいです。



大賑わいの泊いゆまち、毎日大忙しいの當山清理事長（中央）。